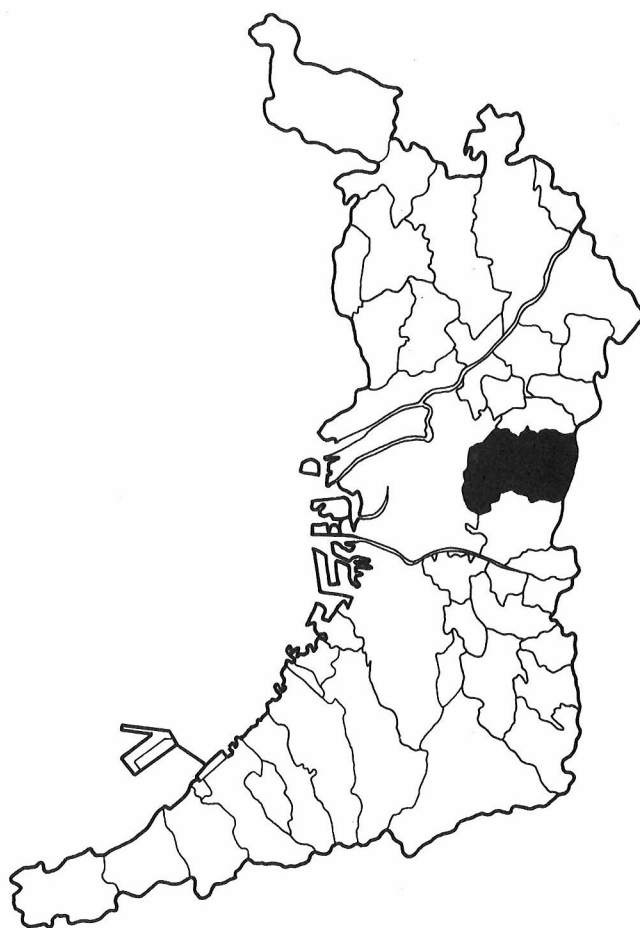


東大阪市下水道事業関係 発掘調査概要報告

—— 1995年度 ——



1997. 3

財団法人 東大阪市文化財協会

例 言

1. 本書は財団法人東大阪市文化財協会が東大阪市の委託を受け、平成7(1995)年度に実施した公共下水道管渠築造工事に伴う発掘調査の概要報告書である。
2. 本書には池島遺跡・山畑古墳群・鬼塚遺跡・段上遺跡・植附遺跡・若江遺跡・上小阪遺跡で実施した11件の発掘調査の概要をおさめた。このうち上小阪遺跡第5次調査は6年度に実施したものである。植附遺跡第9次調査は調査方法が異なること等から報告をふたつに分け、若江遺跡第61・62次調査は調査区が近接していること等からひとつにまとめて報告するものである。また、下水道関係の調査参考資料として、若江遺跡第63次調査の概要を第10章に掲載した。
3. 財団法人東大阪市文化財協会では平成8年度より東大阪市教育委員会社会教育部文化財課の指導によって機構改革が行われた。その内容は多岐にわたるが、特に発掘調査に関連する事項のひとつに整理部の新設がある。これにより遺物整理は調査担当者から分離し、整理部という組織によって実施されるものとなった。したがって整理作業の責は整理部長が負うものである。

調査および整理作業は以下の事務局体制によった。(1997年1月末現在)

理事長	日吉 亘(東大阪市教育委員会教育長)
常務理事	柏谷祐臣
事務局長	杉山浩三(東大阪市教育委員会社会教育部文化財課主幹)
庶務部長	同 上 兼 務
調査部長	芋本隆裕(東大阪市教育委員会社会教育部文化財課主査)
整理部長	福永信雄(東大阪市教育委員会社会教育部文化財課主査)
嘱託職員	石割珠貴・今井喬子・夏原宜佐子・西村慶子・藤崎博子 本田けい子・榎原美智子

4. 各報告は調査主担当者が執筆した。分担は次のとおりである。編集は曾我と金村が行った。

第1・3・10章	金村浩一
第2章	三輪若葉
第4・8章	井上伸一
第5章	松宮昌樹(現財団法人大阪府文化財調査研究センター専門調査員)
第6・7・11章	松田順一郎
第9章	(1～5)井上伸一・(6～13)曾我恭子・(14～23)金村浩一

5. 遺構実測の基準には国土座標第VI系を使用し、図中の方位は特に表記のないかぎり、国土座標北を示す。水準高にはT.P.値を用いた。基準点には委託して設置したものがある。
6. 土色名は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に準じたが、夜間調査等には主観によって判断したものがある。
7. 本書に収録した遺構写真は各担当者が撮影し、遺物写真は(株)スタジオGFプロに委託して撮影したものと担当者が撮影したものがある。
8. 調査にあたっては東大阪市建設局下水道部の援助とともに、施工業者ならびに近隣市民各位の御協力を得た。ここに記して感謝の意を表したい。調査・整理作業には多数の補助員の参加を得た。

目 次

第1章	平成7年度の下水道関係調査について	1
第2章	池島遺跡第15次発掘調査報告	5
第3章	山畑古墳群第17次発掘調査報告	9
第4章	鬼塚遺跡第20次発掘調査報告	15
第5章	段上遺跡第5次発掘調査概要	21
第6章	段上遺跡第6次発掘調査報告	27
第7章	植附遺跡第9-1次発掘調査概要	29
第8章	植附遺跡第9-2次発掘調査報告	31
第9章	若江遺跡第61・62次発掘調査概要	43
第10章	参考資料・若江遺跡第63次発掘調査概要	119
第11章	上小阪遺跡第5次発掘調査概要	123

第1章 平成7年度の下水道関係調査について

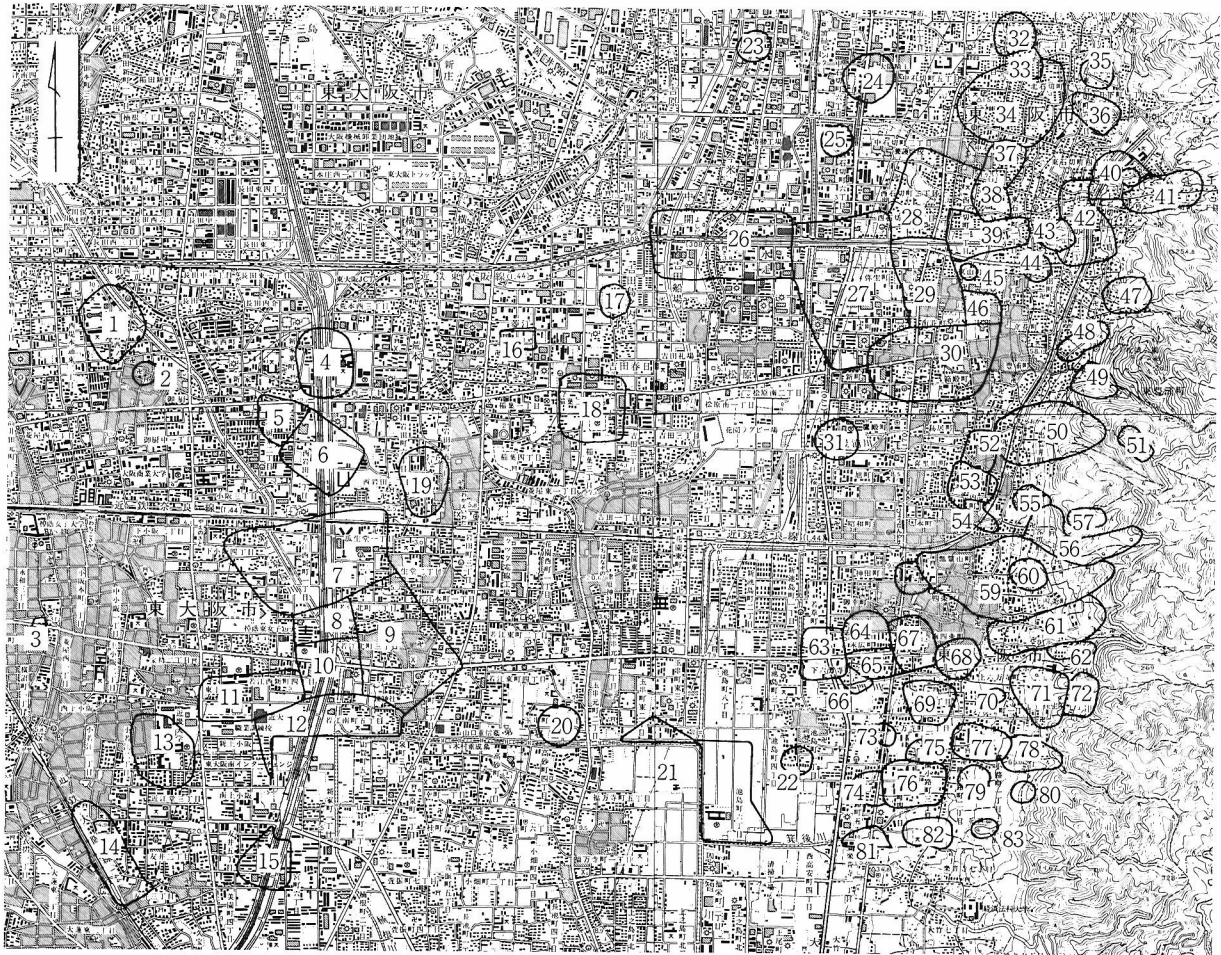
遺跡内での公共下水道管渠築造工事の円滑化と埋蔵文化財の調査・保存を図るため、東大阪市下水道管理者と東大阪市教育委員会および財団法人東大阪市文化財協会の間で平成2年10月に基本協定が締結された。その後、平成6年度までに下水道関係事業として37件の発掘調査と多数の試掘・立会調査を実施してきた。

平成7年度は表1に掲載する6遺跡8件の発掘調査と表2に掲載する6遺跡9件の試掘・立会調査を実施した。各事業における成果の詳細は次章以下の概要報告に委ねるとして、ここでは総体的に本年度事業の傾向を記述することとする。前年度までと比較した本年度のおよその傾向として、若江遺跡が所在する中地区において発掘調査が集中的に実施されていること、池島遺跡等が所在する東地区の調査件数が増加したこと、交通事情から夜間調査での厳しい条件下での調査が1件あったこと、以上の3点があげられる。

中地区では新規事業として若江遺跡第61次、若江遺跡第62次の都合2件の発掘調査を実施した。ともに若江遺跡南部の各地点を総延長、約1,690mにわたり幅約1m前後の掘削トレンチでの調査となった。工事として4工区に分かれていたため調査次数を2件としたもので、実際は調査担当者3名が約1年にわたって各種工事に貼りついたものである。同遺跡内では6年度に同様な3件の発掘調査が行われており、府道大阪東大阪線より南部において精力的に公道における本管の埋設工事が行われていることによるものである。今回の工事によって遺跡南部の公共下水道管の築造工事はほぼ終了し、私道や路地等の小規模な工事を残すだけとなっている。したがって平成8年度には若江遺跡南部にお

調査次数名	担 当	面 積	調 査 期 間	備 考
池島遺跡 15次	三輪	51m ²	H. 8. 3. 14～継続中	2章に報告、推進立坑
山畑古墳群 17次	金村	500m ²	H. 7. 08. 22～継続中	3章に報告、開削工事
鬼塚遺跡 20次	井上	165m ²	H. 7. 9. 5～H. 7. 11. 3	4章に報告、開削工事
段上遺跡 5次	松宮	106m ²	H. 7. 11. 6～H. 7. 12. 7	5章に報告、開削工事
段上遺跡 6次	松田	30m ²	H. 7. 12. 7～H. 8. 1. 17	6章に報告、推進立坑
植附遺跡 9次	松田・井上	175m ²	H. 7. 9. 7～H. 8. 1. 24	7・8章に報告、推進開削
若江遺跡61・62次	曾我・金村・井上	1,686m ²	H. 7. 5. 23～継続中	9章に報告、開削工事
若江遺跡 63次	金村	63m ²	H. 7. 6. 14～H. 7. 8. 22	10章に報告・参考資料

表1 平成7年度下水道関係発掘調査一覧表



- | | | | |
|----------|-----------|------------|------------|
| 1 西堤遺跡 | 22 池島東遺跡 | 43 正興寺山遺跡 | 64 五合田遺跡 |
| 2 薬師寺跡 | 23 加納遺跡 | 44 若宮古墳群 | 65 段上遺跡 |
| 3 横沼遺跡 | 24 和泉遺跡 | 45 舳古墳群 | 66 下六万寺遺跡 |
| 4 新家遺跡 | 25 北島遺跡 | 46 額田寺跡 | 67 縄手遺跡 |
| 5 意岐部遺跡 | 26 水走遺跡 | 47 額田山古墳群 | 68 上六万寺遺跡 |
| 6 西岩田遺跡 | 27 鬼虎川遺跡 | 48 みかん山古墳群 | 69 船山遺跡 |
| 7 瓜生堂遺跡 | 28 植附遺跡 | 49 豊浦谷古墳群 | 70 桜井古墳群 |
| 8 巨摩遺跡 | 29 西ノ辻遺跡 | 50 出雲井遺跡群 | 71 岩滝山遺跡群 |
| 9 若江遺跡 | 30 鬼塚遺跡 | 51 神津嶽祭祀遺跡 | 72 往生院金堂跡 |
| 10 若江北遺跡 | 31 鶴立遺跡 | 52 狐塚遺跡 | 73 コモ田遺跡 |
| 11 上小阪遺跡 | 32 日下遺跡 | 53 皿池遺跡 | 74 西代遺跡 |
| 12 山賀遺跡 | 33 馬場遺跡 | 54 河内寺跡 | 75 北屋敷遺跡 |
| 13 小若江遺跡 | 34 芝ヶ丘遺跡 | 55 水走氏館跡 | 76 馬場川遺跡 |
| 14 弥刀遺跡 | 35 正法寺山遺跡 | 56 客坊山遺跡群 | 77 半堂遺跡 |
| 15 友井東遺跡 | 36 芝坊主山遺跡 | 57 五条山古墳群 | 78 浄土寺谷古墳群 |
| 16 菱江寺跡 | 37 辻子谷遺跡 | 58 市尻遺跡 | 79 貝花遺跡 |
| 17 吉田遺跡 | 38 法通寺跡 | 59 山畑古墳群 | 80 浄土寺跡 |
| 18 稲葉遺跡 | 39 神並遺跡 | 60 山畑遺跡 | 81 楽音寺遺跡 |
| 19 岩田遺跡 | 40 千手寺山遺跡 | 61 花草山古墳群 | 82 西の口遺跡 |
| 20 玉串遺跡 | 41 辻子谷古墳群 | 62 五里山古墳群 | 83 萩山古墳 |
| 21 池島遺跡 | 42 神並古墳群 | 63 北島池遺跡 | |

図1 遺跡分布図(S=1/50,000)

いては本調査が減少し、試掘・立会調査の増加が予測される。なお、ともに次年度への継続事業となっているが、本書に概要を報告するものである。

東地区では池島遺跡第15次、山畑古墳群第17次、鬼塚遺跡第20次、段上遺跡第5次、第6次、植附遺跡第9次の6件の調査を実施した。基本協定締結後の過去5年間で東地区における発掘調査は9件にすぎなかった。そのうち4件は池島遺跡内での推進工法による立坑部分の調査であり、土木公営所による緊急性の高い比較的小規模な開削工事に伴うものが3件であった。本年度に入って、この地区での調査件数は急激に増加している。山畑古墳群第17次、鬼塚遺跡第20次、段上遺跡第5次は開削工事に伴うもので、段上遺跡第6次は推進工法による立坑部分の調査であった。植附遺跡第9次は開削工事と推進工事の併用である。植附遺跡第9次のように開削工事と推進工事の併用など工事が複雑化していることからみても、これまで中地区を中心に進められてきた公共下水道整備事業が漸次東地区へ移りつつあり、工事も本格化している傾向がうかがわれる。8年度以降には調査のほとんどが東地区で実施されることが予測され、調査拠点の確保等の課題を残すこととなった。

交通事情等から夜間に発掘調査を行う場合もある。7年度には1件を実施している。調査担当者の健康管理等の課題はすでに指摘されているものであるが、依然として先送りの状態となっている。8年度以降に調査件数の増加が予測される東地区では迂回路の確保が難しく、夜間調査が増加するものと考えられる。場合によっては長期にわたる開削工事に伴う調査が夜間に行われることも予測され、課題の解決が切望されるものである。

発掘調査の有無は周辺での調査結果を参考に判断し、必要な場合は試掘調査を実施した。遺跡外で

遺跡名	調査地点	調査期間	担当	種別	調査内容
山畑古墳群	四条町	H.7.4.27～4.29	井上	試掘	土師器細片出土、立会調査必要
岩田遺跡	岩田町5丁目	H.7.5.10	井上	立会	遺構・遺物を検出せず
若江遺跡	若江南町1丁目	H.7.8.4	金村	試掘	近世包含層確認、立会調査必要
若江遺跡	若江南町1丁目	H.7.8.7	井上	立会	遺構・遺物を検出せず
北屋敷遺跡	横小路町4丁目	H.7.8.7	松田	試掘	河道を確認、遺物を検出せず
鬼虎川遺跡	宝町	H.7.8.18～9.6	松田	立会	河道を確認、遺物を検出せず
若江遺跡	若江南町3丁目	H.7.9.8	金村	試掘	遺構・遺物を検出せず
若江北遺跡	若江北町3丁目	H.7.10.16	松宮	試掘	遺構・遺物を検出せず
若江遺跡	若江南町1丁目	H.7.10.23	松宮	試掘	遺構・遺物を検出せず

表2 平成7年度下水道関係試掘・立会調査一覧表

あっても重要地点は試掘調査を行っている。本年度は6遺跡の9件の試掘・立会調査を実施した。現地表下2m以上の深さに埋もれている遺跡の場合は通常の試掘がおよばず、様相を把握できていないものが多い。このため推進立坑の掘削に際して、できるだけ本調査や立会調査を実施して遺跡の資料収集に努めた。また、私道における下水道工事に対しても遺跡範囲内のものは、試掘・立会調査で対応し地層観察と遺物採集を行っている。

公共下水道整備事業はおもに東大阪市下水道部によって行われているが、東大阪市土木公営所による場合もある。土木公営所による工事は緊急性を帯びた突発的な例が多い。当然のことながら下水道の整備されていない東地区で遺跡内の工事が行われ、7年度では行っていないが6年度に発掘調査を1件実施している。東地区で公共下水道整備事業が本格化していることから8年度には発掘調査が必要となる場合が予測され、調査体制等に課題を残している。

公共下水道網が整備されるに従って、民家や各施設との接続工事も増加する。多くは小規模なものであるため、試掘・立会調査によって対応しているが、本格的な発掘調査が必要となる場合もある。この種の工事は私道に下水道管を埋設する場合と同様に原因者負担によるものである。したがって東大阪市下水道管理者との協定には含まれないものであるが、参考資料として本書によって概要を報告している。7年度では若江遺跡第63次調査がこれにあたるものである。

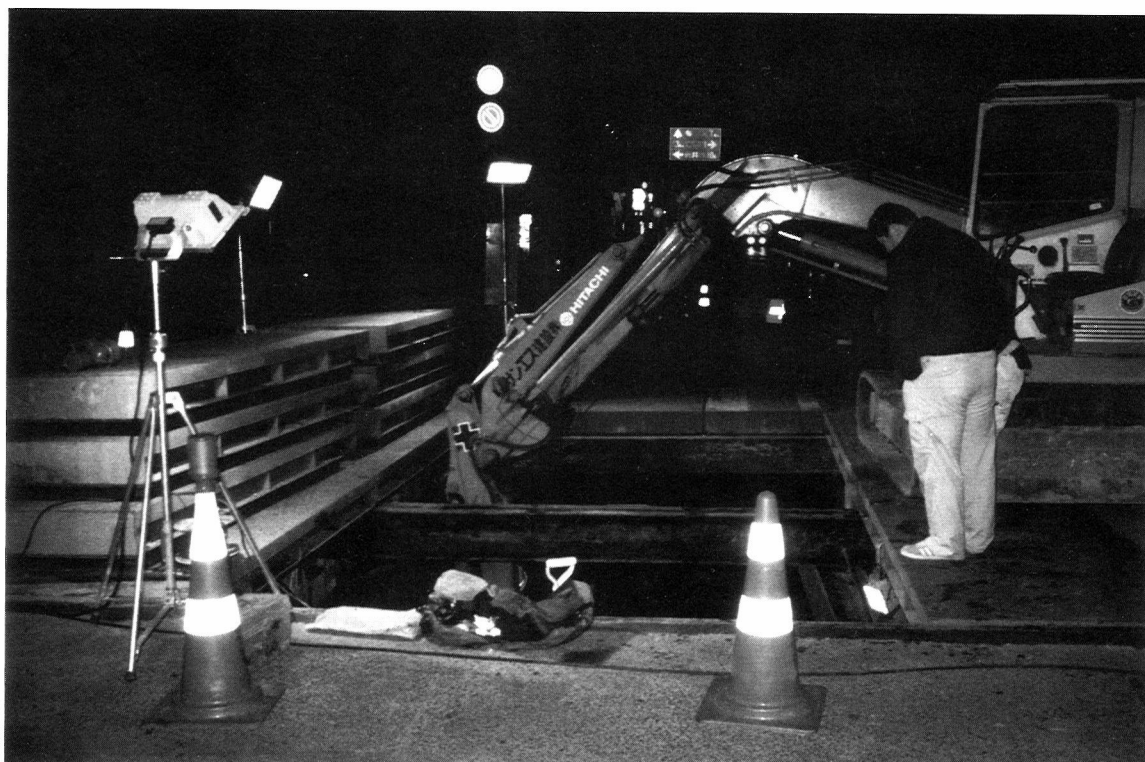


図2 夜間調査風景(段上遺跡第6次調査)

第2章 池島遺跡第15次発掘調査報告

1. はじめに

池島遺跡は東大阪市の南東部、池島町5～7丁目、玉串町東2・3丁目にかけて位置し、これまで財団法人大阪文化財調査研究センター等により大規模な発掘がおこなわれている。弥生時代の小区画水田の調査では給水のための灌漑設備や排水のための水路などが検出され、その全容がしだいに明らかになるなど、確実に成果が上げられている。しかし、その集落については未だ明らかではない。

近年、当協会によって実施した調査は小規模なもので面的な広がりを確認することは困難であったが、島畑や水田など耕作に関する遺構が検出されている。

今回の調査地は池島町5丁目地内、箕後川の北、約80～100mの地点で、現地表面の標高は約6mである(図3)。この調査地点は池島遺跡の東隅に位置するが、先述した集落が存在するかどうかを確認することも目的の一つであった。

築造工事が推進工法であるため、約32㎡の発進坑(A地区)と約16㎡の到達坑(B地区)において調査を実施した。調査期間は平成8年3月14日～4月5日までである。

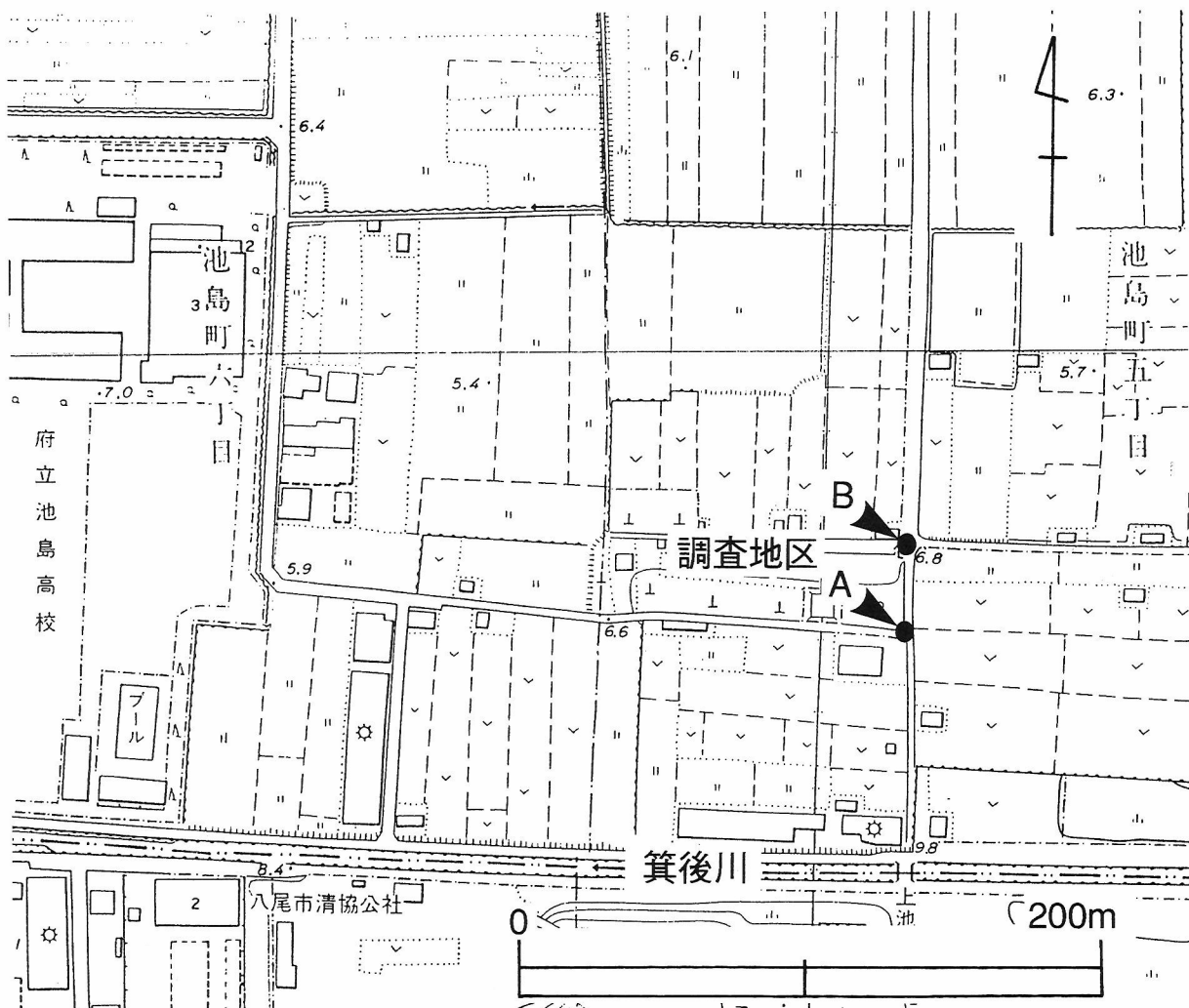


図3 池島遺跡第15次発掘調査調査地位置図(S=1/2,500)

2. 調査概要

掘削は機械と人力の併用で、遺構・遺物の有無を確認しながらおこなった。両地区とも東辺と北辺にアゼを残し、土層断面を観察した(図4)。以下に各層の土色・土質を記す。

1. 極細粒砂～シルト層。中礫～極粗粒砂層。7.5Y R6/8。
2. 細粒砂～極細粒砂まじりシルト層。5Y4/1。
3. 極細粒砂～シルト層。7.5G Y6/1。
4. A地区、シルト質粘土層。7.5G Y5/1。部分的に細粒砂がまじる。
B地区、細粒砂とシルトの互層。
5. A地区、粘土層。7.5G Y6/1。B地区、細粒砂とシルトの互層。5Y4/1。
6. A地区、有機物を含む粘土層。10G Y6/1。B地区、中粒砂と細粒砂の互層。
7. A地区、有機物を含む粘土層。2.5G Y4/1。B地区、中粒砂～細粒砂。5G Y6/1。
8. A地区、シルトと粘土の互層。5G Y4/1。B地区、シルト層。
9. 粗粒砂～中粒砂層。7.5Y6/2。
10. 粘土層。N4/0。
11. 粘土層。N3/0。
12. シルト層。10G Y5/1。11・12は地震による変形構造が見られる。
13. 粘土層。7.5G Y4/1。
14. 中粒砂層。部分的にシルト質粘土がまじる。
15. 細粒砂～極細粒砂層。2.5G Y5/1。
16. 極細粒砂～シルト層。2.5G Y4/1。
17. 極細粒砂まじりシルト層。5Y4/1。
18. 中粒砂～細粒砂層。7.5Y5/1。

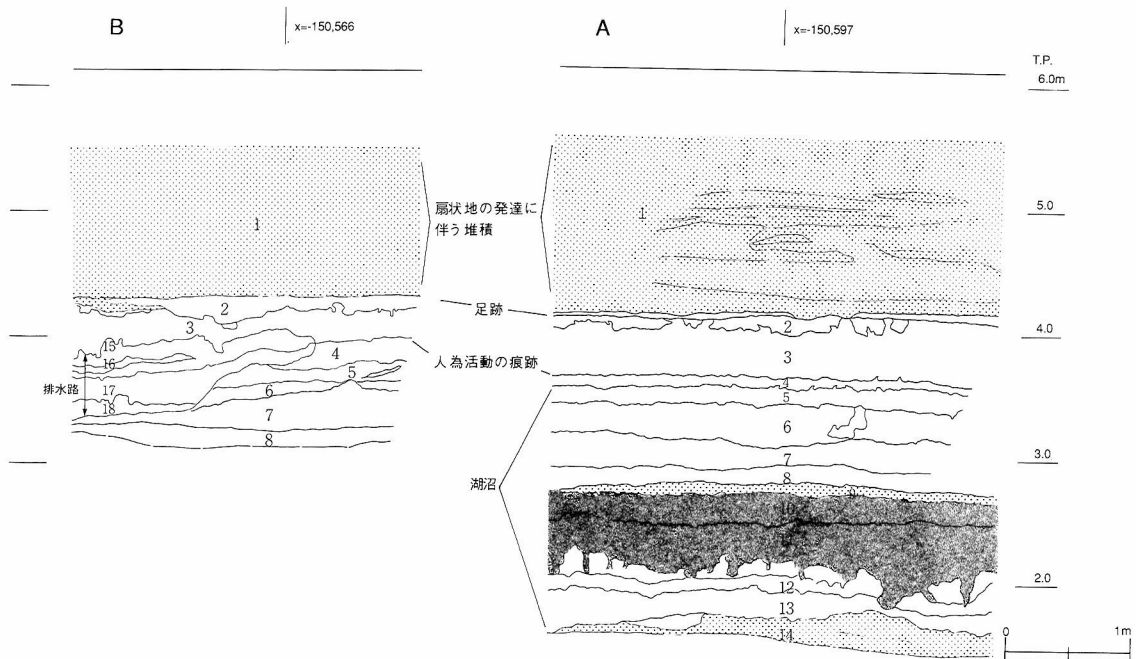


図4 土層断面図

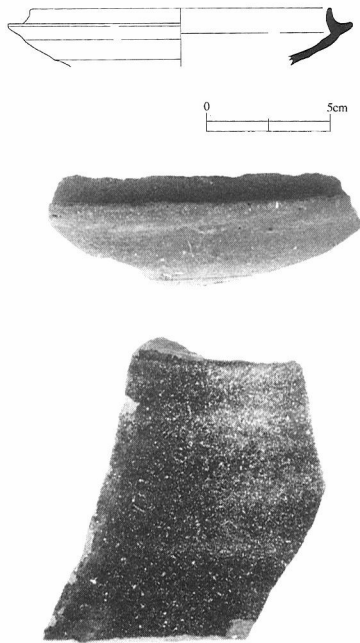


図5 砂礫層出土遺物

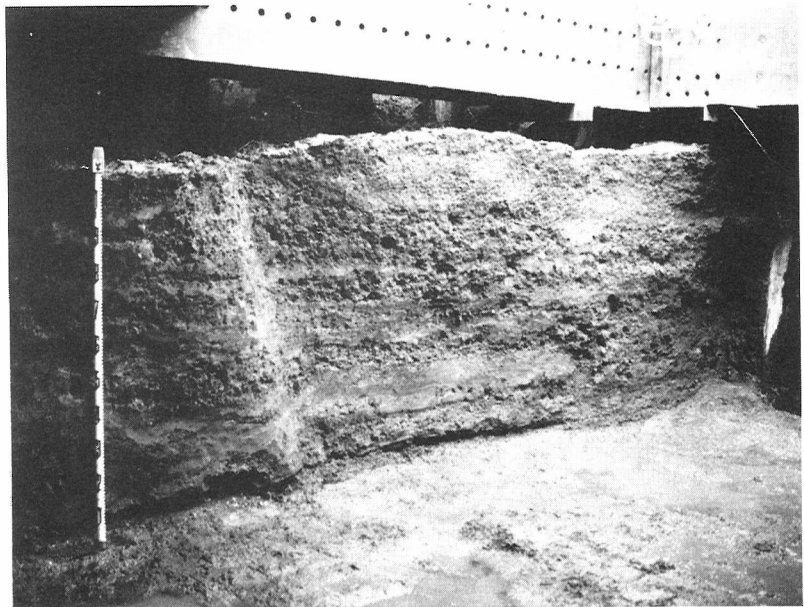
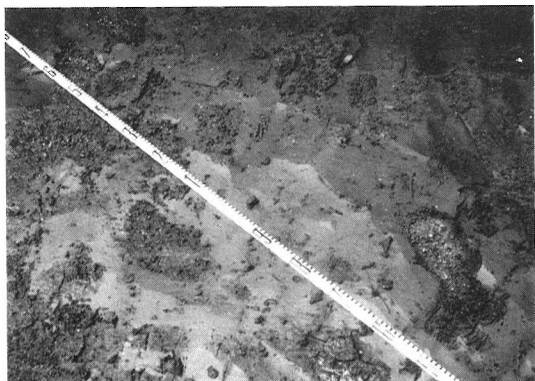


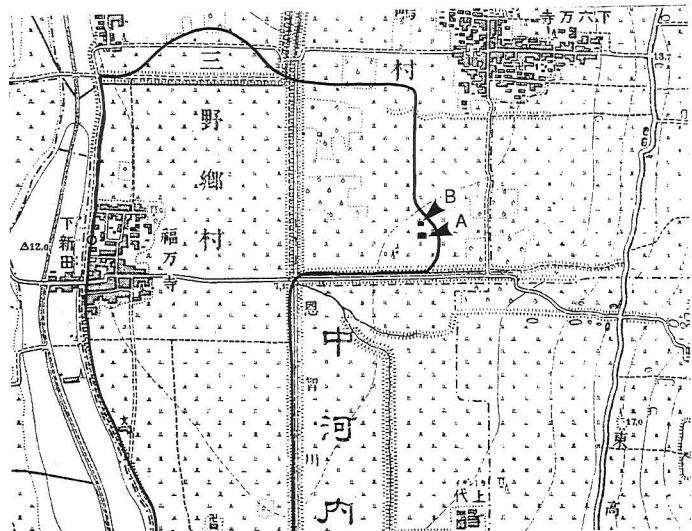
図6 扇状地の発達に伴う砂礫の堆積



↑図7 足跡

→図8 明治41年頃の池島周辺

(文献2より転載 一部加筆)



次に各層の観察と遺構・遺物から堆積環境およびその時期について考えたい。

1. 中礫～極粗粒砂の堆積を細粒砂～シルト層が切り込んで堆積し、それをまた、中礫～極粗粒砂層が切り込んで堆積するという繰り返しが見られる(図6)。この砂礫層は河道堆積物で扇状地に流れる河川の存在が考えられる。明治41年の地図に調査地点を当てると、5mの等高線の縁辺に位置する(図8)。扇状地の発達に伴った堆積と考えてよいだろう。

古墳時代末～飛鳥時代初頭の土師器杯・甕・高杯の細片、古墳時代末の須恵器杯身・高杯脚部の破片が出土している(図5)。この頃から、当地点周辺に砂礫が溜まり始めたと考えられ、おそらく近世頃まで堆積したと思われる。

2. 上面で足跡を検出している(図7)。足跡の埋土は上層の砂礫層。砂礫層がやや堆積した時に動き回ったと考えられることから、古墳時代後期と考えている。

3. 湖沼

4. B地区は細粒砂などの堆積も見られ、A地区に比べて陸化していたと考えられる。若干安定し

たところでは人為活動があったといえ、B地区の排水路もそのためのものと考えられる。

古墳時代(布留期)の土師器が出土していることから、この時期は古墳時代前期と考えている。

5.~13. 静穏な湖沼。6.7.は植物のラミナが部分的に残る。10.11.は有機物に富み黒色を呈している。遺物は出土していないが弥生時代を通じて堆積したものと考えている。

A地区とB地区の層序は対応するが、上述したようにB地区は7.が堆積する頃から陸化が進んでいることがわかる。

14. 遺物は出土していないが、縄文時代晩期と考えている。この中粒砂層が海水準の低下によるものかどうかは不明である。

3. まとめ

池島遺跡の範囲の東端部に位置する当地は、弥生時代を通じて腐食質土が形成されるような静穏な低湿状態=湖沼であり、積極的に土地利用できない場所であった。人為的な活動があった時期は古墳時代前期と古墳時代後期~飛鳥時代にかけてであった。また、A地区と比べてB地区の方が陸化が進んでいたが、両地区が形成される条件が異なるものか、現段階では不明である。

今後の調査において、古墳時代前期および古墳時代後期~飛鳥時代からの砂礫層の広がりや遺構の形成に関わるものであり、注意する必要がある。

また、当初池島遺跡の弥生時代の集落についても考えていたが、上述したように不安定な土地であり、この集落については改めて解釈する必要がある。池島遺跡内だけではなく、池島東遺跡の周辺も考えるべきであるが、その範囲が次第に限定されてきたと捉えるのか、必ずしも集落があったとは言えないということも考えられるだろう。

文献

1. 「池島・福万寺遺跡 発掘調査概要」—89-1~6 調査区の概要— 1991 財団法人大阪文化財センター
2. 「図録 農耕の技術とまつり」1992 財団法人大阪文化財センター



図9 A地区 西壁断面(中部)



図10 A地区 北壁断面(下部)

第3章 山畑古墳群第17次発掘調査報告

1. はじめに

本調査は平成7年度公共下水道管渠築造工事に伴い、東大阪市四条町地内で実施したものである。築造工事は総延長約250mの現市道上を現地表下約2mから5mにかけて開削し、幅約2mに雨水管と污水管を並置するものであった(図11)。

工事設計の段階で1994(平成6)年2月7日に試掘調査を実施し⁽¹⁾、瓦器碗細片を含む中世遺物包含層が確認された。包含層は人頭大の礫を含む砂礫層で、河道内堆積層の可能性が強いと判断された。この結果を受け、東大阪市教育委員会文化財課の指導のもと関係機関の協議がもたれた。調査区の狭小さ等による諸条件から人力での掘削が不可能であるとの判断がなされ、機械掘削による立会調査的な発掘調査とし、必要もしくは可能な場合に本格的な発掘調査に切り替えることとなった。西から東へむかって調査は進行し、結果として本格的な調査を行うこと無く終了したが、中世の河川を確認する等、いくつかの知見を得ることができた。以下にその結果を略述する。

なお、立会的な調査にとどまったため、国土座標値や水準高の移設作業は行っていない。このため本文中の数値は単なる目安としての意味である。本調査は面積にすると約500m²、調査期間は中断を含め1995(平成7)年8月22日から11月17日を要した。

2. 調査概要

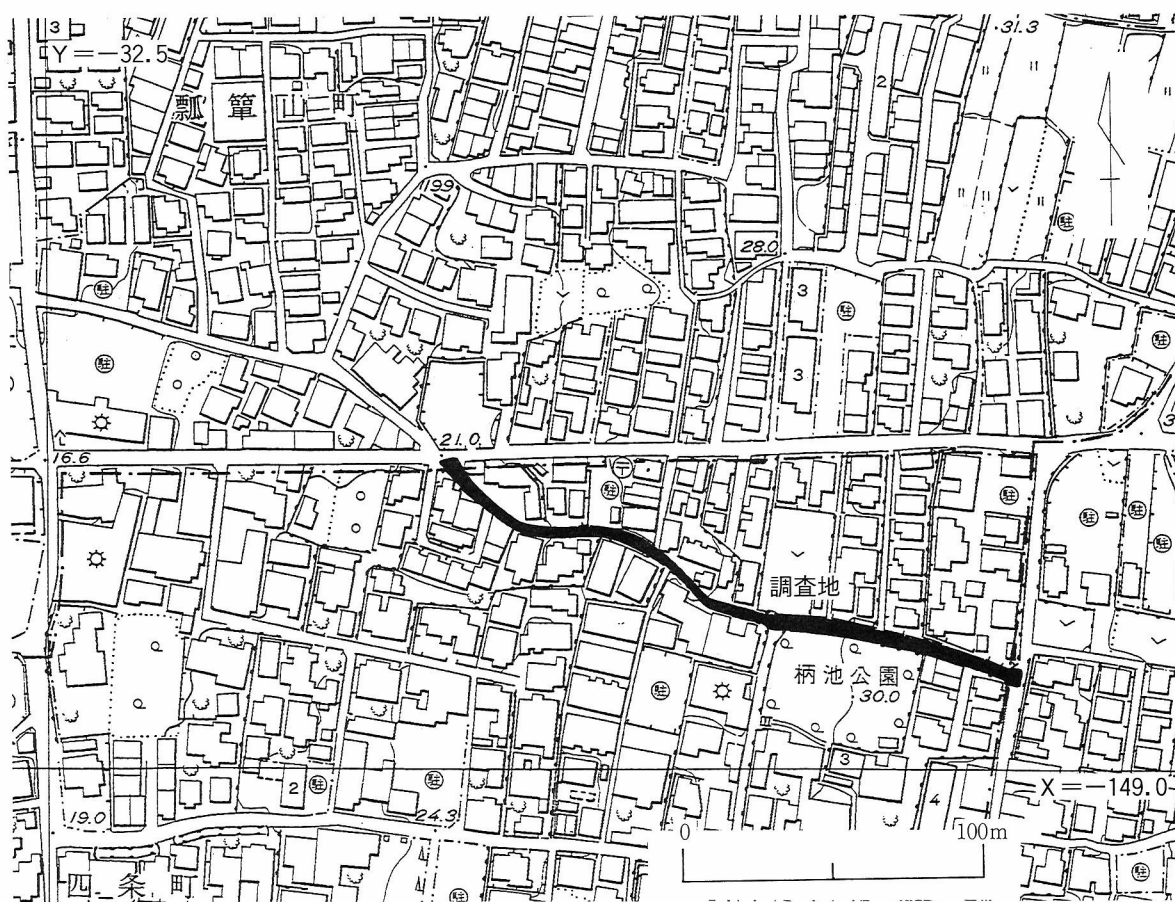


図11 山畑古墳群第17次発掘調査調査地位置図(S=1/2500)

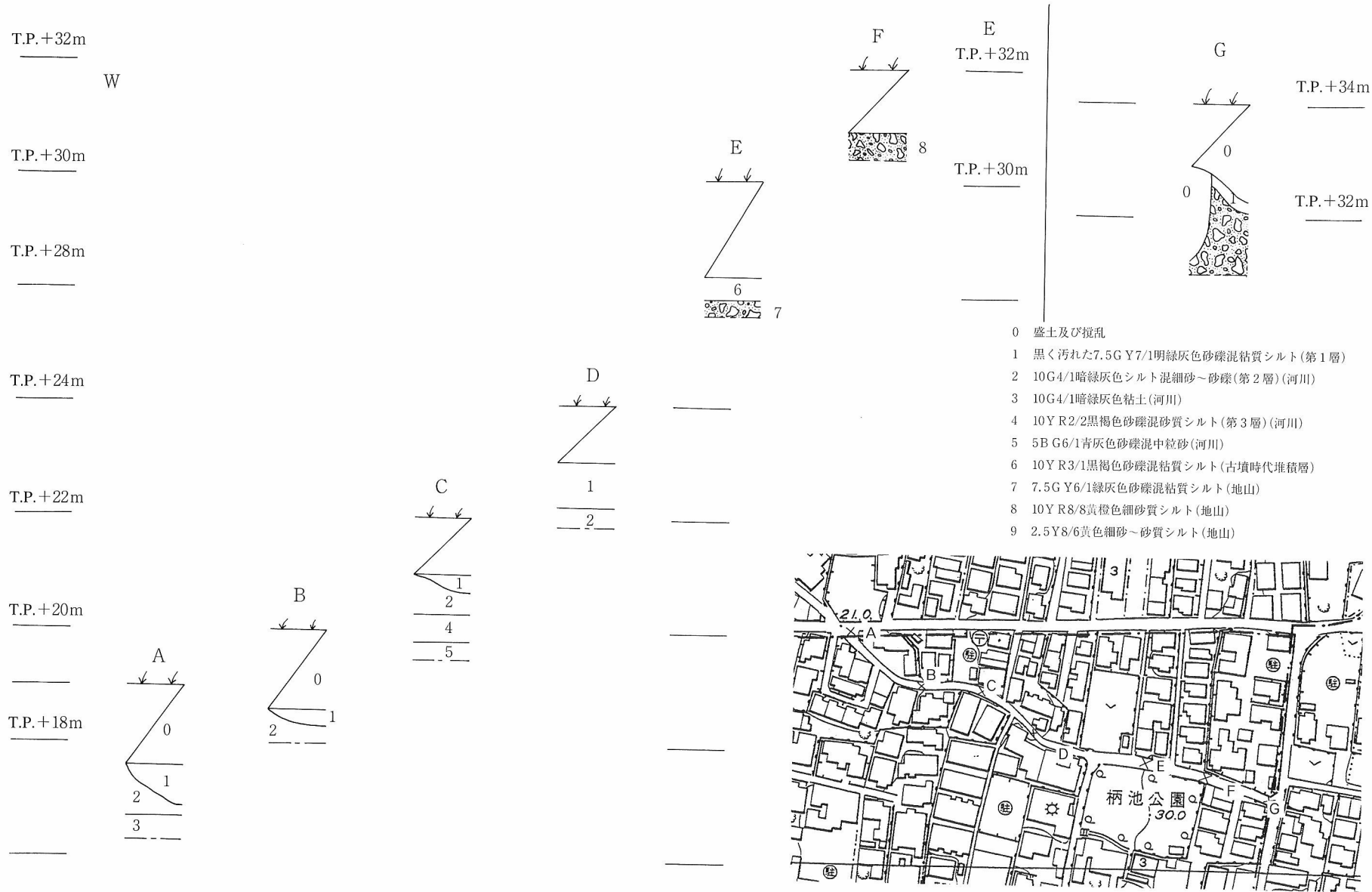


図12 山畑古墳群第17次発掘調査土層略図(上下方向のみ S=1/100)

上記の経緯から調査は機械掘削に立ち会い、遺物採集と土層断面の観察に努めるものとなった。土層の観察は埋設する管の長さが約4 mであることから5 mごとに行った。

調査区内の層位は柄池公園付近を境に西半(A・B・C・D地点)と東半(E・F・G地点)で大きく異なる(図12)。

調査区西半の基本的な層序は上層から順に次のとおりであった。

第0層 盛土及び攪乱層。

第1層 黒く汚れた明緑灰色砂礫混粘質シルト層。北から南に落ち込む。粘土ブロック等を含むことから人為的に埋められたものと考えられる。道路となる以前は水路であったという地元市民の話と、BからD地点で調査区の両壁に石垣(図14・15)が検出されたことから、本層はその水路の埋土と思われる。

第2層 暗緑灰色シルト混細砂～砂礫層。礫には握りこぶし大から人頭大のものが含まれるが、C地点付近ではこぶし大以下であった。瓦器碗細片と土師皿細片が出土したが、図示できるものはない。本層は洪水や土石流等によって一挙に堆積したものと考えられる。

第3層 黒褐色砂礫混砂質シルト層。瓦器碗細片が出土したが、図示できるものはない。本層は流水による堆積層と考えられる。

このほか、A地点付近では暗緑灰色粘土層が、C地点付近では青灰色砂礫混中粒砂層が確認された。ともに流水による堆積と思われる。状況から第3層とともにひとつの河川内堆積層の一部を構成するものと考えられる。

土地条件図(国土地理院発行)には扇状地と緩扇状地の境界に東へ入り込む凹部が現れて



図13 山畑古墳群第17次調査地近景



図14 山畑古墳群第17次調査C地点石垣(北壁)

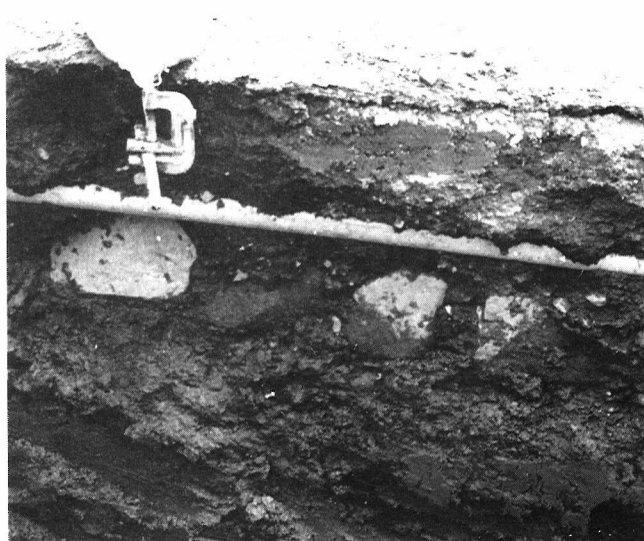


図15 山畑古墳群第17次調査C地点石垣(南壁)

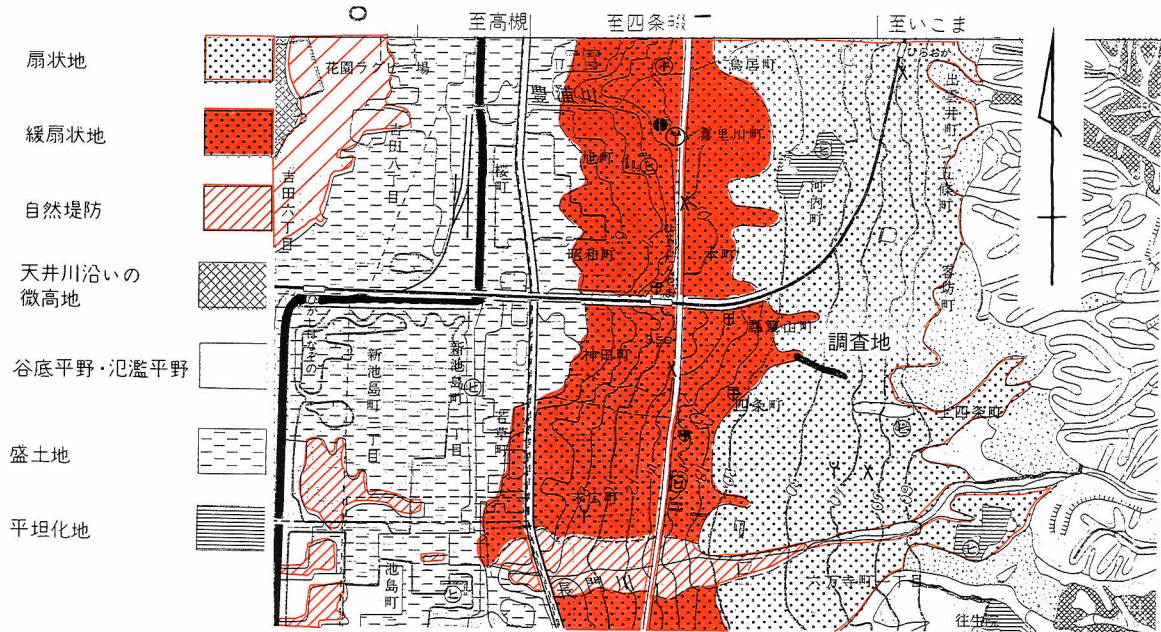


図16 山畑古墳群第17次発掘調査地周辺土地条件図(S = 1/25,000)

いる(図16)。調査区は凹部に位置し、確認された層序から凹部は河川の痕跡と考えられる。河川の規模や初現の時期は明らかにしえないが、出土遺物から12から13世紀には確実に存在し、13世紀頃に第2層によって一挙に埋まり、近世以降はその河道を踏襲して水路が作られたものと推測される。

調査区東半で第2層が確認されたのは東端のG地点のみである。本地点では北から南に落ち込んでおり、河道が現道路よりわずかに北に振れていると考えられる。

調査区東半のほとんどでは第0層の直下に地山と思われる黄色細砂～細砂質シルト層が検出された。東端のG地点では北から南へ大きく落ち込んでいた。南に隣接する柄池公園の名が示すとおり、かつては溜池が存在し、池の築造によって削平を受けていると思われる。築造の時期は不明である。

E地点では黒褐色砂礫混粘質シルト層を確認した。土師器細片や須恵器細片が出土し古墳時代後期に堆積したと考えられる。遺物に図示できるものはない。ごく一部で検出したにすぎず、削平をまぬがれた包含層であるか溝等の遺構であるかは明らかではない(図17)。



図17 山畑古墳群第17次調査E地点土層断面

3. まとめ

立会的な調査であったが、中世の河川と古墳時代堆積層の存在を明らかにすることができた。

これまでも調査地周辺では下水道管渠築造工事に伴う試掘や立会調査が行われており、河川内堆積層と思われる地層を確認している⁽¹⁾。その結果と土地条件図に表現される凹部や地域計画図(地形図)(大阪府発行)にみえる現在の等高線などから今回確認された河道は瓢箪山古墳(現瓢箪山稲荷神社)付近で北へ屈曲し、近畿日本鉄道(近鉄)瓢箪山駅の南を西流すると推定される。現御神田川はこの中世河川の位置を踏襲しているものと考えられる(図18)。

同様のことから近鉄線南側の瓢箪山町から客坊町地内にかけて



図18 山畑古墳群第17次発掘調査中世期河道推定図(S=1/2,500)

も中世の河川が存在する可能性が高い。1985(明治18)年の仮製2万分之1地形図(大日本帝国陸地測量部作成)に明記されている河川はこの河道を踏襲していると思われる(図19)。さらに、近鉄線北側の本町地内には現在藤ノ木川が西流しており、これがかつての河道を踏襲しているとする、2本の河川が河内寺跡や皿池遺跡と市尻遺跡や山畑古墳群との境界をなすものと考えられる。近鉄瓢箪山駅北側付近に集落跡等の遺跡が確認されないことから裏づけされる。

また、出土した瓦器碗や土師皿から調査地付近に中世集落が存在したと思われる⁽²⁾。遺跡名が山畑古墳群とされているように、これまで本遺跡については古墳の確認を主眼とする調査が行われてきた。しかし、今後は集落遺跡の存在を予想した調査が必要であろう。

中世の河川がいつまでさかのぼるものか、資料は得られなかったが、中世の河道が現代まで踏襲されているように、古墳時代頃から河道であった可能性は高いといえよう。そう仮定すると、山畑51号墳(成山古墳)は東から西へ尾根状にのびる凸部の先端部に、山畑52号墳(瓢箪山古墳)は南から北へ伸びる高地の北端部に位置していると思われる。ところが、山畑53号墳(鬼塚古墳)は推定する河道の中に存在することになる⁽³⁾。実は53号墳は近世の絵図によって所在が推測されているもので、測量や発掘調査で確認されたものではない⁽⁴⁾。すべては想像であるが、53号墳の位置がより南であるか、古墳ではなく後世の塚であった可能性が高いといえよう。

古墳時代堆積層は存在を確認したのみで、性格等は不明である。今後の調査の進展によって明らかにされることを期待したい。

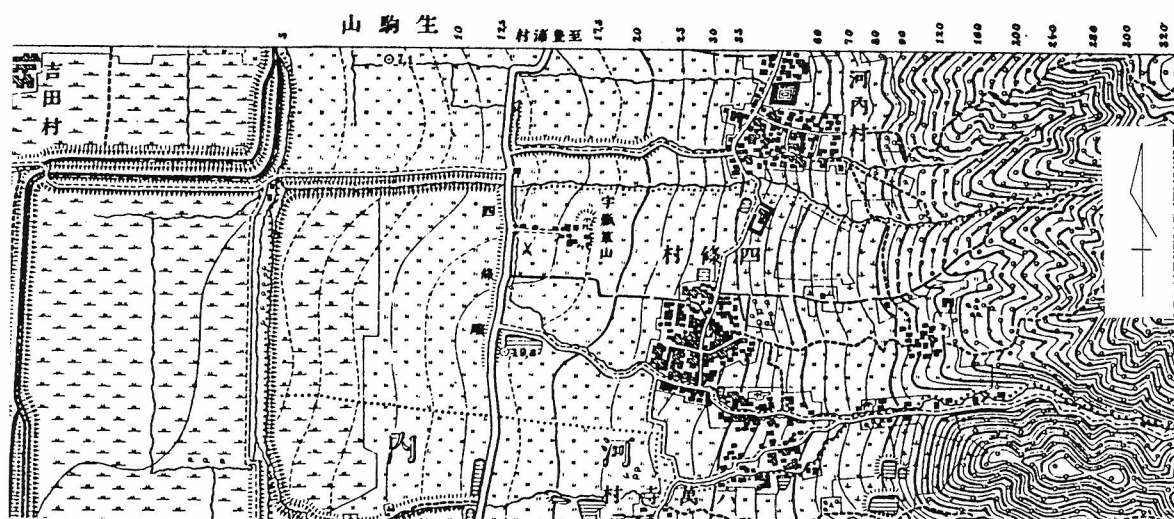


図19 山畑古墳群第17次発掘調査地周辺仮製地形図(S=1/20,000)

注

- (1) 堆積層を確認した試掘調査は1994(平成6)年3月29日に実施したものである。
- (2) 東大阪市教育委員会文化財課によって調査地周辺で試掘や立会調査が多く行われている。その資料によれば集落位置の推定は可能であろうが、市民のプライバシーに関わるものとして公表を禁じられている。
- (3) 埋蔵文化財包蔵地・指定文化財分布図』 1996 東大阪市教育委員会
『一わが街再発見—東大阪市の古墳』 1996 東大阪市教育委員会
- (4) 『河内四条史第1冊本編』 1981 四条史編纂委員会
『河内四条史第2冊史料編I』 1977 四条史編纂委員会

第4章 鬼塚遺跡第20次発掘調査報告

1. はじめに

鬼塚遺跡は生駒山西麓の扇状地緩斜面の東大阪市箱殿町・南荘町・新町・豊浦町一帯に広がる⁽¹⁾、縄文時代～室町時代に至る複合遺跡である⁽²⁾。これまでの調査で縄文時代の土器・土偶が出土し⁽³⁾、弥生時代後期の火災を受けた竪穴住居址、古墳時代後期の作り付け竈を伴う竪穴住居址⁽⁴⁾、平安時代の井戸や土器集積ピットなどが確認されている。

今回の調査は東大阪市南荘町と立花町の境にあたる南北の道路のうち、南側約75mを本調査、北側約17mを交通事情等から休日みの工事となり立会調査とした。また調査地南端の東西方向の道路は、大坂と奈良を最短距離で結んだ暗越奈良街道にあたる。事前に試掘調査を実施したところ、街道関連遺構等は検出されず、西流する番匠川の整備によって攪乱されていることが判明し、街道上の下水管布設は埋蔵文化財に支障はないとの結論に至った。

調査地の土質は堅固で鋼矢板の打設が困難であったため、1日あたり延長約4mの範囲を素掘りで調査し、当日中に埋め戻して路面復旧する調査方法となり、作業時間の都合上、掘削には重機を併用し、土層断面図は柱状図的なものとなった。調査は平成7年9月5日から開始し、立会調査も含めて11月3日に終了した。

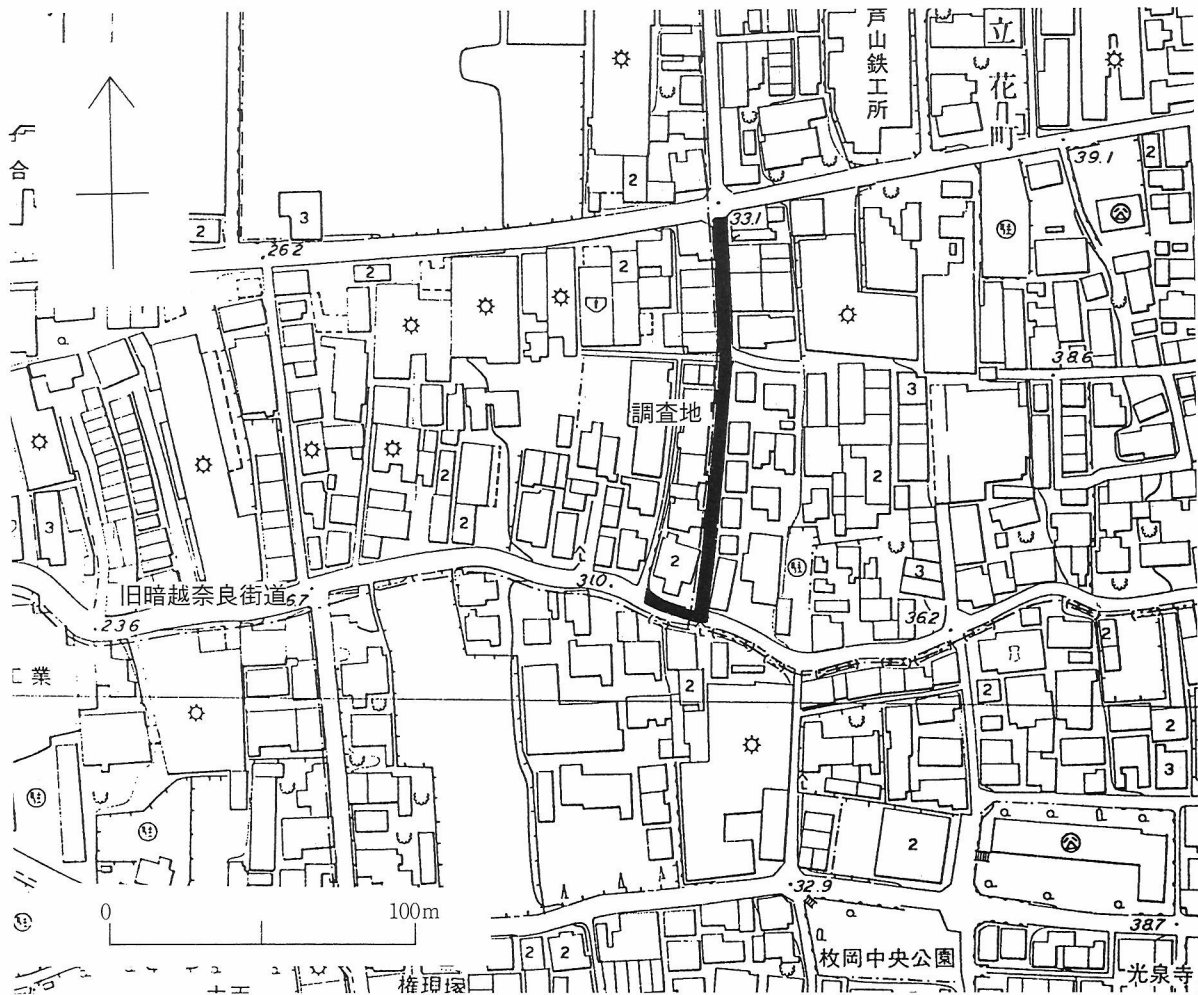


図20 調査地位置図(1/2,500)

2. 層位

調査地の層序は大きく8層に分れる。第3層は調査地北半で認められた近代の遺物を含んだ耕土層。第4層は近世の遺物を含んだ旧耕土層。調査地南端では層厚78cmで酸化状態にあり7枚の鉄分の沈着層が認めら、暗渠・杭跡を検出した。調査地北半では還元状態で徐々に層厚も薄くなって行く。第5層は調査地の南端及びほぼ中央部の2ヶ所で確認された、人頭大の礫を含んだ平安時代後期～鎌倉時代の土石流による堆積層。第6層は調査地のほぼ全域で認められ、平安時代後期～鎌倉時代の遺物が出土し、下面で鋤溝を検出した。第7層は部分的に認められ、古墳時代後期の遺物(図29、3・6)が出土し下面で同時期の遺構が検出された。

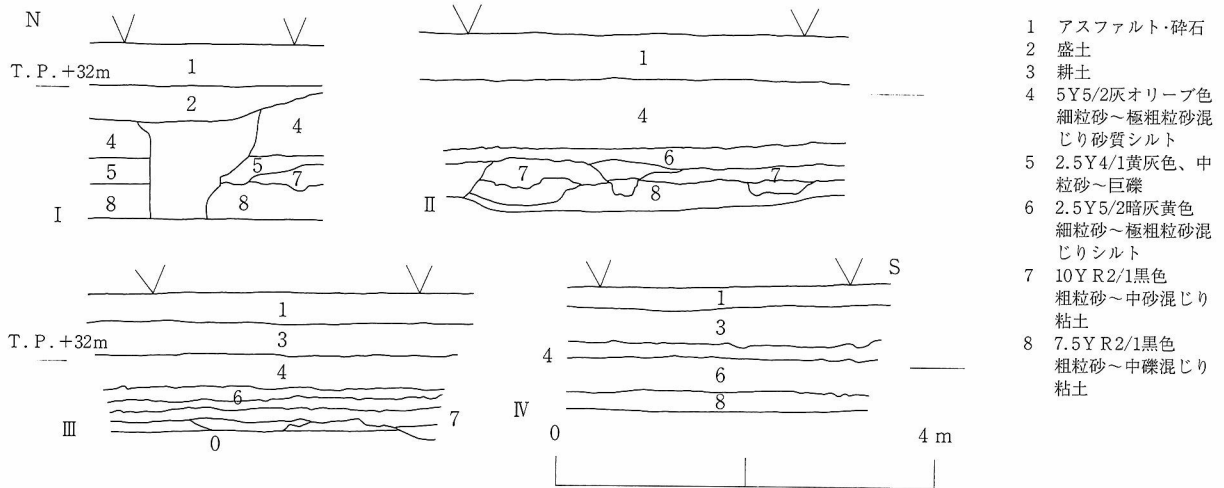


図21 西壁断面図(1/80)

図22 西壁断面 I

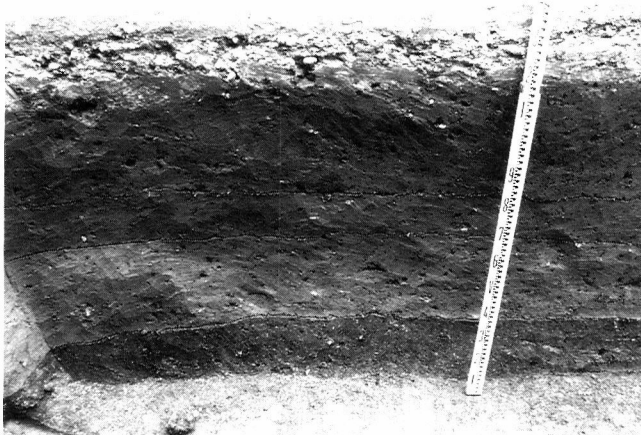


図23 西壁断面IV

3. 遺構

暗渠は直径約12cm、長さ約33cmの瓦質土管を4本、東西方向につないでいた。覆土が第4層であることから近世までに棚田への導水のため使用されたものと思われる。杭跡は第4層中で検出したことから同様に近世の耕作関連のものと思われる。

鋤溝は調査地南部で東西方向、中央で南北方向を各2条検出した。覆土が第6層で鋤溝からは瓦器碗が出土し、平安後期～鎌倉時代のものと思われる。

溝1～4は深さ8～10cm、出土遺物はないが第8層上面で検出したことから古墳時代後期頃のものと思われる。

土壙1は深さ14cmで図29、4の土師器丸底壺の出土から古墳時代後期に比定でき、深さ5～8cmの溝6・7も同時期のものとして推測できる。溝5は深さ46cmで土壙1を切り込んでいることから平安時代後期～鎌倉時代と思われる。

溝8は深さ6cm、溝9は深さ20cmで瓦器碗が出土し、平安時代後期～鎌倉時代のものと思われる。

土壙2は深さ16cmで図29、5の須恵器杯が出土していることから古墳時代後期のものと思われる。

落ち込みは深さ約70cmで北肩には深さ10cm前後のピット9～12を伴っていた。落ち込み内からは図29、7の土師器高杯のほか須恵器・焼土塊が出土した。また底面では深さ36cmの土壙3を検出し土師器・須恵器が出土した。いずれも古墳時代後期に比定できる。

ピット13からは古墳時代後期の須恵器出土し⁽⁵⁾、ピット14とともに本調査地東部に接する第17次調査地の住居址に関連するものと思われる。

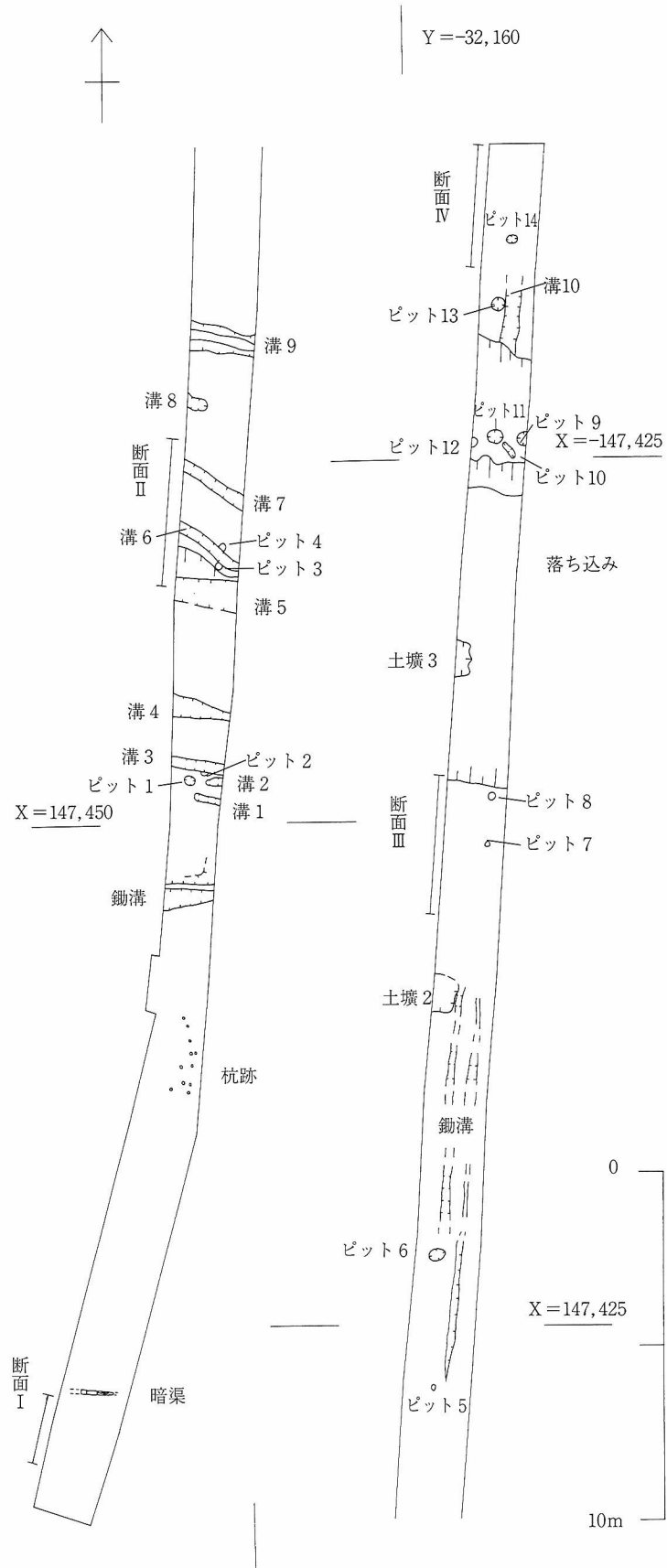


図24 遺構平面図(1/200)

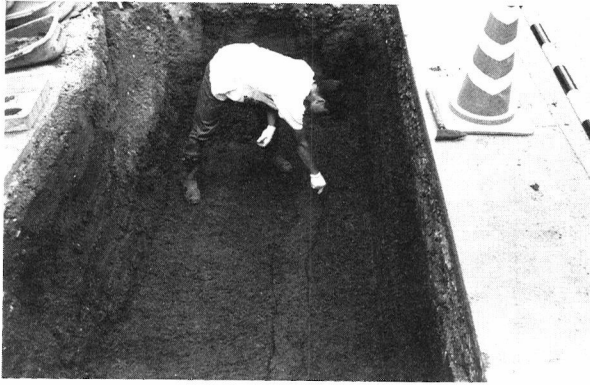


図25 鋤溝検出状況



図26 暗渠



図27 落ち込み、ピット13



図28 ピット5断面

4. 出土遺物

今回の調査ではコンテナ2箱程度の遺物が出土した。1は鋤溝ベース層上面出土の見込み部に格子状暗文をもつ瓦器椀。2は鋤溝出土の土師器皿。3は第7層出土の製塩土器。4は土壌1出土の土師器丸底壺で外面は風化しているが、内面口頸部にはヘラミガキ、内面肩部以下にはハケメがみられる。5は土壌2出土の須恵器杯身で立ち上がりは低く内傾し、端部は丸い。6は第7層出土の土師器高杯で脚部外面にヘラミガキ、杯部外面にハケメがみられる。7は落ち込み出土の土師器高杯。8は第7層出土のサヌカイト製の石錐か。背部に表皮が残る。

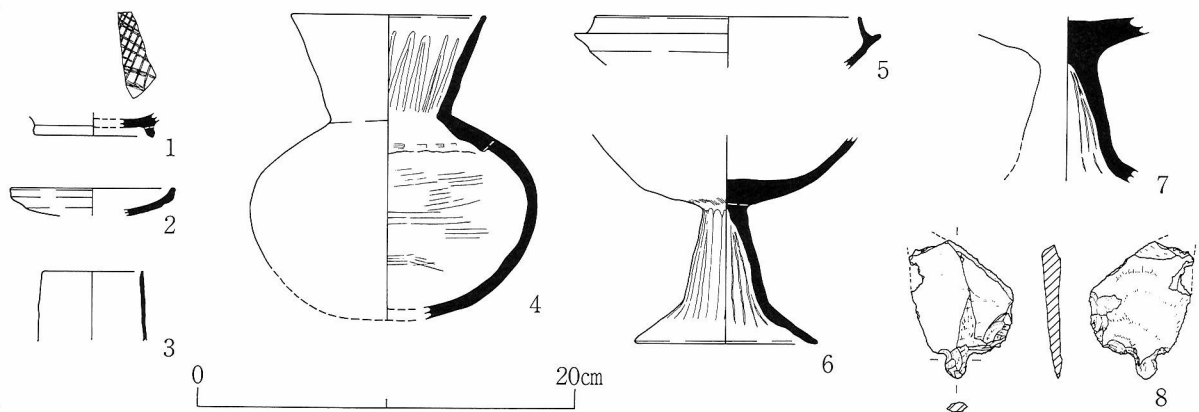


図29 出土遺物実測図(1/4)



图30 出土遺物



图31 出土遺物

5. まとめ

今回の調査で明らかになった点を簡潔に記しまとめとしたい。鬼塚遺跡における既往の調査では縄文時代晩期・弥生時代の遺構及び遺物が検出されているが、本調査地で確認できた人間活動の痕跡は古墳時代後期まで下る。当該期の包含層は部分的にしか認められず遺物の出土量も少なかったが、集落址に伴う遺構を検出することができた。また第13次調査で検出された奈良～平安時代前期の集落址は本調査地では確認されなかった。平安時代後期以降は暗渠・杭跡・鍬溝の確認から耕作地として利用されていたものと思われる。

注

- (1) 芋本隆裕「鬼塚遺跡」『東大阪市文化財調査報告書 第2冊』東大阪市教育委員会 1975
- (2) 芋本隆裕「鬼塚遺跡Ⅱ」『鬼塚遺跡Ⅱ・若江遺跡』東大阪市遺跡保護調査会 1979
- (3) 吉村博恵「鬼塚遺跡第17次調査」『西の口・鬼塚・若江遺跡の調査』東大阪市教育委員会 1993
- (4) 松田順一郎「ピット内出土遺物のファブリック分析—鬼塚遺跡第13次発掘調査から—」『東大阪市文化財協会ニュース』Vol. 5 No. 3 東大阪市文化財協会 1991
- (5) 前掲注(3)

第5章 段上遺跡第5次発掘調査概要

1. はじめに

段上遺跡は東大阪市下六万寺3丁目地内に所在し、これまでの4次を数える調査で縄文後期から現在に至る人々の生活活動の痕跡が確認されている遺跡である。

今回の調査は府道大阪東大阪線新設工事にともないその歩道部に下水管を埋設するための事前の調査で1995年11月6日～同年12月7日までの一ヶ月間実施した。調査区は下水工事で掘削される長さ70m、幅1.5mに設定した。ただし調査区の西側約30m分は府道部分の調査トレンチ内であったため立会とし、本調査はそれ以降の堆積土が残っている部分からG.L. -約2mまで行った。なお調査するにあたり調査開始地点から任意に、A・B・C・D・E・F・G・H・I・J地区としA地区から順に調査した。

2. 調査概要

A地区はちょうど第3次トレンチと今回のトレンチとの境目で上層の包含層はすでに調査済みであったため立会の予定にしていたが、G.L. -1.5mのところまで弥生中期の遺物がまとまって出土した事から下層のみ調査となった。弥生中期の遺物が出土したのは、やや粘土質のシルトが南北に溝状に検出できた中からで、第3次調査で確認されている溝状湿地の延長部にあたる事がわかった。

B地区はA地区と同じく上層はまだ攪乱土であったが下層は調査できた。しかし遺構、遺物とも確認できなかった。

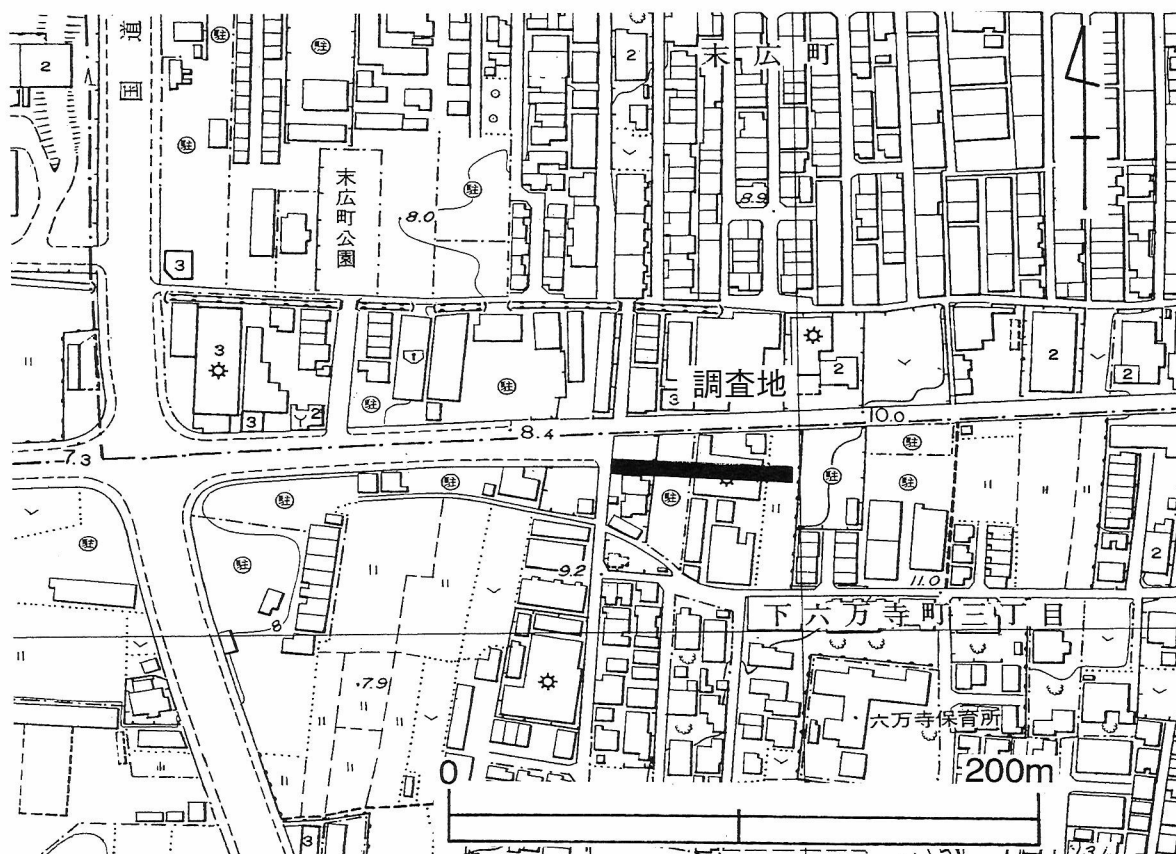


図32 段上遺跡第5次発掘調査調査地位置図(S=1/2,500)

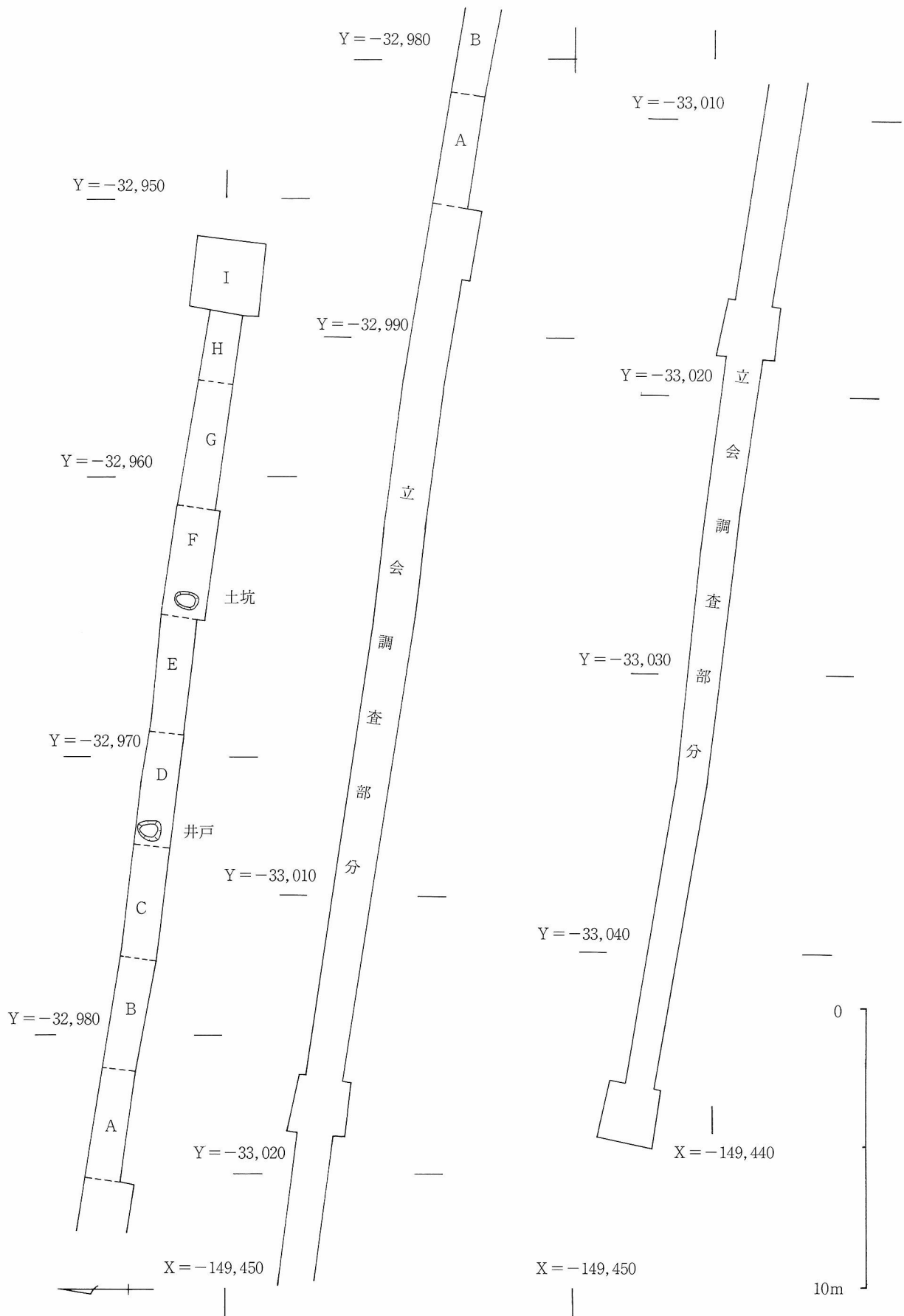


图33 段上遺跡第5次発掘調査調査区平面図 (S=1/200)

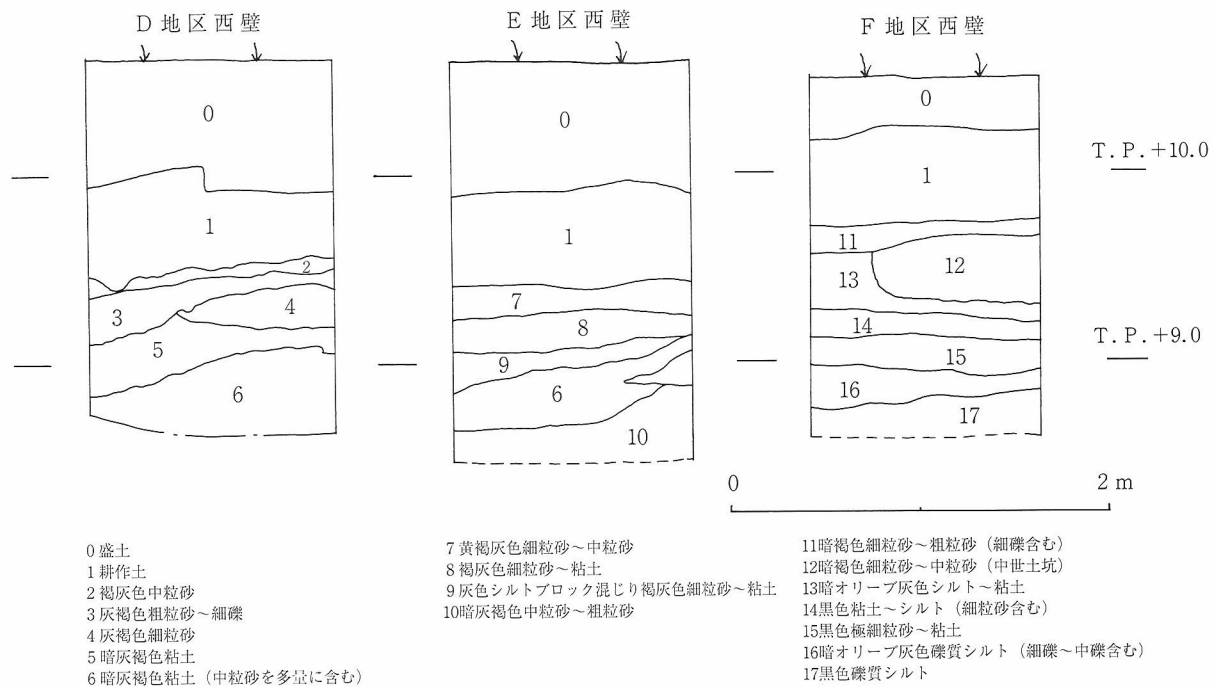


図34 段上遺跡第5次発掘調査土層断面図(S=1/40)

C地区は整地土下から調査をし、中世までと考えられる耕作土層を除去した下層から浅い溝状の遺構を検出した。これまでの調査結果から弥生後期に対応すると考えられる。

D地区は中世耕作面でピットを確認したほか、調査区東端のT.P.+8.8mの弥生後期遺構面にて粘土と粗粒砂混じり細粒砂のブロックからなる落ち込みを確認した。落ち込みからはブロックに混じって土器片も多く混入しており時期は弥生後期後半である。

E地区ではD地区で検出された落ち込みの続きを検出した。D地区では落ち込み状にしか残っていなかったが、E地区では落ち込みに土を取り除いた下層から井戸が検出された。つまり落ち込みは井戸を埋め立てた最終埋土であったと考えられる。井戸は径94cmで深さT.P.+8.8mから90cm掘込む円錐形の断面を持つ。遺物は上層・下層・最下層に分けることができ、特に上層からは多量の土器が出土した。しかし上層の土器は落ち込みのブロック土を除去してすぐに見え始めるので、井戸の廃棄段階の物であり井戸利用中の土器は下層最下層の土器であると考えられる。最下層の土器には弥生後期前半の小型長頸壺があり胴部にはヘラ記号が施されていた。上層の土器は半完形の高坏や完形の鉢が目立ち、甕が少ない。井戸廃棄にともない祭祀を行っている可能性も考えられる。

F地区では中世耕作面(弥生後期遺物包含層上)で南北方向の小溝を確認した。

G地区ではT.P.+9.3mの弥生中期遺構面から径88cmの炭・焼土混じり土坑とそれにとまなうピットを検出した。遺物は少ないが弥生中期後半の物と考えられる。

H・I・J地区では中世～弥生中期までに対応する層は確認したが、遺構は確認できず、遺物もかなり少なかった。

3. まとめ

今回は弥生後期と中期の良好な遺構が検出できた。特に後期の井戸は隣接する第4次調査区で検出されている竪穴住居とともに段上集落の生活を知る手がかりとなると考えられる。

最後に調査に際し調査補助員として原邦昭、中村順一郎両氏、遺物整理で垣本明美氏の協力を得た。記して感謝いたします。

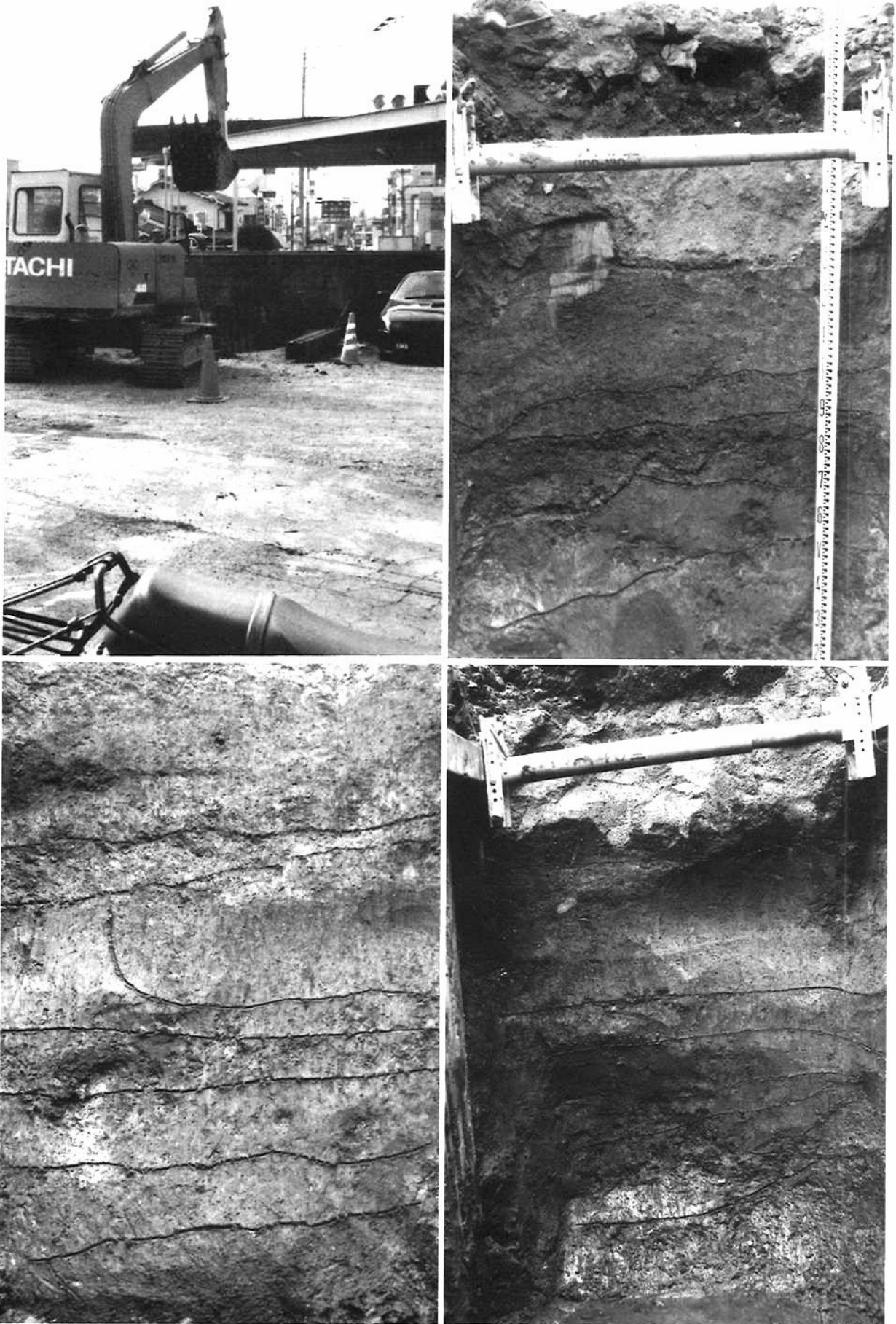


图35 段上遺跡第5次断面(上左:調査前狀況・上右:D区東壁・下左:F区東壁・下右:E区東壁)



図36 段上遺跡第5次発掘調査弥生後期井戸上層遺物出土状況

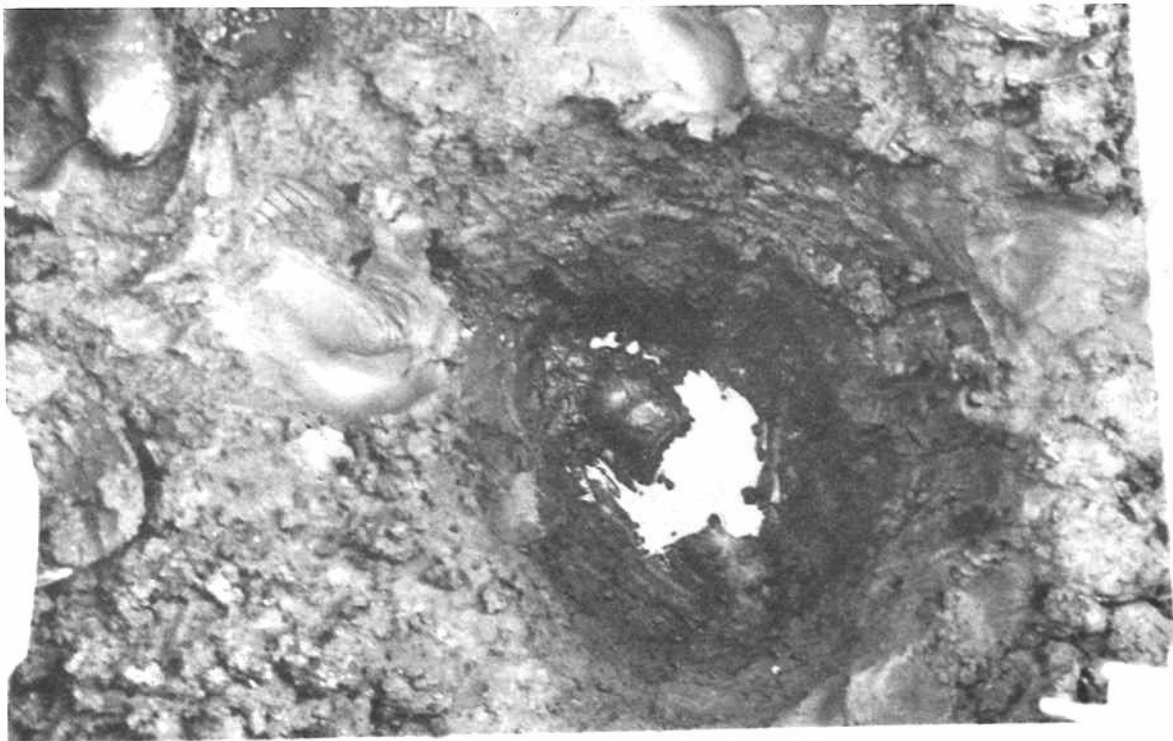


図37 段上遺跡第5次発掘調査弥生後期井戸最下層遺物出土状況

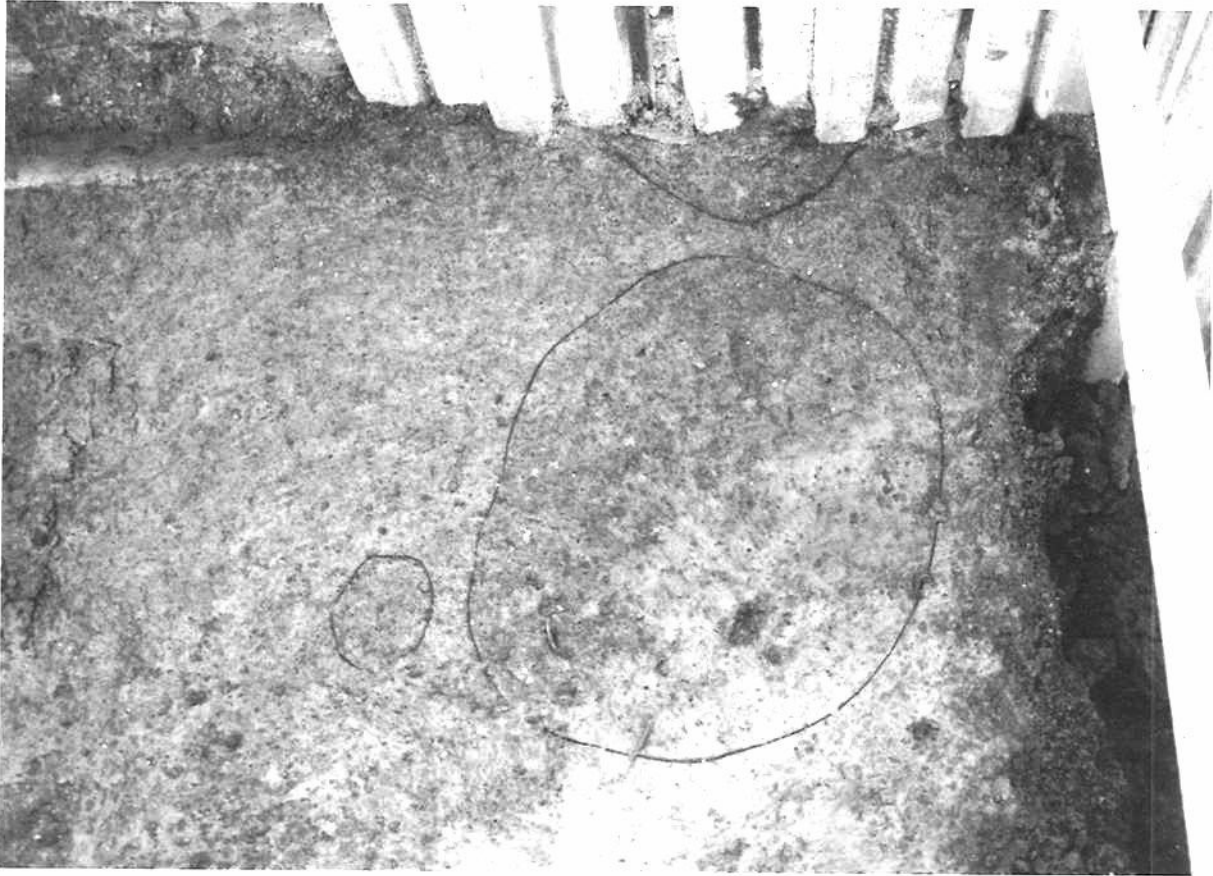


図38 段上遺跡第5次発掘調査弥生中期土壌(北より)

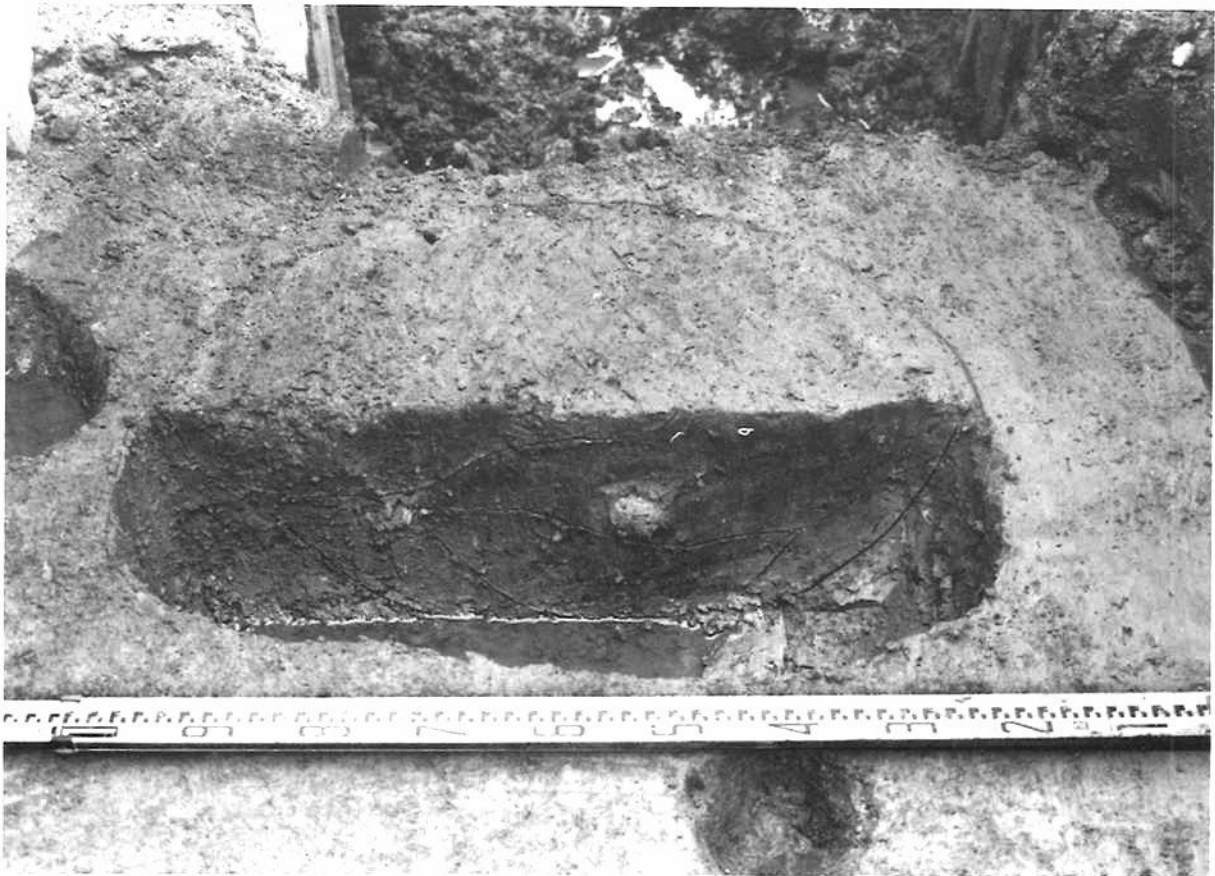


図39 段上遺跡第5次発掘調査弥生中期土壌断面(東より)

第6章 段上遺跡第6次発掘調査報告

段上遺跡第6次発掘調査は、下水管渠築造工事にとまない、東大阪市下六万寺町6丁目5～6番地の、主要地方道大阪東大阪線の道路敷で、1995年12月7日から1996年1月12日までの期間、推進工法の豎坑内(7×5m)で行われた。地表下約8mまでの垂直範囲のなかで、遺構・遺物の有無を確認し、本調査地の東の隣接地で行われた第3・4・5次発掘調査地との層序対比を行うことを目的とした。これらの調査では、古墳時代中期・後期、弥生時代後期・中期、縄文時代晩期・後期・中期の堆積層がみとめられている。

第6次調査は、1995年11月21日に試掘調査を行い、地表下約2.8mまでの耕作土層とその下位の砂礫層中にきわだった考古資料のないことを確認し、その深さまでの機械掘削後、12月7日から人力掘削による下方の堆積層の調査を始めた。その結果、機械掘削終了面直下のオリーブ黒色を呈する有機物に富む砂質シルト質粘土から、弥生時代中期の土器片が数点出土し、同層直下で、同じくオリーブ黒色を呈する有機物に富む砂礫まじりシルト質粘土層の下面と、さらに下位の礫まじり泥質砂層との層界付近で、縄文時代晩期末の土器片が約20点出土した。ほとんどの縄文土器片は堆積葉理に沿って出土し、過去の地表面に貼りついてきたかのような状態であった。また、2枚の出土層は、上位がもっとも暗色で、下方に向かって黒みと泥分を減じる土壤成層をなし、より下位のシルト質粘土層には、上位の堆積物で充填された樹木の根の跡が高密度に分布していた。これらのことから、縄文時代晩期の土器が堆積した前後の時期には、調査地付近には、森林が広がっていたと推測される。根の痕がみられる泥層の下方約2mまでの上部には、逆級化成層をなし、層理が不明瞭でおおむね塊状の、土石流堆積物と考えられる礫まじり泥質砂が、下部にはクラストサポートでトラフ型斜交層理をなす掃流性の礫まじり砂が累重し、ともにより下位の更新統最上部と推定される堆積層を下刻した開析谷を充填していた。この開析谷は、3・4次調査で検出された縄文時代中期の開析谷に対比される。

本報告では、詳細なデータを示しえず、また堆積物の分析や年代測定などの作業を多く残したままであるが、調査地における観察と出土遺物の年代や層序対比から、以下のような堆積環境の変化に関する予察をおこなった。

(1) 縄文時代中期に、この地域の更新統最上部堆積層から構成される扇状地面を河川が下刻するような基準面の低下が想定され、このことは沖積低地において沖積層上部砂層の堆積の要因となった海水準低下と関連する可能性が高い。

(2) さらに、縄文時代晩期までの期間に開析谷が埋没したことで、開析谷内堆積層最上部に、静水域の泥質堆積物が載ることは、中期以後海水準が上昇に転じたことを強く示唆する。

(3) 縄文時代晩期に(2)の静水域が土石流堆積物に覆われた後、さらに一定期間にわたって植生の発達する陸上の環境に変化することは、上位の弥生時代中期の泥層堆積期までに、一般的には無堆積で侵食的な環境にあったことを意味する。この時期にはたとえば、3・4次調査では小規模な開析谷が発達し、北方の西ノ辻遺跡では、幅約10m、深さ約4mの開析谷が検出されている。これらの開析谷の発達時期と、宮ノ下遺跡や水走遺跡でみられる、いわゆる「埋積浅谷」の発達の時期はほぼ一致し、「河内潟」の時代から「河内湖」への過渡期に、一時的に海水準が低下した可能性が高い。

(4) 弥生時代中期頃の泥層は、段上遺跡のほか、鬼虎川遺跡などの沖積低地縁辺部のみならず、新家遺跡などの低地中央部においても前後の時期の堆積層に対して比較的大きな層厚を示す。このことは、縄文時代晩期の海水準低下の後、再び上昇に転じ、陸側では排水不良の湿地や湖沼が発達するとともに、「河内湖」全体としては、水面下に継続的な堆積空間が生じたためと考えられる。

図41 段上遺跡 6次調査地柱状図

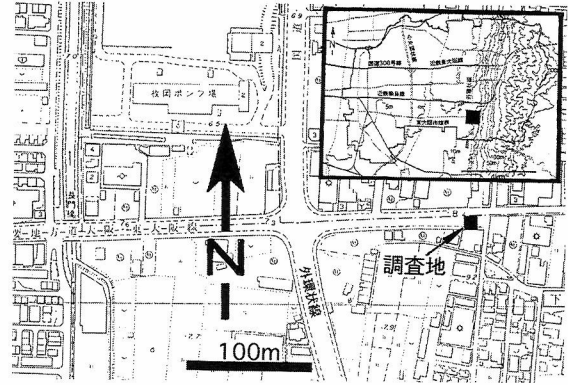
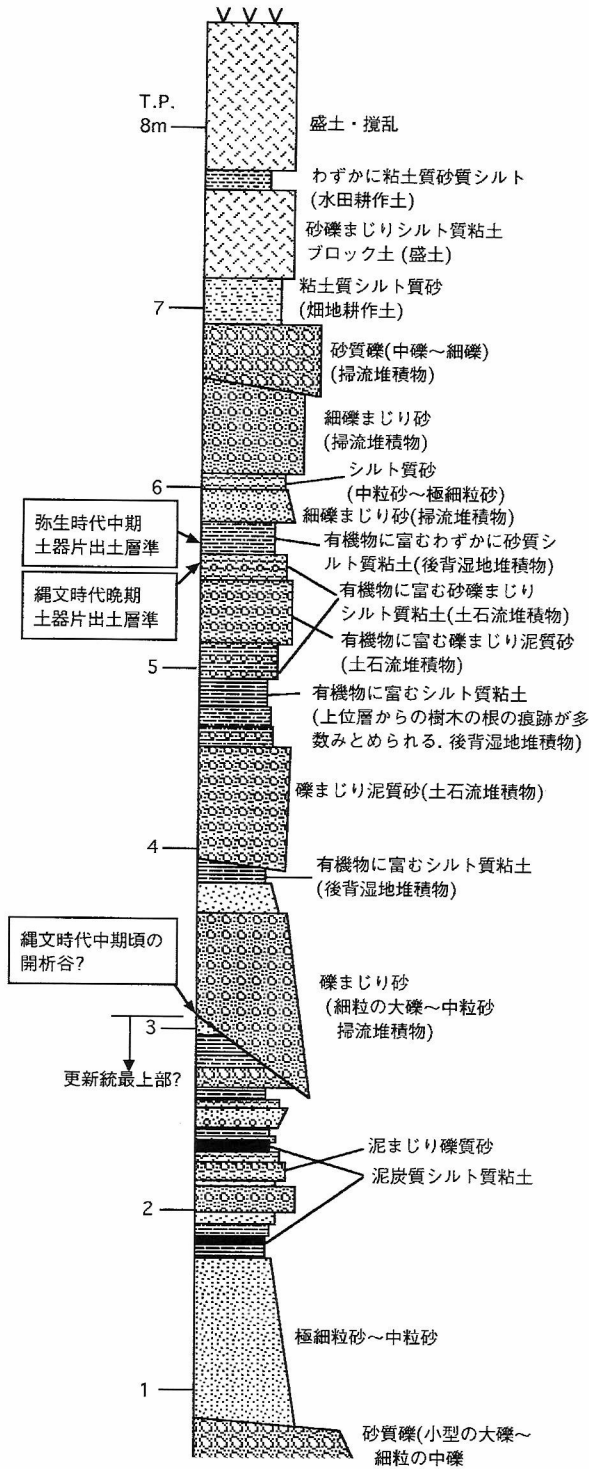


図40 段上遺跡 6次調査地位置図

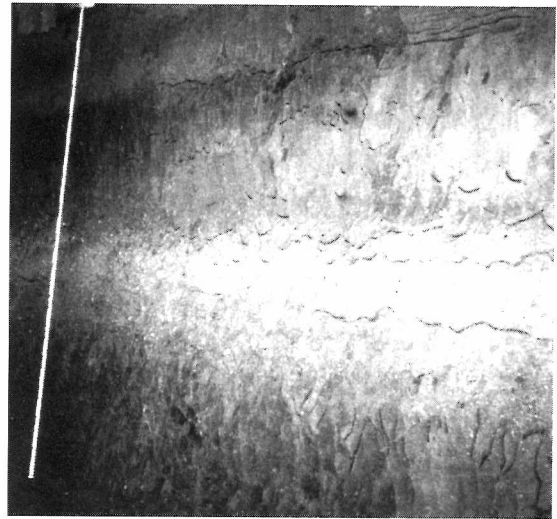


図42 弥生時代中期の堆積層(上半部)と縄文時代晩期堆積物(中位部下)

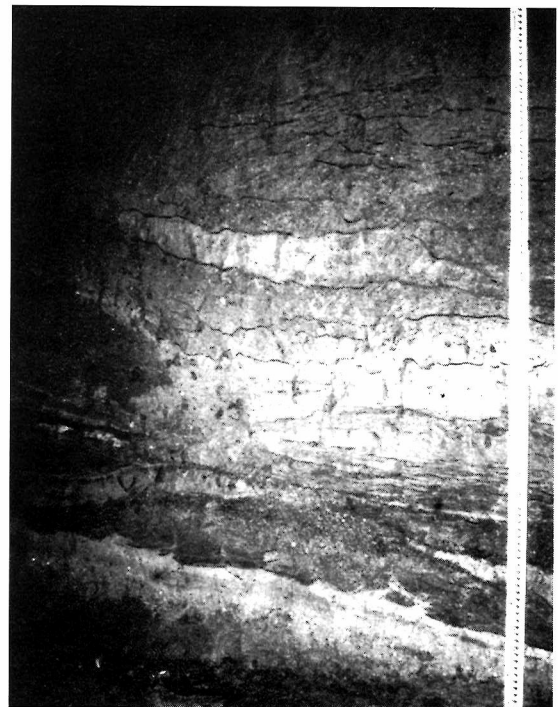


図43 開析谷を充填する堆積物(上半部)とその基盤

第7章 植附遺跡第9-1次発掘調査概要

植附遺跡第9次発掘調査は下水管渠工事に伴い、東大阪市石切町3丁目10・5において、1995年7月から11月末日までの間に工事の進捗に合わせ、推進工法の豎坑部分6か所(以下ピットと呼ぶ)において断続的に行われた(図44)。調査地点は、植附遺跡の推定範囲の北縁部にあたり、旧村の芝集落の南辺と、一部は集落内に位置する。図に示すNo. 1～3およびNo. 5・6ピットでは、豎坑の工事掘削に立ち会い堆積層の観察と遺物の採集を行ったが、後述するNo.4ピットにおいては、奈良時代、古墳時代の遺構・遺物が検出されたため、急拠数日間の人力掘削による調査が行われた。

No. 1～3ピット(標高7～10m)は同年9～10月に掘削され、上位より近代の水路跡、近世以前の旧河道などがみとめられた。同年11月にNo. 3ピットの北隣で行われた東大阪市教育委員会の調査で古墳時代の遺物を含む堆積層が検出され、そのベース上面が同ピットの旧河道側に傾斜していたことから、古墳時代にはすでにこの旧河道は形成されていたことがわかる。またNo. 1ピットでは旧河道内に累重する堆積層の中位より弥生時代中期の土器細片が1点出土し、断面の観察で柱穴らしき落ち込みを確認した。旧河道の埋没の時期は不明であるが、上位には中-近世の耕作土層が載る。

No. 4ピット(標高11m)では、奈良時代(8世紀代)と古墳時代後期(6世紀前半)の遺構・遺物帯を確認した(図45柱状図-左)。前者では、地表下約2.1～3mまでのわずかに泥まじりの礫質砂層中から遺物(図48-1・2)が出土し、その下位の砂礫まじりシルト質粘土の上面で素掘り井戸が検出された(図46左端)。同層からも同時期の遺物が出土した。井戸内の大部分は砂と泥が互層をなして、徐々に埋積された状況を呈しているが、最上部は上位層の堆積物で充填されていた。検出面では、掘かたの周囲には大礫～小型の巨礫クラスの礫が散布し、石組が施されていた可能性がある。後者の遺構・遺物帯では、暗緑灰色～黒褐色を呈し有機物・炭片・土器片に富む僅かに礫まじり砂質シルト質粘土層から土器類が出土し(図48-3～7)、この下位の砂礫質シルト層上面で、溝および柱穴群(図47)が検出された。柱穴の幾つかには柱根が残存していた。調査区内でのまとまりで判断する限りでは、中央の直径約25cmの柱根をもつ柱穴の周囲を、やや細い直径約10～15cmの柱根をもつ柱穴が、隅丸方形の配列をなすように見え、建物跡を構成する可能性が高い。また、2基が隣接する柱穴が散見され、建て替えられた痕跡とも考えられる。想定される建物の一辺の長さは5m弱である。

No. 5ピット(標高約12.5m)では、地表下約1m以下で、逆台形の断面をなし幅約1.5m、深さ約1mで、南南東-北北西方向にはしる溝を検出した。溝は黒褐色を呈し炭片などの有機物に富む砂まじりシルト質粘土層で充填されており、同層からは古墳時代のものと考えられる製塩土器を含む土師器が数点出土した。埋積された溝の上位には、No. 4ピットの奈良時代の砂層と同様な層相をなす砂層が、さらに上位には工事関係者の話によると泥と砂礫層が載る。

No. 6ピット(標高12.6m)は、現地地表下数10cmより約1.9mまでに小型の巨礫～中礫を主とする砂礫層がみられ、その下位に6世紀の須恵器・土師器片を含み、有機物に富む黒褐色の砂礫まじりシルト質粘土層が約2.8mまでにみとめられた。同層の最上部には、調査地点の北側を東西にはしると考えられる流路を充填した砂礫層との指交がみられた。

植附遺跡北部一帯には、人間活動や集落の拡がりに関連するが、古墳時代後期に比較的静穏な堆積環境下で形成されるような泥層が広く分布する。今後堆積物の分析と周辺の調査における層序と古地形の検討から遺跡形成過程を復原する必要がある。

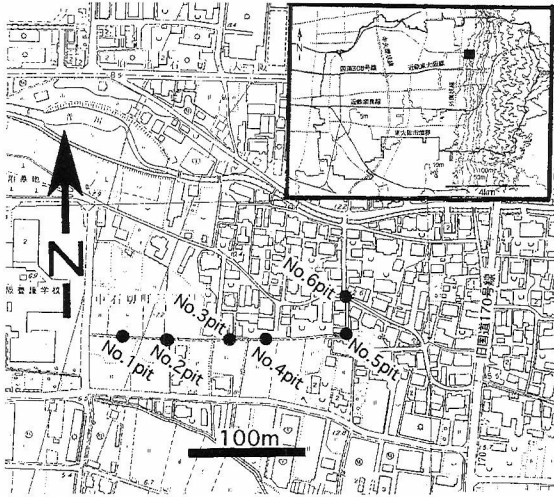


図44 植附遺跡 9次調査調査地点

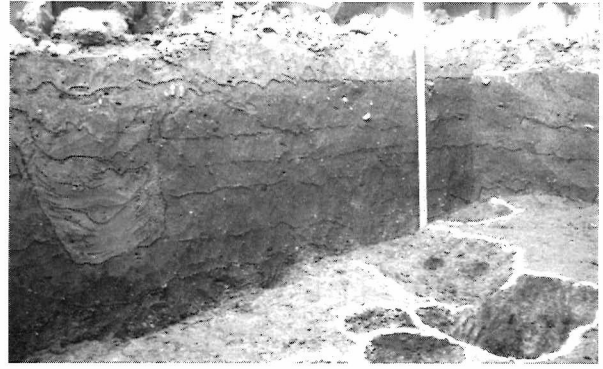


図46 No. 4 pit 堆積層断面北壁 (断面左端は井戸)

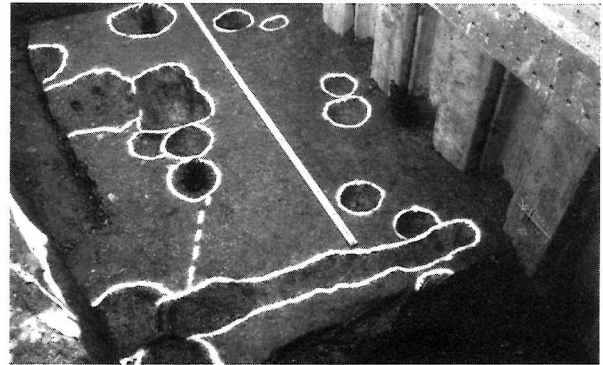


図47 古墳時代遺構検出面(柱穴と溝)

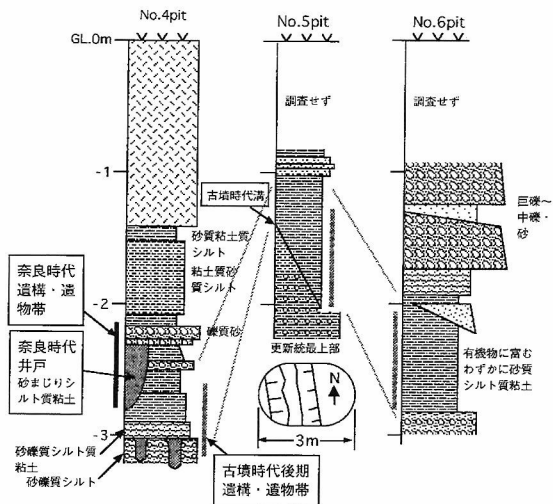


図45 No. 4・5・6 pit 柱状図

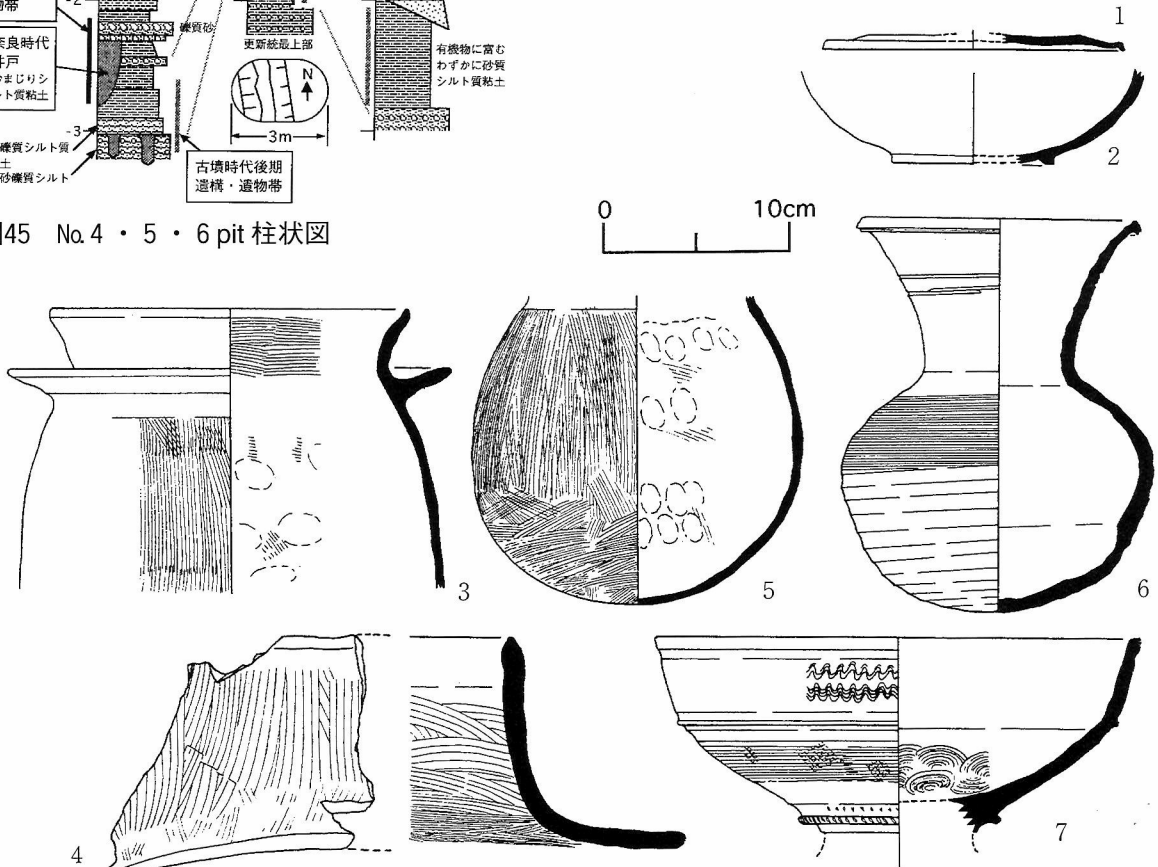


図48 植附遺跡 9次調査の出土遺物

1. 須恵器蓋、2. 土師器椀、3. 土師器羽釜、4. 土師器かまど、
5. 土師器甕、6. 須恵器壺、7. 須恵器器台

第8章 植附遺跡第9—2次発掘調査報告

1. はじめに

前章で植附遺跡第9—1次調査の報告がされているように、中石切町3丁目で実施された下水道推進工事に伴う立坑部分の発掘調査で、遺構の検出と遺物の出土がみられた。そのためNo3地区とNo4地区間で予定されていた開削工事についても本調査が必要となり実施されたのが第9—2次調査である。幅2.1m、延長60mの範囲を、1995年11月27日～1996年1月24日までに実働21日間調査を実施した。

2. 層位

地表下90cmは機械掘削を行なった。第2層～第5層は旧河道の直上から東に向かって順次整地された層で、第5層の上限は出土した瓦器碗・土師器皿から鎌倉時代頃と思われる。第7層は第9—1次調査No4 pitの礫質砂とその下位の砂質シルト質粘土層に相当する奈良時代頃の遺物包含層。第8・9層はNo4 pitのG.L. -2.5～-3 mの砂質シルト質粘土に相当する古墳時代中期末～後期頃の遺物包含層で、調査地西部では薄く両者の識別は困難であった。

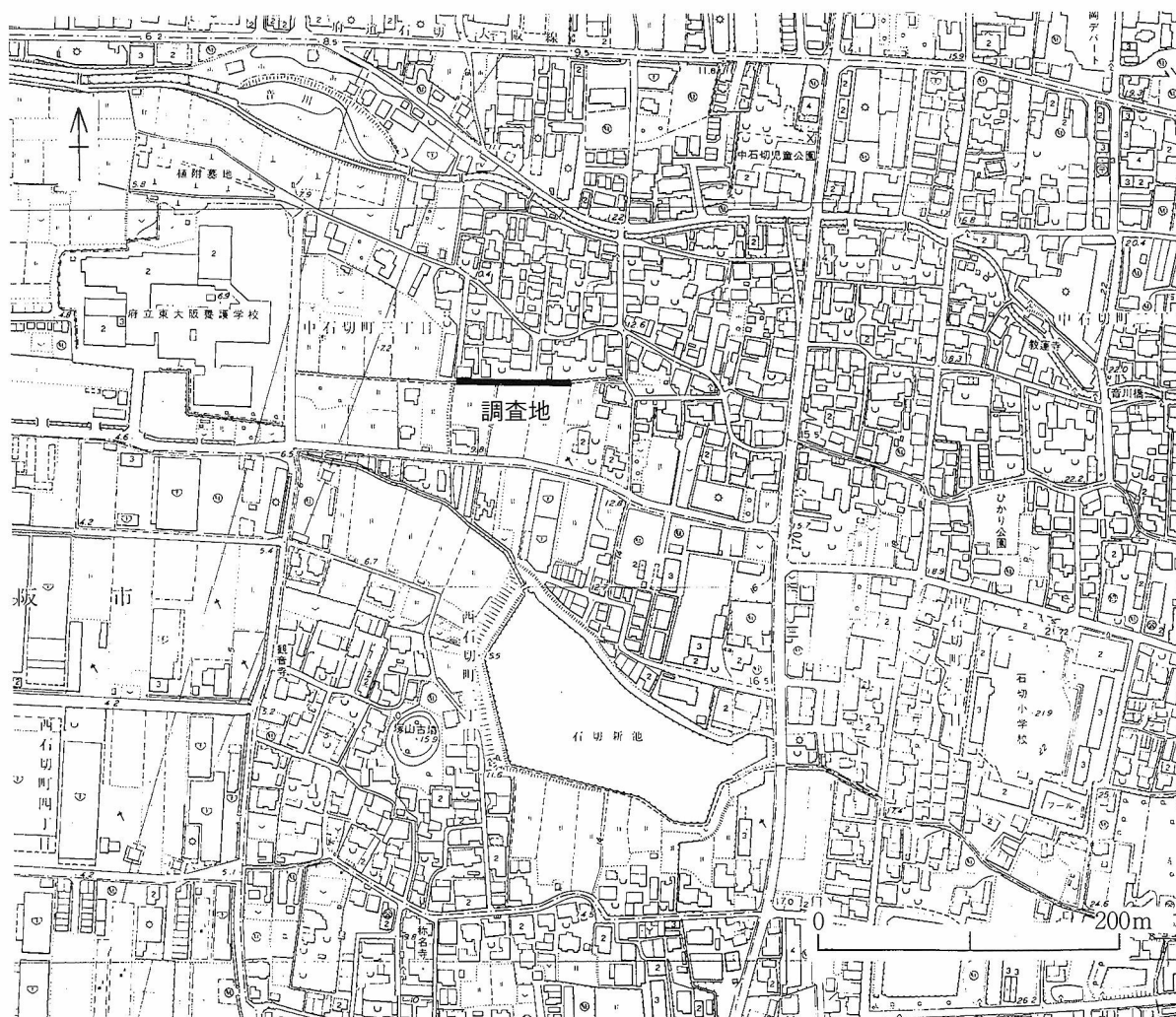


図48 調査地位置図(S=1/5,000)

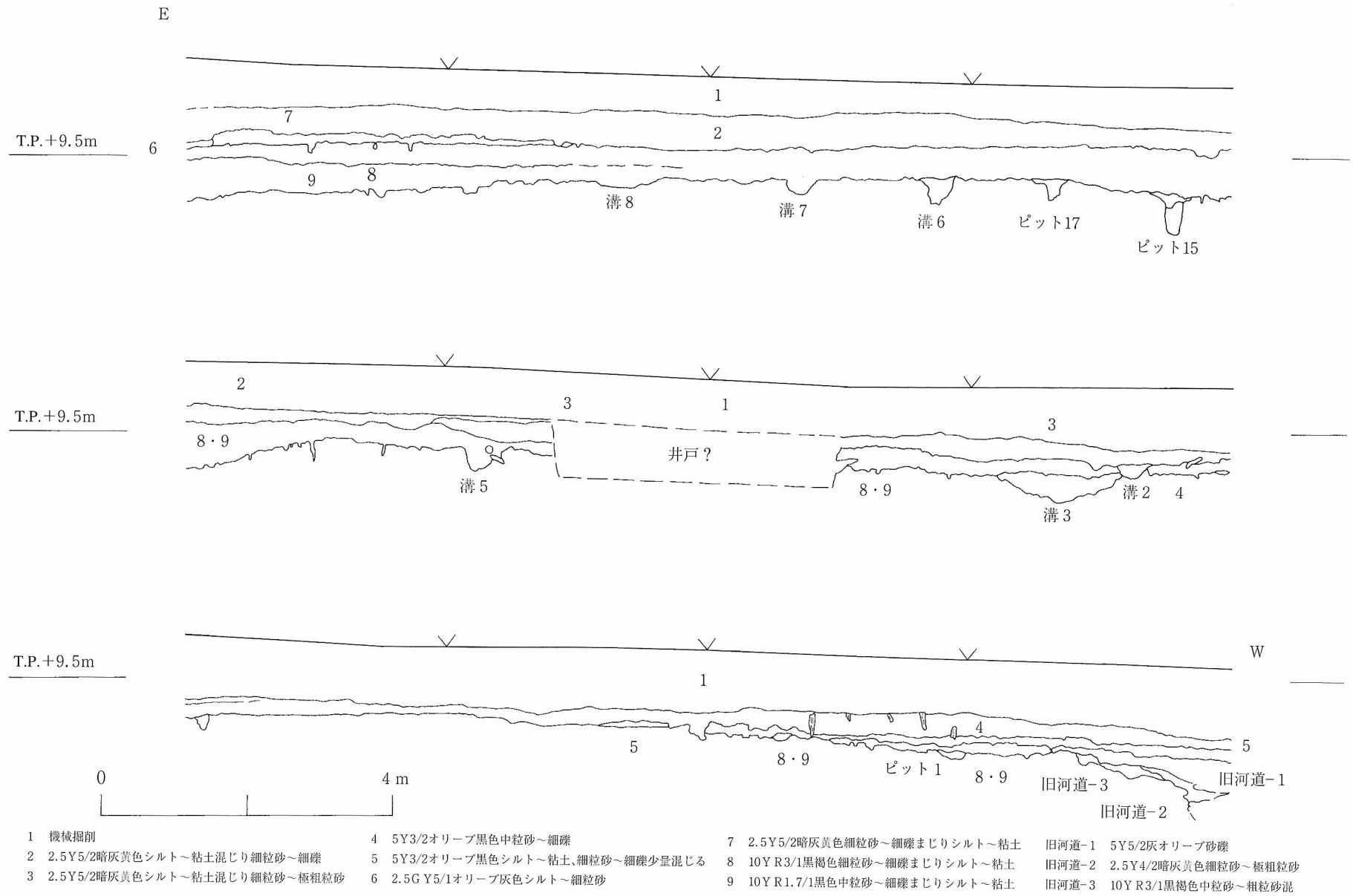


図49 植附遺跡第9-2次発掘調査南壁断面図(1/80)

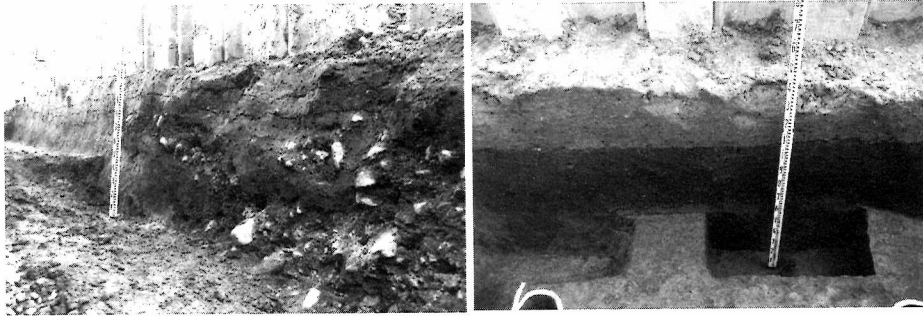


図50 植附遺跡第9-2次発掘調査南壁断面図

3. 遺構

第8層および地山上面で奈良時代遺構を検出した。旧河道は幅約6mで北東から蛇行して北西へ流れる。出土遺物から平安時代後期～鎌倉時代頃と思われる。井戸？は直径約4mで礫が堆積しており、完掘はできなかった。獣骨が1点出土しただけで、時期は不明である。ピットはいずれも直径30cm、深さ10cm程度であった。調査地東部では鋤溝らしき東西2条、南北2条のわずかな窪みを検出した。第7層を埋土とし、奈良時代頃の遺物が出土した。土壇2は直径190cm、深さ30cmで杭が1本残存しており、断面にも杭を打ち込んだ痕跡が確認できた。奈良時代頃の遺物が出土した。土壇2に伴うもの以外の杭は鎌倉時代遺構の整地後に打ち込まれたものと思われる。

第8・9層下面で古墳時代中期末～後期の遺構を検出した。調査地西半は包含層が削平されており、ほとんど遺構は検出されなかった。ピットの直径は16～58cm、深さは8～60cmで埋土は概ね第8・9層で、下部に地山層が混じるものもあった。またピット17には柱根が残存していた。溝は幅30～160cm、深さ12～40cmで、南北に延びるものが多いが、溝7だけは北東から南西に延びていた。埋土は概ね第8・9層である。



図51 土壇2周辺

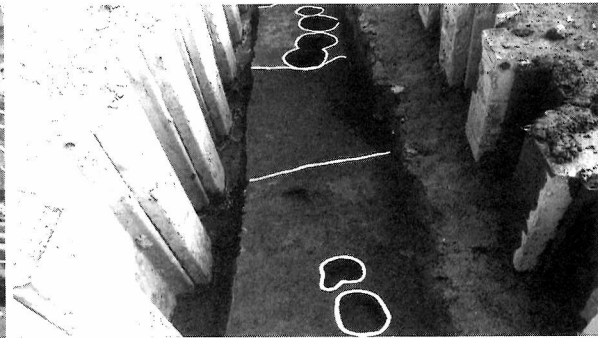


図52 溝3周辺

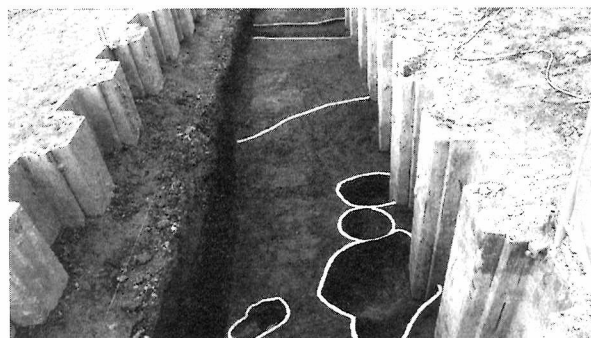


図53 土壇1周辺

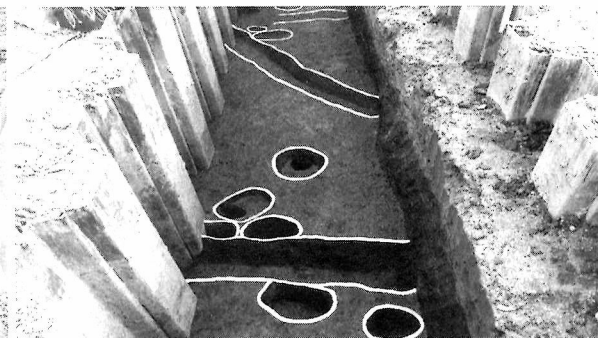


図54 溝6・7周辺

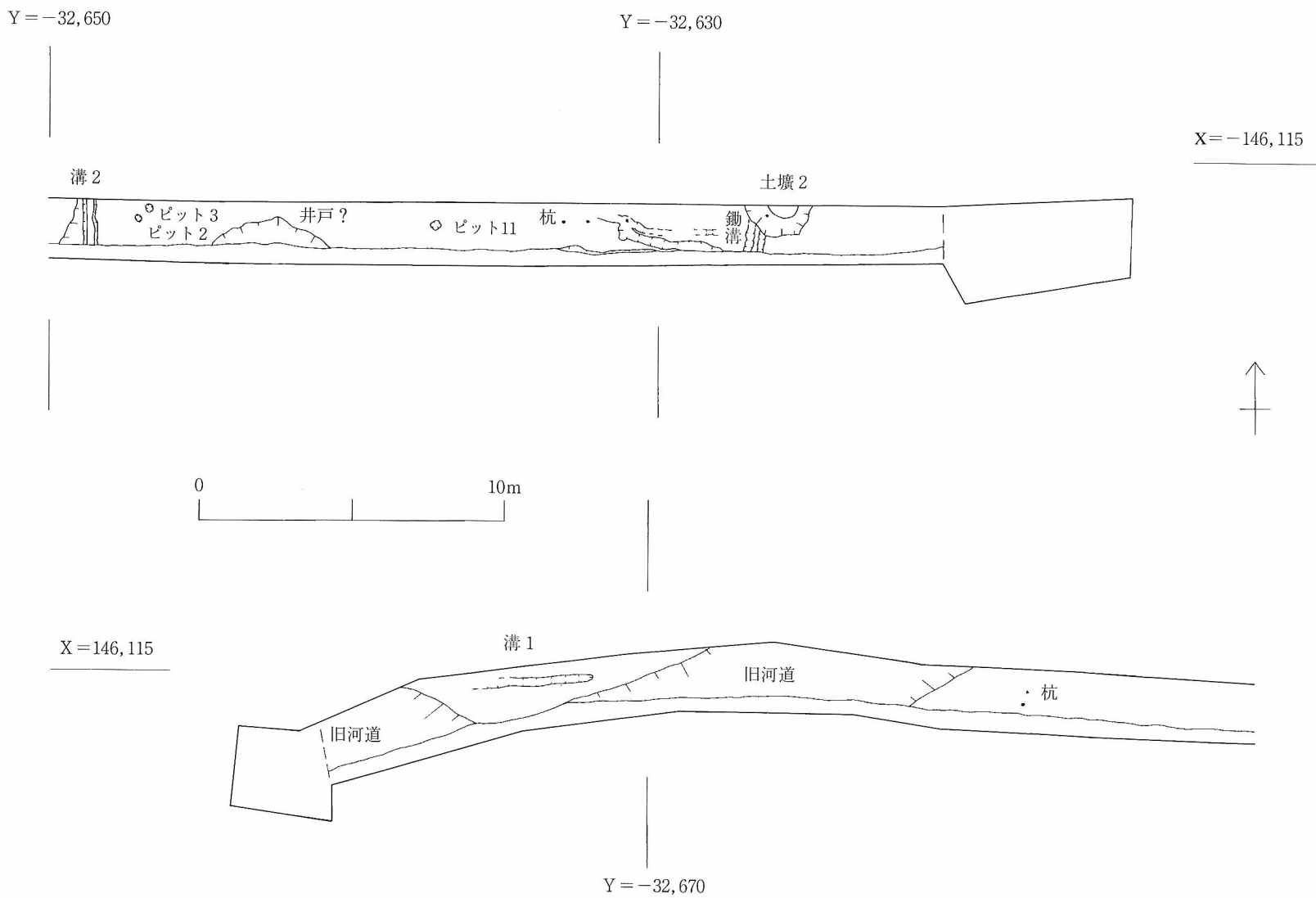
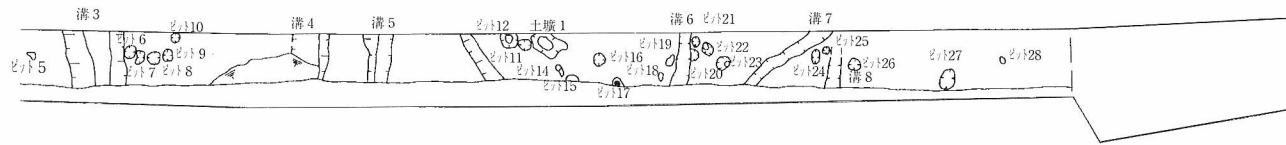


図55 植附遺跡第9-2次発掘調査奈良時代以降遺構平面図(1/200)

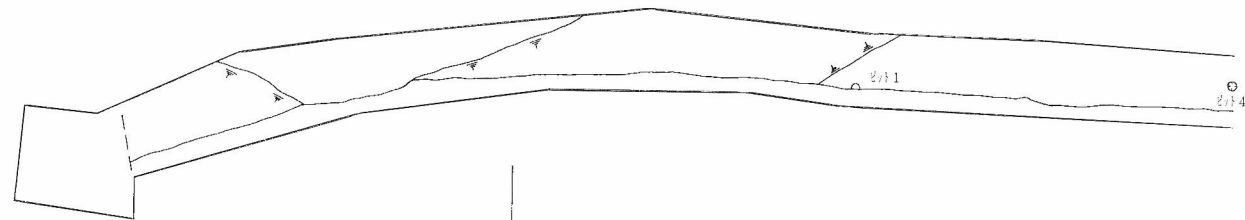
Y = -32,650

Y = -32,630

Y = -146,115



X = -146,115



Y = -32,670

図56 植附遺跡第9-2次発掘調査古墳時代遺構平面図 2 (1/200)

4. 出土遺物

今回の調査では遺物包含層および遺構内から縄文時代晩期～江戸時代の土器、埴輪、石器、瓦、動物遺存体等の遺物が出土した。出土量は古墳時代のものが最も多く、次に奈良時代が続きそれ以外の時期のものはそれぞれ数点にすぎない。以下図57・1～40に示した遺物について器種・器形・出土層位を中心に簡潔に記す。

1～3は第9層出土、4は溝6出土の須恵器杯蓋で受け部を持つ杯身に対応するもの。5は第7層、6はピット13、7は第9層、8は土壙2、9はピット2出土の受け部を持つ須恵器杯身。10・11は第7層出土の須恵器杯身で、返りを持つ蓋に対応するもの。

12は第9層出土の須恵器無蓋高杯。13は第9層出土の須恵器甕で、体部内面にわずかに青海波文が残る。14は第8層出土の須恵器器台で、凸帯間に6条/0.7cmの原体で波状文を施す。

15・16は第9層出土、17は第7層出土の土師器杯。17の外底部にはヘラ条工具による線刻が認められる。18は第9層出土の土師器高杯。杯部内面は放射状の暗文、外面はハケ後ヘラミガキを施す。

19～22は第9層出土の土師器甕。口径にばらつきがあるがいずれも体部外面はハケ目であり、19は体部内面をナデ、20～22はケズリで仕上げる。23は土壙2出土の土師器鉢。

24～31は第9層出土の製塩土器。24・25は外面にタタキ目を持つもの、26・27は外面に指圧痕が残るもの、28・29は内外面をナデで仕上げるもの、30・31は外面に指圧痕が残り内面に二枚貝条痕が残るものである。

32は土壙2出土の韓式土器。このほか第9層からも韓式土器の細片3点が出土している。

33は第9層出土の縄文時代晩期の深鉢。凸帯に刻目を施す。このほか第9層から1点、溝3から2点縄文時代晩期の土器細片が出土している。

34は第9層出土の朝顔形埴輪。貼付凸帯をもち、内面をナデ、外面をハケ目で仕上げる。

35は第8層出土、36は第9層出土の砥石。35は5面を使用している。凝灰岩製か。36は4面を使用している。

37は第9層出土の馬歯。38は獣骨。骨と直交するように、ナイフ状の工具による幅1mm程度の解体時の痕跡が2本残り、その後焼成を受けたため煤が付着している。39は井戸？出土の馬骨。40は二枚貝の一種。

5. まとめ

今回の調査では奈良時代の遺物包含層およびそれ以後の遺構、古墳時代中期末～後期の遺物包含層および遺構を確認できた。

古墳時代の遺構は調査地東部に集中しており、西部では旧河道による削平という可能性はあるものの、遺構の空白域であった。このため当時の集落の中心地は調査地東部であったと判断できる。

出土遺物では古墳時代の製塩土器が比較的多く出土しているのが目立つ。製塩土器の出土が馬の飼育にとって不可欠であることは既に指摘されているところであり、本調査での多量の出土は「河内の馬飼い」と関係するものであろう。包含層から出土した馬歯はそれに対応するものと思われる。

奈良時代以後については包含層の削平が著しく、また遺構のまとまりも見られず不明な点が多い。今後の周辺地域での発掘調査に期待したい。

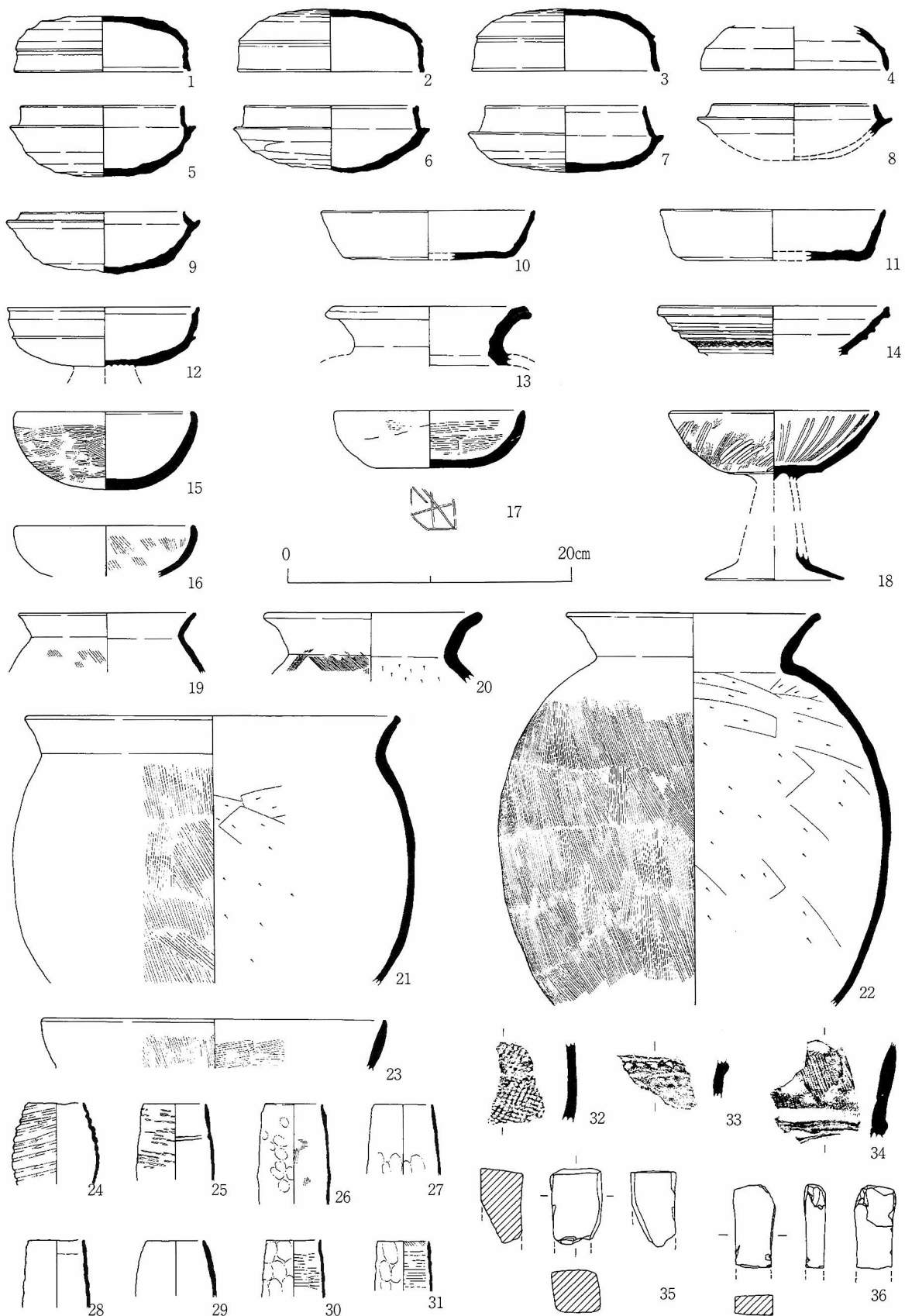


図57 植附遺跡第9-2次発掘調査出土遺物実測図(S=1/4)



図58 植附遺跡第9-2次発掘調査遺物写真1

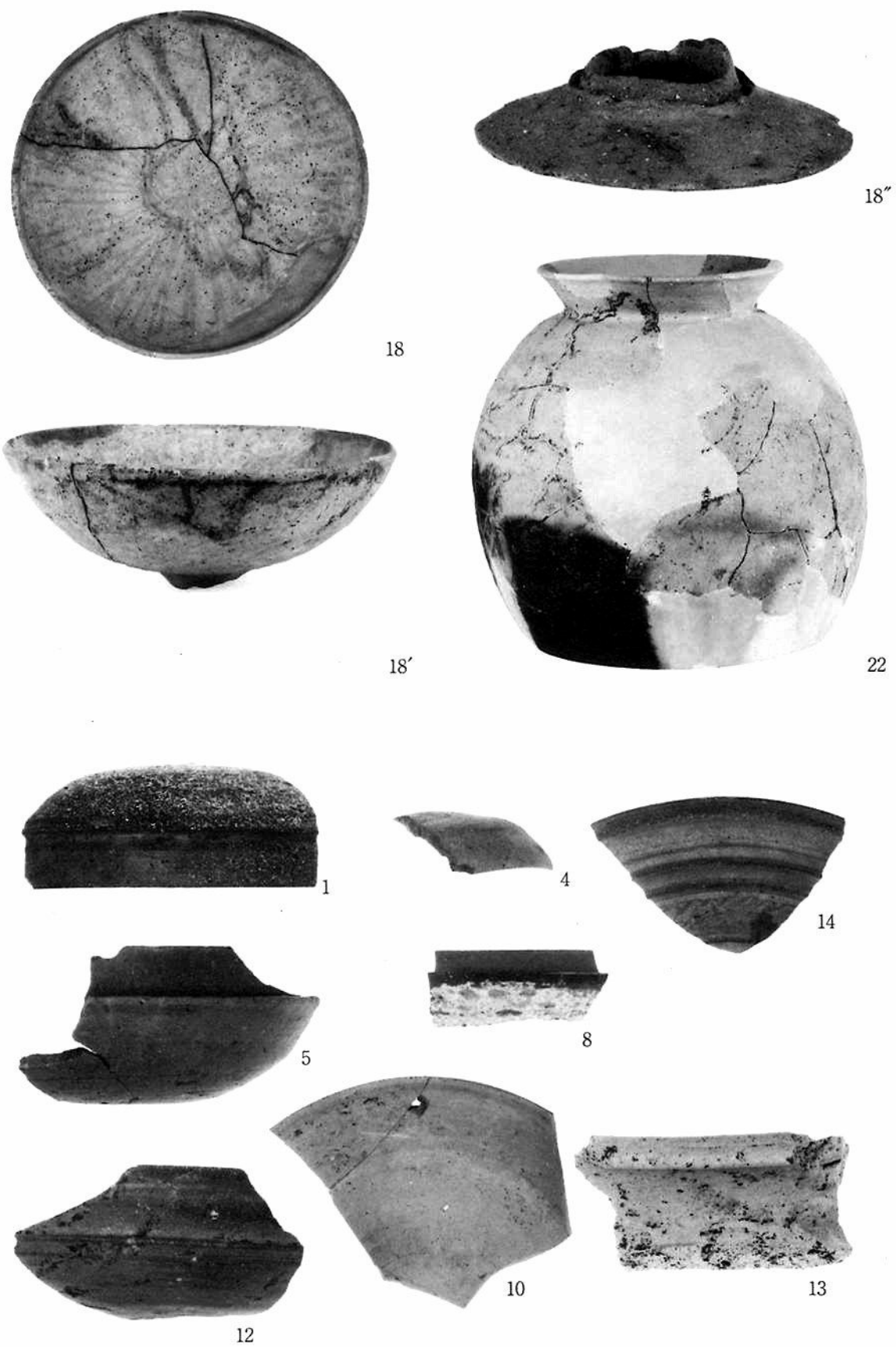


図59 植附遺跡第9-2次発掘調査遺物写真2

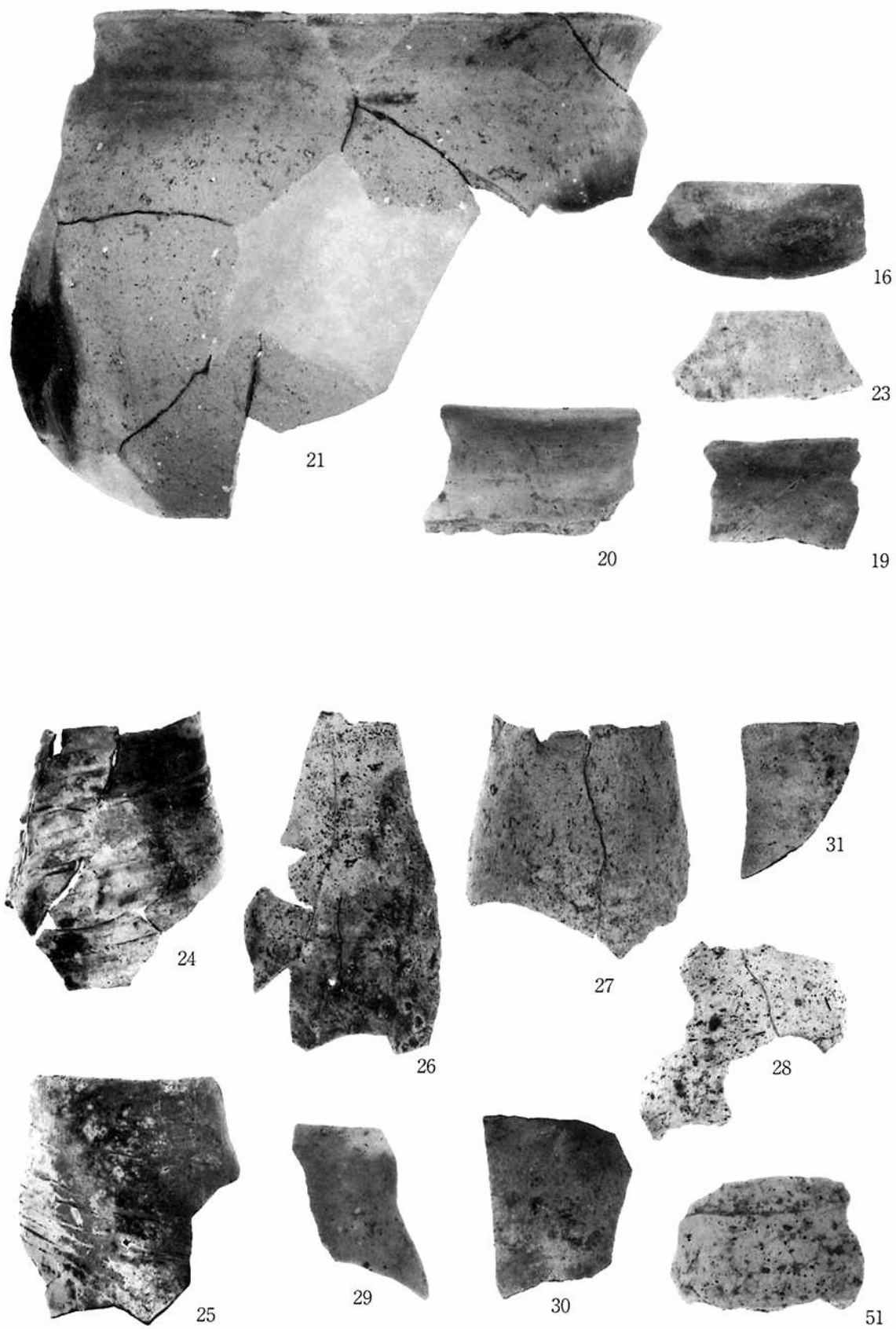


図60 植附遺跡第9-2次発掘調査遺物写真 3

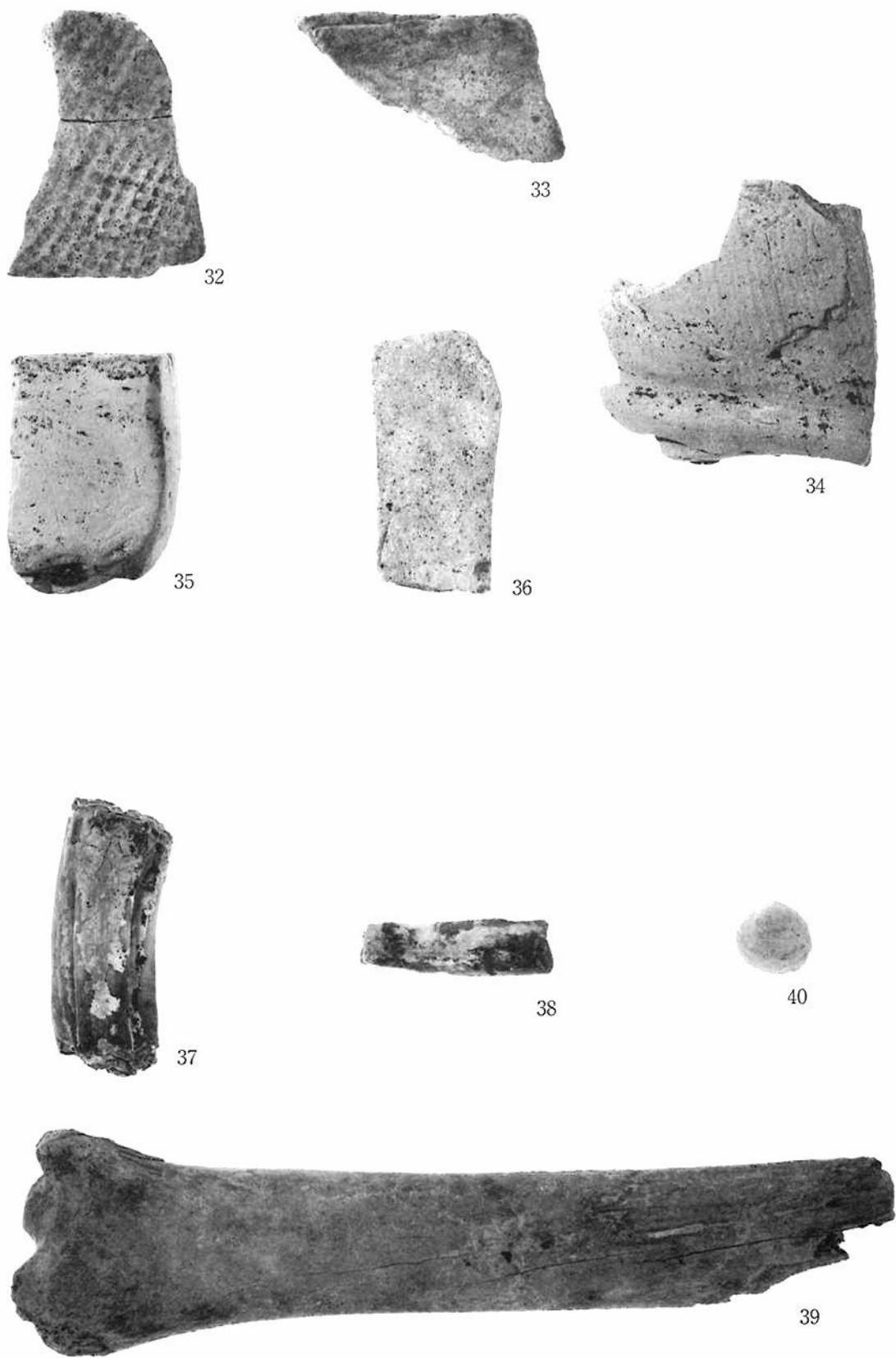


図61 植附遺跡第9-2次発掘調査遺物写真4

追記

脱稿後、図57の版下に、ヘラ削りとヨコナデの境界を実線で示していないという初歩的な誤りが認められたため、以下に補足説明を加える。

1は天井部ほぼ全体、2～4は約 $1/3$ をヘラ削りで仕上げる。6は底部約 $2/3$ 、5・7は約 $1/2$ 、9は $1/3$ をヘラ削りで仕上げる。

第9章 若江遺跡第61・62次発掘調査概要

1. はじめに

若江遺跡は河内平野のほぼ中央に位置し、東大阪市若江本町2～4丁目、若江北町2・3丁目、若江南町1～4丁目、瓜生堂2丁目一帯の自然堤防上に広がる弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。

これまでの60次におよぶ発掘調査によって弥生時代の方形周溝墓や水田畦畔⁽¹⁾、古墳時代の溝や土塋⁽²⁾、鎌倉時代から室町時代のピット・溝・井戸・土塋などの住居址、南北朝期から天正8（1580）年迄存続した若江城関係の堀や土橋、土塁、逆茂木、礎石建物、磚立建物などの遺構および小刀・鉄砲玉・鎧の小札など武具をはじめとする遺物⁽³⁾、律令制下の郡寺と想定されている若江寺所用と思われる瓦などの遺物が確認されている。

今回の調査は平成7年度公共下水道管渠築造工事にともない若江本町4丁目と若江南町1～4丁目とで21ヵ所をA～V地区と仮称し、合計面積1686㎡を対象とした。現地調査は平成7年5月23日～平成7年度末現在継続中である。なお出土遺物は決して十分に整理を行えたとは言い難く、その不備については後日改めて報告したいと思う。

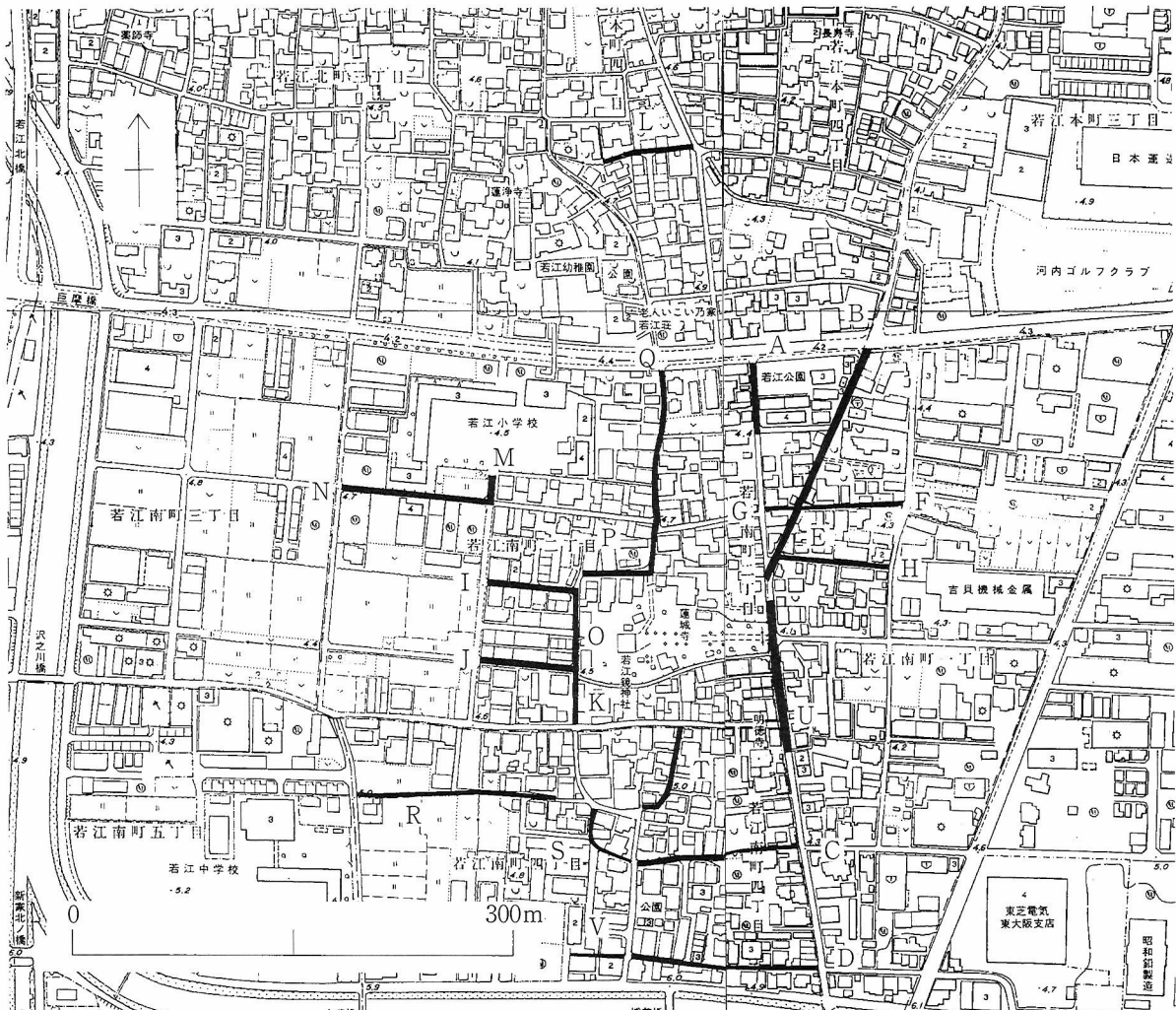


図62 調査地位置図(S=1/5,000)

2. A地区

調査地は若江南町2丁目で府道大阪東大阪線から南へ45mまでの範囲である。地表下80cmまでは道路舗装および近年の盛土、地表下90～110cmで近世の水路を検出した。幅約28m、深さは70cm以上あり、国産陶磁器・瓦・銭貨などが出土した。地表下120～140cmは古墳時代前期の旧河道内堆積層と思われる砂礫層が堆積していた。

3. B地区

調査地は若江南町2丁目の木村通り上にあたり、府道大阪東大阪線から南へ約54mまでの範囲である。地表下60cmまで機械掘削を行い、中世および近世の遺構が検出された。調査地の南半でA地区より続くと思われる近世の水路を確認した。最大幅約12.8mでA地区と比較して規模は小さいが、兩岸には建築廃材・杭を用いた護岸設備をもなっていた。その後水路の南側に土砂が堆積すると幅は約6mに狭まり、南岸には杭を打ち込み幅約30cmの船材らしき板を並列して敷いた遺構が検出された。栈橋として水路を往来したであろう剣先舟の船着き場の機能を果たしたと想定される。調査地北半では中世および近世の溝5条を検出した。このB地区では周辺で検出されている古墳時代前期の旧河道内堆積層と思われる砂礫層は確認されず、代わって府道大阪東大阪線に近い地点では地表下80～120cm以下で古墳時代中期の包含層が検出された。

4. C地区

調査地は若江南町4丁目で木村通りと第47次調査地を結ぶ。西半は既設の下水道によって攪乱されていた。盛土・近現代の表土以下には、近世以降の水路内堆積層と思われる暗青灰色細粒砂混じり粘土質シルトが検出され、部分的に旧耕土等を用いた埋土と思われる層も確認された。おそらく木村通りのすぐ東側の第56次調査B地区で検出した水路が東方向へ延び、本調査地点に至っているものと考えられる。国産磁器を含む遺物が少量出土した。

5. D地区

調査地は若江南町4丁目でC地区の一筋南にあたり、第47次調査地と木村通りを結ぶ。調査地東半およそ40mの範囲では周辺の調査で確認されている古墳時代前期の旧河道内堆積層と思われる砂礫層が認められた。しかし上部は既設の下水道によって攪乱されており、遺構が検出されなかったため重機によって掘削を行い、遺物の採集に努めた。その砂礫層からは流れ込みによる摩滅した弥生土器および庄内式～布留式土師器が少量出土した。



図63 B地区栈橋状遺構

図64 B地区水路内断面

注

- (1) 上野利明『若江遺跡第29次発掘調査報告』東大阪市文化財協会 1989
勝田邦夫『若江遺跡第32・33次発掘調査報告』東大阪市文化財協会 1990
勝田邦夫『若江遺跡第35次発掘調査報告』東大阪市文化財協会 1988
- (2) 阿部嗣治「瓜生堂遺跡・若江遺跡発掘調査概報」『(財)東大阪市文化財協会年報1983年度』1984
- (3) 前掲注(1)(2)
吉村博恵『若江遺跡第25次発掘調査報告』東大阪市文化財協会 1987
才原金弘『若江遺跡第27次発掘調査報告』東大阪市文化財協会 1988

6. E地区

1. はじめに

調査地は東大阪市若江南町二丁目の通称「木村通り」と呼ばれている道路で、南端は鏡神社前の道路に通じる。先述の北側のA地区の調査に引き続き下水道埋設の管路と人孔部、約97m²を調査した。上層の盛り土、攪乱土70cmは機械掘削で以下約1mは人力掘削により調査をした。調査期間は1965年8月22日～11月14日である。調査は管埋設等の工事と平行して行ったため、1管路4×1m、1人孔部1.2×1.2mを基本に1区間として24区間に分けて北側から実施した。主な遺構は古墳時代の遺物を含む旧河道、溝、中世の耕作土、溝、土坑、瓦敷きを検出した。この地区は江戸時代の「村絵図」によると南北に流れる水路と東西に流れる水路が合流する地点に描かれ、北側は「田地」、に「井路川」を挟み、南側は「村中」になる⁽¹⁾。調査では北側路線の1/2強は古墳時代から中世の遺構、遺物を検出したが、南側路線の1/2弱は近世の旧河道、後背湿地の堆積状況がみられ、この時期のものと考えられる石積み堤防状の遺構、渡し場状の板、溝を検出した。

2. 層序

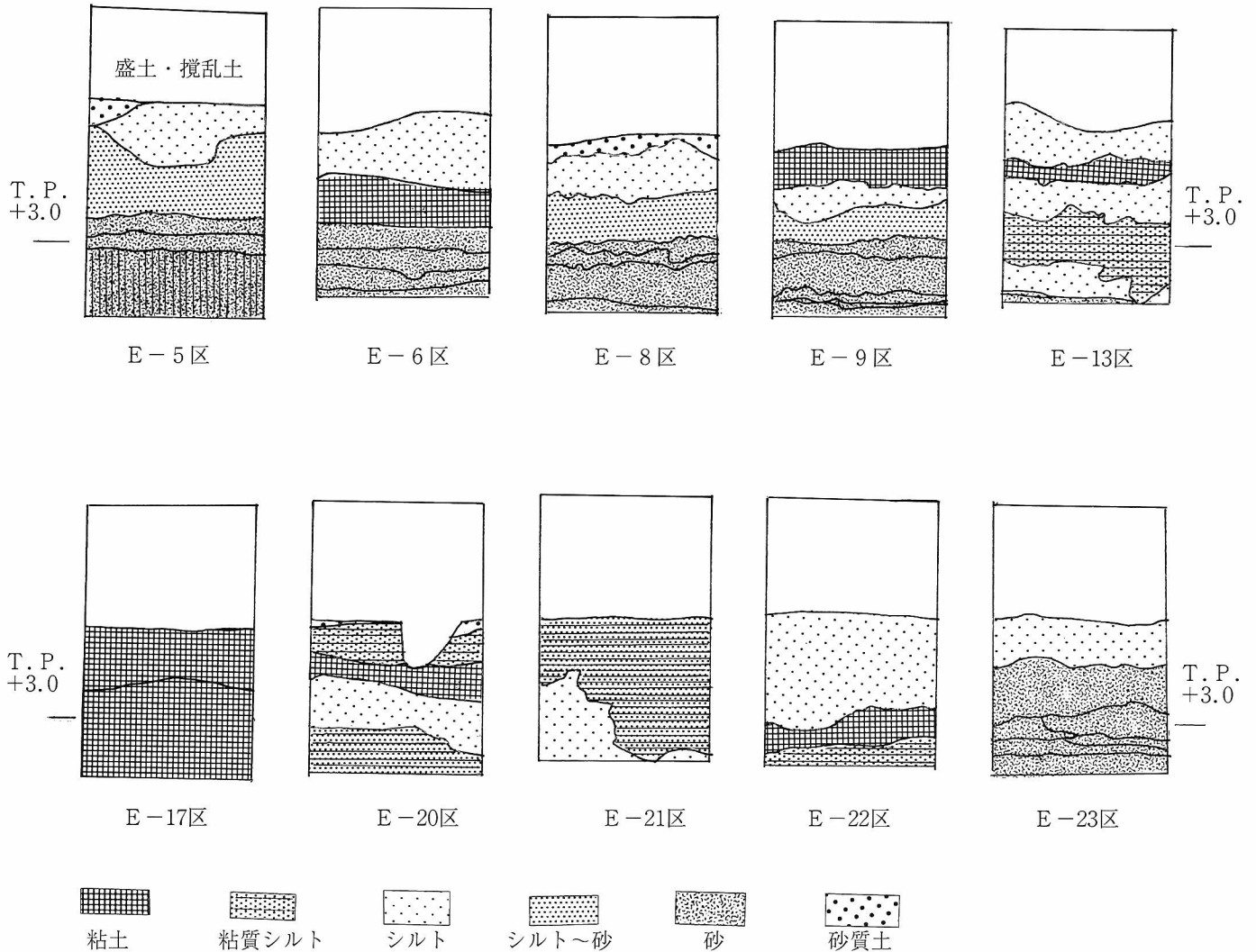


図65 E地区 各地点土層柱状図 (1/40)

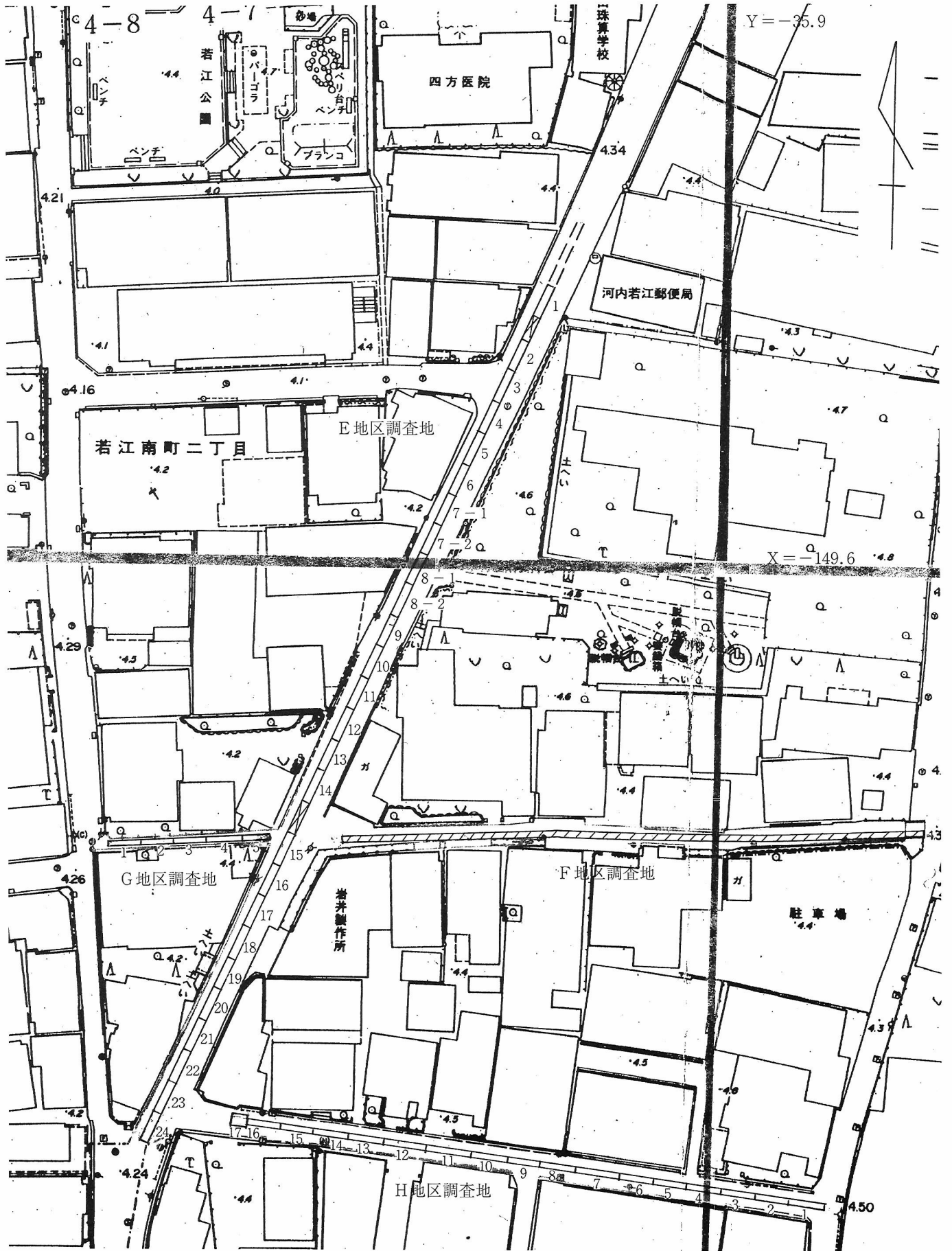


図66 E・F・G・H地区割図(S=1/600)



図67 E-1区古墳時代河道と中世耕作土層断面



図68 E-6区古墳時代河道土層検出面

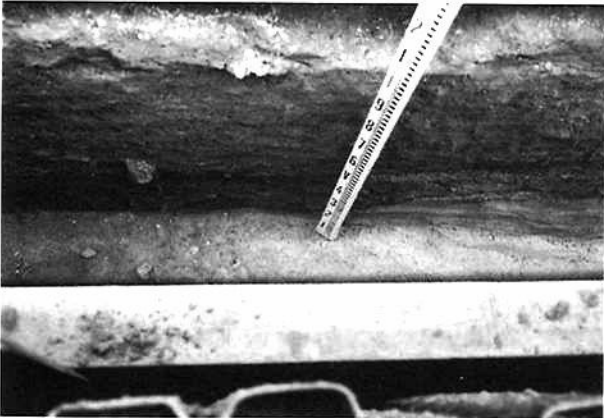


図69 E-7区古墳時代河道を切る中世溝土層断面



図70 E-7区古墳時代河道土層断面



図71 E-8区古墳時代～中世の耕作土層断面



図72 E-9区古墳時代河道、中世耕作土層断面

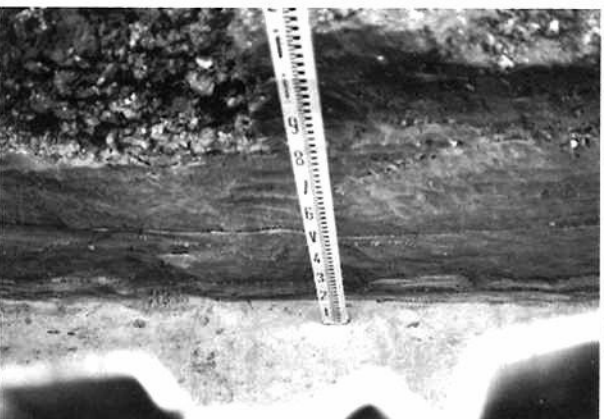


図73 E-9区古墳時代河道と耕作土層断面

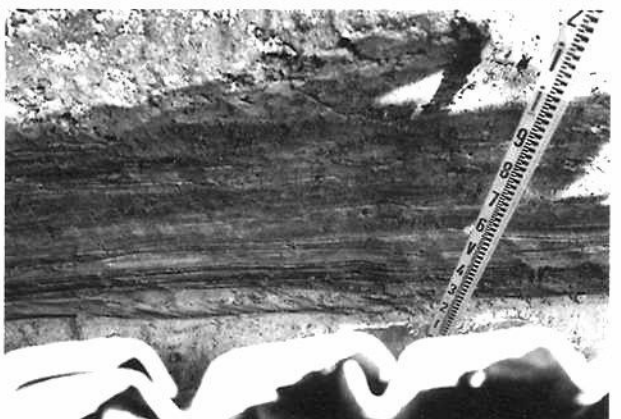


図74 E-10区古墳時代河道土層断面
(図73～74 西側から)

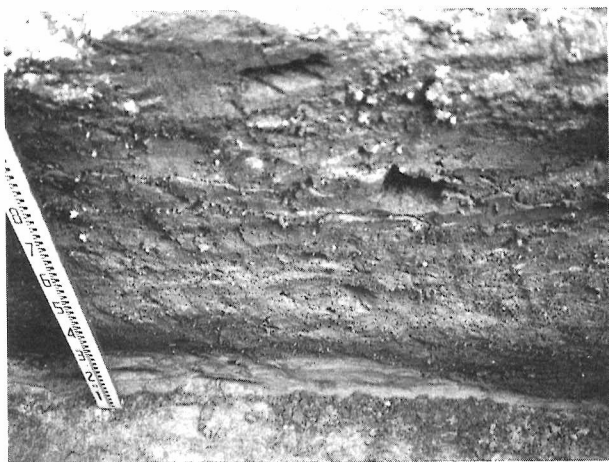


図75 E-13区近世河道土層断面



図76 E-14区近世河道土層断面



図77 E-16区近世河道土層断面



図78 E-24区近世自然堤防状土層断面

3. 遺構と遺物

1) 古墳時代

〈旧河道〉下位のT.P.約3.2~3.1で古墳時代前半以降の旧河道の堆積層の上面がみられ、粗粒砂~細粒砂の堆積層を検出した。

〈溝〉E-7区で東西方向に埋土が粘土層の溝を検出した。遺物は土師器、須恵器の破片が出土している(幅1m、深さ14cm)。

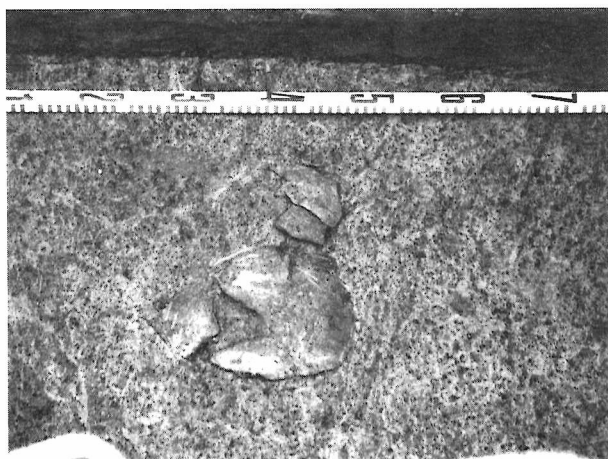


図79 E-8区古墳時代河道内土師器出土状況

〈旧耕作土〉E-7からE-12区まで旧河道の上層には酸化鉄の斑文を含む黒褐色シルト層が堆積しており、耕作土(T.P.約3.5~3.0)と考えられる。北側は中世の溝で切られており南側にいくに従い層厚が薄くなる。遺物は古墳時代初期のS字状口縁の甕(T.P.3.04)、前半頃の甕、甌、中頃の須恵器(図84・85)が出土している。

2) 古代

近世の耕作土内から複弁蓮華文軒丸瓦と中国製の白磁碗が出土している(図86)



图80 E-8区古墳時代河道内土師器出土狀況

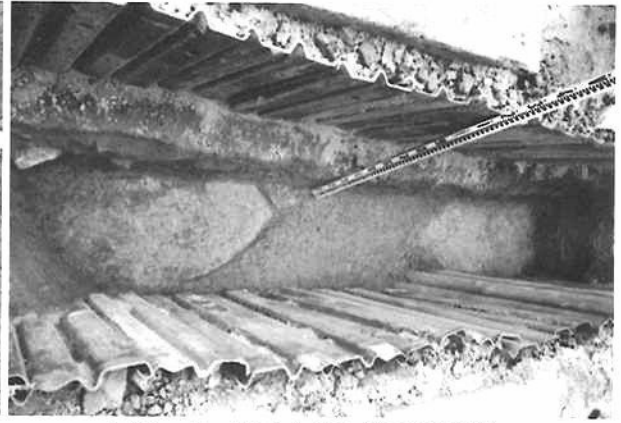


图81 E-7区古墳時代蛙状遺構



图82 E-5区古墳時代河道泥層



图83 E-7区古墳時代河道細砂層



图84 E-8~10区古墳時代耕作土層内出土土師器

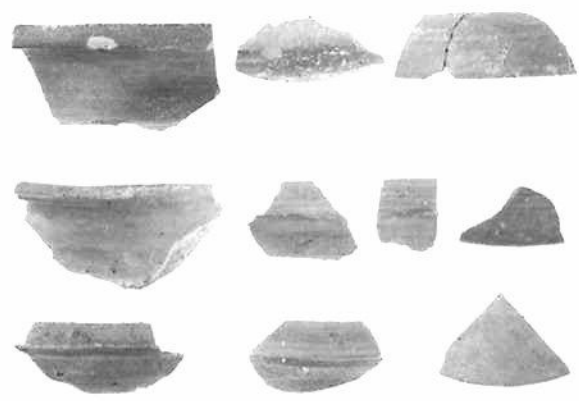


图85 E-8~10区古墳時代耕作土層内出土須恵器

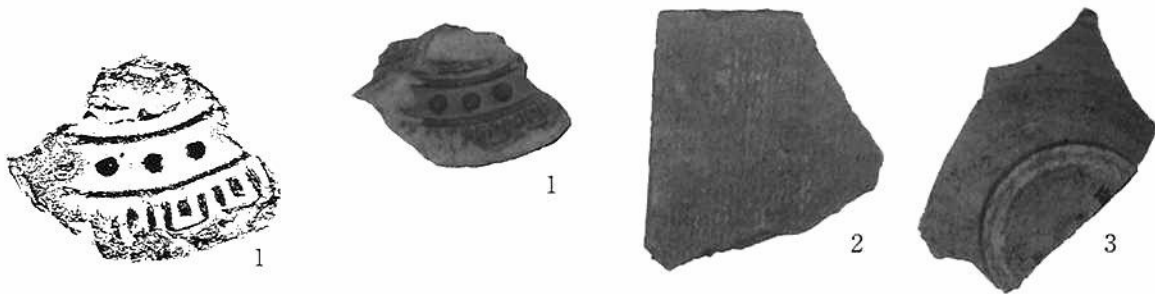


图86 古代遺物 1.軒丸瓦(複弁連華文) 2.平瓦 3.白磁碗

3) 中世

〈旧耕作土〉E-2~E-7、E-8~E-10区の間で古墳時代以降の旧河道の砂層の上に中世の遺物を含む旧耕作土層を検出した。旧耕作土層は2枚あり、土坑、素掘り溝、小穴などを伴う。旧耕作土1 (T.P.約3.7~3.2) は暗褐色の砂質~粘質シルト層で層厚は一定でなく、耕地面は旧耕作土2から上層の削平や穴掘がみられる。またE-7区の溝8の土手状の堆積層の南側に古墳時代の耕作土層が残存するが、一部分は中世の耕作土1と地表面が同一になる。北端からE-7区までの古墳時代の耕作土層は中世の時期に削平されたと考えられる。旧耕作土2の旧地表面は盛り土や攪乱でとばされているが、溝7の北側は細レキ混じりのシルト質砂層で洪水による堆積土を耕作地にしたものと考えられる。南側は粘土~粘質シルトである。溝8の上層にあたる旧耕作土の南端の中位の堆積層内で、幅1.5mに渡って破碎された平瓦敷きのなかに、中世の瓦質羽釜、摺鉢、土師器が混じり、瓦敷きの南から岩石が混じる層を検出した。旧耕作土層が残る地表面には酸化鉄による赤黄褐色土の間に、還元による青色土を呈する地点が疎らにみられた。旧耕作土1は鎌倉時代以降、旧耕作土2は室町時代以降の堆積層に客土などをしながら形成されたと考えられる。E-24区では中世~近世の河道の南側に僅かな面積の旧耕作土3がみられた。

〈小穴〉E-8、11区で旧耕作土3内から杭跡や植物の根の跡とみられる小穴SP10を検出した。

〈土坑〉E-8区で旧耕作土2に伴う土坑を検出した。E-6地点のSK5は、旧耕作土2から旧耕作土1の中間部へと掘り込まれている。土採り穴と考えられる。埋土は旧耕作土2と同じ土である。SK5の南側に浅い土坑状の窪みがあるが上層が削平されており、底部には杭跡がみられ、羽釜が出土した。溝6の土手の補強の客土と杭と考えられる。

〈溝6・7・8・11〉(図87) E-7区で古墳時代の旧河道を切る溝8(幅3、3m)を検出した。E-6区の溝6の埋土は下位の粘質シルト、粘土層の上に粗粒砂、シルト層が被る。木質遺物が多く、椀の高台などと陶器摺り鉢、土師器や瓦器の破片が出土した。E-6区で溝6(幅1.6m)と、この溝の南端上位を切る溝7を検出した。溝7からは中世~近世の遺物が出土した。溝6は下位の旧河道の砂層の上面を切る。E-8区の溝11は小規模の素掘り溝で旧耕作土2から古墳時代の耕作土層まで掘りこまれて、底面には薄い板が敷かれており、須恵器の高杯が出土した。溝8の北側から片口鉢、木質遺物、南側から須恵器、土師器が出土した。

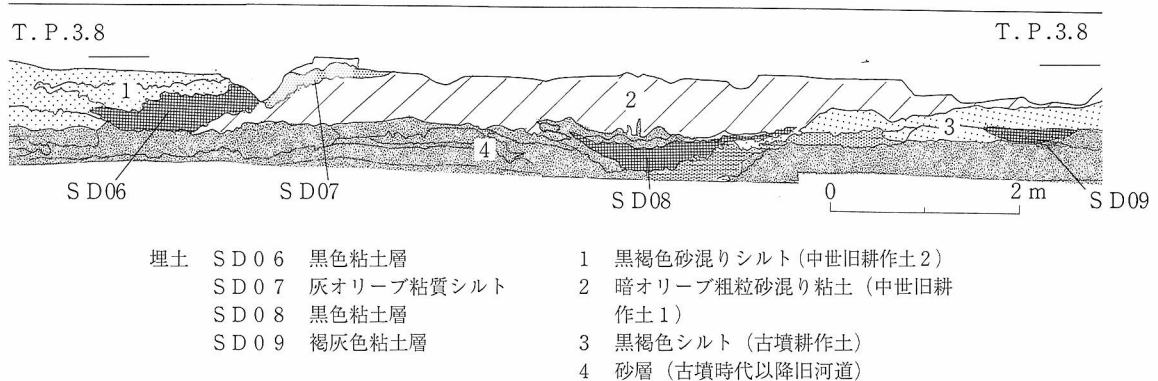


図87 E-6・7区中世溝6・7・8、古墳時代溝9土層断面図

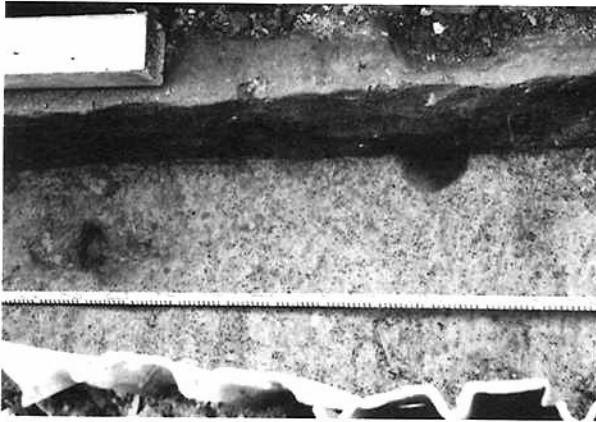


図88 E-8区中世耕作土内の小穴



図89 E-11区中世耕作土内の小穴



図90 E-8区中世耕作土内溝・小穴土層断面



図91
E-8区中世耕作土内
溝11底面の板出土状況



図92 E-7区中世溝8の粘土層断面



図93 E-7区中世溝8の底面



図94 E-7(-2)区中世瓦敷出土状況



図95 E-6区中世耕作土内土坑

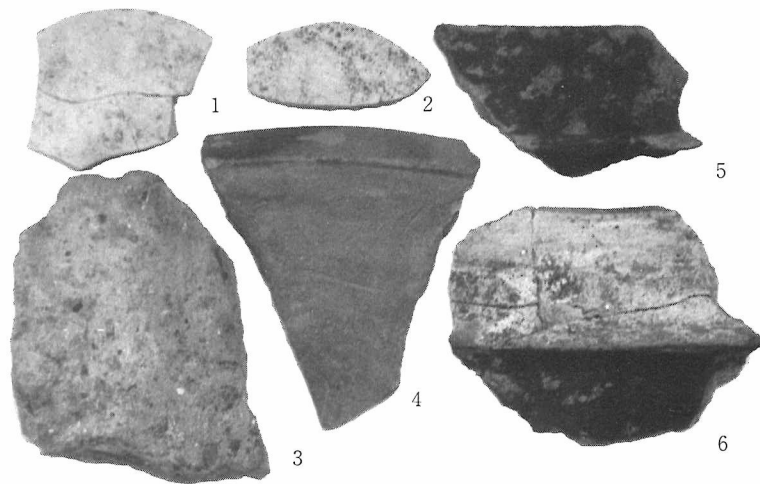


図96 E-7(-2)区中世瓦敷下層内出土

1・2. 土師器皿 3. 平瓦 4. 東播系鉢 5・6. 瓦質羽釜

4) 近世

〈溝〉E-19区で溝9を検出した。溝9は腐食土をかむ黒色粘土層で板、瓦、陶磁器を検出した。E-23区で溝(T.P.約3.2)を検出した。下位は古墳時代の遺物を含む旧河道の砂の堆積層がみられ、上位には中世～近世の遺物を含む砂が堆積している。

〈土坑〉E-20区でSK e、E-22区でSK a、E-23区でSK bを検出した。SK eの埋土は硬い砂混じり黒色土で木片が多く肥やし入れと考えられる。SK a、SK bの埋土は暗オリーブ灰色粘土である。SK aから瓦片、石、SK bから竹、瓦、漆器椀(図117)が出土した。

〈旧河道、後背湿地〉E-13～E-21区までの堆積層はグライ化した粘土層、粘質シルト、中レキ、粗～中粒砂混じりシルト及び粘質シルト層である。旧河道と後背湿地状の堆積層がみられた。17世紀末～19世紀代の陶磁器、土師器などが出土している。

〈渡し場状遺構、堤〉(図104～109)E-16区で上層に後背湿地状の堆積層がみられ、東西方向に半割り材(幅35cm)が渡されていた(T.P.約3.0～3.1)。この半割り材の北側半分は欠損しており、少し離れた場所に固定用の杭を検出した。すぐ南側には2枚の厚い板(幅1.6m、厚み6～10cm)を北側の半割り材と「ハ」の字型(東に広がる)になるように渡したものが検出された(T.P.約2.9～3.05)。これも太い杭で両側が固定され、板の下にも沈まないよう支えの杭が打たれている。旧河道の渡し場と考えられる。その南側の板の上位には南北2mに渡って傾斜をもつ石積み(比高差50cm)が検出され、渡し場の旧河道より時期的に新しい河道の土手状遺構と考えられる。岩石は斑れい岩がほとんどで、粗粒花こう岩、花こう岩、閃緑岩が混じる。

〈旧耕作土3〉E-23～E-24区の旧河道の北側はSK bで切られており南側の下位の黒色粘土層の上に、中世の時期の耕作土3が堆積している。SK b、旧河道、旧耕作土の上層面は凹凸がみられ粗粒砂混じりのシルト層で覆われている。旧耕作土3の上には炭層が堆積している。

〈自然堤防〉E-24区では下位に古墳時代の砂と粘土の堆積層がみられ、上位は攪乱の下に、上から砂層、細レキ～中粒砂混じりシルト・粘質シルト層と自然堤防の堆積層がみられた。この堆積層の中位から近世の時期の杭を検出した。

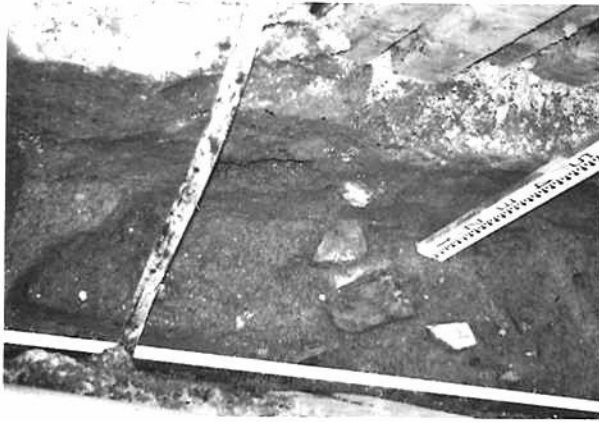


图97 E-22区近世耕作土内土坑 a



图98 E-23区近世土坑 b 上層内遺物出土狀況

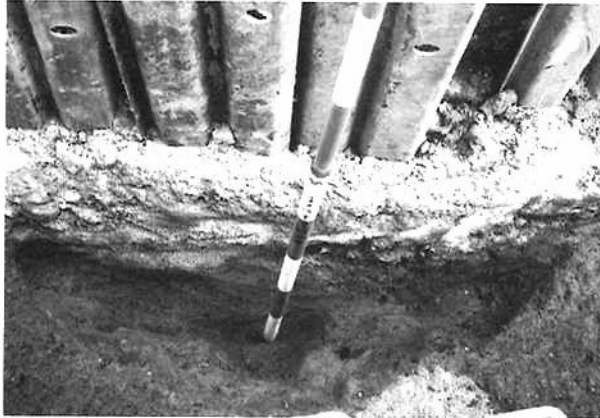


图99 E-24区近世土坑 c



图100 E-23区近世土坑 b 下層内出土漆器碗

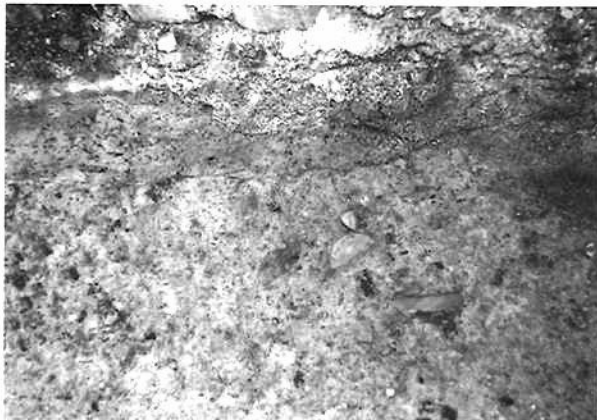


图101 E-24区近世土坑 d 炭化物検出狀況

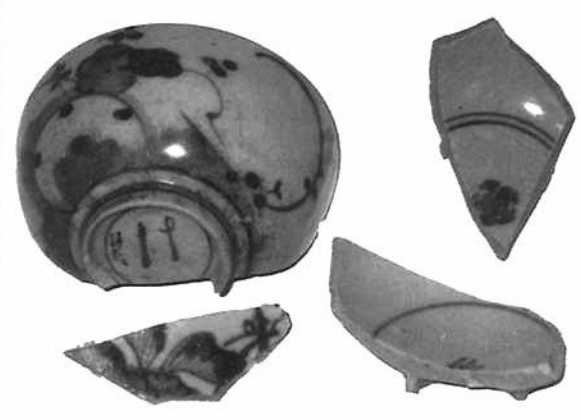


图102 E-17・18区近世粘土層(下層)内出土磁器



(外面)

图103 E-17区近世渡し場状遺構付近粘土層下層内出土陶磁器(18世紀後半～)



(内面)

図104 近世木製渡し場状遺構
(北側の板)と石積み遺構
(北から撮影)

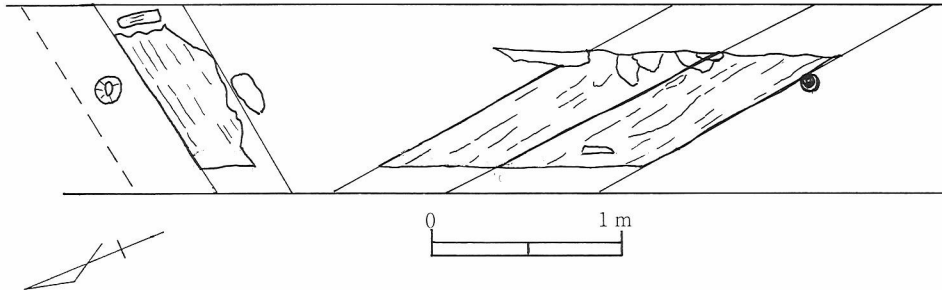
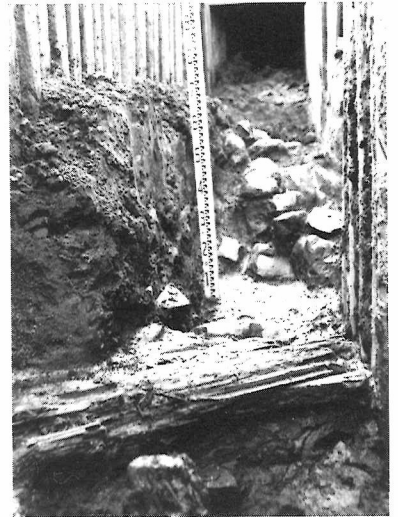


図105 E-16区近世渡し場状遺構平面実測図



図106 近世渡し場状遺構の南側の板
(西から撮影)



図107 近世石積み遺構

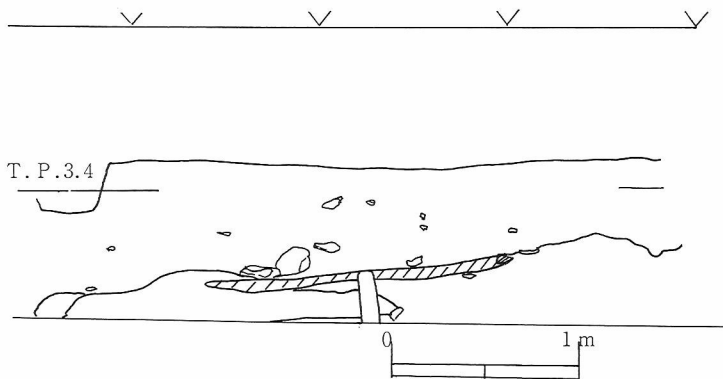


図108 E-16区近世渡し場状遺構
南側の板断面実測図



図109 近世渡し場状遺構の北側
の板と支柱杭(北から撮影)

〈旧河道及び後背湿地状の堆積層内出土遺物〉
遺物の大半は陶磁器類である。磁器(碗、皿、仏飯)・陶器(碗、皿、摺り鉢、鉢、建水)・土師器(焙烙、火鉢、稻荷神社の人形、泥面子)などが出土した。磁器は肥前物が多く、陶器では備前焼きの摺り鉢、刷け目唐津片口鉢、三島手皿などがみられる。

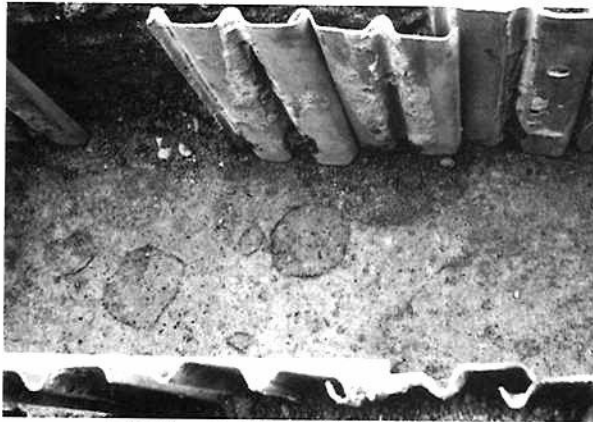


図110 E-21区近世小穴検出状況

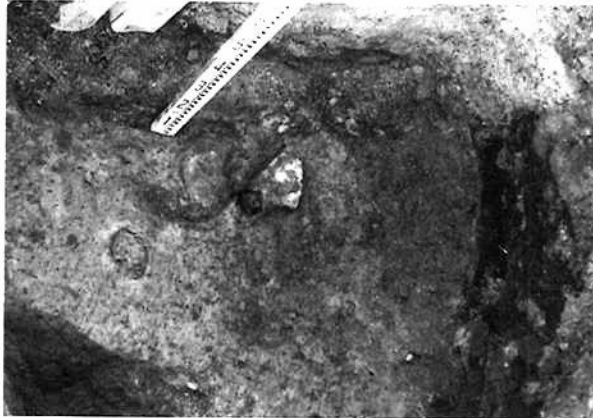


図112 E-24区近世杭跡遺物出土状況

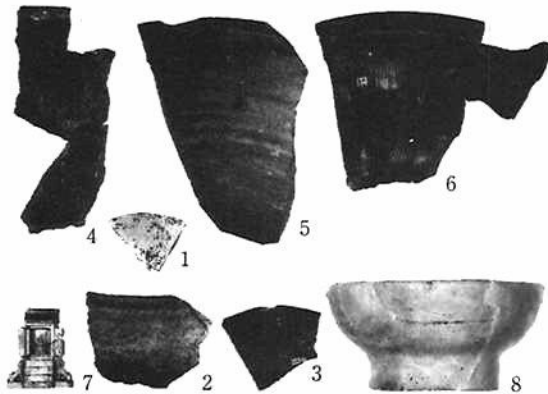


図115 E地区近世耕作土内出土中世～近世遺物
1.土師皿、2.瓦器椀、3.羽釜、4～6.摺鉢、
7.土製品、8.土師質火舎

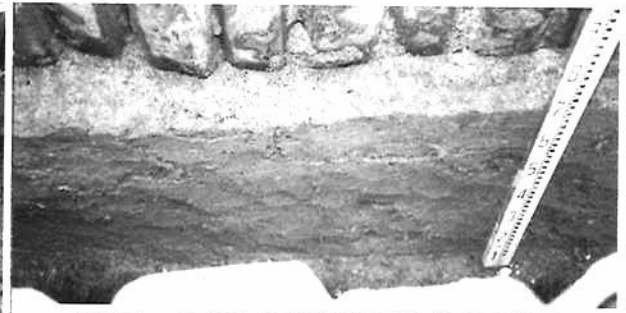


図111 E-21区近世後背湿地状土層断面



図113 E-23区近世耕作土下の古墳時代河道



図114 E-22区近世耕作土層断面

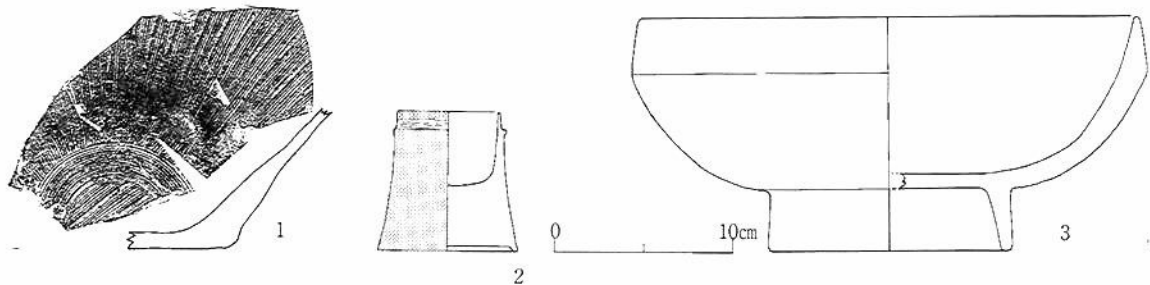


図116 1. E-17区出土摺鉢(底径17.0cm)、2.3. E-23土坑 b 内出土漆器

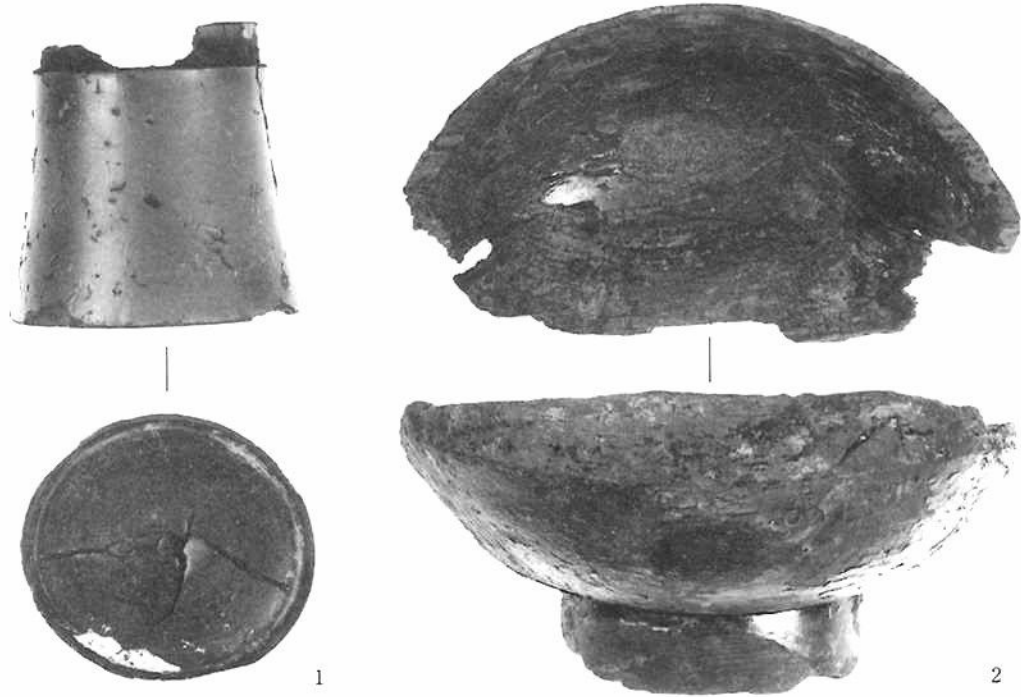


図117 E-23区近世土坑

b内出土漆器

1.花生、2.椀

- ・ 1 外面は朱、内面・底面
黒色の漆塗り
- ・ 2 内外面は黒色の漆塗り

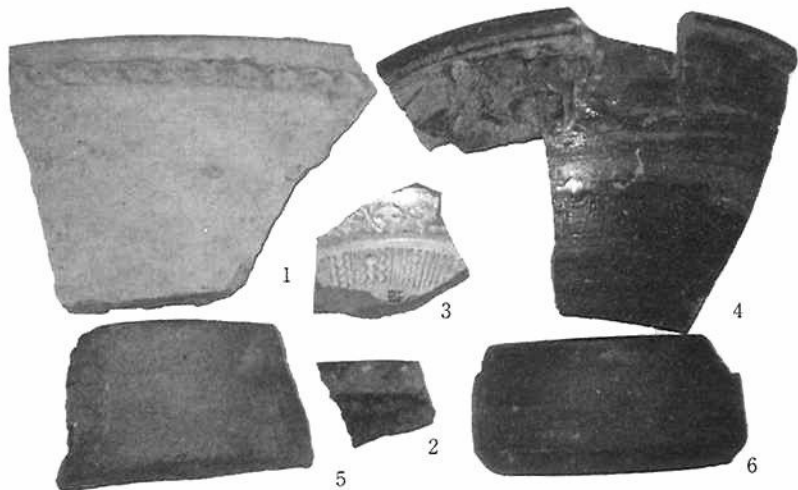


図118 E-17～21区近世後背湿地状土層内出土 1.土師質火舎、
2.焙烙、3.陶器鉢(三島手)、4.陶器鉢(刷毛)、5・6.陶器鉢

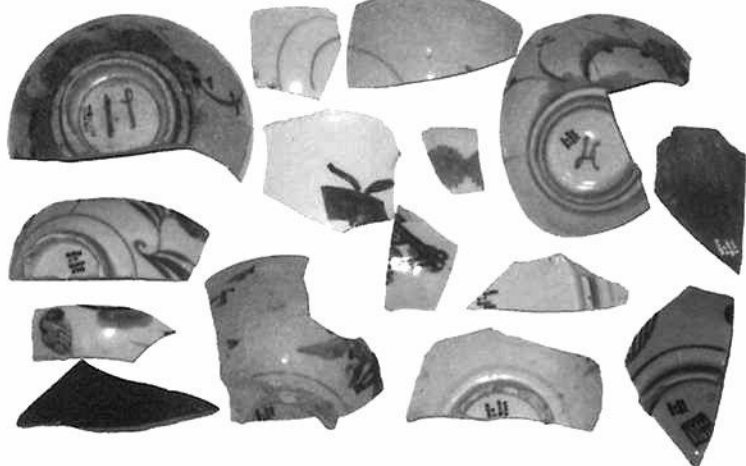


図119 E-17～21区近世後背湿地状土層内出土磁器(染付碗・湯飲)

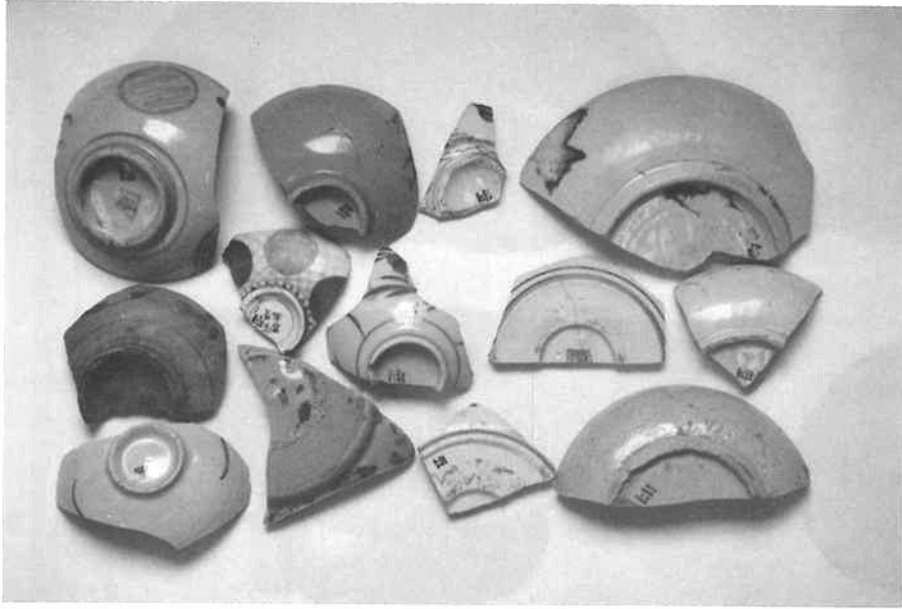


图120 E-17区近世粘土層(下層)内出土磁器(外面)



图121 同上(内面)



图122 E-17·18区近世粘土層(上層)内出土陶磁器

7. F地区

1. はじめに

調査地は若江南二丁目の鏡神社参道前の東西に走る道路から北へ2本目の筋の幅約2mの道路で、かつて水路であったところである(図66)。調査は東側から下水管理設の管路と人孔部約68.4㎡について、上層の道路造成のために埋め立てた盛り土を機械で除去し、下層の旧河道の堆積を精査した。調査期間1996年1月31日～2月26日である。南側の水路から絶えず浸水があり難行した。掘削は機械で慎重に層毎に土をあげ、遺物の確認を行った。この地区は江戸時代の「村絵図」によると「井路川」が流れ、現在の通称「木村通り」を横切って北から通じている「井路川」と合流するように描かれている。現在はこの道に添って幅約80cmの水路が流れている。地元の話によれば「太平洋戦争前までは幅1.8mの水路が流れ、北側に細い道があったが、車が走るようになってから、車を通すために北側半分を埋め立てた」とのことである。また「この水路を埋め立てる前まではよく溝さらえをおこない、田植えなどの農作業時には小舟で行き来していた」と話されていた。この水路は戦前までは農業用水路として使われていたと考えられる。17世紀初頭の陶器を始め、17世紀末～18世紀中頃の陶磁器、瓦が多量に出土した。上層の遺物のなかには18世紀末～19世紀にかけてのものが混じっている。

2. 層序

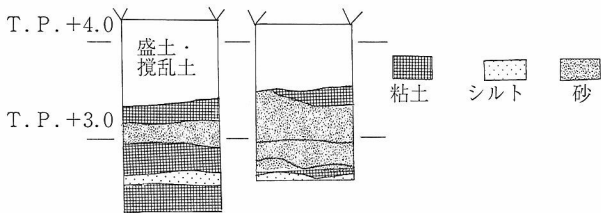


図123 F地区 土層柱状図

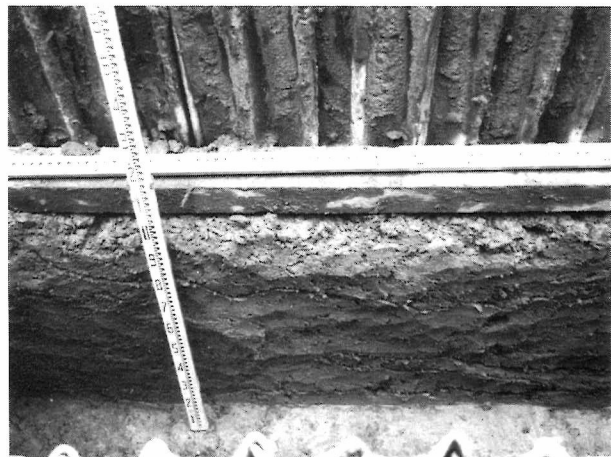


図124 F地区東端近世水路土層断面 (1)

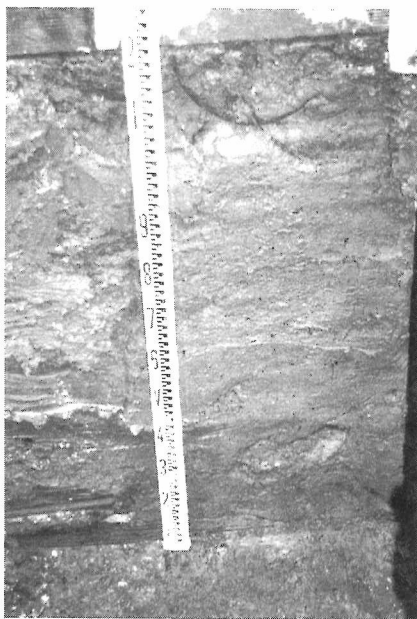


図125 F地区近世水路土層断面 (2)



図126 F地区近世水路土層断面 (3)

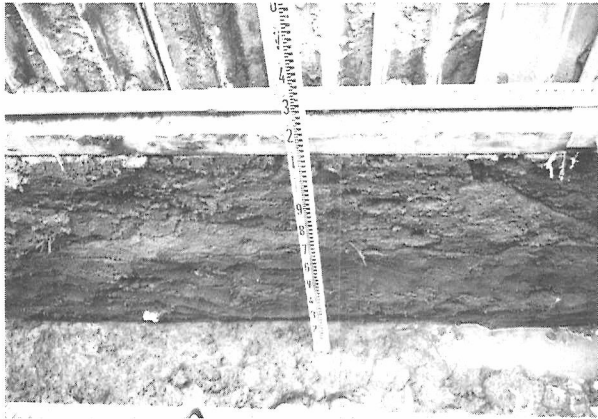


図127 F地区西端近世水路土層断面

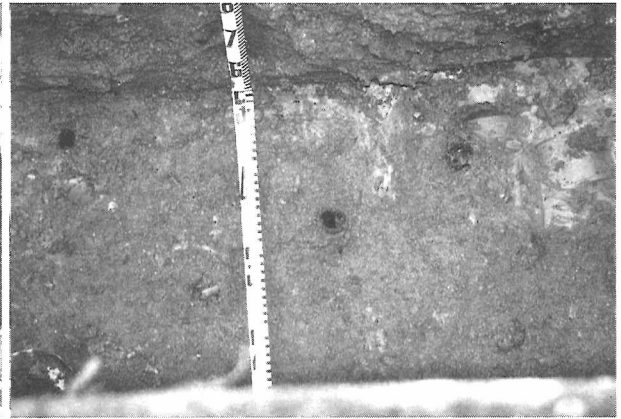


図128 F地区近世水路内竹・木杭跡検出状況

3. 遺構と遺物

1) 近世

〈旧河道〉先にも記したように、調査区全体が江戸時代の用水路である。下層には粘土層の堆積する地点が多くあり粗～中粒砂混じり粘土、砂混じり粘質土層、中位には場所により砂層を挟む地点などがある。この旧河道内には杭が何箇所かに打たれていた。調査区の東端は、南北に流れていた水路を塞ぎ止めるためのコンクリート製の堰があり、近辺の石垣に使われた岩石のなかに臼を転用したものがみられた。木杭が東西に並ぶ。また中間地点からも木杭、竹杭を検出した。「村絵図」にある南北の「井路川」とF地区の水路がT字形に合流する地点のものか土手補強用のものが考えられる。遺物は伊万里染め付けを始め京焼き風の磁器、唐津、瀬戸美濃、備前、信楽、丹波陶器、土師器の鍋、焙烙、火舎、瓦質の火舎、丸・平瓦など国産のものと、古い時期の若干の輸入陶磁器の出土をみた。

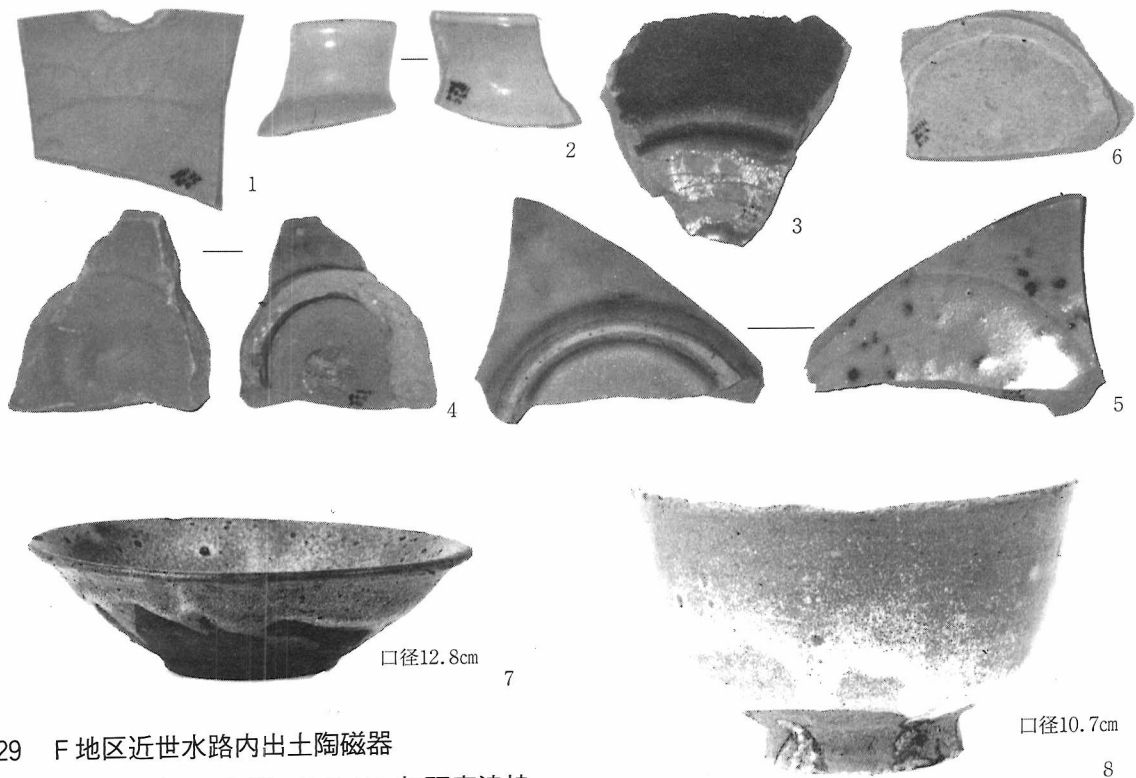


図129 F地区近世水路内出土陶磁器

1～5. 青磁、6. 白磁、7・8. 17c 初頭唐津焼
(7. 鉢-胎土目4個あり、8. 碗)

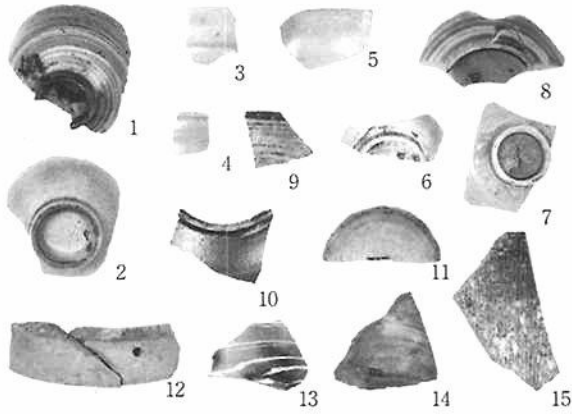


図130 F地区近世水路下層内出土陶器
 1.刷毛目碗、2・6・7.灰黄釉・貫入、3・5.灰釉・貫入、
 8・9二彩手鉢、10・11.黒釉土瓶、12.土師質火舎、
 13.練上手、14.内口クロ目壺、15.摺鉢(9条)

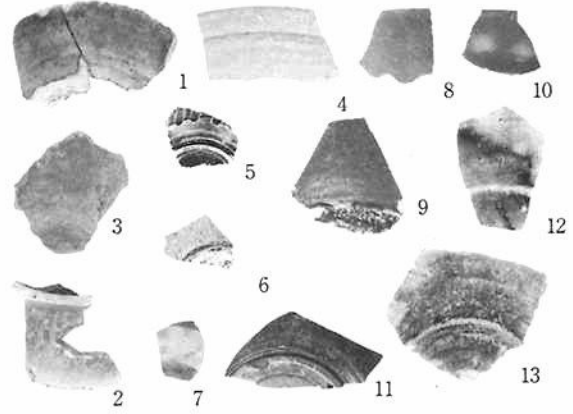
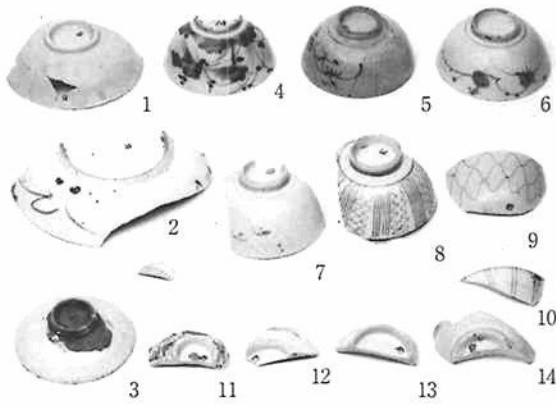


図131 F地区近世水路下層内出土
 瓦質-1.火舎、2.脚、須恵質-3.甕、陶器-4.丹波焼摺
 鉢、5.茶褐釉湯飲、6.外白・内鉄釉小壺、
 7.内鉄釉土瓶、8・9・10.鉄釉、11.内刷毛釉皿、
 12.外自然釉、内鉄釉壺、13.内二彩釉皿



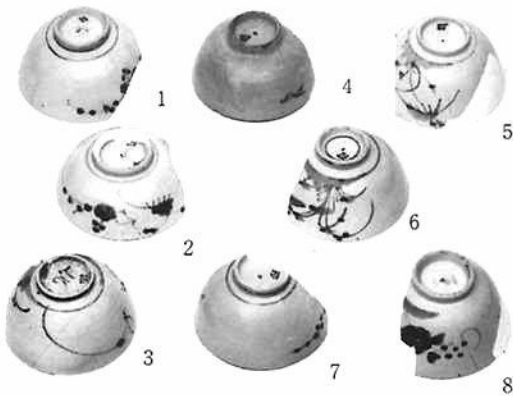
(外面)



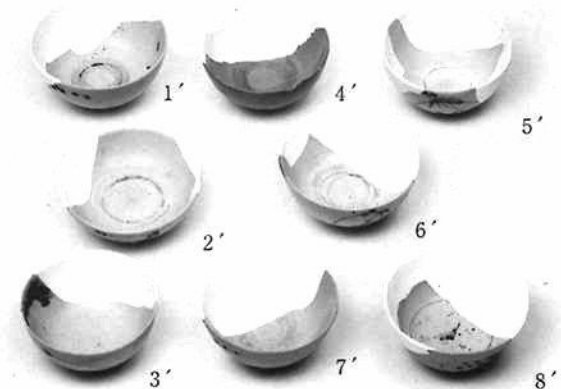
(内面)

図132 F地区近世水路下層内出土染付

▶染付碗 網目、草花、雁金、よろけ縞などがあるが、草花文が多い。
 ▶皿 内外草花に見込みは五弁花、内面に折れ松葉のものがある。
 口径 4・6・7-11.0cm 8-11.2cm



(外面)



(内面)

図133 F地区近世水路上層内出土染付碗

1・3.草花・折れ松葉、2・5.雪持笹草花、4.雁金、6・8.草花、7.草花・雁金などがある。
 口径 1-11.8cm 2-11.7cm 3-10.8cm 4-11.0cm 5-10.4cm 6-10.0cm 7-10.8cm
 8-11.6cm

(外面)

(内面)



図134 F地区近世水路上層内出土染付碗

草花(1)、雪輪(3)、松皮菱(5)、菊散らし(3)、雨(9)、網目(10・11・12)などのよくみられるものの他に(6)のような唐子虫追いと蝶などの絵がみられる。なかでも草花文が一番多い。

口径 1-11.0cm 2-11.4cm 3-12.0cm 4-11.0cm 5-12.2cm 6-10.0cm 7-11.9cm 8-10.0cm 9-9.0cm
10-10.8cm 11-10.4cm 12-10.0cm

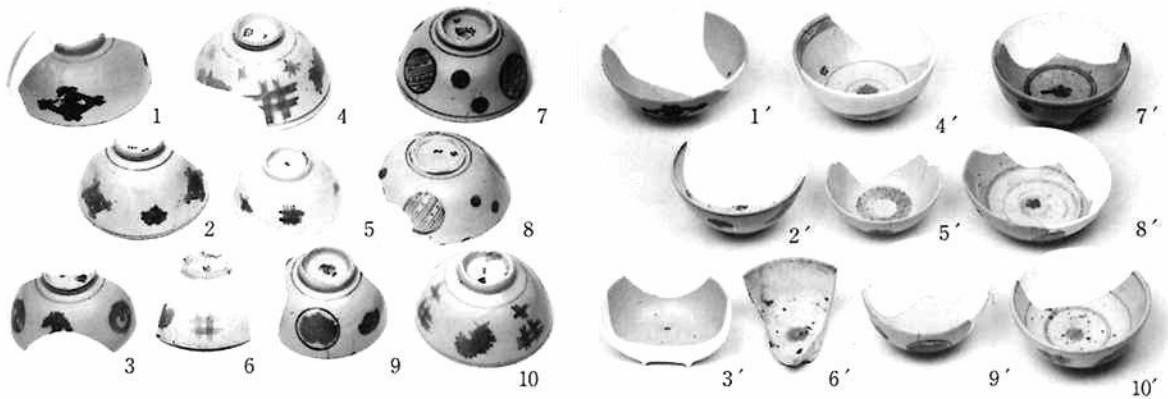


図135 F地区近世水路上層内出土染付磁器碗

コンニャク印判による染付碗で、井桁、薦の葉、家文風のもの、丸文などがみられる。見込みにもコンニャク印判で五弁花文が押されている。口径 1-12.8cm 2-11.2cm 3-10.4cm 4・7・8・10-12.0cm 5-9.8cm 9-10.0cm

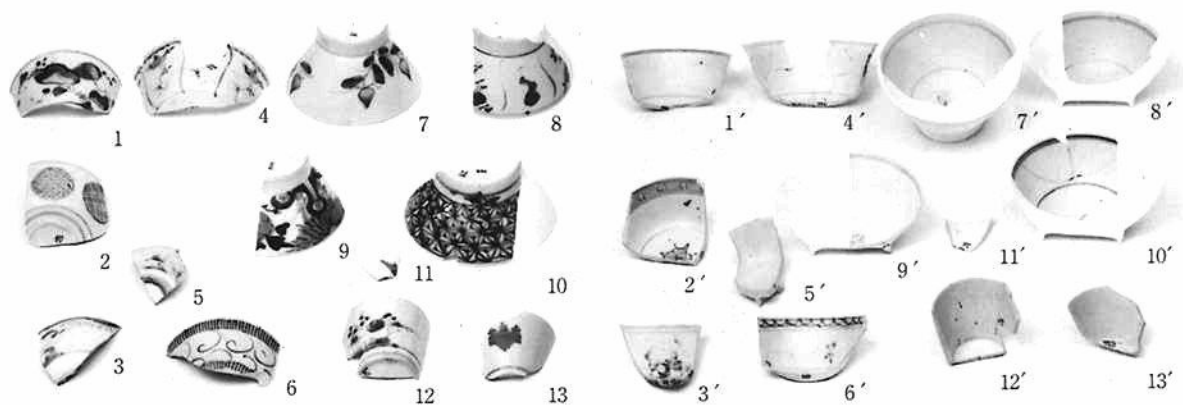


図136 F地区近世水路上層内出土染付碗

端反碗(1~6) 仙芝祝寿、草花・瓜・広東碗(7~10) 草花、麻の葉、仙芝祝寿・そば猪口(11~13) 雪持笹、コンニャク印判などがある。

口径 1-10.2cm 2-10.4cm 3-13.2cm 4-11.6cm 6-10.6cm 7-12.4cm 8-11.6cm 9-10-10cm

(外面)

(内面)

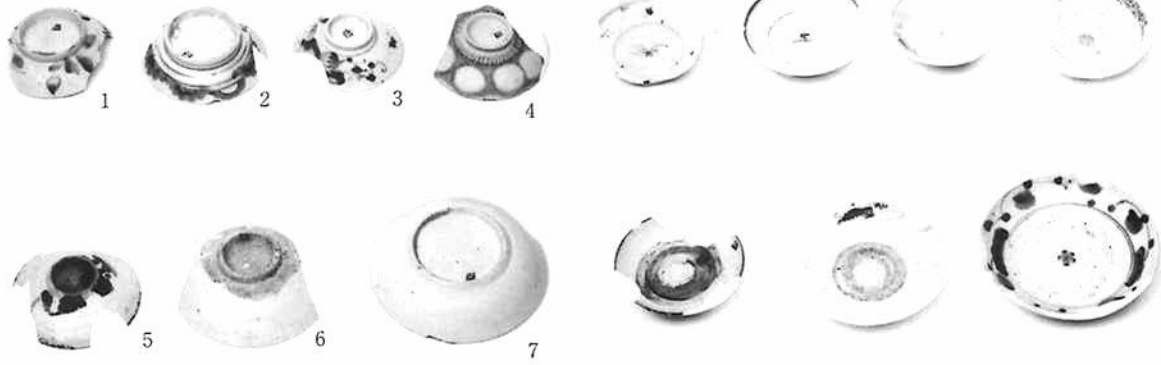


図137 F地区近世水路上層内出土染付蓋、皿

▶蓋(1~4) 広東碗用のものと端反碗用のものがある。口径 2-10.3cm、3-9.3cm、4-10.5cm

▶皿(5~7) 内面は蛇の釉剥ぎのもの。口径 5-10.0cm 7-13.5cm

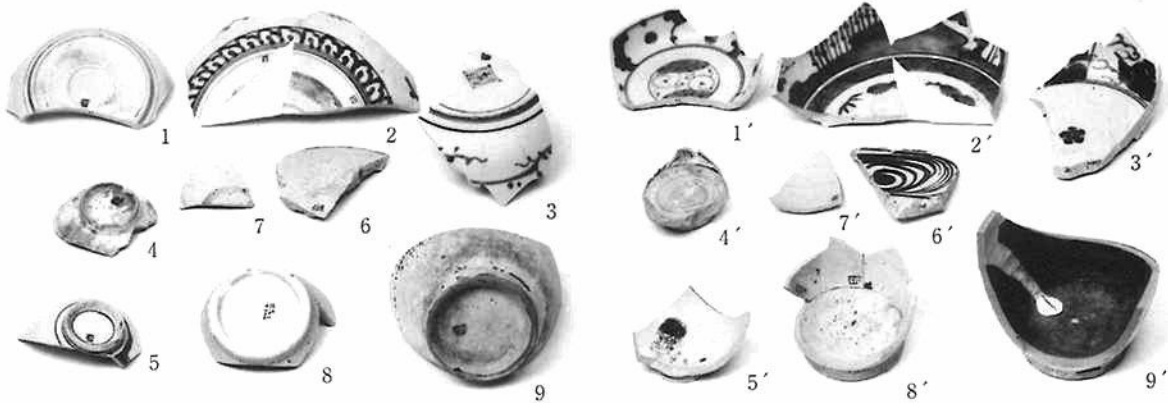


図138 F地区近世水路上層内出土陶磁器

▶染付鉢(1~3) 内面上に松竹梅、五弁花文を入れている。口径 1-11.2cm 底径 2-14.0cm

▶陶器・碗(4・5)、馬の目皿(6)、白釉瓶(7・8・9)などがある。底径 8-7.0cm

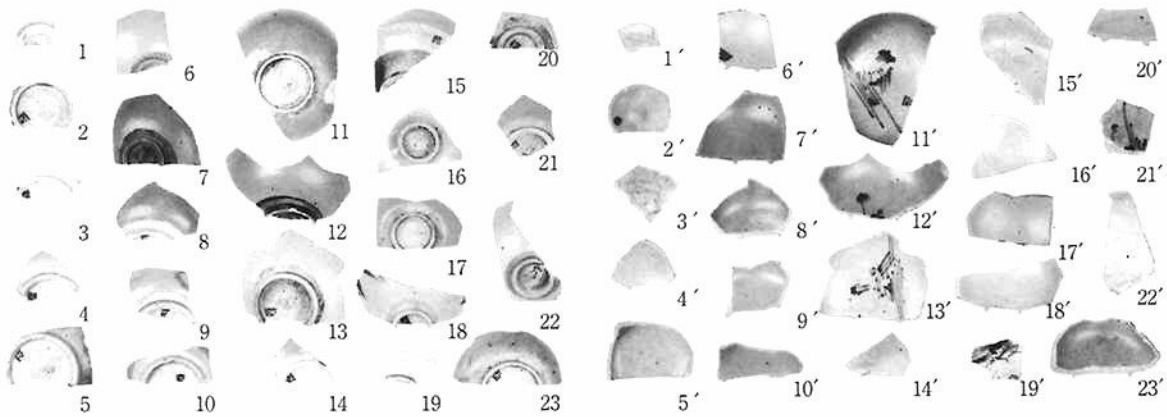


図139 F地区近世水路上層内出土陶器(京焼風)

灰~灰黄釉碗、湯飲みなどがある。細かい貫入のあるものが多い。11・12・13・19・21の内面に山水画などが描かれている。高台裏に「富永」、「善」、「小松吉」などの銘が入っているものがある。

(外面)

(内面)



図140 F地区近世水路上層内出土陶磁器

陶磁碗に刷毛目碗、灰釉、茶褐釉のものがある。磁器は青磁染付で蓋がセットになるものがある。

口径 1-11.0cm 2-11.8cm 3-11.2cm 6-9.5cm 8-10.2cm 11-11.0cm

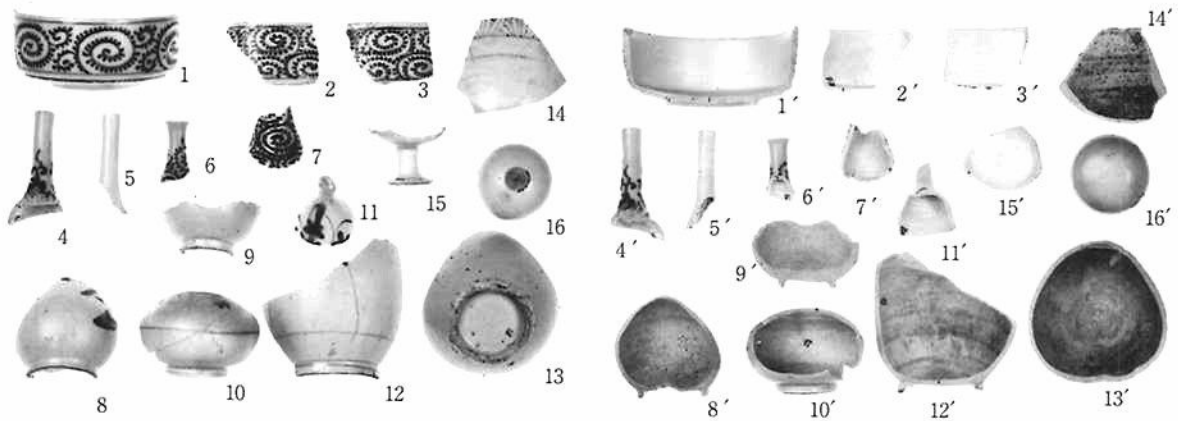


図141 F地区近世水路上層内出土染付鉢・瓶・仏飯

たこ唐草文の染付鉢・瓶がある。瓶には草花文を染付たものが多い。

口径 1-12.6cm 6-1.9cm 16-5.8cm

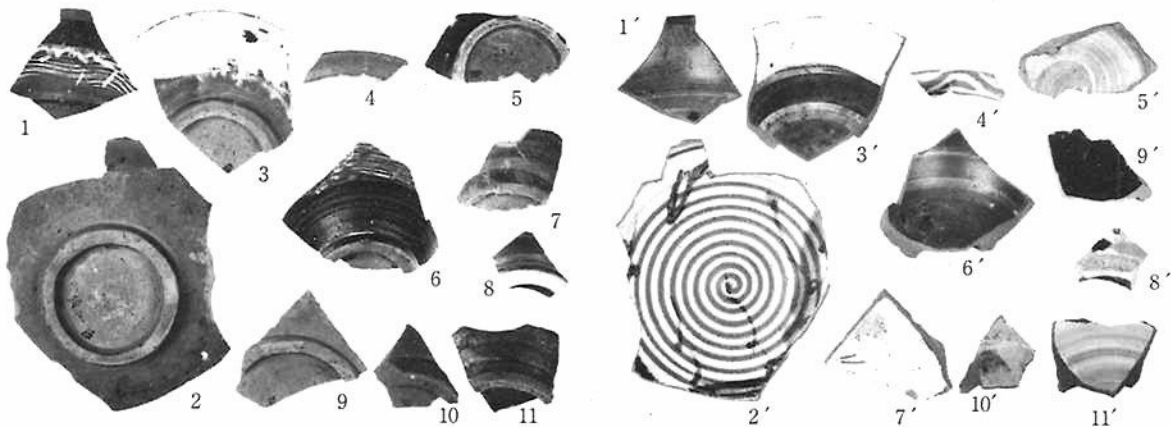


図142 F地区近世水路上層内出土陶器鉢

大型鉢に二彩手、刷毛目、茶褐釉がみられる

口径 3-24.0cm

底径 2-12.0cm 3-10.2cm

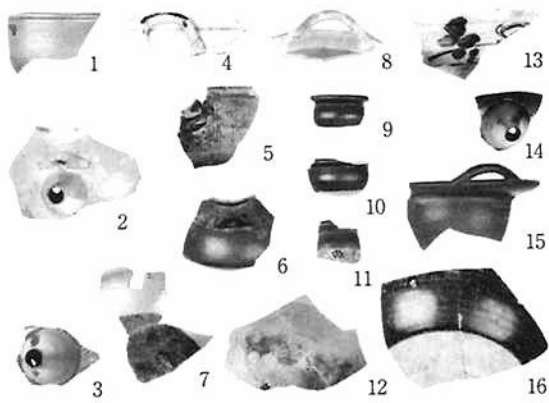


図143 F地区近世水路内出土陶器
行平鍋、土瓶に灰釉、茶褐釉、鉄釉のものなどがある。
口径 1-18cm 4-17cm 6-5cm 底径 12-8cm

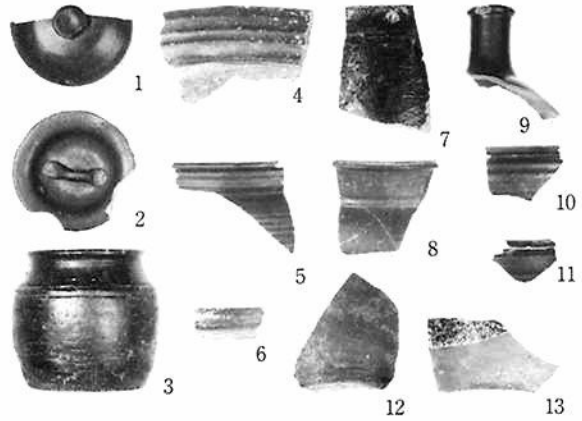


図144 F地区近世水路内出土陶器
蓋・壺・瓶・甕などに鉄釉、茶褐釉焼きしめたもの
などがみられる。
口径 1-10.9cm 2・3-10.8cm 9-4.5cm
底径 3-10.6cm

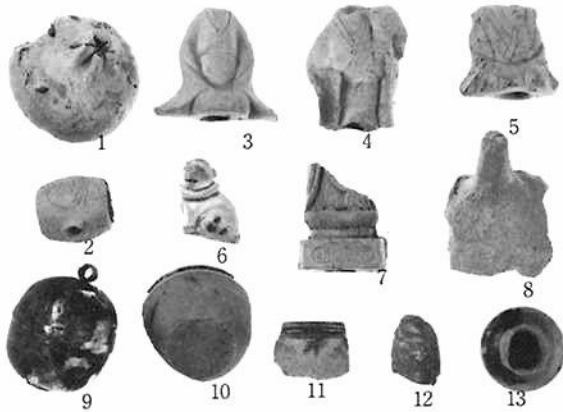


図145 F地区近世水路内出土ミニチュア土
製品
伏見人形、土鈴、小杯、柿釉小杯と金属製鈴が
ある。



図146 F地区近世水路内出土土師器皿

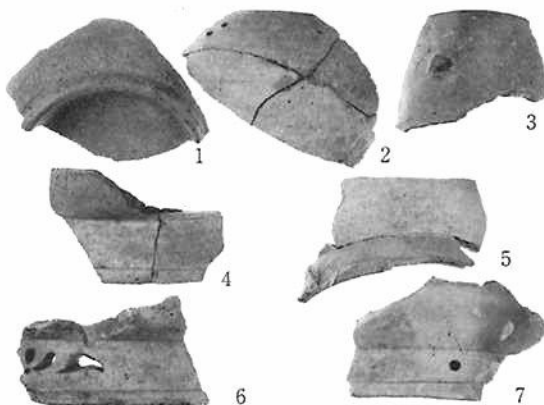
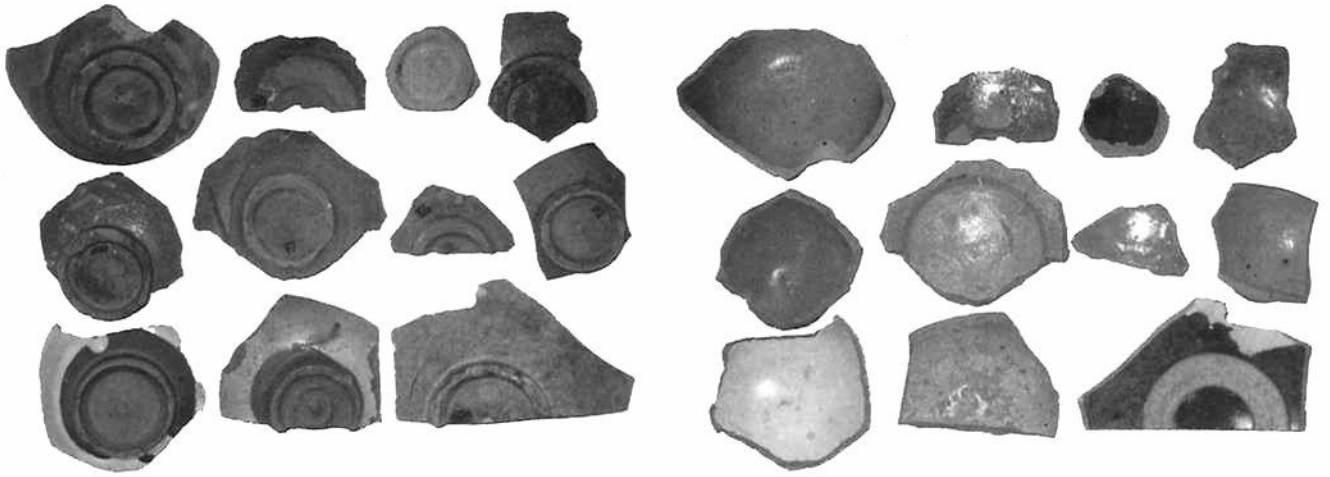


図147 F地区近世水路内出土火舎



図148 F地区近世水路内出土瓦質火鉢・甕



(外面) 図149 F地区近世水路内出土陶器碗・鉢

(内面)

土師器と摺鉢

土師器は火鉢、焙烙、皿などがみられる。

焙烙はA、B、Cタイプに分けられ、Aはさらに立ち上がり部が深いものA-1と浅いものA-2に分けられ、Bタイプも立ち上がり部の深さによりB-1、B-2に分けられる。難波氏の分類によれば、Aタイプのもは18世紀後半、Cタイプのもは18世紀末～19世紀代に多い⁽²⁾。口径は7～10寸ものがある。

摺鉢

摺鉢は備前焼き、堺焼き、丹波焼きのものがあり、口縁部の造りと摺目に変化がみられる。摺目が斜め方向に刻まれた16世紀末～17世紀初の備前焼き、口縁部の端部が拡張しない丹波焼きをはじめ、17世紀代、18世紀代、19世紀代のものがあり、おもに備前系の摺鉢が多い。

口径は21cm、26.6cmのもの以外は30cm以上のものが多い。



(外面)

(内面)



(外面)

図150 F地区近世水路内出土摺鉢

(内面)

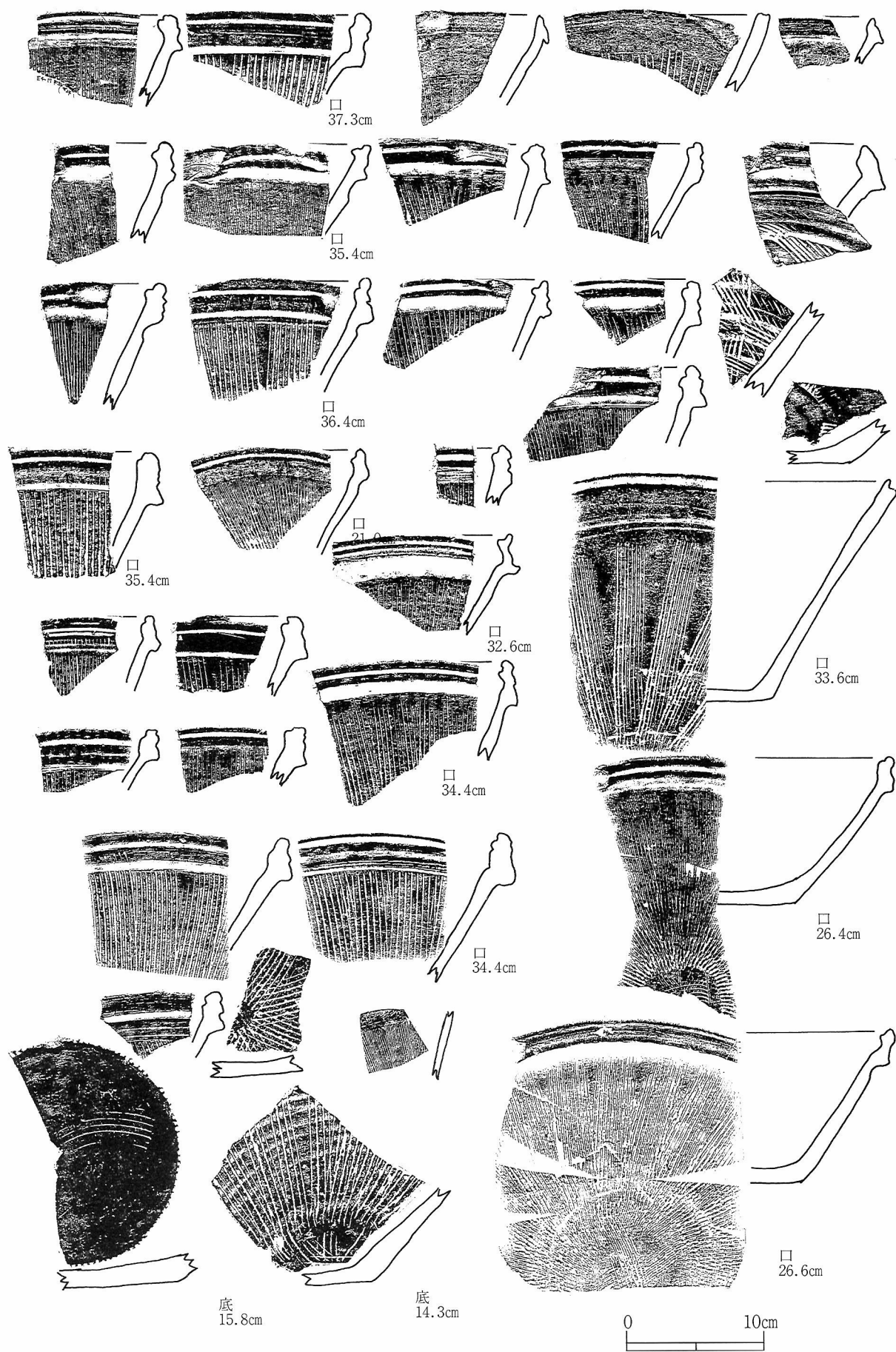


图151 F地区近世水路内出土摺鉢断面、拓影图（口—口径、底—底径の復元値）

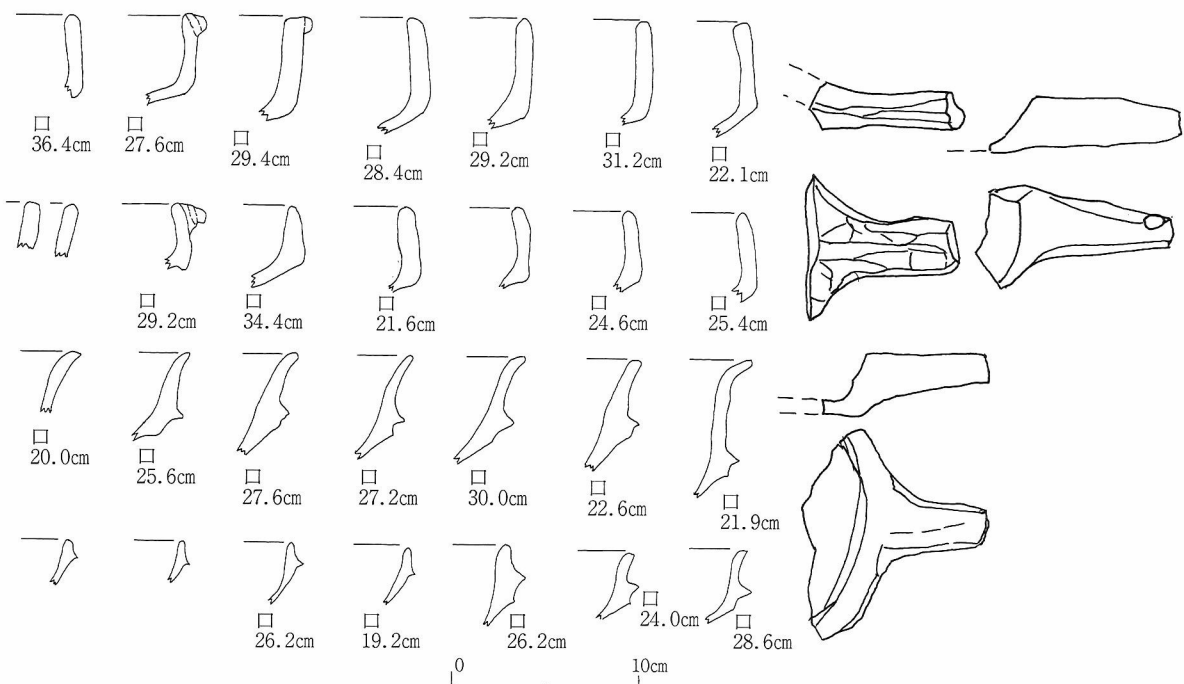
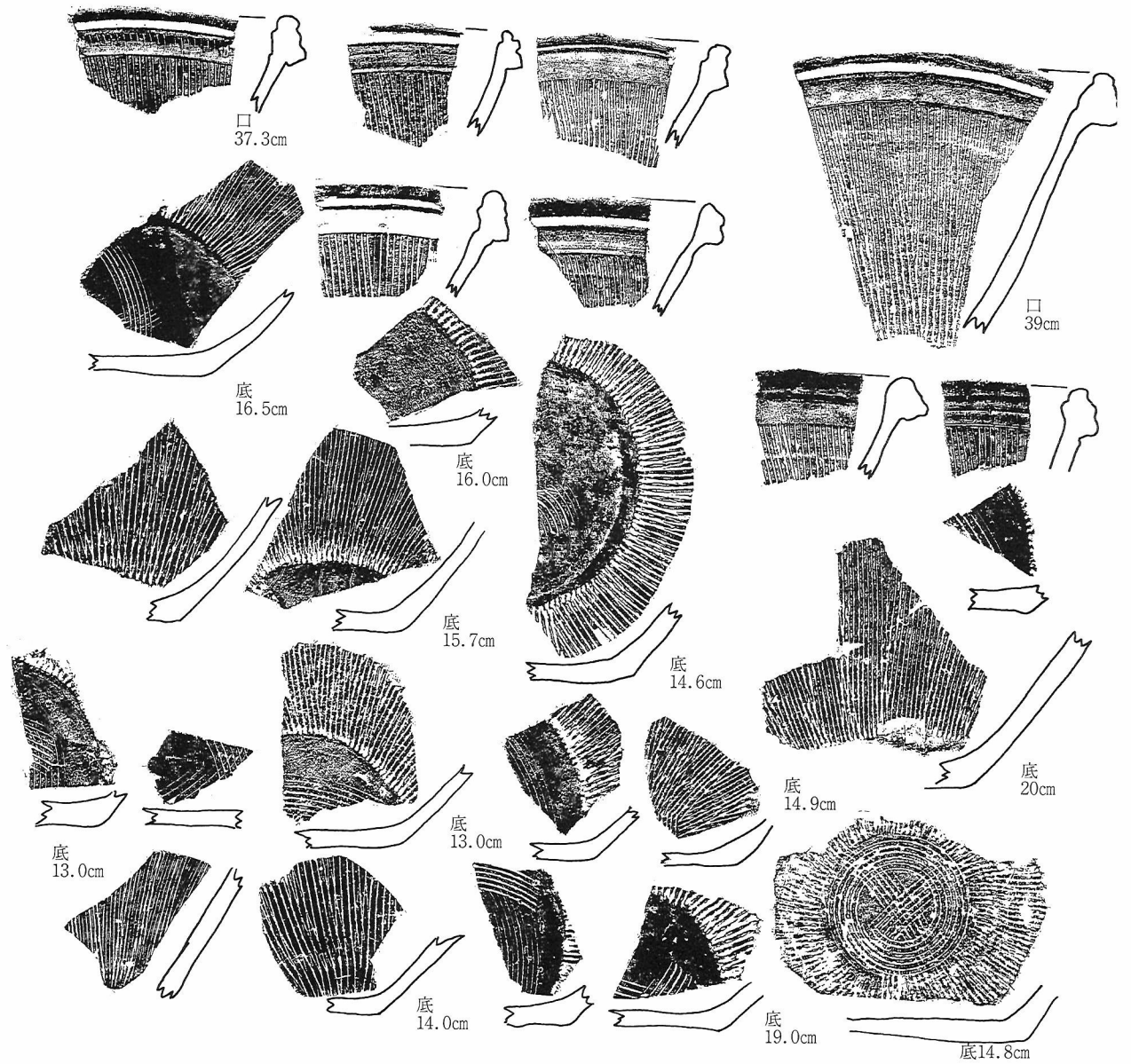


図152 F地区近世水路内出土摺鉢、焙烙、十能（口—口径、底—底径の復元値）

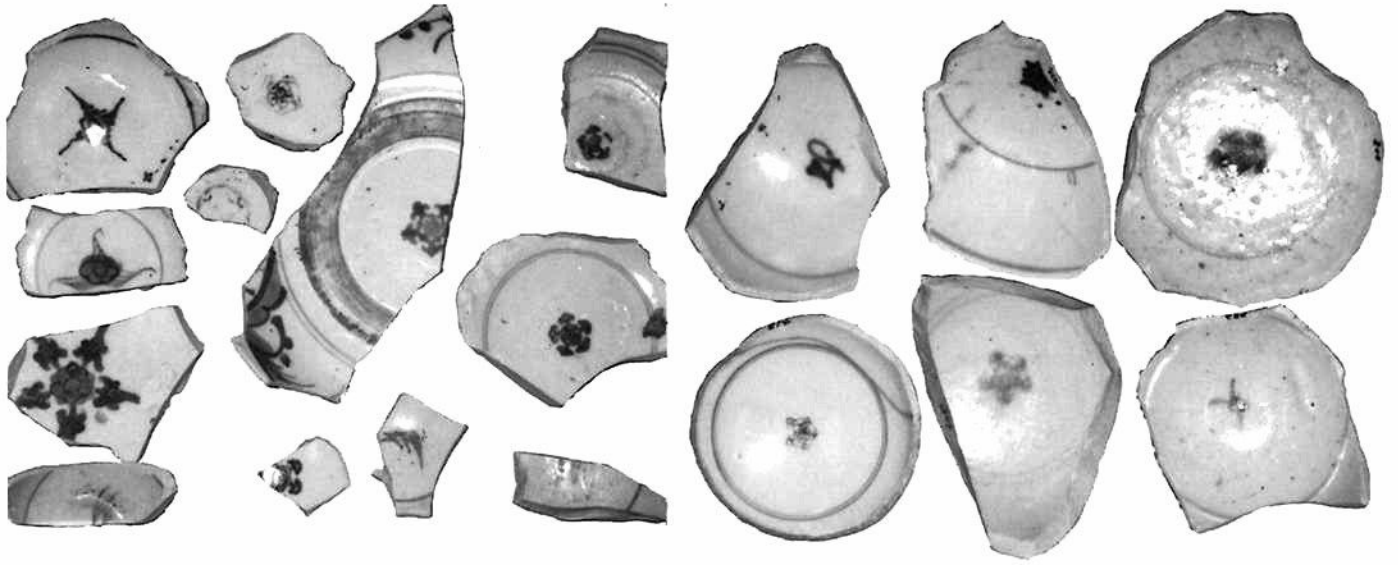


图153 F地区近世水路内出土
染付磁器 見込み 五弁花文他

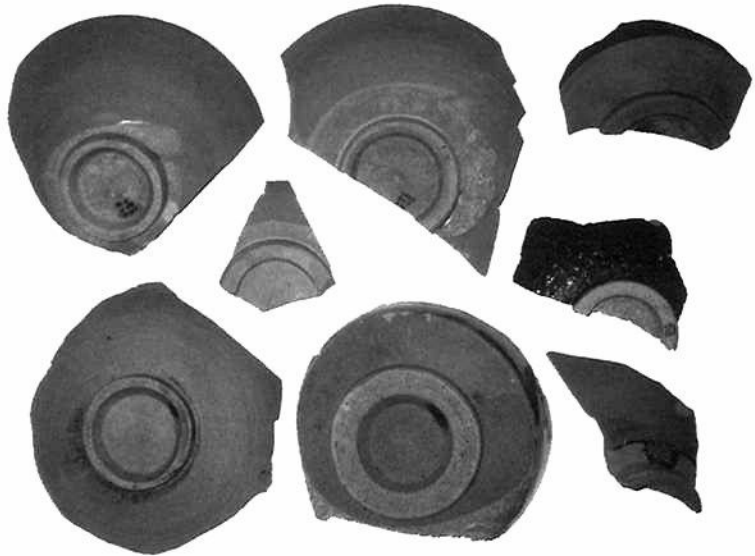
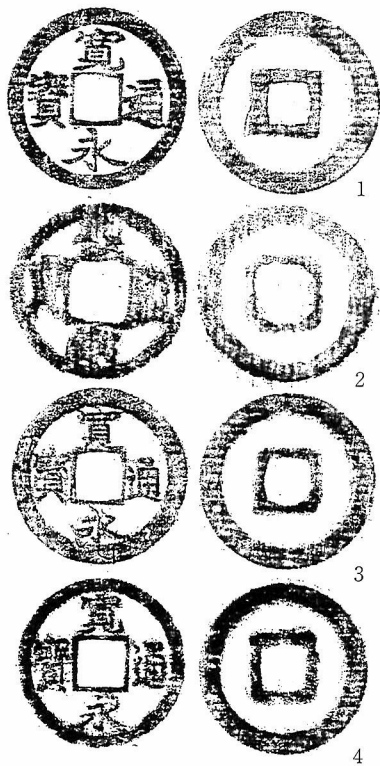


图154 F地区近世水路内出土
灰釉陶器外面



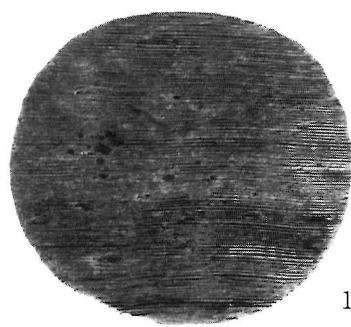
图155 同内面



(1/1)

図156 F地区近世水路内出土銭貨

1. 古寛永通宝(「コ」通)
2. 判読不明
- 3・4. 新寛永通宝(「マ」通)



1



2



3

図157 F地区近世水路内出土木製品

1. 桶底板(径13.5cm)
2. 曲物底板(径9.9cm)
3. 桶底板の一部(現存長29.4cm)

〈遺物 (図129～158)〉

陶器

- ・備前焼き 備前焼きのなかでは摺鉢、壺などの出土が多い。
- ・信楽焼き 全体のなかでは少なく摺鉢がある。
- ・唐津焼き 17世紀前後の碗、皿が一番古く、ほか鉄絵碗、刷け目碗、三島手、二彩などがみられる。
- ・瀬戸・美濃焼き 馬の目皿が一点みられた。
- ・京焼き風の灰黄色から灰褐色釉の碗に山水画をえがいたものがみられた。

磁器はほとんどが肥前の染め付け碗、皿などである。

他、古寛永通宝(初鑄造1636年)、新寛永通宝(初鑄造1697年以降)、木製品の容器、軒丸瓦、軒平瓦などがみられた。

図158 F地区近世水路内出土巴文軒丸瓦、唐草軒平瓦



8. G地区

1. はじめに

調査地は東大阪市若江南二丁目内で、F地区から現在の通称「木村通り」を横切って西に続く道路18m²で、鏡神社参道前の南北に通じる道と北側で「T」字型に交差する道幅が約1.3mの狭い路地である（図66）。下水管理設の管路と人孔部約0.4mについて、盛り土、及び攪乱土を機械掘削し、以下約0.7mを人力掘削により調査した。調査地は北側の家屋のブロック塀から20cmほどしか離れていないため、測量杭のかわりにのブロック塀を地区割りに利用し5地点にわけて東側から実施した。調査期間は1995年9月28日～10月4日である。江戸時代の「村絵図」によると、この路の北側は「田地」で南側は「村中」に描かれている。白鳳時代の素弁百濟様式の瓦、川原石を含む旧河道の砂層の堆積がみられた。

2. 層序

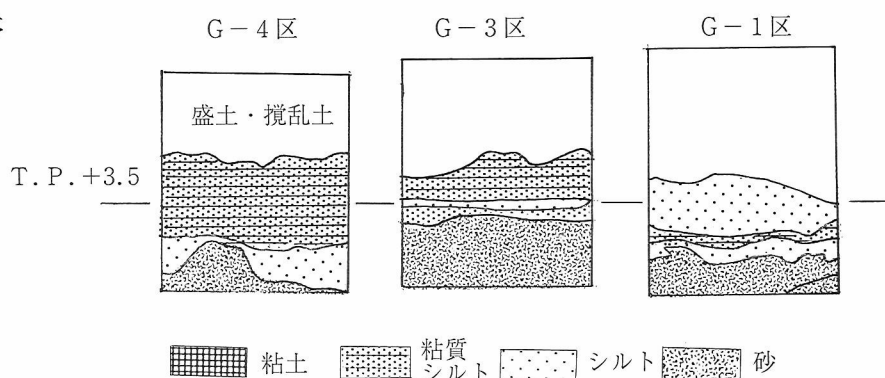


図159 G地区各地点土層柱状図 (1/40)

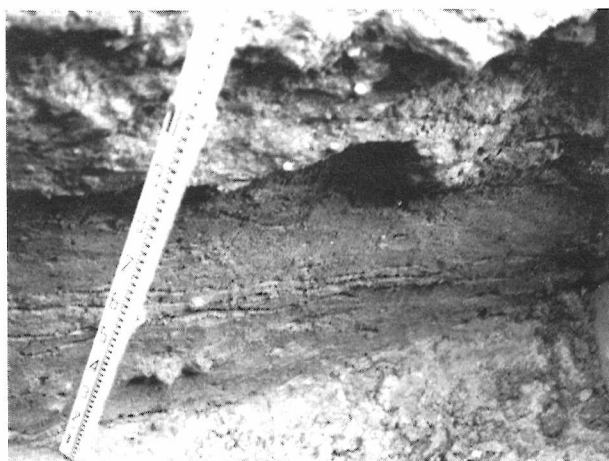


図160 G-3区近世水路土層断面

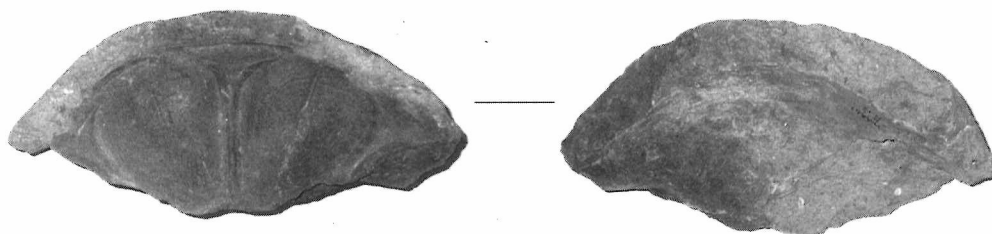


図161 G-2区出土 白鳳時代素弁百濟様式軒丸瓦(残存最長13.0cm) (左側瓦当部)(右側瓦当裏面)

3. 遺構と遺物

〈旧河道、自然堤防〉下位は中レキ～粗粒砂混じりの細砂層（T. P. 約3.5～）レンズ状の腐食土を挟む。中世から近世の遺物が出土している。中央で川原石、東端で杭を検出した。上層は還元化した砂混じりのシルト～粘質土の堆積である。

〈土坑〉焼け跡のある凝灰岩、粗粒花こう岩と瓦を置いた土坑とその南側に白鳳時代の軒丸瓦（図161）が出土した。この瓦は若江遺跡でほかに3例の出土がみられる。

〈遺物〉E 4 地区でみた近世の陶磁器類と同じ時期のものである。

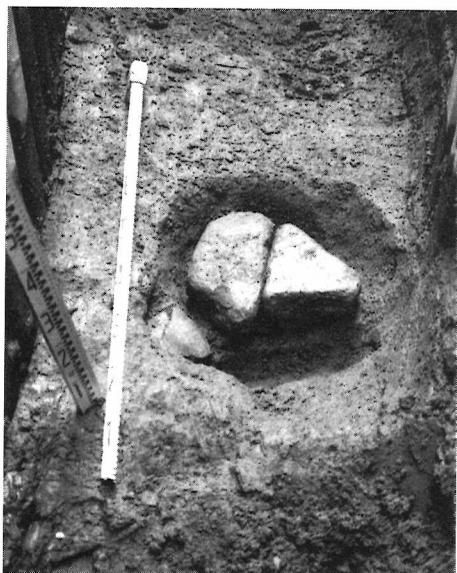


図163 G-3区土坑1下面に焼け痕の
みられる石検出状況

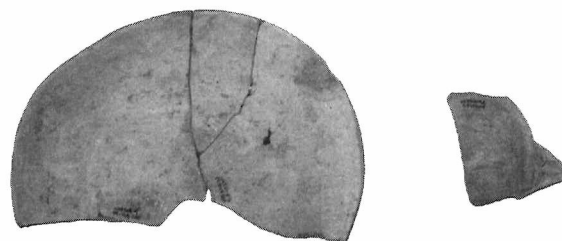


図162 G-5区第3層内出土土師器皿(口径9.8cm)
注口付土師器皿

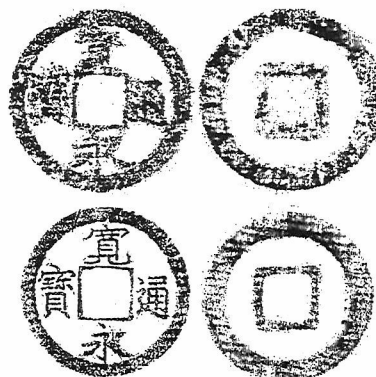


図165 (上) G-5区出土新寛永通宝(「マ」通)
(下) G-4区出土新寛永通宝(「コ」通)

(1/1)



図164 G-5区第3層(砂層)内出土陶磁器

9. H地区

1. はじめに

調査地は若江南2丁目の鏡神社参道前の東西に走る道路から北へ一本目の筋の幅約3mの道路で(図66)、下水道埋設の管路と人孔部約70m²について、盛り土及び攪乱土約0.4mは機械掘削、以下約1.6mは人力掘削により調査をした。調査期間は1995年11月21日～1996年1月23日である。調査はE地区と同様に17区間に分けて東側から実施した。この地区は江戸時代の1677～1704年の間に描かれたとされる絵図(図325)では、中央に水路が南北の方向に流れている。当時はこの絵図の水路の他にも何本かの水路が流れていたと考えられ、旧河道と自然堤防の堆積層と考えられる砂層がみられた。またその下層は古墳時代前期以降の旧河道の堆積層がみられる。おもな遺構は近世のものが多く小穴、溝、素掘りの井戸、捨て石、杭列、竹管を利用した用水路である。

2. 層序

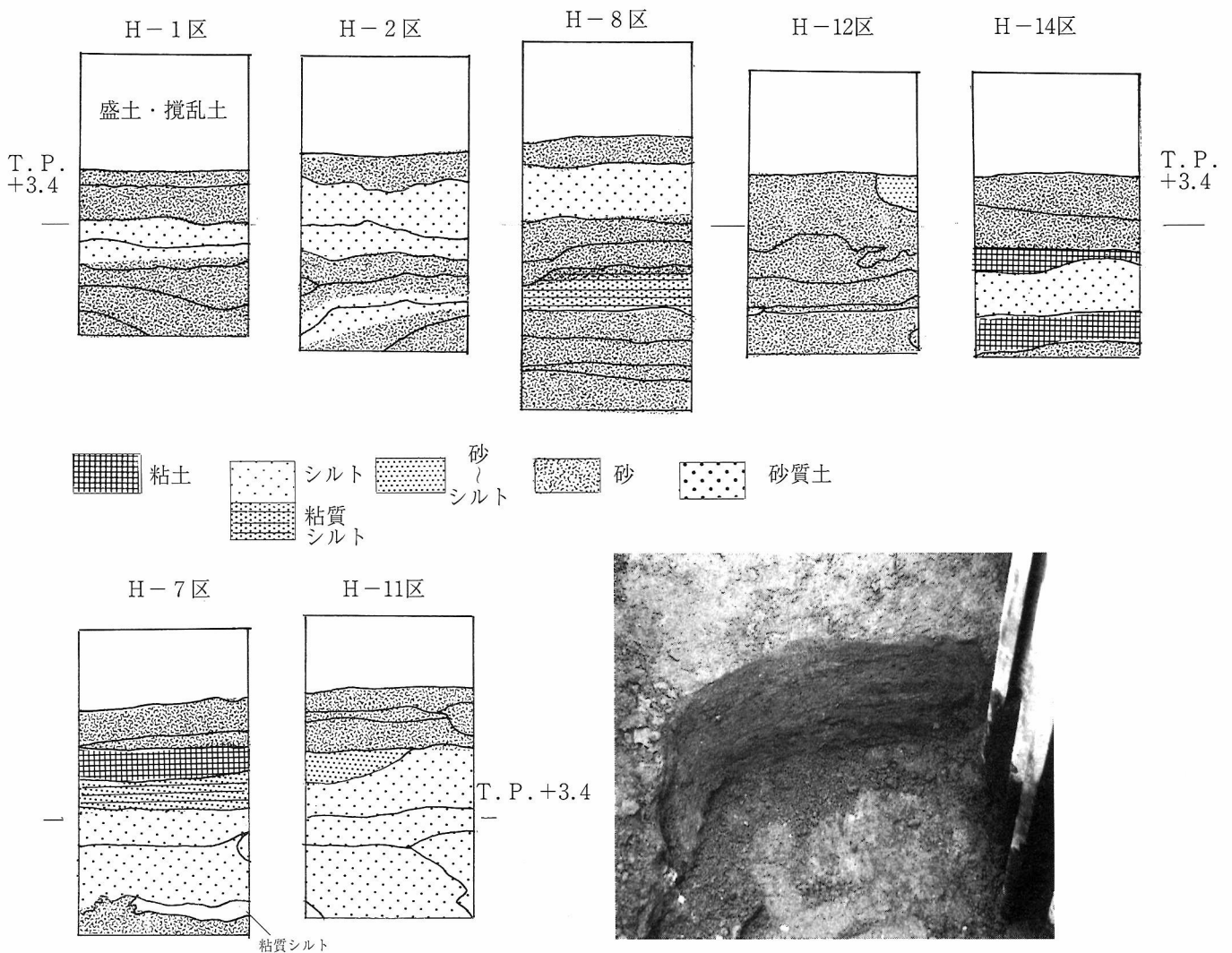


図166 H地区各地点土層柱状図 (1/40)

図167 H-1区18c前半頃の洪水の砂の堆積層



図168 H-4区中世～近世土層断面

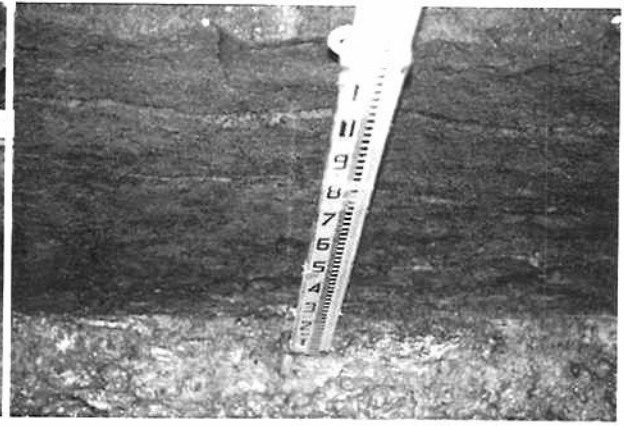


図169 H-4区中世～近世土層断面

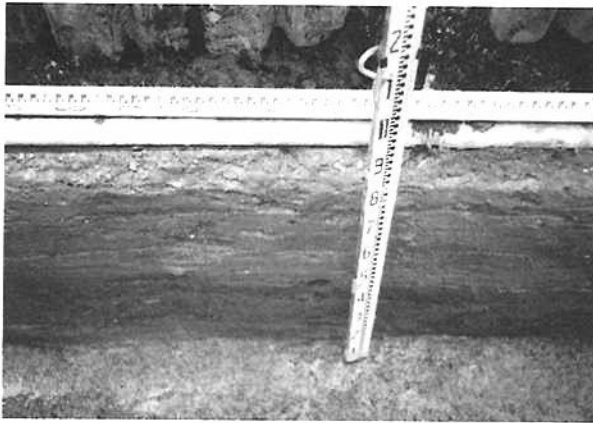


図170 H-5区古墳～近世土層断面



図171 H-5区古墳時代河道土層断面



図172 H-6区古墳時代河道泥・砂層断面



図173 H-7区近世河道土層断面



図174 H-10区古墳～近世土層断面
(図168～175は南から撮影)

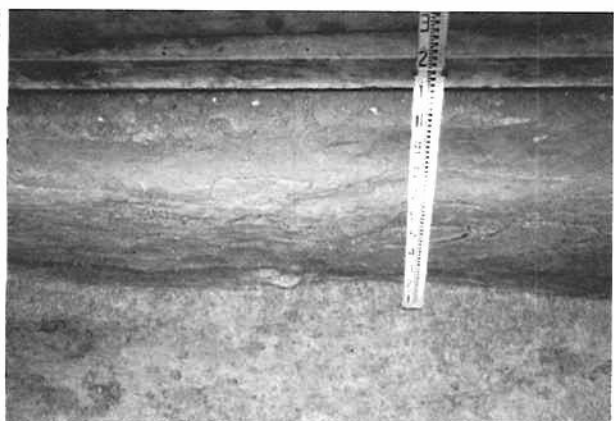


図175 H-11区近世自然堤防状堆積土層断面

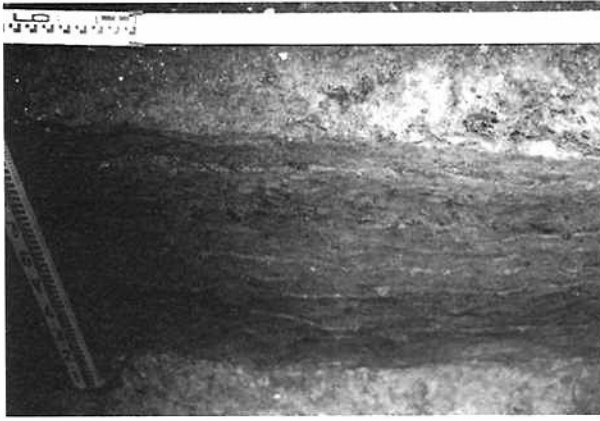


図176 H-1区古墳時代河道～近世土層断面

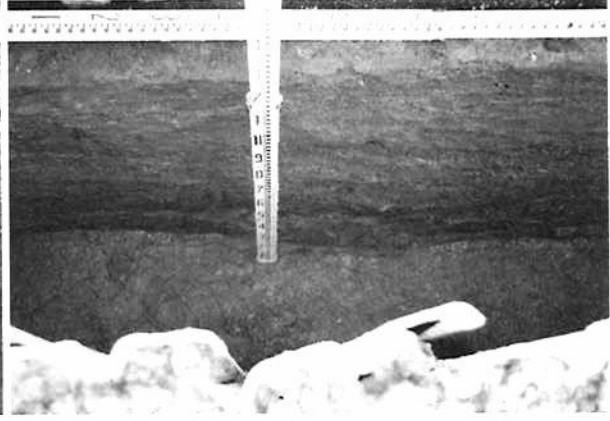


図177 H-2・3区古墳時代～中世土層断面



図178 H-2・3区古墳時代河道土層断面

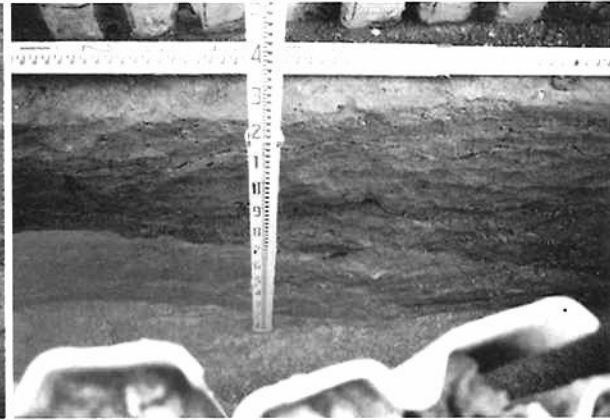


図179 H-2・3区古墳時代河道土層断面



図180 H-8区近世河道土層断面

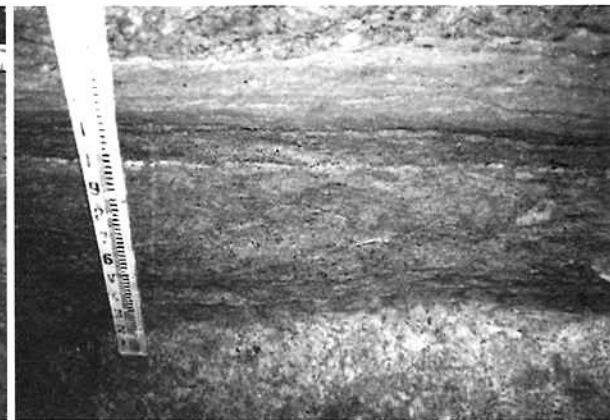


図181 H-8区古墳～近世土層断面
(H-7～H-9 中世耕作土)



図182 H-8区弥生後期～近世土層断面

最下層は黑色砂粒層
(図176～188は北から撮影)



図183 H-9区中世～近世土層断面



図184 H-9古墳～近世土層断面

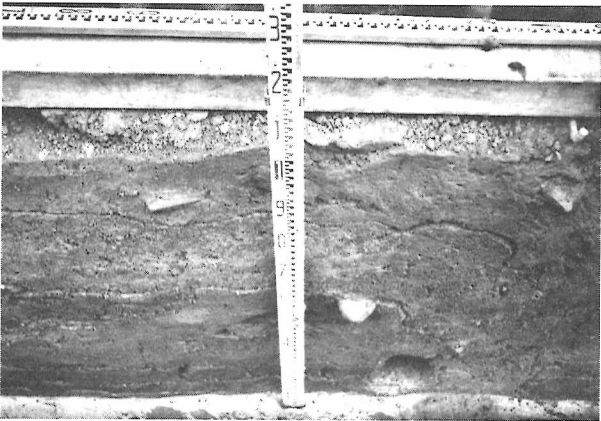


図185 H-10古墳～近世土層断面

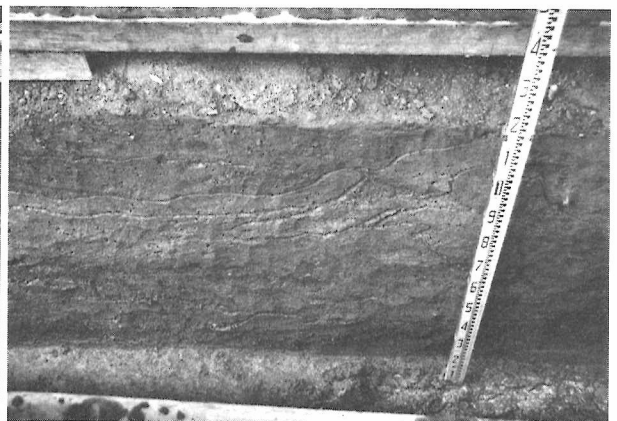


図186 H-11近世自然堤防状堆積土層断面

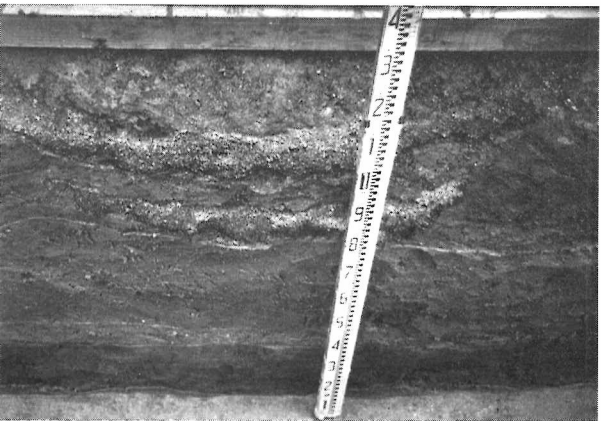


図187 H-13区古墳～近世土層断面

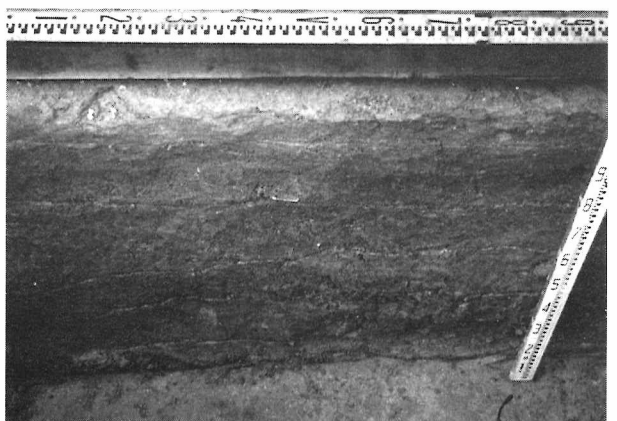


図188 H-14区古墳～近世土層断面

3. 遺構と遺物

1) 古墳時代

〈旧河道〉古墳時代前期以降の旧河道の堆積層がH-1～H-13区の間で下位に部分的にみられた(T.P.約3.0～2.9以下)。H-2～H-5区の土層はシルト、細粒砂～粗粒砂で、部分的に中州状に薄くシルトが堆積している。H-10～H-13区では植物根やその痕跡のある粘土層がみられるが、旧河道の後背湿地の堆積層と考えられる。H-2区では弥生時代後期の遺物が古墳時代の旧河道の砂層内から出土した。H-2、H-4、H-6、H-9、H-10、H-13区の旧河道の砂層内から古墳時代の遺物—土師器、須恵器、埴輪の小片が出土している。H-2区ではシルト層内から数個体の庄内式の甕(図191・193)、杉材の舟形木製品の先端部(図190・200)、H-11区では粘土層内から小型

丸底壺が完形品のまま出土し、底部には穿孔をもつ（図195・197）。H-13区では砂利層内から庄内式の甕が出土している。この砂利層の下層の粘土層の上面には薄い木皮が広がっていた。

〈凹地遺構〉 H-2区で動物の足跡状の窪み（深さ7cm）を検出した（図196）。



図189 H-2区古墳時代河道内土器出土状況

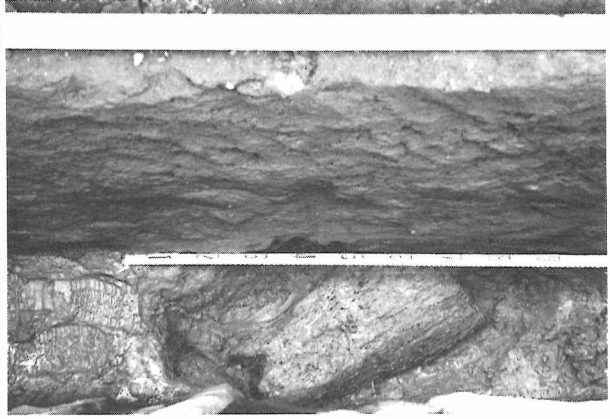


図190 H-2区古墳時代河道内木器出土状況



図191 H-2区古墳時代河道内庄内式土器出土状況



図192 H-10区古墳時代河道内出土庄内式土器
（口径 14.2cm）



1



2

図193 H-2区古墳時代河道内出土庄内式土器(口径 1-15.6cm・器高19.7cm 2-16.8cm)



図194 H-2区古墳時代河道内高杯出土状況

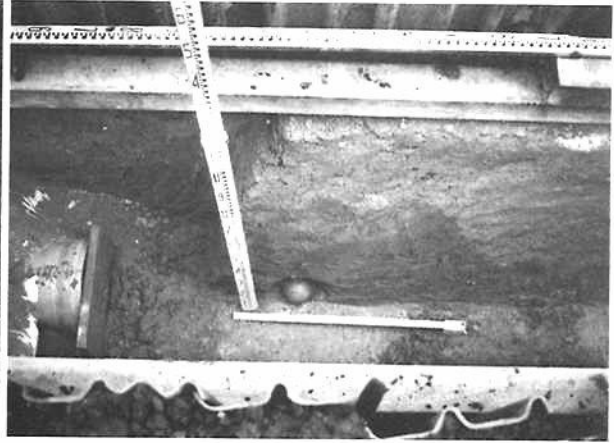


図195 H-11区古墳時代河道内丸底壺出土状況



図196 H-2区古墳時代足跡状の凹み
検出状況



図197 H-11区古墳時代河道内出土古墳時代前期
丸底壺(口径 8.4cm、器高 11.6cm、底部
に穿孔をもつ)



図198 H-4区古墳時代河道内土器出土状況

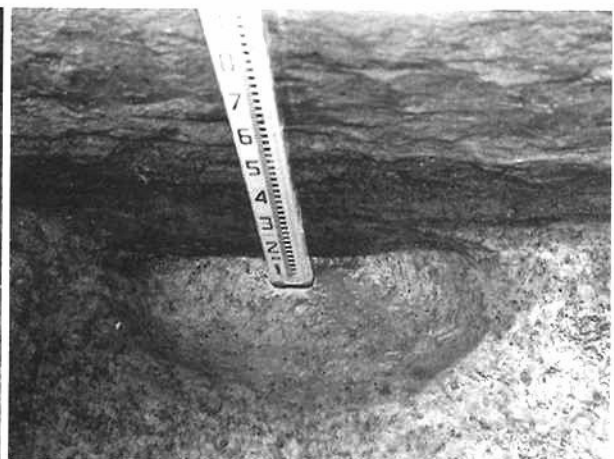


図199 H-7区古墳時代凹み遺構検出状況

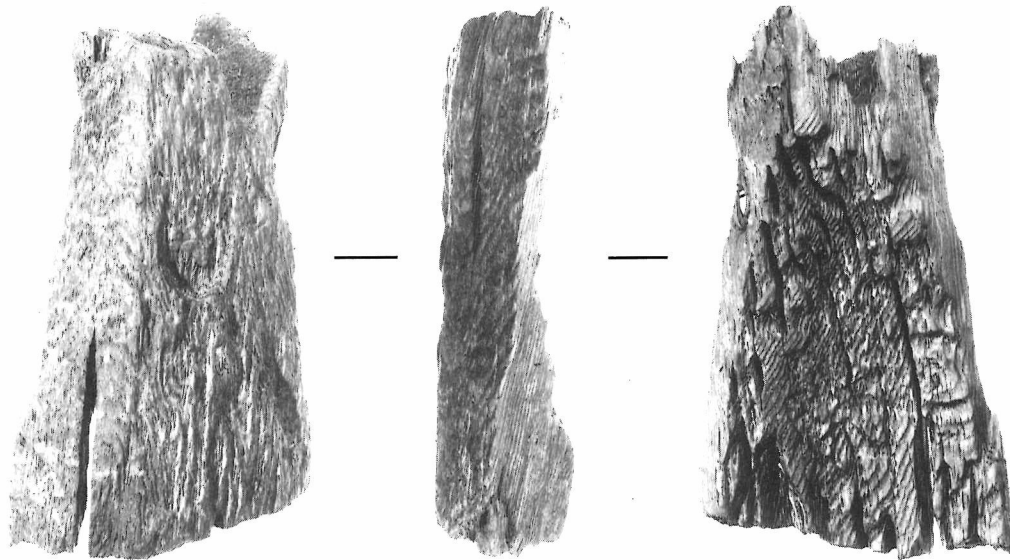


図200 H-2区古墳時代河道内出土舟形木製品の舳部(1/8)残存最長55.4cm

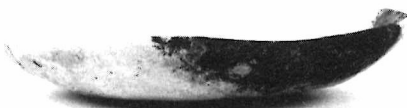
2) 中世

中世の面は近世の旧河道にほとんど削られている。H-13区古墳時代には後背湿地であったと考えられる堆積層の上位と、H-14区近世の旧河道の自然堤防の堆積層の下位に部分的に中世の包含層が残る。また中世の遺物は近世の包含層内に混入して出土した。遺物は小片である。

〈用水施設〉H-10地点の旧河道の底部に竹の樋管が南北に渡されていた(T.P.約2.9)。樋管の上から瓦器碗、掘り方内から平瓦と土師器片が出土したが中世でも終わり頃のもの(図201~203)。

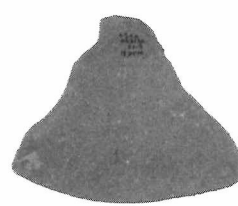


図201 H-10区中世竹樋検出状況

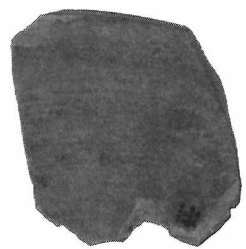


1

図202 H-10区竹樋共伴出土遺物
1. 土師器皿、口径 8.9cm



2



3



4

図203 竹樋共伴出土遺物 2. 土師高杯、
3. 瓦器碗、4. 布目平瓦

3) 近世

〈旧河道〉盛土のすぐ下から旧河道の堆積層がH-7～H-8区(旧河道1-幅約6m、深さ約90cm)、H-9～H-11区(旧河道2-幅7.5m、深さ約50cm)、H-12～H-13区(旧河道3-幅約7m、深さ約10cm)、にみられる。この河道の下位には中世の堆積層があり、また古墳時代の旧河道のシルトから細砂の堆積層が部分的にみられ、粘土、シルト～砂層がおおきなブロック状を呈して堆積する。H-1～H-6・7区ではシルトと粗粒砂混じりシルト～細砂の互層がみられ、旧河道の自然堤防の堆積層と考えられる。H-11区の堤状の堆積層では下位の砂混じりシルト～

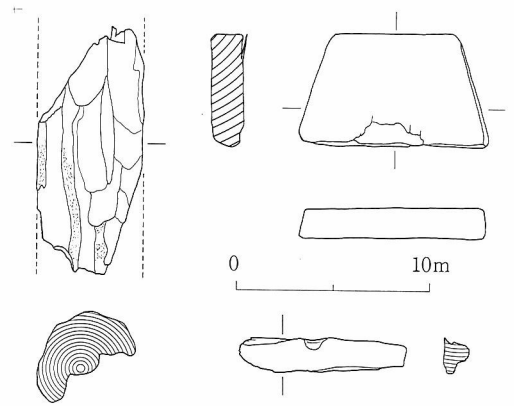


図204 H地区出土木製品

砂混じり粘土層の間に旧河道1・2からオーバーフローしている砂層がみられた。土堤状遺構には杭と3枚の板材が立ち並び、北側の上層には横位置に並ぶ石垣を検出した。いずれも洪水防止用のものと考えられる。岩石は閃緑岩、斑斕岩、花こう岩、粗粒花こう岩、片麻状花こう岩などで生駒産系のものである。上層から瓦質羽釜、鉢、備前摺り鉢、刷け目、二彩の唐津焼き鉢など18世紀初め頃までのもの、中層から瓦質火舎、土師器皿、中粒砂層内から13世紀代の瓦器碗が出土した。

〈用水・排水設備〉(図222～226) H-6区では北側に丸瓦を利用した樋(T.P.約3.6)を検出した。南側の東西に走る細い溝に排水する設備と考えられ、溝の北側には竹、木杭が打たれている。またH-17区では北から南西の方向にほぼ水平に渡された竹管の樋(T.P.約3.05)が灰色粘質シルト層上面に約3.5m分みられた。北端には木製の継手が杭で固定されている。この竹管は矢板で切られた継手から調査区の東端までしか確認できなかった。竹管の口径は7cmで、節の間は37cmを測る。継手は丸太材の二箇所を面取りし真ん中に竹を通す穴をあけている。共伴した遺物は18世紀中葉～末のものである(図227)。このような類例は高槻市の三の丸跡でも見られ当時の竹の水道管施設の一部と考えられる⁽³⁾。

〈溜め池状遺構〉H-15区では溜め池状の遺構(幅約5m、T.P.3.5)を検出した。埋土はグライ化した粘質土が堆積し底には巨大な岩石(斑斕石)を始め中大(黒雲母花こう石)、小石(安山石)の川原石がみられた。江戸時代「絵図」にある南北方向の旧河道の一部とも考えられる。

〈井戸〉旧河道の東側のH-8地区で素掘りの井戸を検出した(規模は66×70cm、深さ51cm)。埋土は下層から黄褐色粘質土、灰色粘質土、灰色粘土層である。この井戸の南東側には規模が65×70cmの1段低くなる水汲み場と考えられるテラス状の遺構がみられた。

〈杭〉調査地の全体から木杭、竹杭を検出した。杭はH-4～8、11、15、17区でのそれぞれ遺構に伴う。H-15からH-17区の溜め池状遺構の上層ではシルトと粗粒砂の互層がみられ、グライ土層が下層から上層まで続き、後背湿地の様を呈す。

〈溝〉H-6区で南北に溝11(幅約1.6m、深さ約0.7m)を検出した。埋土が、黒色細砂層内の下面に杭(竹、木)列がみられ、上面から木質遺物が出土した。

〈落ち込み〉H-5区の南側、H-7、10区の南・北側、H-15区の北側にそれぞれグライ化した土層の東西に伸びる落ち込み((T.P.3.2、約3.1m、幅0.6m、深さ約20cm)を検出した。H-7区では酸化した面から木・竹杭跡を検出した。酸化土面は畦及び島畑、旧農道などが考えられる。

〈土坑〉H-1区で陶磁器を廃棄した穴、H-8区で浅い窪みから薄い炭層の堆積と杭を検出した(図205)。

〈小穴〉H-7区の落ち込みの西側で小穴(S P 14, 15, 16)を検出した。川原石、瓦を伴う。



図205 H-8区近世杭の堀方跡、土坑内の炭層検出状況



図206 H-5区近世落ち込み検出状況



図207 H-1区近世陶器出土状況



図208 H-6区近世杭跡検出状況

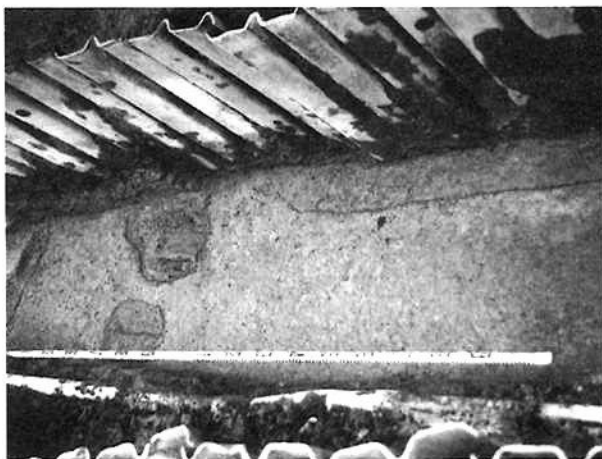


図209 H-7区近世遺構面



図210 H-7区土坑、落ち込み検出状況



図211 H-10区近世河道内杭、板検出状況

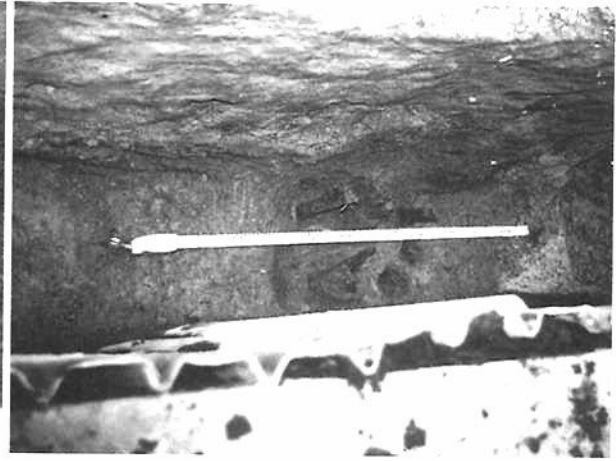


図212 H-6区近世溝11内杭検出状況



図213 H-8区近世遺構面



図214 H-8区近世素掘り井戸、
テラス状遺構検出状況

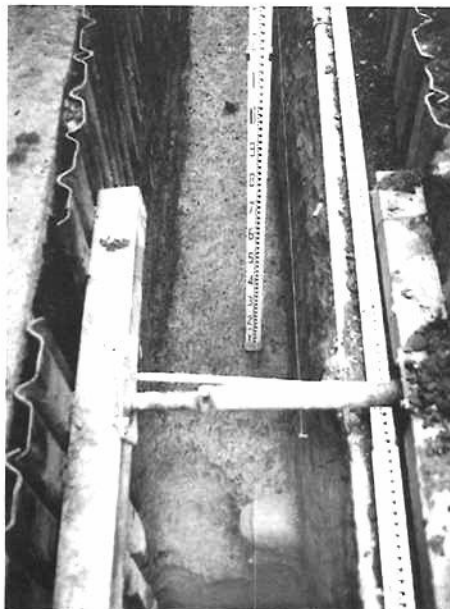


図215 H-7区近世最下層杭検出状況

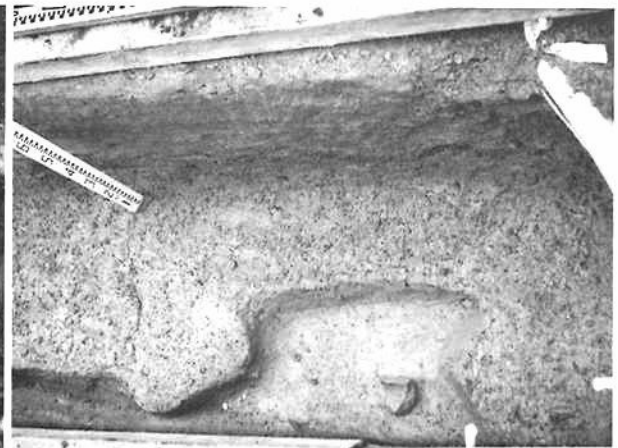


図216 H-9区近世凹み内瓦出土状況



図217 H-12区近世板組遺構



図218 H-11区近世石堤状遺構

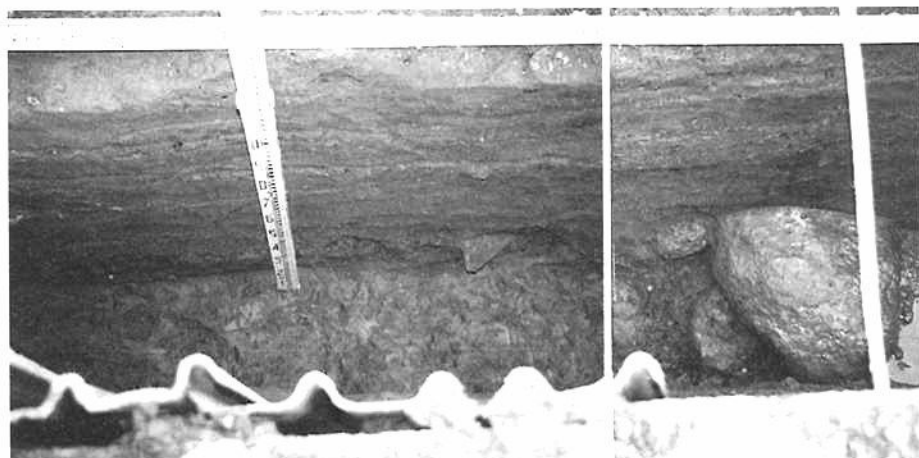


図219 H-15区近世溜池状(旧河道)遺構(西側)

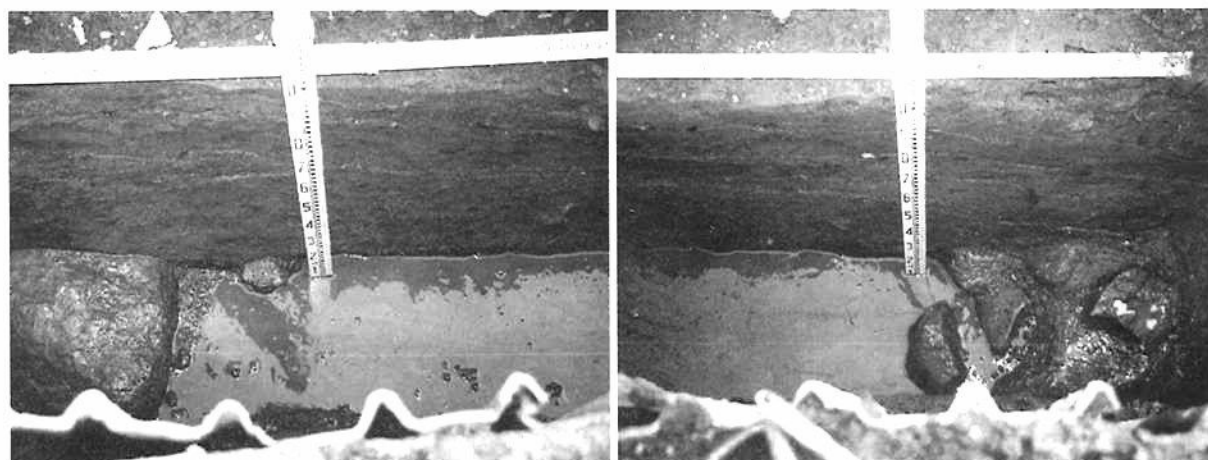


図220 H-15区近世溜池状(旧河道)遺構(東側)

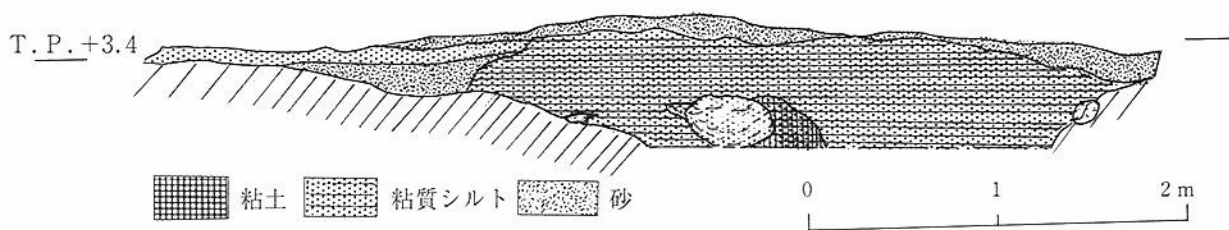


図221 H-15区近世溜池状遺構(旧河道)土層断面実測図

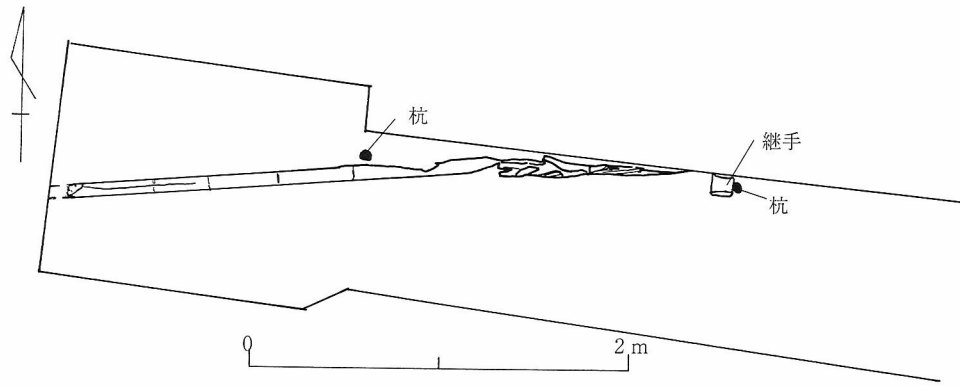


図222 H-17区近世竹樋実測図（継手の中心 X=-149.664、Y=-35.952）



図223 H-17区近世竹樋検出状況



図224 H-17区近世竹樋と継手検出状況

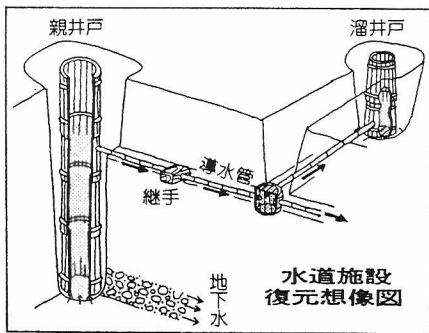


図225 高槻城三の丸跡で検出された江戸時代後期の竹の水道管からの想像図
（産経新聞1995年8月1日より転載）

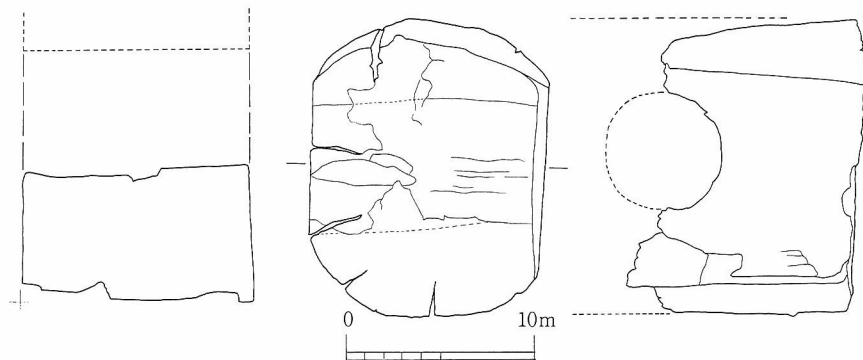
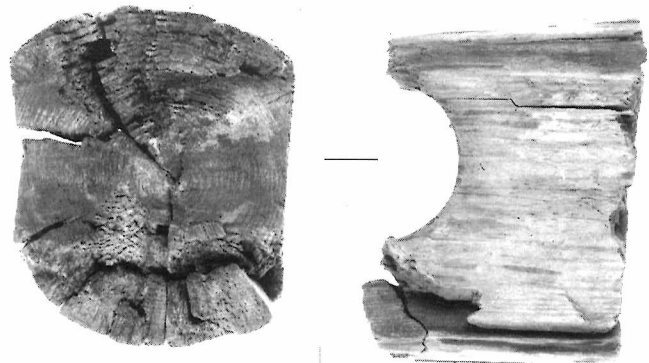


図226 H-17区近世竹樋の継手写真と実測図

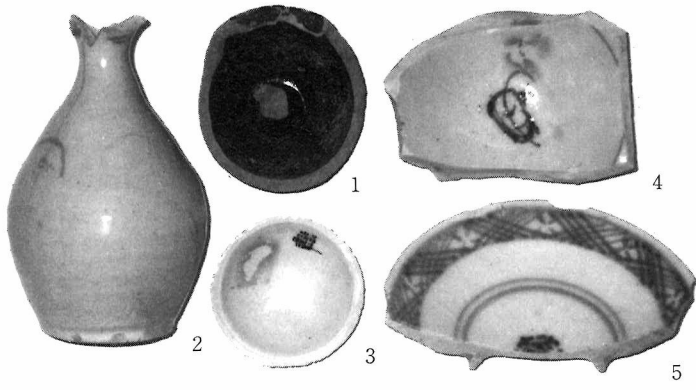


図227 H-17区近世竹樋共伴出土陶磁器(1. 灯火具、2~5. 磁器)

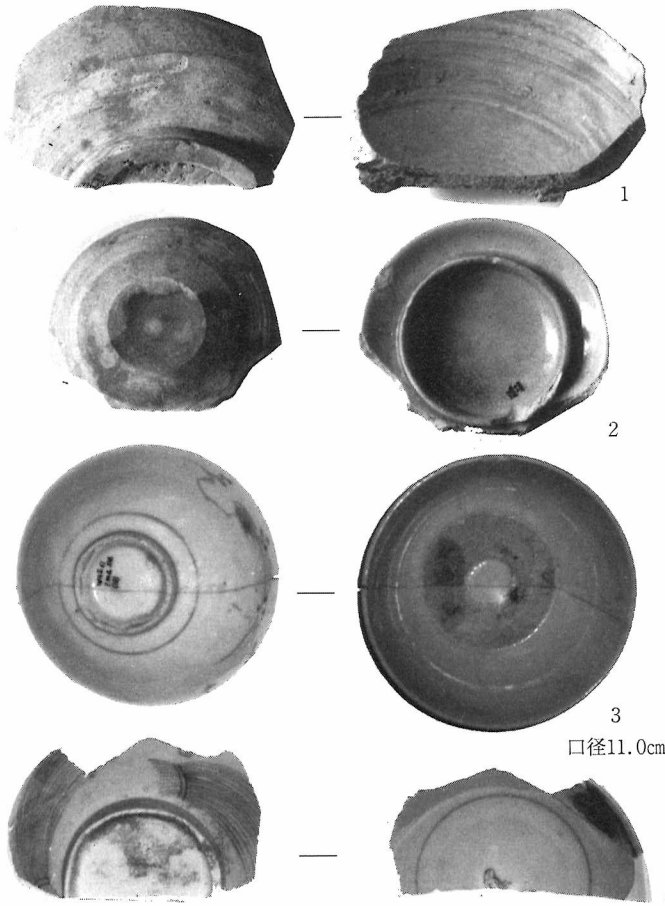


図229 1. H-5区SK5内出土黄褐釉鉢、2. 灰釉灯明皿、3. H-5区上層出土染付磁器碗、4. H-1区SK1内出土染付磁器碗

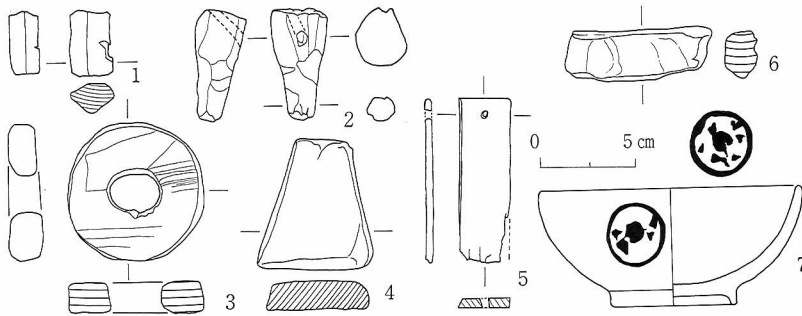


図230 H地区出土木製品 1. 楔形、2. 栓、3. 有孔円板、4. 下駄の歯

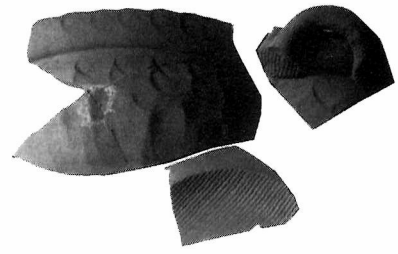


図228 H-5区SK5内出土平鍋

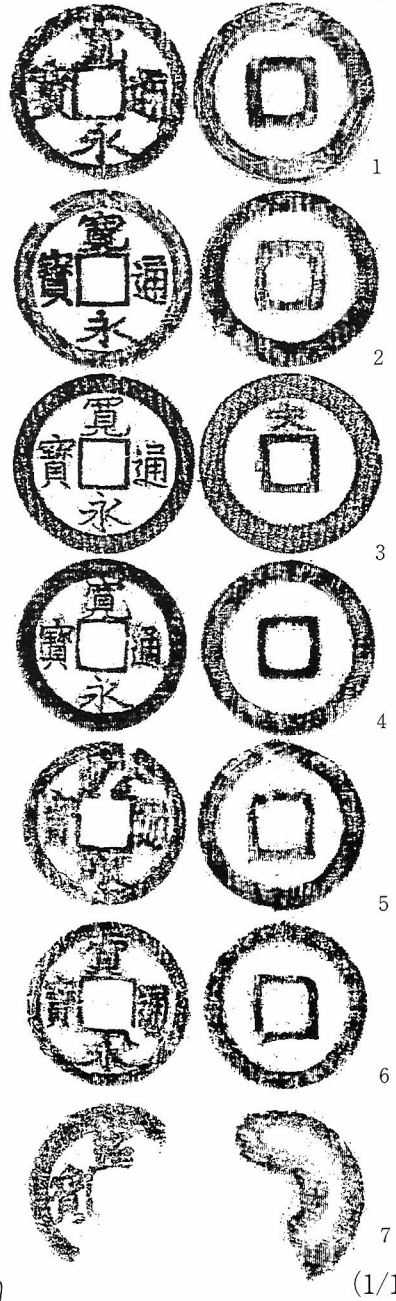


図231 H地区出土銭貨 1・2. 古寛永通宝、3~6. 新寛永通宝、7. 判読不明 (3・5・6. 「コ」通、4. 「マ」通、3. の背に「夫」あり)



図232 H地区伏見人形・土鈴・小鉢・滑石・小壺



図233 H-8区近世河道内出土香炉(口径8.0cm)



図234 H地区出土近世羽釜

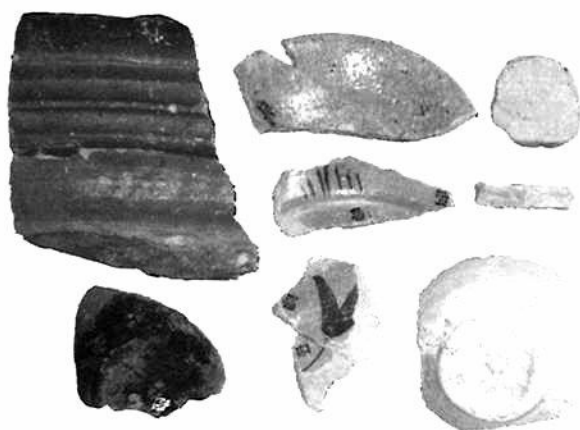


図235 H-5区砂層内出土陶器
(甕・ひょう燭・鉢・向付・瓦質円板)

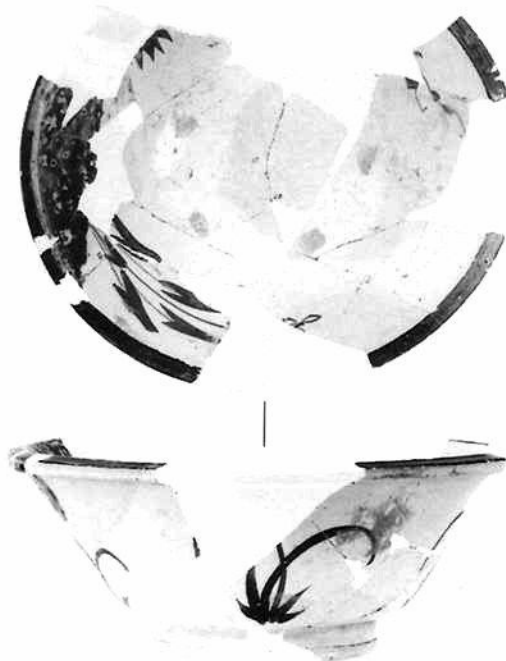


図236 近世瀬戸美濃風鉢(口径 23.6cm)

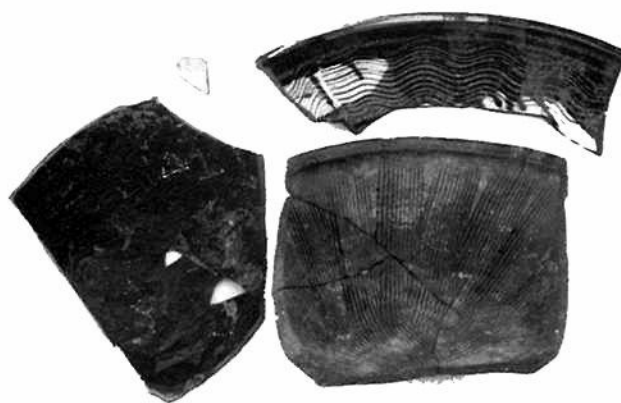
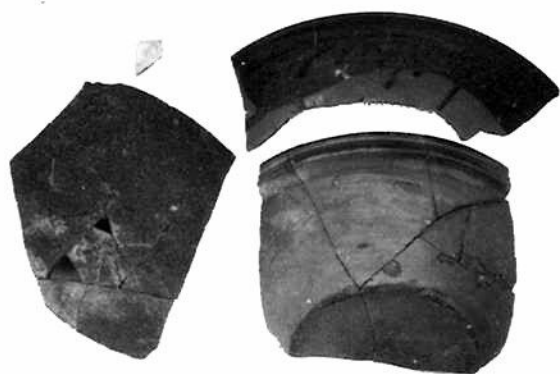


図237 H-1区上層内出土陶磁器(碗・甕・刷毛目唐津鉢・摺鉢) 17c 後半~18c 前半
(外面)

(内面)

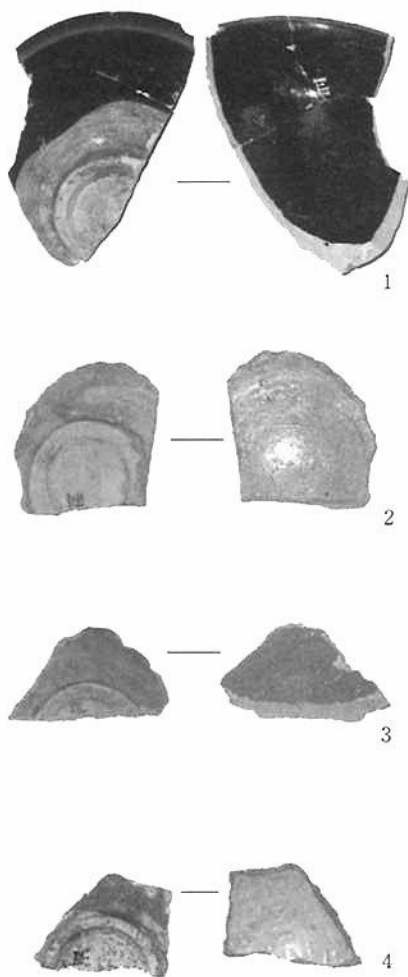


图238 H-12区 2·3層内出土
陶器(天目茶碗・鉢)



图239 H-6区 SK11内出土
陶磁器·瓦器 (上)外面、(下)内面

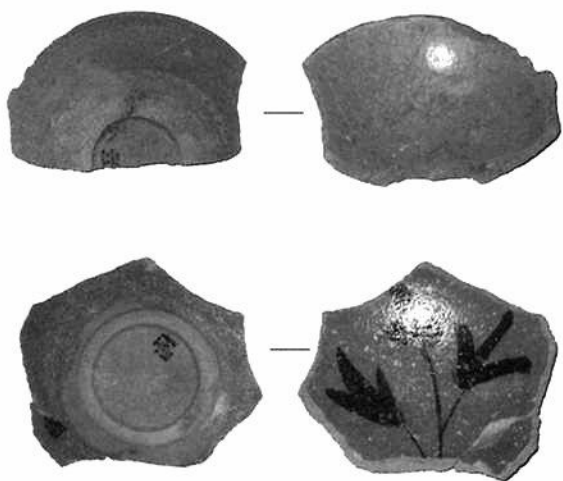


图240 H-12区 第2·3層内出土陶器(唐津鉢)



图241 H-9区近世有孔木製品(1/2)

10. I地区

1. はじめに

調査地は東大阪市若江南町二丁目にあり、東大阪市立若江小学校南門から南へ二本目の筋約58.3m²で東西に走り、鏡神社の裏側の南北の道路にT字形に通じる。調査はE地区と同様に区割りをし、15区間に分けて西側から実施した(図242)。調査期間は1965年8月21日～10月17日である。江戸時代の「村絵図」によると、「田地」になっており、東端は鏡神社の周囲を巡る「井路川」と「道筋」が描

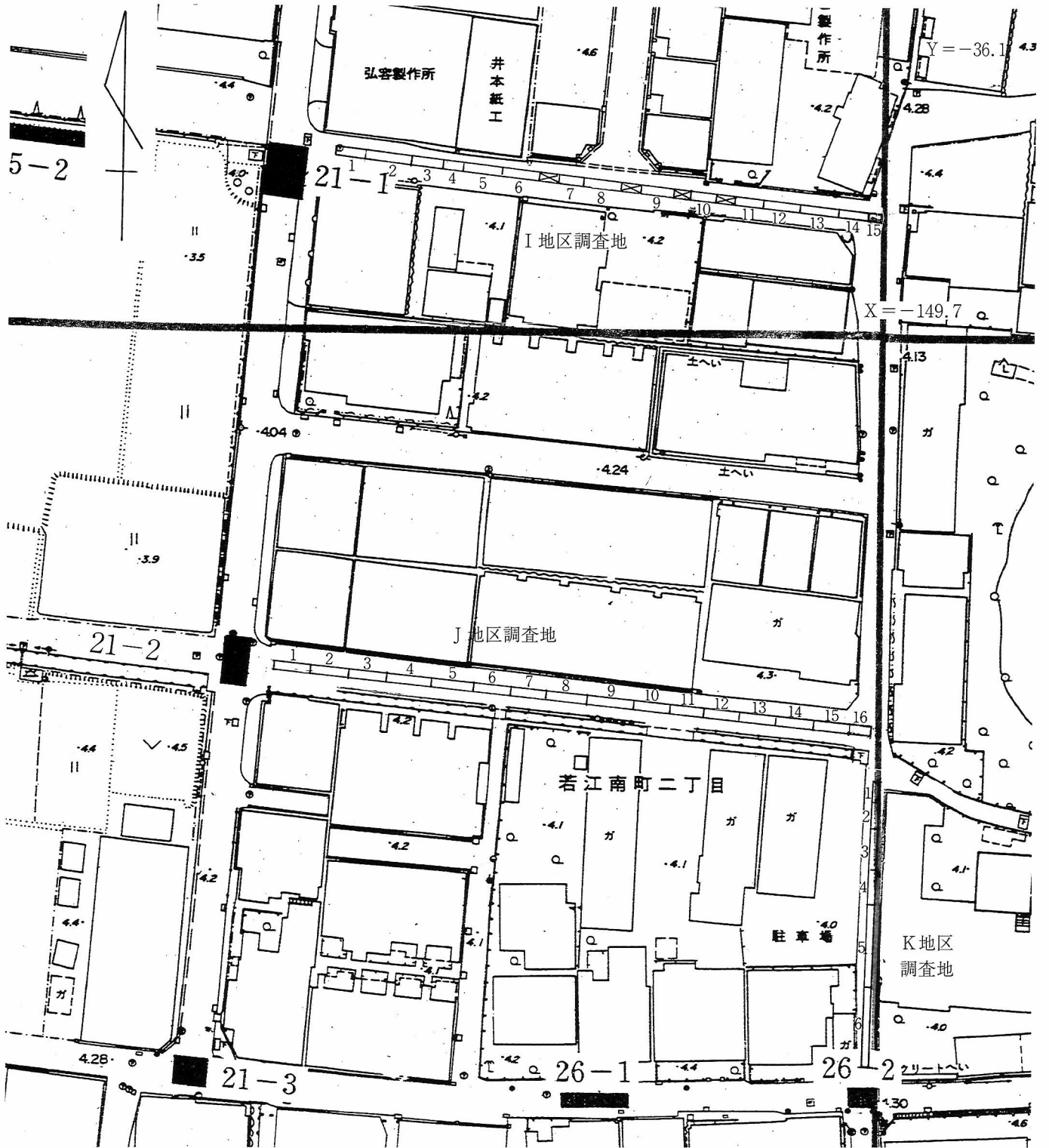


図242 I・J・K地区割図(S=1/600)及び第21次、第26次調査地

かれている地点に当たる。地表面から深度1.2m (T.P.約3.35~1.15)までは、旧管の埋設で攪乱されている為、それを機械で除去しながらその下部の調査を人力で行った。旧管の除去の際の出水などで調査は難行した。また旧管による攪乱で調査不可能の地点が何箇所もあった。この地区は下層までグライ化した土で後背湿地状の堆積層がみられた。中世~近世の旧河道のほかに主な遺構として瓦溜まり、石溜まり、堰、杭、旧耕作土を検出した。遺物は完形の土師器をはじめとする中世の遺物が多く出土した。調査地の西側は1980年の第21次調査で南北の交差点内約16.2m²が行われている(第12ピット)⁽⁴⁾。この調査では室町時代前半~中葉の溝4から、土師器、須恵器、陶磁器、瓦、弥生時代後期の溝から甕、壺、弥生時代後期以前の足跡が検出されている。また調査区の北西にあたる共同住宅建設地の1988年の第35次調査では江戸時代の井戸2基、溝4条、室町時代の井戸4基、溝13条、弥生時代後期の水田畦畔が検出されている⁽⁵⁾。

2. 層序

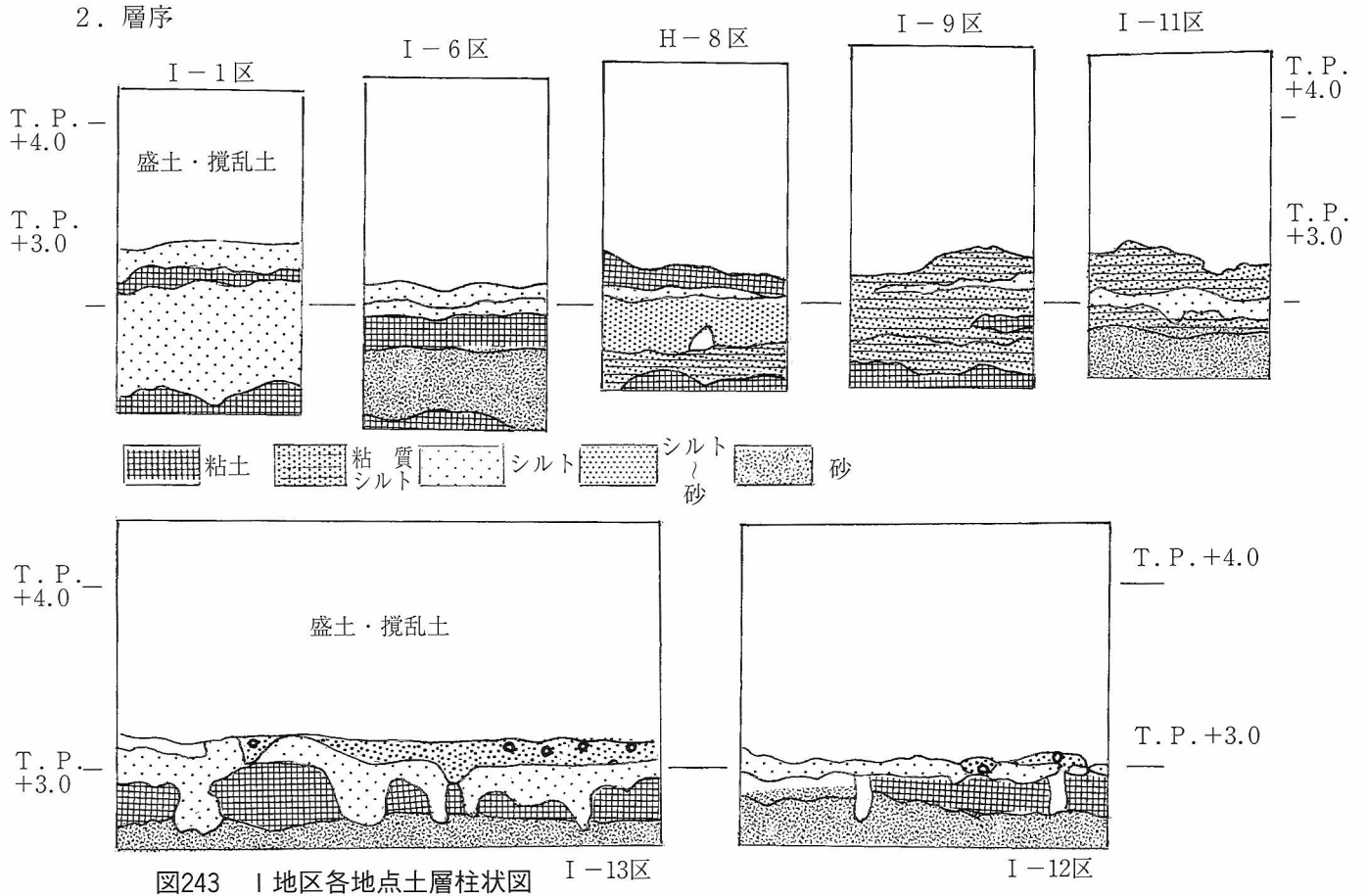


図244 I-1区中世~近世溝土層断面

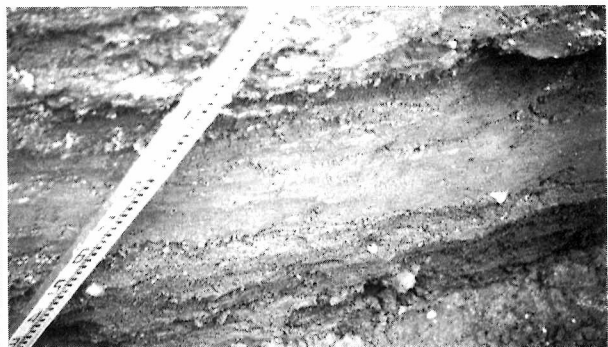


図245 I-6区中世河道砂層断面

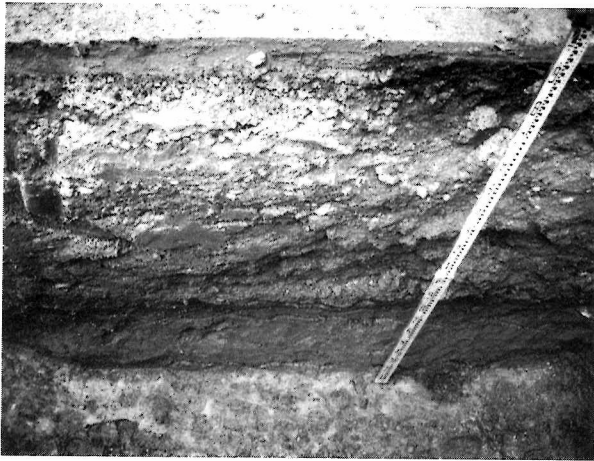


図246 I-8区中世河道土層断面

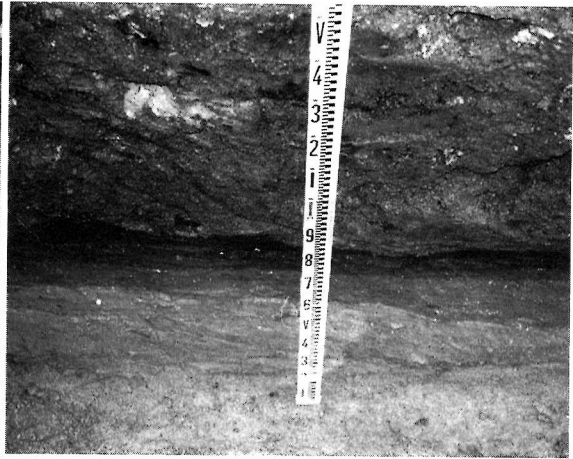


図247 I-11区中世河道土層断面



図248 I-12区中世耕作土、河道土層断面



図249 I-15区近世杭検出状況

3. 遺構と遺物

1) 弥生時代

〈遺物〉旧河道の砂層内から、I-2区で中期の壺の口縁部、I-4区で底部、I-7区で壺底部、高杯の脚部が出土した。

2) 古代

〈遺物〉中世の遺物に混じって須恵器、土師器の小破片が出土した。I-4区で錢貨元祐通宝(1086年初鑄造)、I-12地点では錢貨照寧通宝(1068年初鑄造)が出土した。

3) 中世～近世

〈旧河道〉第21次調査の溝4がそのまま東に続き、調査地区の下位に中～近世の旧河道の堆積層の上面(T.P.約2.6～2.45)が調査区の東端までみられる。埋土内から中世の遺物が土師器皿の完形品をはじめとして多量に出土した。下位は粘土層と砂層の交互層で、その上は粗粒砂混じりの細砂の堆積層がみられた。

〈瓦・石溜まり〉I-3・4・16区で瓦溜まり(T.P.約3.05～2.9)、I-7区で石溜まり(T.P.約2.7～2.5)を砂層の上で検出した。下位の旧河道の足場と考えられる。

〈旧耕作土〉I-10区の砂層の上で土壌の色が真ん中で南北にはっきりわかる面(T.P.約3.2～3.0)を東西に3mに渡って検出した。北側は酸化鉄による赤黄褐色土で南側は還元による青色土を呈する。この地点より西側は還元土のみになる。島畑と水田状遺構が考えられる。

〈杭〉 I-12～I-15区の間で杭及び杭跡がみられた。

〈堰〉 I-16区で板と杭による堰状遺構を検出した。鏡神社の周溝「井路川」からの溢水を防ぐためのものと考えられる。

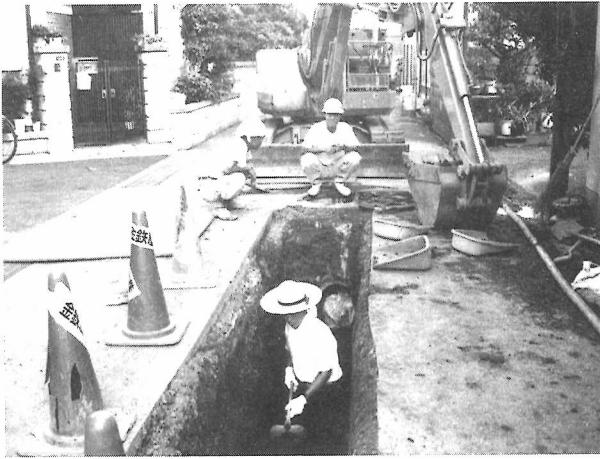


図250 I区調査風景



図251 I-3区中世河道内土師器出土状況



図252 I-3区中世河道上層内瓦積出土状況



図253 I-7区中世河道内石溜り出土状況



図254 I-16区近世石・瓦溜出土状況

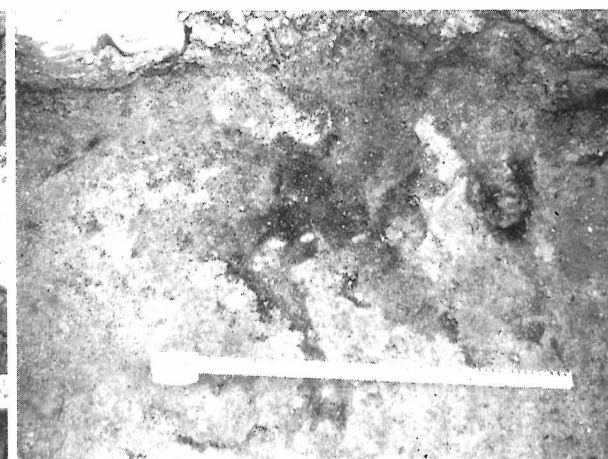


図255 I-14区近世焼土出土状況



図256(左)

I-16区近世杭検出状況

図257(右上)

I-16区近世堰状遺構検出状況

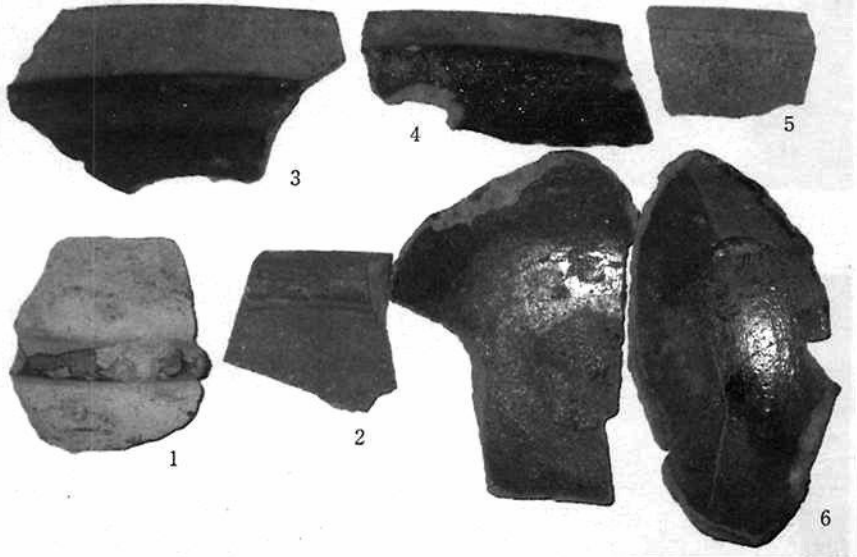


図258の(6)柿釉灯明皿は片方がI-16区もう片方がE-16区の粘土層から出土。

図258 I地区出土中世河道内出土(1・2)、近世(3~6)

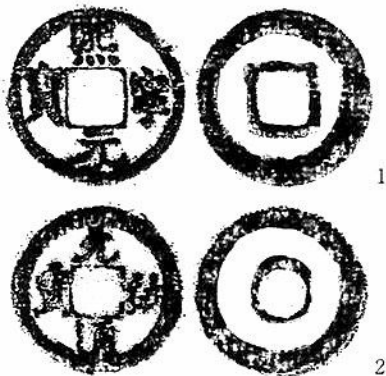


図259 I地区出土銭貨

1. I-12区中世河道下層内出土「照寧元宝」、2. I-4区中世河道上層内出土「元裕通宝」



図260 I-4区中世河道下層内出土土師器皿(内面に記号風刻印あり)

〈遺物〉

旧河道から15～16世紀代の土師器（羽釜、皿）、瓦質土器（摺り鉢、甕）、瓦、宝篋印塔が出土している。上層から土師器（羽釜）、瓦質土器（甕、鍋、火舎）、陶器（天目茶碗）、磁器（碗・杯・仏飯）、道具瓦、木製の下駄などが出土している。

また多量に出土した土師器皿はほとんどに煤がつき、灯明皿としてつかわれていたものである。法量、形態、胎土で分類してみる。

法量では1（7.5cm以下）、2（7.6～8.5cm）、3（8.6～10.5cm）、4（10.5～14.5cm）で分けられる。圧倒的に2・3の大きさの皿のものが多く。形態では

A内面の底面が盛り上がる「ヘソ皿」

B「ヘソ皿」風のもの

C内面底面は平らで体部との境界がはっきりするもの

D内面底面から体部にかけてなだらかに立ち上がるものに分けられる。

胎土は白色系のものと、褐色系のものが見られるが後者のものが多い。



図261 Ⅰ-5区中世河道内出土宝篋印塔

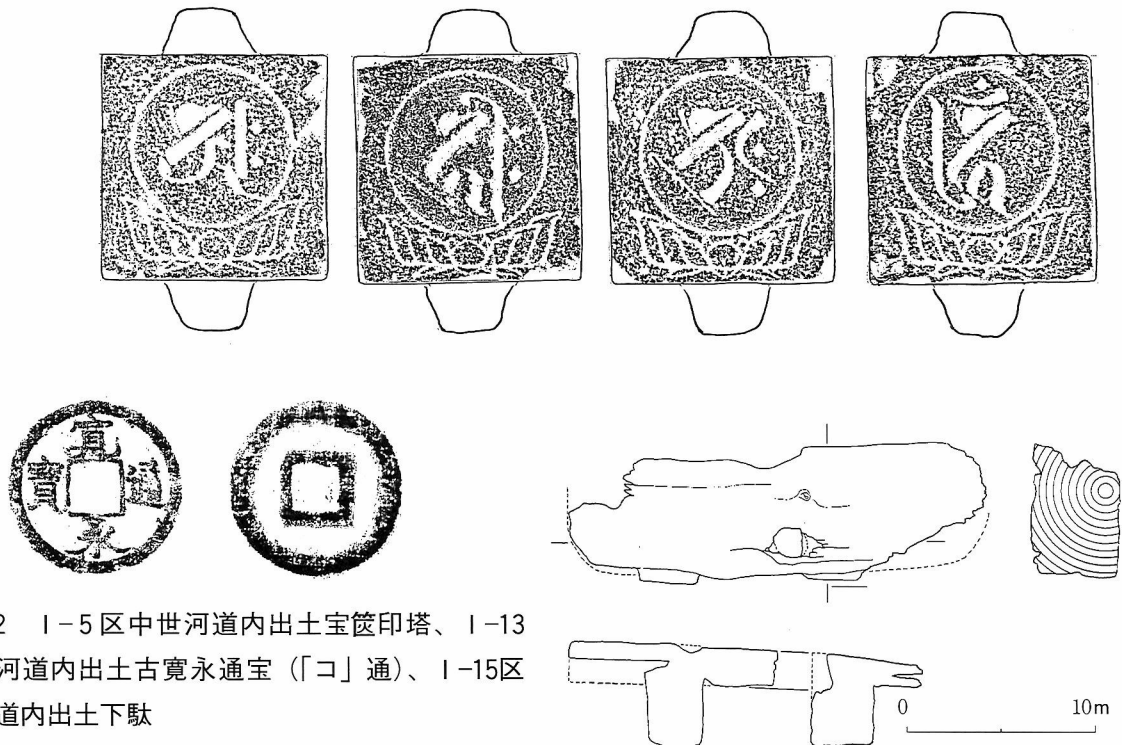


図262 Ⅰ-5区中世河道内出土宝篋印塔、Ⅰ-13区旧河道内出土古寛永通宝（「コ」通）、Ⅰ-15区旧河道内出土下駄

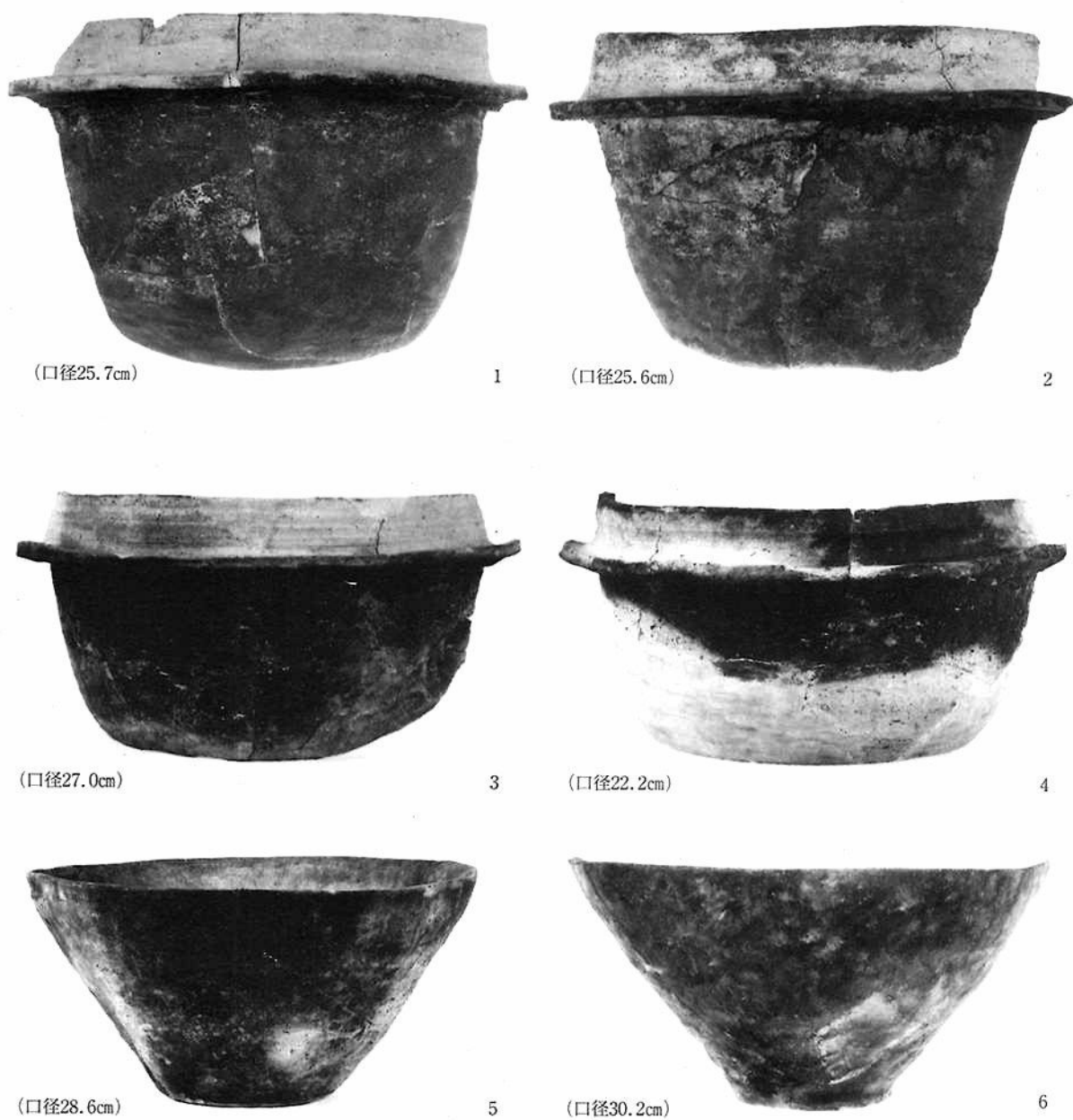


图263 1-5 中世河道下層内出土 1·3·4. 羽釜、5·6. 瓦質摺鉢、河道上層内出土層、2. 羽釜



图264 I 地区中世河道下層内出土瓦質土器

图265 I 地区中世河道上層内出土瓦質土器

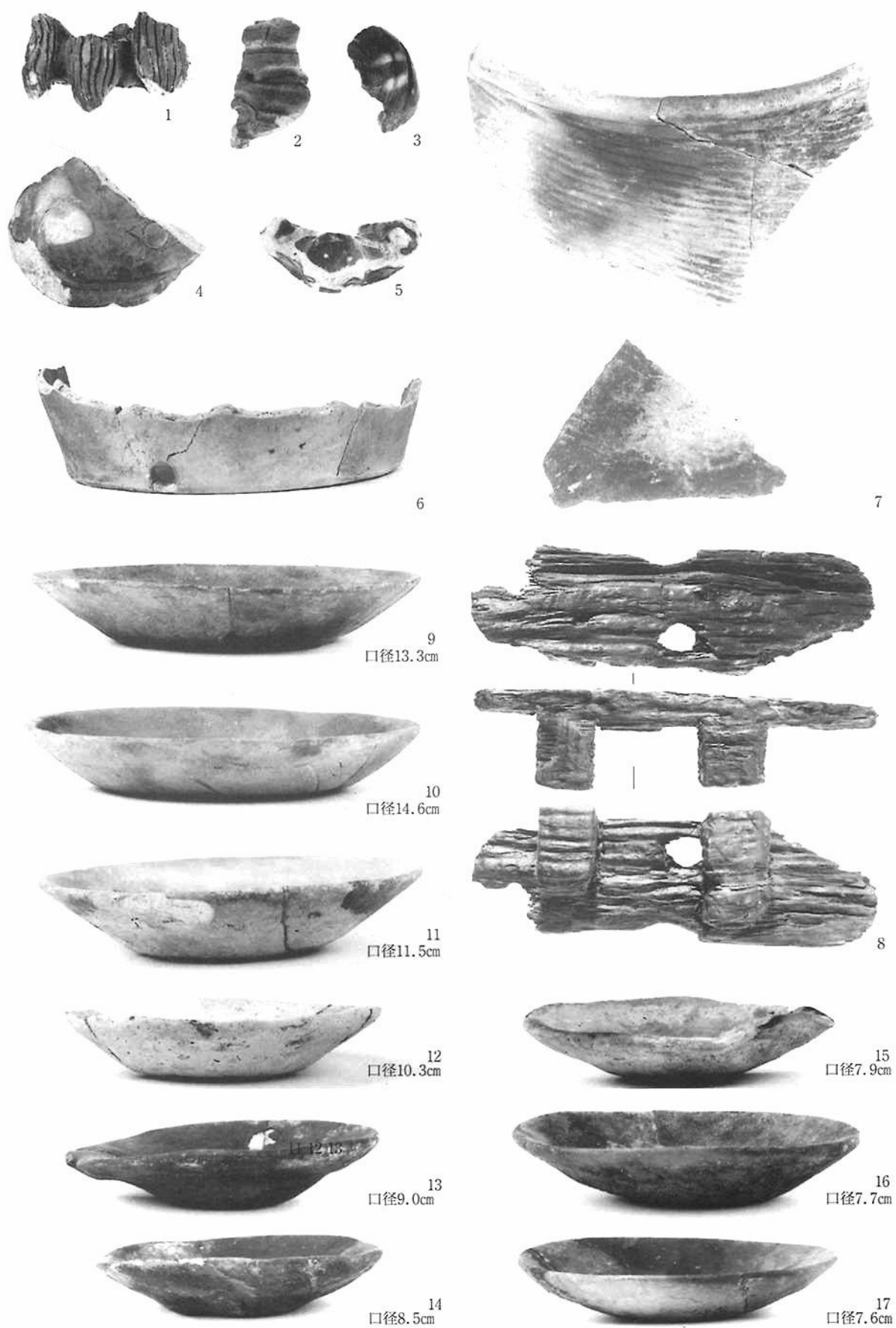


图266 I地区中世河道内出土 1~5. 道具瓦、6. 瓦質水甕、7. 甕、8. 下駄木製品、9~17. 土師器皿

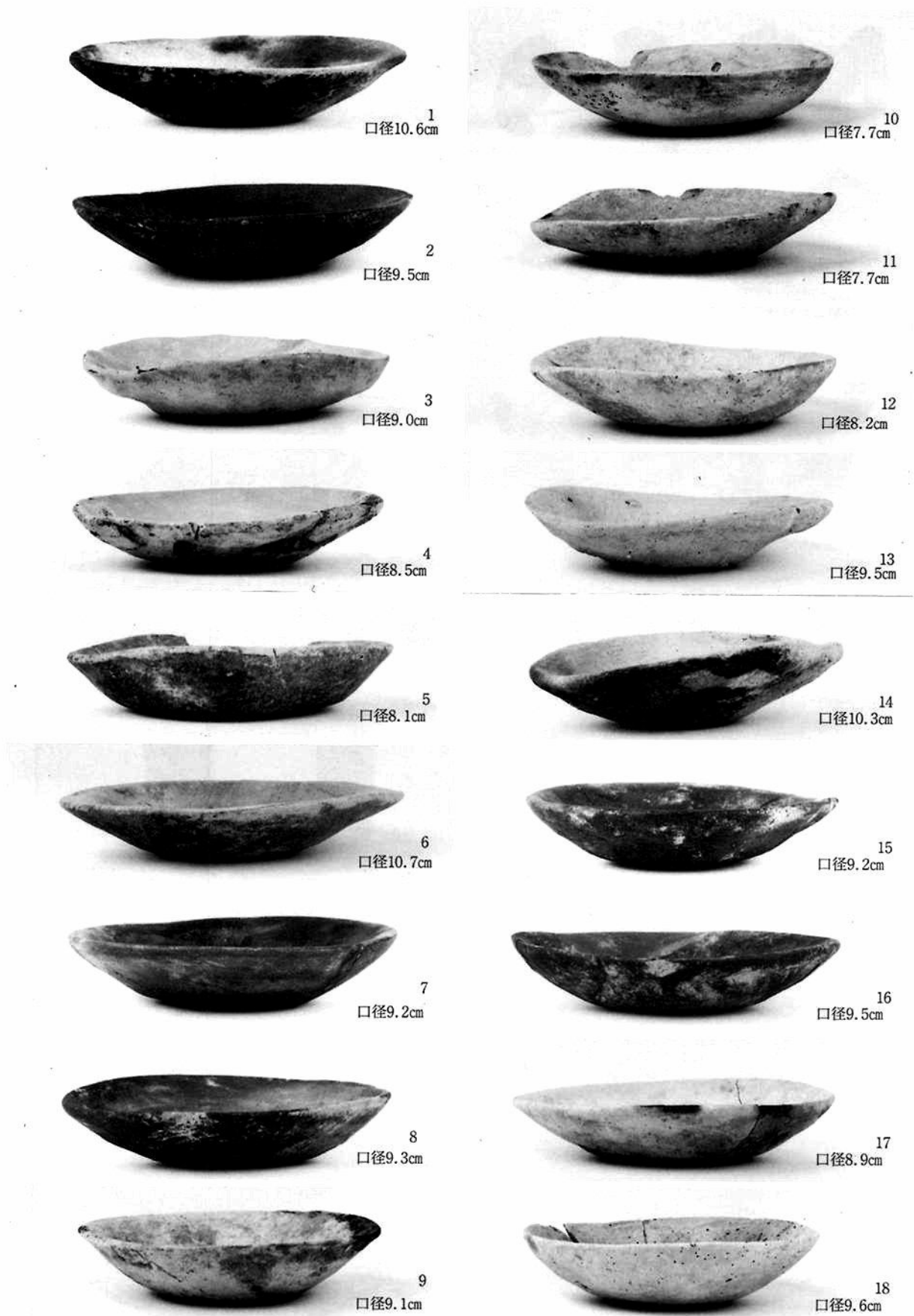


图267 I地区中世河道内出土土師器皿

11. J地区

1. はじめに

調査地は東大阪市若江南2丁目内にあり、東大阪市若江小学校南門から南へ三本目の筋で東に入る、鏡神社の南側の道路に通じる幅約3.5mの道路である。下水道埋設の管路、人孔部、約64㎡を盛り土及び攪乱土0.5mは機械掘削、以下1.6mは人力掘削により調査をした。調査期間は1995年6月5日～7月27日である。調査はE地区と同様に区割りし、16区間に分けて西側から実施した(図242)。この地区は鏡神社の真裏に当たる。調査時には調査地区の南に道路と平行して流れる幅1.5mの水路があったが、この水路は鏡神社の周囲を巡る溝に通じており、調査終了後に暗渠工事が行われた。調査地は下層に弥生時代の遺物を含む旧河道の堆積層がみられ、江戸時代の絵図によると、鏡神社の周囲を巡る溝と南北に流れていた旧河道の間に位置する低湿地にあたる。調査でも旧河道の氾濫による自然堤防や、絵地図に描かれていないが旧河道砂層の堆積状況がみられた。主な遺構は近世のものが多く旧河道のバラスや瓦による土手補強の設備、耕土、溝などである。本調査区の西側の南北道路との交差する地点の約15㎡がこの下水管渠築造工事に先だって1980年度の第21次調査で行われており(第13ピット1981年概報)、室町時代前半から中葉と中葉以後に埋まった土坑3基が検出され、遺物は土師器、須恵器、瓦、弥生土器等が出土している⁽⁶⁾。

2. 層序

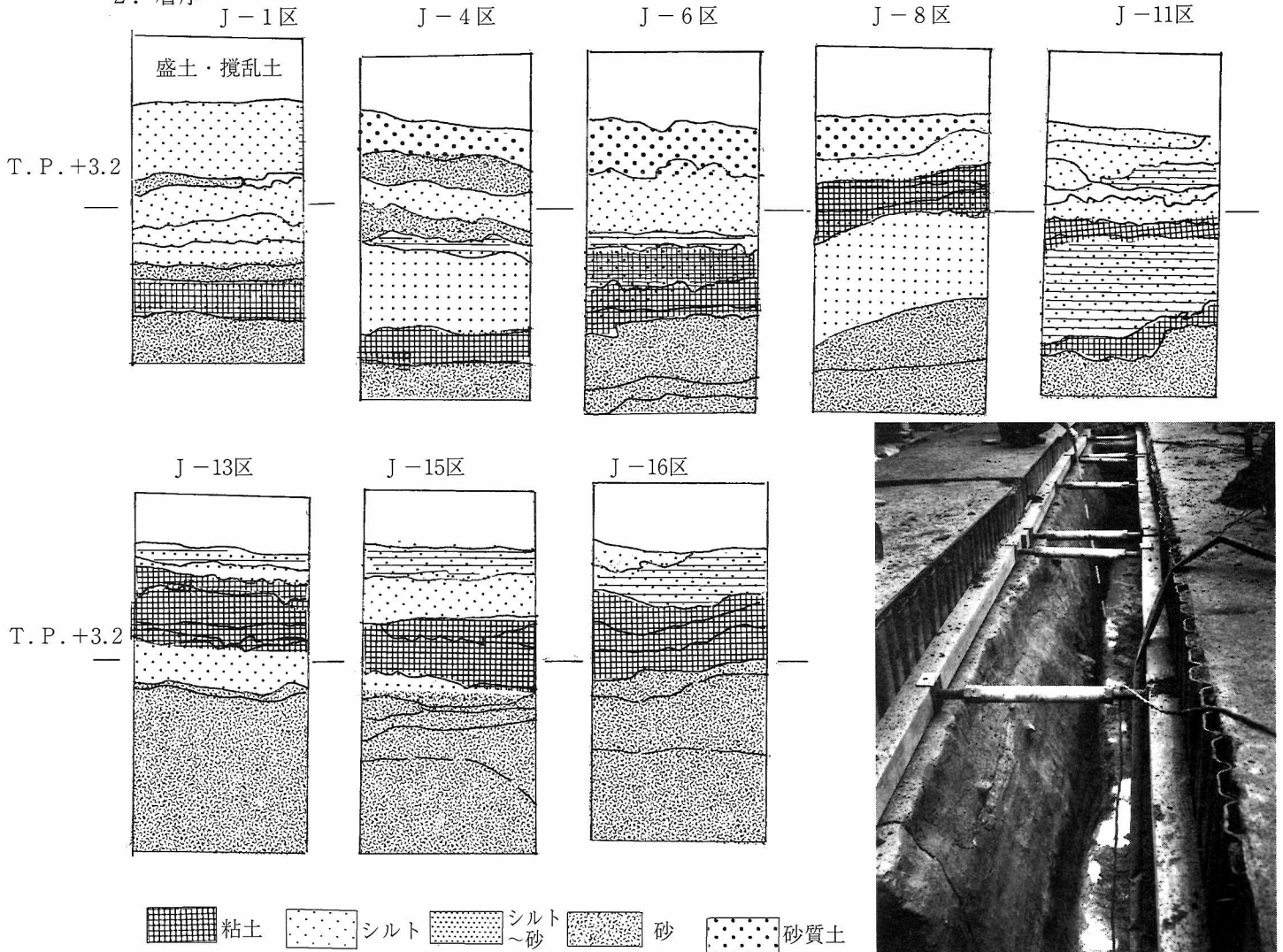


図268 J地区各地点土層柱状図 (1/40)

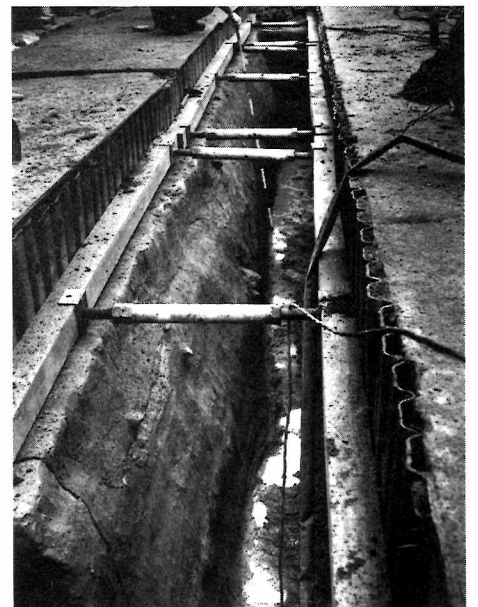


図269 J-1区調査区

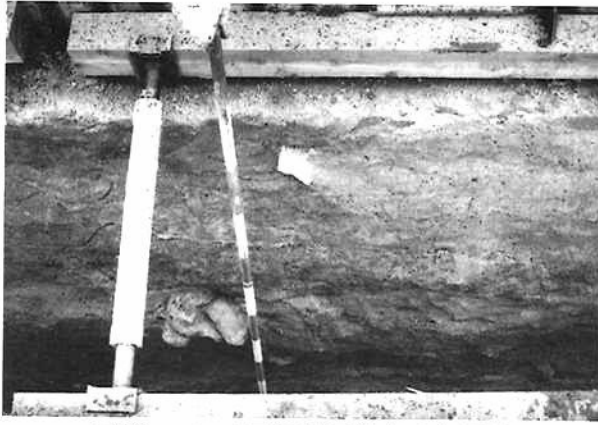


图270 J-1区近世河道土手土層断面

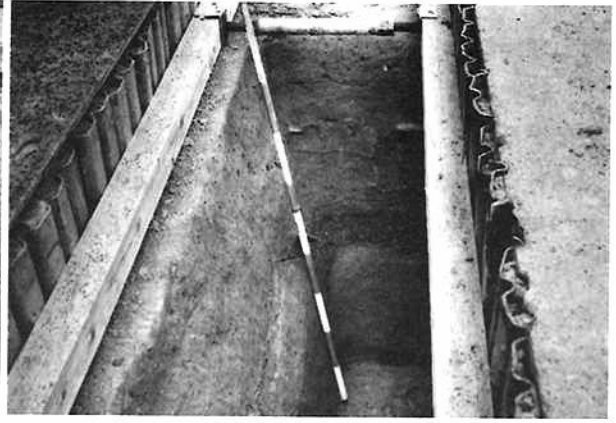


图271 J-1区近世河道土層断面

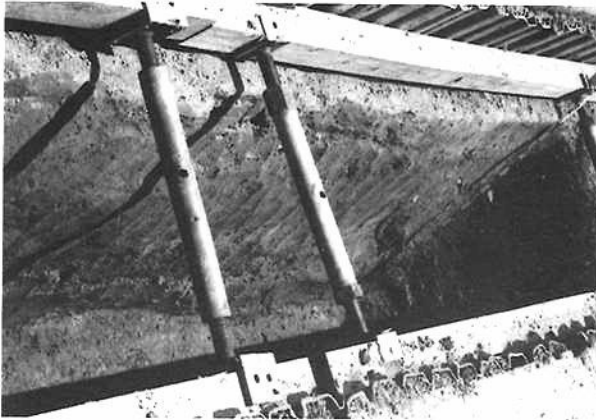


图272 J-2・3区近世土層断面

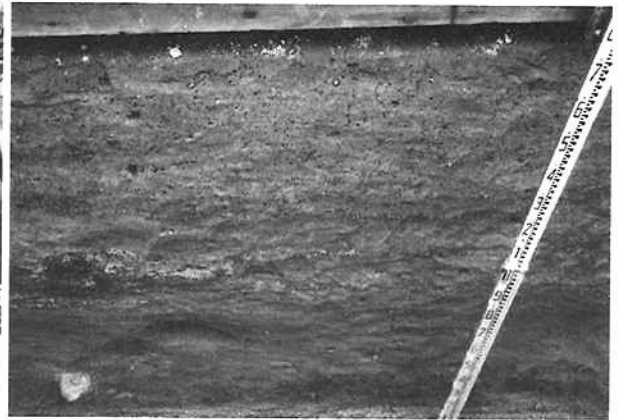


图273 J-3区近世河道土層断面

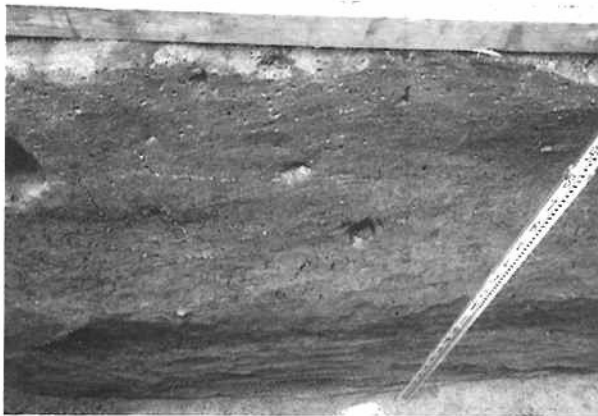


图274 J-5区中世~近世土層断面

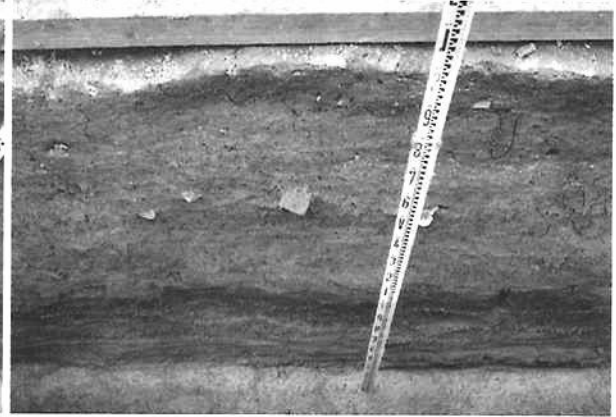


图275 J-6・7区中世~近世土層断面



图276 J-8区弥生時代中期以降河道、
近世土層断面



图277 J-11区弥生時代中期以降
河道土層断面



图278 J-12区近世河道、耕作土層断面

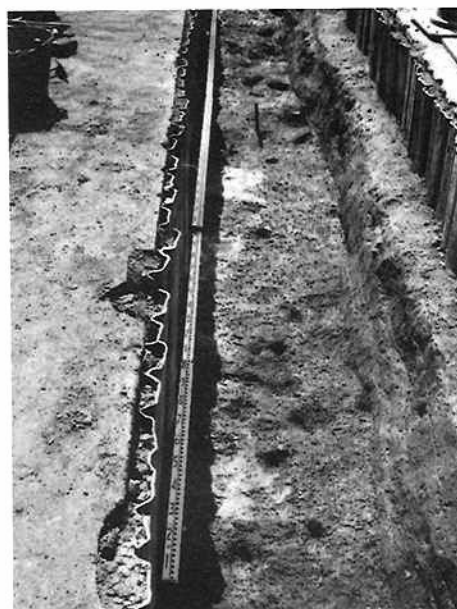


图279 J-14区近世耕作土内凹み検出状況



图280 J-14区近世河道、耕作土層断面

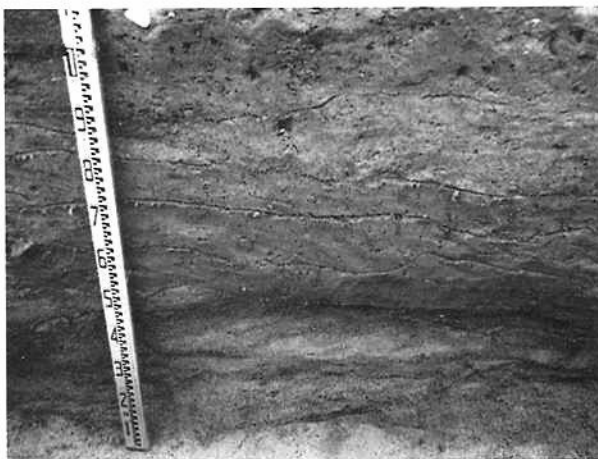


图281 J-14区近世河道土層断面



图282 J-15区近世耕作土層断面



图283 J-16区近世河道、溝土層断面

3. 遺構と遺物

1) 弥生時代

〈旧河道〉 J-8区からJ-10区にかけて弥生時代の遺物を含む砂レキ、砂、シルトの堆積層による旧河道1 (T.P.約3.0~2.8以下) を検出した。J-8区の砂層から弥生時代中期の甕が立位の状態で出土した。J-10区の粘土層からは弥生時代後期の長頸壺の口縁部、甕の底部、その他弥生時代の時期不明の破片が出土した(図284・286)。弥生時代中期以降の旧河道の堆積層はJ-8~J-10区にみられるが、両側の河道上面は近世の旧河道で削られている。



図284 J-8区弥生時代中期以降~河道内弥生土器出土状況



図285 J-7区弥生時代中期以降~近世土層断面

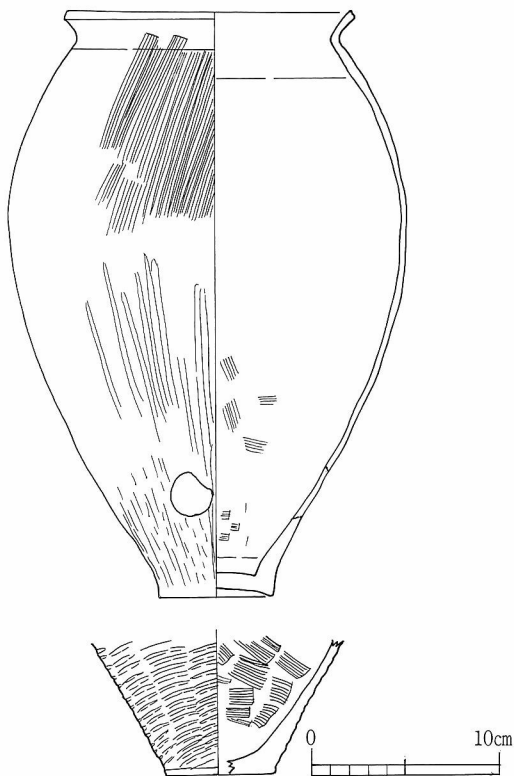


図286 J-8区弥生時代中期以降河道内出土甕



図287 J地区発掘調査風景

2) 古墳～中世

〈遺物〉近世の遺物に混じって各時期の小破片が出土している。

3) 近世

〈旧河道〉この地区の下層全体に近世の砂の堆積層がみられる。J-1～J-5区にかけては下層の旧河道2の上に小規模な旧河道3の堆積層がみられた。旧河道2 (T.P.約3.9～3.0) は中レキ～砂・シルトが堆積し、薄層の粘土を挟む地点がみられる。堆積層は上方細粒化を示し、東側ではラミナがみとめられ、地層が平面的に連続している。場所により植物遺体を含む。旧河道3の西側のJ-2区では砂やレキを盛土し、バラス (泥岩、砂岩など) を撒きその上に瓦や石 (斑れい岩、花こう岩、粗粒花こう岩、ひん岩など) を敷くなど土手状の遺構がみられた。J-1地点にかけて自然堤防のシルトと粗、中～細粒砂の堆積がみられる。東側の土手状の堆積層ははっきりしないが、J-6区に瓦溜りがみられた。下位の西側には粗粒～極粗粒砂、東側には細レキ～中粒砂が堆積し、その間にリップル状の細砂を挟み上方に極細砂～シルト層が重なる。近世の陶磁器が出土した。

〈旧耕作土〉J-6区の上位は粘土層、シルトと粗粒砂の互層、シルトと細粒砂の薄互層、団子状の砂、層厚が薄く幅の狭い砂を挟む層など後背湿地状の堆積がみられた。この堆積層を耕作土 (T.P.約3.5～3.2) に利用したと考えられる。旧耕作土のすぐ下位には厚い粘土層及び粘質シルト、シルト層が堆積している。その上にJ-6区の東半分からJ-9区、J-11区、J-13区では層厚10cmの粘土層の床土が形成されている。またその間のJ-6～J-14区には島畑の耕土層が2～3層重なる。J-14区から東側の地点も旧耕作土層の堆積がみられるが溝、足跡また近代の穴を検出した。旧耕作土層の各地点からは杭、杭跡が多く検出された。中世の遺物を若干含むがほとんど近世のものが出土している。

〈溝〉溝状遺構はJ-14区で検出したもので、下位は緑黒色中レキから粗粒砂混じり細砂～シルト層で杭と足跡状の窪みがあり黄褐色砂が埋まっていた。上位の埋土は黒褐色粗粒砂混じりシルトである。

〈杭跡〉J-16区で盛り土のすぐ下層には杭、杭跡が無規則にみられ、旧河道3のすぐ東のJ-6地点から円状を呈する杭跡 (T.P.約3.5) を検出した。近世から近代の杭と考えられる。

〈堤状遺構〉J-16区は斜めに堆積する台地状の高まり (T.P.約3.1) がみられた。鏡神社の周囲を巡っていた「井路川」の土手と考えられる。

4) 近代

〈土管〉表土下の攪乱の下層は細砂～シルトの堆積で南側の水路の土手道にあたる。J-6区から、北側の後背湿地に造成された水田の排水用の暗渠と考えられる土管 (T.P.約3.4) を検出した。

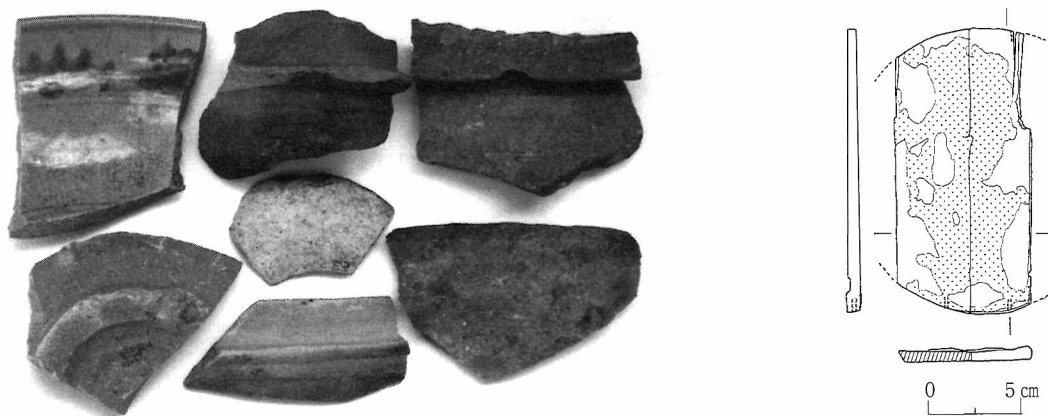


図288 J-5区近世耕作土層内出土 羽釜、土師皿、J-1区旧河道内出土 陶磁鉢、焙烙、火舎、陶器甕、曲物底板



図289 J-1区近世土坑検出状況



図290 J-1区近世旧河道3の土手



図291 J-3・4区近世耕作土内凹み検出状況



図292 J-1区近世畦状遺構



図293 J-5・6区近世耕作土内杭跡検出状況



図294 J-3区近世 河道3上層内瓦・石出土状況



図295 J-8区近世瓦溜り検出状況



図298 J-9区近世杭検出状況



図296 J-14区近世耕作土内凹み検出状況



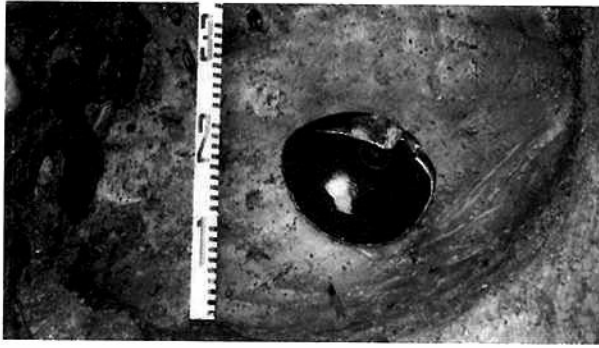
図299 J-15区近世落ち込み検出状況



図297 J-16区近世土手状遺構と杭検出状況



図300 J-16区近世溝底面



1



2



3

图301 (上) J-5区近世河道内漆器碗出土状况 1. J-8区弥生时代中期以降河道内出土弥生时代甕(口径14.9cm)、2.漆器碗(口径13.6cm)、3. J-3区近世河道内出土肥前陶器(口径14.0cm)

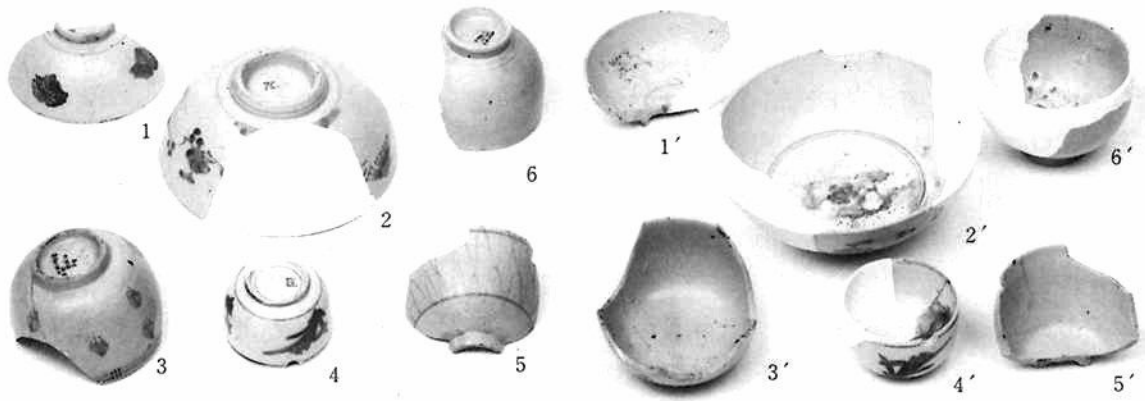
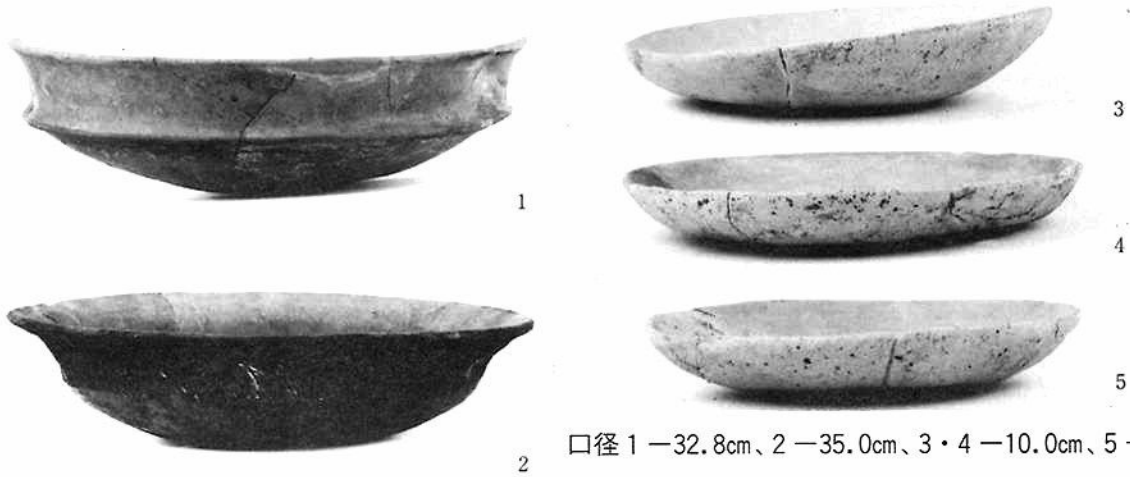


图302 J地区近世耕作土層内出土染付磁器(1~5)、陶器(6)、(左)外面、(右)内面
口径 1—9.8cm、2—16.6cm、3—9.4cm、4—8.6cm、5—9.6cm、6—9.8cm



口径 1—32.8cm、2—35.0cm、3·4—10.0cm、5—7.6cm

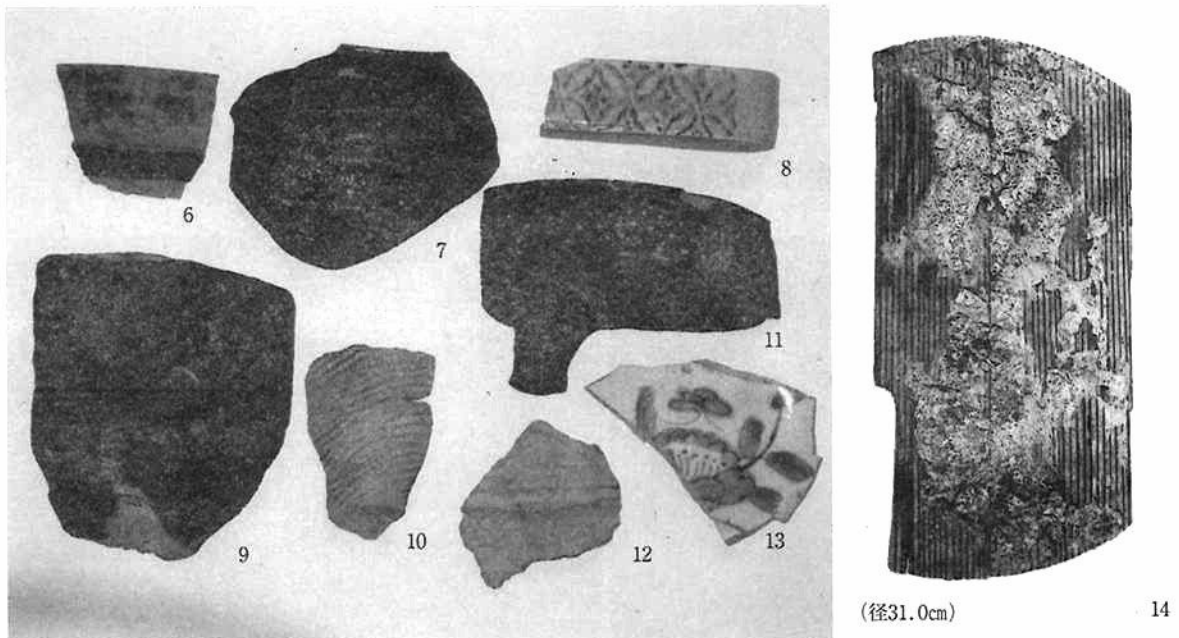


图303 J-1区河道2土手内出土、7.備前烧壺、J-3区近世旧河道3土層内出土、11.瓦質香炉、J-4·5区近世耕作土内出土 1.焙烙、3~5.土師皿、J-6区近世土層内出土 6.焙烙、9.火舎、13.染付磁器、J-7区河道上層内出土 12.埴輪片 口径 7—9.4cm、8—11.4cm、11—16.8cm、底径 10—5.8cm

12. K 地区

1. はじめに

この地区はJ地区の東端で「T」字型に交差する道路の南側へおれる部分35m²である（図242）。調査はE地区と同様に6地区に区割りをし北側から実施した。調査期間は1995年7月28日～8月11日である。江戸時代の村絵図によると、鏡神社裏を南北に通る道－旧十三街道に通じる道筋－の鏡神社の南東の部分に当たる。また本調査地の北半分の北西と南半分の両側の地点は「村中」に描かれている。鏡神社にくらべると低地で、この道路に隣接する家主さんからも「よく洪水にあっていた」と聞く。下位にはJ地区に続くと考えられる旧河道の砂の堆積層がみられる。主な遺構は旧耕作土、溝、畦道などである。1982年の第26次調査で下水管埋設工事に先だって今回の調査地南の旧十三街道筋で3箇所が行われている。今回の調査地のすぐ南側のT字路上の約5.7m²の調査（第2ピット）では奈良時代後半～16世紀後半の土師器、羽釜、陶器等を伴う東西方向に走る溝が検出されている⁽⁷⁾。今回の調査区でも南端でこの溝の肩の一部が確認できた。

2. 層序

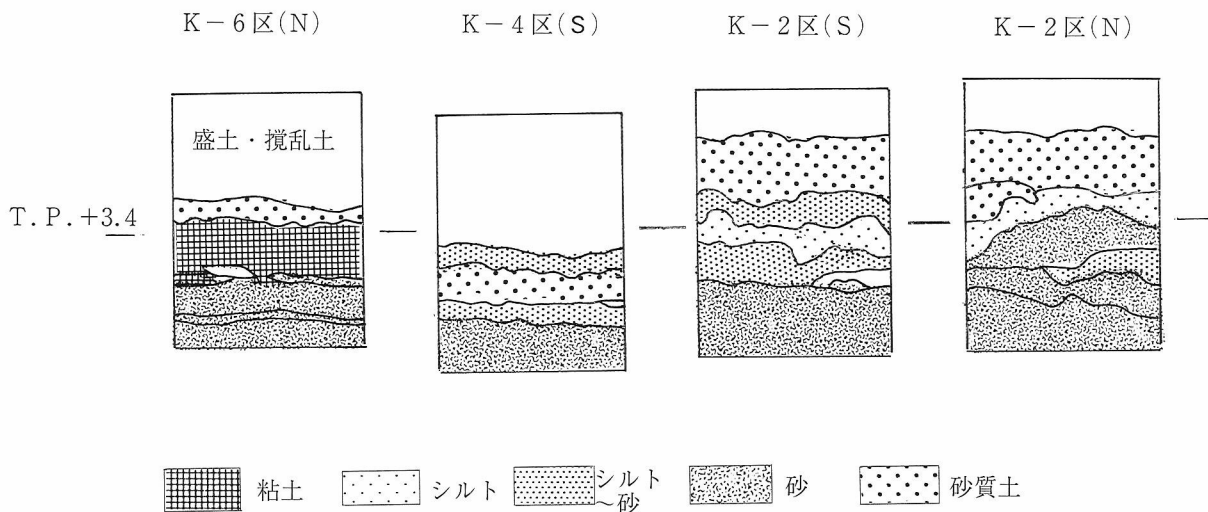


図304 K地区各地点土層柱状図 (1/40)



図305 K-2区弥生時代後期以降～河道、近世耕作土層断面(東から)

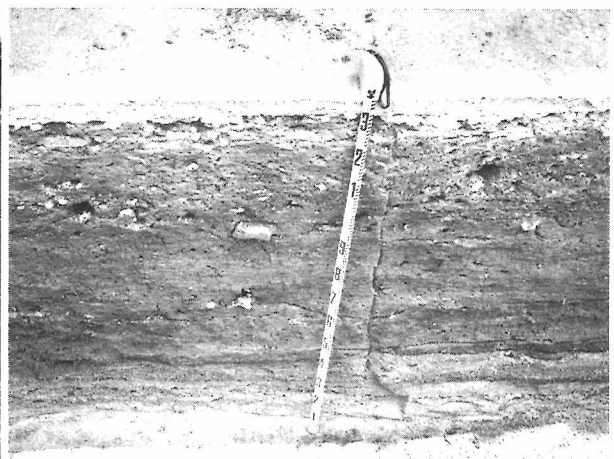


図306 同左(西から)



図307 K-3区中世以降河道、近世耕作土層断面



図308 K-4区中世以降河道近世耕作土層断面



図309 K-6区奈良時代～中世溝堆積土断面



図310 K-6区溝内軒平瓦出土状況(奈良時代前期)

3. 遺構と遺物

1) 弥生時代

〈旧河道〉調査地区の下位に粗～細粒砂の弥生時代後期以降の堆積層がみられた。砂層の間には粘質シルト層を挟む。K-6区から弥生時代の甕の破片などが出土した。

2) 古代～中世

〈溝〉1982年の第26次調査時で検出された東西に走る「溝1」の北側の肩をK-6区で検出した。中世の遺物が近世の耕作土や溝から出土した。遺物は第26次調査結果と同じく時間差があり、藤原時代の瓦をはじめ、中世の羽釜、土師皿が出土した。

3) 江戸時代

〈旧河道〉この地区は先に記したように低湿地のためか、砂層が上位の旧耕作土などの上に被っている地点が何箇所もみられた。はっきりした河道をつくらないが旧大和川の支流か氾濫による堆積層と考えられる。K-5区では瓦の集積がみられ、低湿地対策に使われたと考えられる。

〈旧耕作土〉K-2～3区までは旧河道のすぐ上に近世の旧耕作土(T.P.約3.4～3.0)と考えられる堆積層がみられた。地表面は平らではなく、砂を被る地点があり、旧耕作土層内に石、瓦、陶磁器が混じる。K-2区では同一面で西側に還元土、東側に酸化土と南北に分かれる。西側の還元土には杭跡が平行にみられた。東側の土層断面には水平に続く旧耕作土層がみられた。この地点は1942年頃の航空写真によると、耕作地として利用されていたところである。K-6S区では土層がK-2区と反対の様相を呈している。K-5～6区では下層の砂層に酸化鉄の集積部があり、上層部に旧耕作土のあったことが窺えるが溝やグライ化した未熟な堆積層が挟まれ、面的にも酸化土層と還元土層が斑状を呈する。旧耕作土を何回も手を加えたのか面的な広がりはみられなかった。

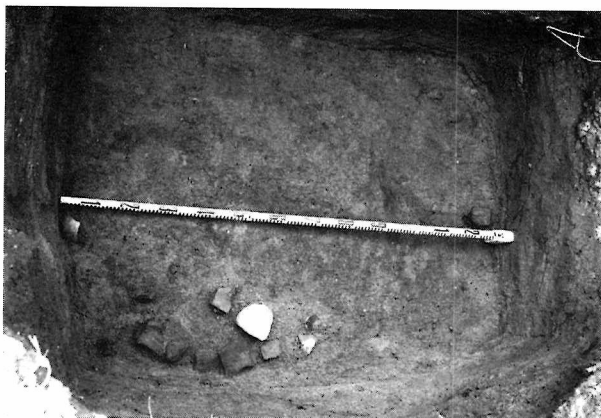


図311 K-1区中世以降砂層上面瓦片出土状況



図314 K-4区銭貸出土状況(図316拓影図)



図312 K-4・5区近世畦状遺構



図313 K-2区近世土坑検出状況

〈畦道〉 K-3区の中央で南北6 mに渡って幅40cmの畦道状の硬く締まった土層 (T. P. 約3.35~3.17) を検出した。この東西側は溝状に10cmほど落ち込む。畦道の北側から東西に敷かれた瓦質の土管を三個繋いだものを検出した。東から西に流れるように高低差がある (T. P. 約3.4~3.2)。南側はぬかるみに入った足跡状の窪みがあり、寛永通宝が裏向きになって出土した。

〈溝〉 K-6 N区の湿地状の溝には足跡が残されていた。



図315 K-2区近世耕作土層内出土土師皿
(口径 9.2cm)

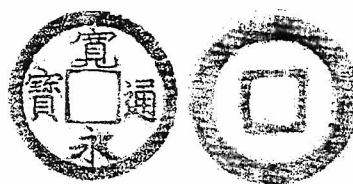


図316 K-4区近世耕作土層内出土古寛永通宝

13. L地区

1. はじめに

調査地は若江本町4丁目の美堂川筋の南北の道路から西に入る路線であるが、最初の下水管の設置の予定地が私有地にあたるため変更されて、北側の現在の暗渠の下に設置することになった。調査期間は1996年3月4日～3月18日、調査面積は63㎡である。路線のコンクリート製の暗渠の撤去と污水のかいだしに時間がかかった。調査は西側から管理設等の工事に伴い、1管路4×1m、1人孔部約1.2×1.2mの1区間毎に機械掘削で遺物の確認と、北辺か南辺の地層の断面観察をした。下位の下水管理設の管路にあたる場所は旧河道の泥および自然堤防の砂、砂混じりの堆積層がみられた。この地区は村絵図によると「田地」にあたる。



図317 L地区調査位置図(S=1/600)

2. 層序

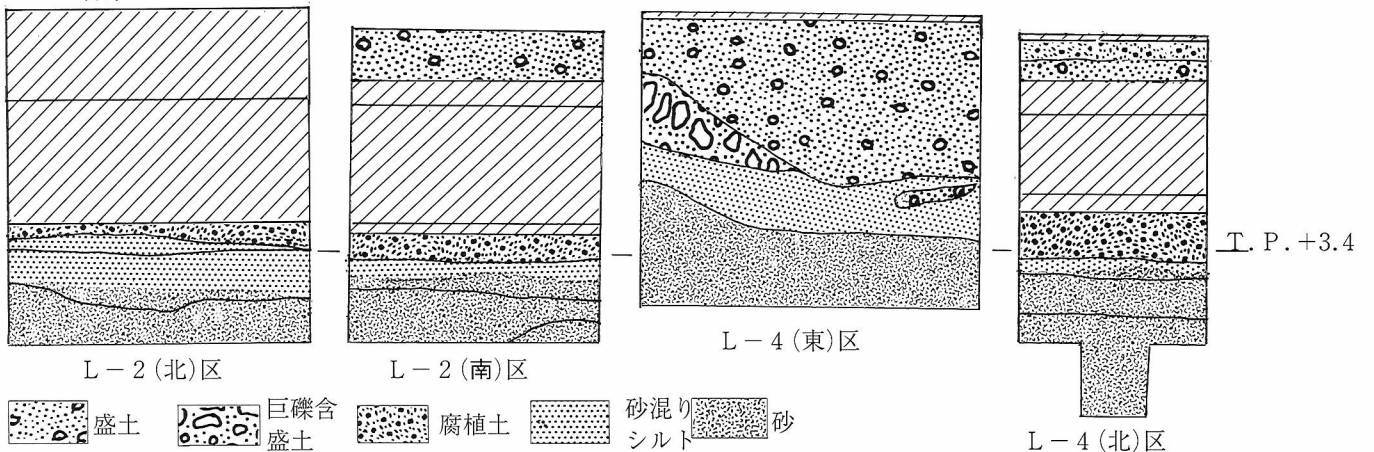


図318 L地区各地点土層柱状図(1/40)

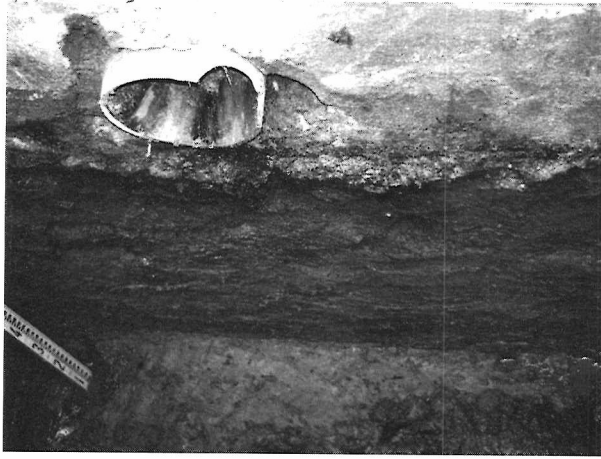


図319 L-1区西端旧河道土層断面

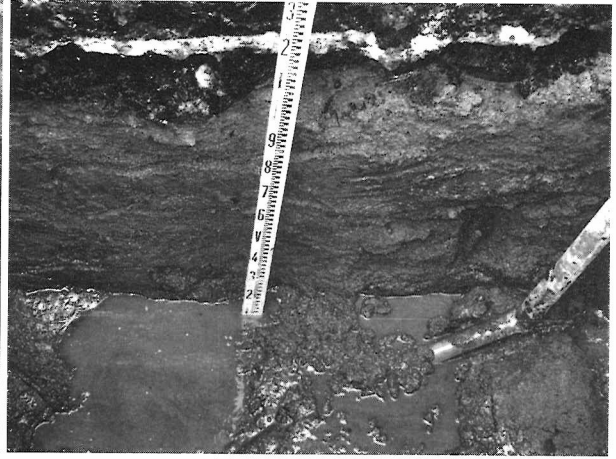


図320 L-2区旧河道土層断面



図321 L-3区東端近世旧河道土層断面



図322 L-4区近世自然堤防状土層断面

3. 遺構と遺物

1) 中世～近世

〈遺物〉暗渠の下から古墳時代の埴輪片、中世から近世の土師器、須恵器、陶磁器、瓦片が少量出土した。最下層からは中世の羽釜（図323）、土師皿が出土している。

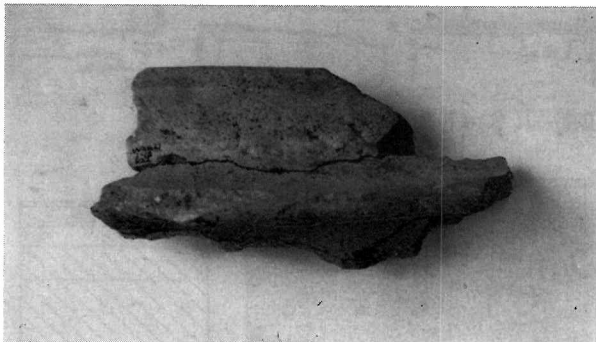


図323 L-3区東端旧河道最下層
(T.P.2.4)内出土中世羽釜

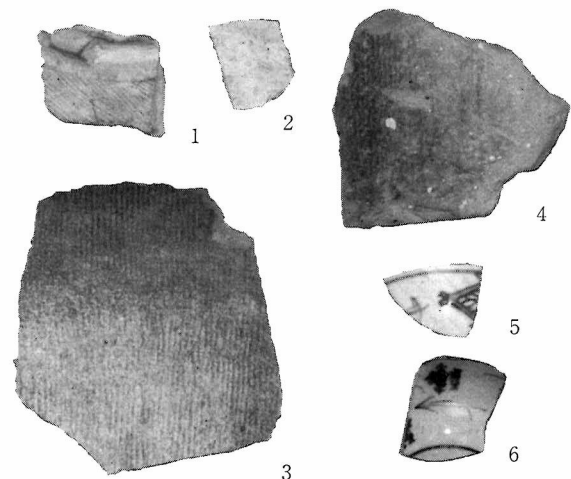


図324 L-2区旧河道2層内出土
1.埴輪、2.土師皿、
3.須恵器甕、4.平瓦
旧河道1層内出土 5・6.染付磁器

まとめ

今回、担当した調査地区は鏡神社の周辺の路線が多く、E・F・G・H地区は鏡神社の北東側の旧集落内で、I・J・K地区は西側で旧集落からはずれ、耕作地域であった(図324)。以下、時代別に確認できたことをまとめてみた。但し今年度から取り入れられた調査部、整理部の組織のなかで機能的にいろいろな欠点がみられ十分な遺物の整理を行えなかったことが悔やまれる。順当な遺物整理の報告のできる機会を望みたい。

弥生時代

I地区の北西から第35次調査で後期から庄内式期の遺物包含層、水田面が検出され⁽⁸⁾、近くに集落のあったことが予想されたが、I・J調査区の下層からは弥生時代中期の遺物を含む旧大和川の支流の痕跡と考えられる旧河道の砂の堆積層が確認できた。

古墳時代

H地区から古墳時代前期の庄内式土器を伴う旧河道を、E地区から須恵器、土師器を伴う旧耕作土層、溝を検出した。各地区から埴輪の破片の出土がみられた。

古代

遺構は検出できなかったが、G地区から白鳳時代前期の素弁葉蓮華文軒丸瓦、K地区から白鳳時代後期の複弁蓮華文軒丸瓦の破片が出土した。若江寺に関わると考えられる遺物で、第21・25次調査から類例が出土している⁽⁹⁾。

中世

若江城に直接関わる遺構は検出できなかった。E地区から中世に古墳時代の堆積層をかなり削り、手を加えて整地されたと考えられる旧耕作土層・溝、H地区からは用水状施設を検出した。また第26次調査⁽⁴⁾で検出された溝がさらにI地区にも伸び、室町時代の遺物を多量に含む溝を検出した。溝というより東西方向の水路と考えられる。

近世

各調査区の上層からは近世の耕作土、杭跡などを検出し、遺物も多量の出土をみた。調査では1677年から1704年の間に描かれたとされる「絵図」を参考にすることができた⁽¹⁰⁾。絵図によると若江城跡を巡る幅の広い用水路が東側を通り、逆L字形に流れる細い水路と合流している状況が描かれている。

今回の調査で検出したE地区の厚い板による堰き状遺構は幅の広い水路に関係し、E地区の「ハ」の字形に厚い板を渡し場状を呈する遺構は、細い水路が逆L字型に曲がる角部に関連するものと考えられる。また、E地区の堆積層は水路が南に伸び、周辺の後背湿地状を呈すると考えられる。E地区の上層、F地区の水路から出土した17世紀末～18世紀中頃を中心とする陶磁器は絵図の描かれた時期前後に相当する。F地区で近世の遺物が多量に出土した水路の中ごろで竹や木製の乱杭跡を検出した地点は、北からの水路の水流の強さや方向を変えるためのもので、「絵図」にある合流地点と考えられる。H地区で巨大レキを伴う溜め池状遺構を検出したが、「絵図」に描かれている水路の痕跡と考えられる。

以上のことから江戸時代の「絵図」の「井路川」(図325)を、今回の調査したE、F、H地区への復元を試みた(図326)。

自然堤防状の砂の堆積層や、後背湿地状の堆積層が各地区でみられ、調査区全体はいずれも各時期において旧大和川の支流の影響を受けている地であること、また旧水路の上層は調査時点も湿地帯の状況がみられたり、つい最近まで水害に悩まされた土地であることなどが窺える。若江城の周辺は「深田」であると記されているが⁽¹¹⁾、中世の頃からの耕作土や用水路の造成、洪水防御の工事跡をかい

まみることができた。またH地区において調査区が限られており全容を確認できなかったが江戸時代の水道施設の一部を検出した。

なお、今回の調査地区割り図（図46、242、317）は、上野利明「若江遺跡代29次発掘調査報告」1989年(財)東大阪市文化財協会の付図1を引用した。また実測の基準には国土産標第VI系を使い、基準点の設置は内外エンジニアリング(株)に委託した。

各地区から多量に出土した近世の遺物の整理に際しては、(財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室『北九州市埋蔵文化財調査報告書第147集国京町遺跡3-永照寺跡地(Ⅱ-2区)の調査』1994年に負うところが大きい。近世陶磁器は同書のカラー図版及び『別冊太陽古伊万里』1988年(株)平凡社のカラー図版が一目瞭然とおおいに参考になった。各地区の遺構から出土した遺物についてはさらに検討をしていかねばならないと考えている。

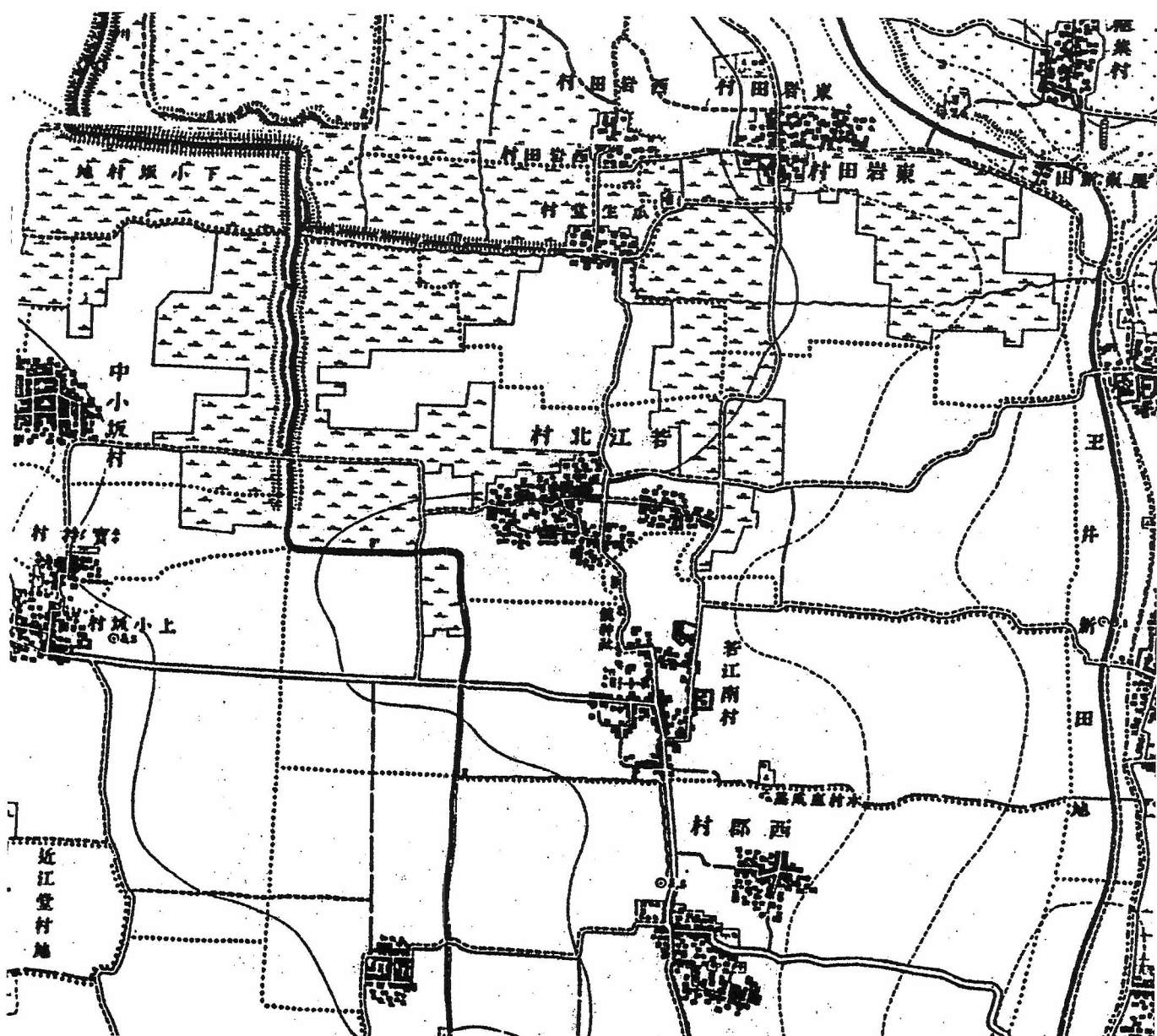


図324 明治22年の地図

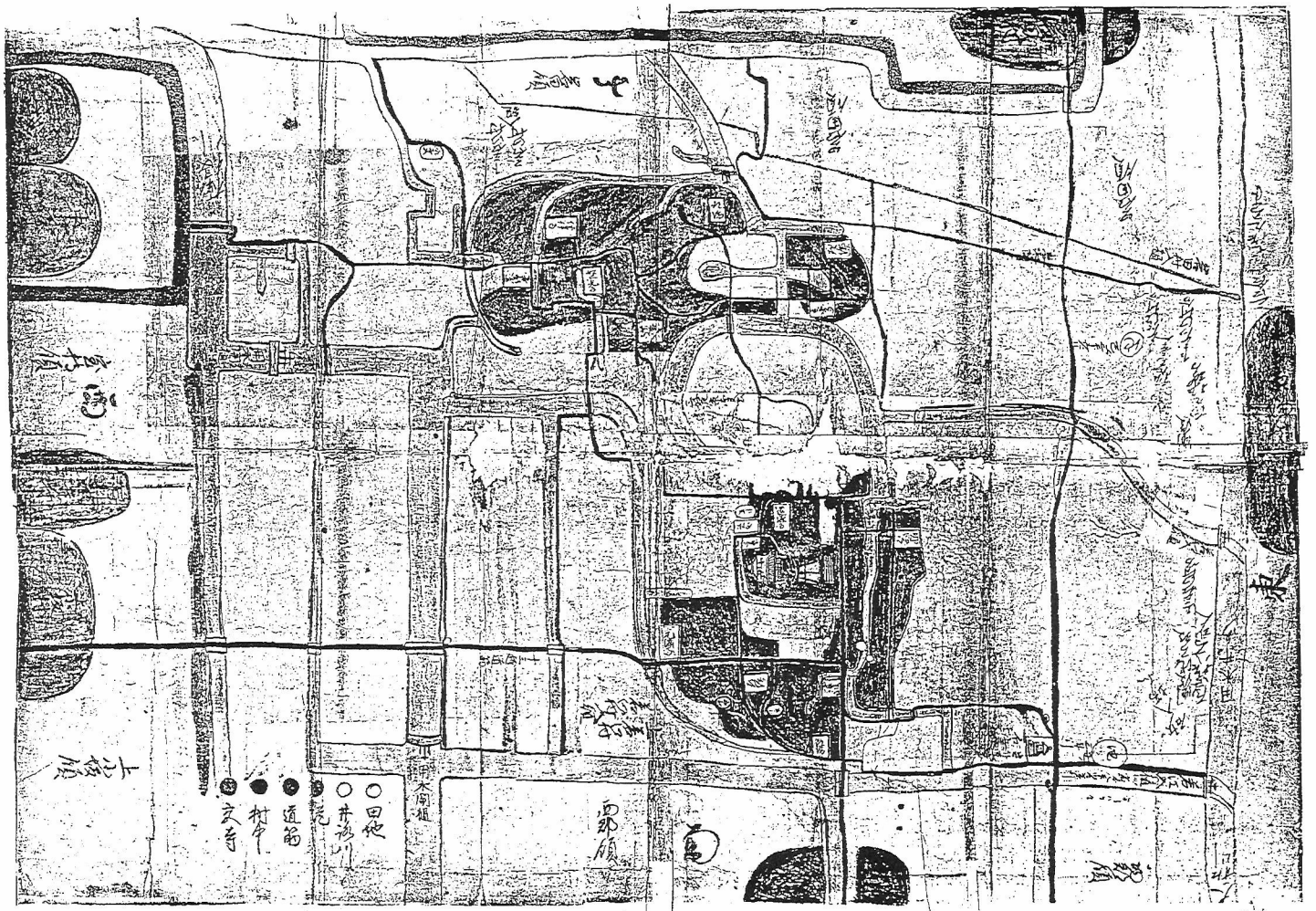


図325 若江・村絵図⁽¹⁾
(複写コピー)

原図は褐色の地に描かれている。
図325の黒色部分は原図では黄褐色で「村中」を表わし、「井路川」は水色、道は赤色で描かれている。

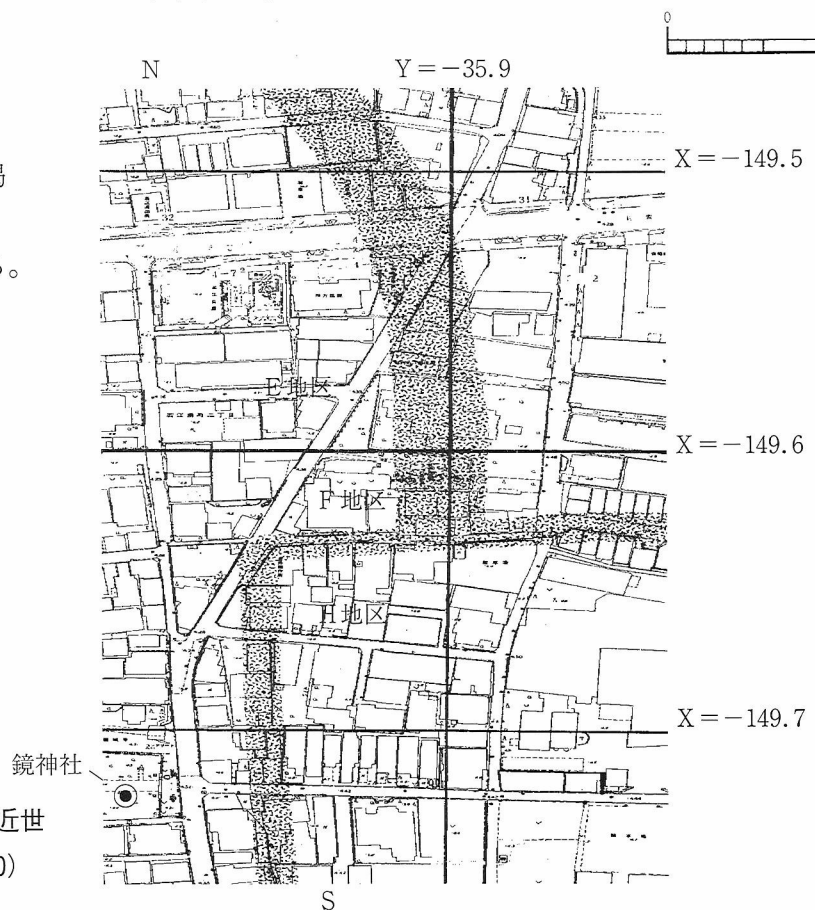


図326 E・F・H地区への近世
「井路川」の復元図(1/2,400)

注

- (1) 吉村博恵、勝田邦男「絵図よりみたる若江城」『若江遺跡第25次発掘調査報告』1987年 (財) 東大阪市文化財協会 P26～35
地元の飯田博一氏所蔵の絵図から性格および制作年代を考察され、この絵図は1677～1704年（大和川が付け替えられた年）の間に描かれたものと考えられている。
- (2) 川口宏海「江戸時代の土師質土器の製作技法」－兵庫県伊丹郷町遺跡出土遺物を中心として－『研究集録』第15号1995年 大手前短期大学・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院
- (3) この遺構は高槻市埋蔵文化財調査センターの調査で明らかにされた。掲載紙によると深い親井戸から屋内の溜井戸に水が集まる仕組み。また同じタイプの設備は京都・宮津城でも一部分が発見されているとのことである。伊藤好一『江戸上水道の歴史』1996年 吉川弘文館で水道施設の管に竹の使用も記されている。
- (4) 阿部嗣治「若江遺跡・山賀遺跡発掘調査概報10。第12ピット」『東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概要』1981年 東大阪市遺跡保護調査会 P131～137
- (5) 勝田邦男『若江遺跡第35次発掘調査報告』1988年 (財) 東大阪市文化財協会
- (6) 注4) 同書「第13ピット」P137～141
- (7) 吉村博恵「2. 若江遺跡 第2ピット」『(財) 東大阪市文化財協会年報』1983年 (財) 東大阪市文化財協会 P122～124
- (8) 注5) 同書
- (9) 注1) －P14、注4) －P143
- (10) 注7) 同書
- (11) 注1) 同書

H地区出土の古墳時代の木材同定に京大木材研究所の伊東隆夫氏、各地区出土の石材の同定に大阪府立花園高校の池田正氏、近世陶磁器の御教示を奈良女子大学の坪の内徹氏にそれぞれお願い致しました。ここに記して厚くお礼申し上げます。

また木器の処理、樹種鑑定及び漆器断面プレパラート作成と顕微鏡撮影は元興寺文化財研究所保存科学センターに委託を予定している。

14. M地区

本地区は若江小学校正門の南に位置する南北約20m、幅約1mの路線である。南端は若江遺跡第15次調査2地区として発掘調査が行われ⁽¹⁾、本調査のN地区と接続する。その南西では共同住宅建設に伴う若江遺跡第35次発掘調査が実施されている⁽²⁾。調査は盛土及び攪乱層を機械によって除去し、以下を機械と人力の併用によって掘削した。

基本的な層序は上層から盛土及び攪乱層、青灰色中粒砂混粘質シルト層(旧耕土層)、黄色砂礫～細砂層、緑灰色細砂～シルト層、黒色粘土層の順であった。黄色砂礫～細砂層から遺物は出土しなかったが、これまでの調査から弥生時代後期から古墳時代初頭の河川内堆積層か洪水等の流水による堆積層と考えられる。上面で中世の井戸や溝等を検出した。緑灰色細砂～シルト層から土器は出土しなかったが同様に弥生時代後期の流水による堆積層と考えられる。

黒色粘土層からは弥生時代後期の土器が出土している。下面に遺構らしきものがみられたが、隣接する暗渠水路が破損し、水が吹きだしたため調査を断念した。この深さまで調査が及んだのは人孔設置予定地である南端部の約2m²のみである。

中世の井戸は1995年7月15日発行の「市政だよりNo610」に紹介された。上部が瓦組で、下部に2段の桶を埋設するものであった。井戸枠内から土師皿や備前摺鉢、明の青花、丸平瓦、漆器椀、箸状木製品などが出土し、16世紀頃に埋められたものと思われる。

15. N地区

本地区はM地区に接続する若江小学校南方に位置する東西約96m、幅約80cmの路線である。西端は若江遺跡第8次調査3地区として、中央付近では若江遺跡第15次調査1地区として⁽³⁾、東端は若江遺跡第15次調査2地区として⁽⁴⁾発掘調査が行われている。さらに東端はM地区と接続する。既設管の入れ替え工事であり、機械掘削に立ち会い、柱状土層図の作成と遺物採集に努めた。M地区で確認された弥生時代包含層のひろがり、中世遺構の確認が期待されたが、攪乱が著しく、把握には至らなかった。

16. O地区

本地区は若江鏡神社(以下鏡神社とする)西辺に位置する南北約50m、幅約1mの路線である。北端はI地区に、南端はJ地区とK地区に接続する。調査は盛土及び攪乱層を機械によって除去し、以下を機械と人力の併用によって掘削した。

層序は上層から盛土及び攪乱層、黒色中粒砂混シルト～粘質シルト層、灰色中粒砂～細砂層の順であった。黒色中粒砂混シルト～粘質シルト層は大きく2層に分けられる。下層は弥生土器や古墳時代の須恵器、中世の瓦類、近世の陶磁器等を含み、上層にはガラス瓶、空き缶等を含む。ヘドロ状を呈していた。近世から現代に至る水路もしくは池が存在したと考えられる。灰色中粒砂～細砂層から遺物は出土しなかったが、M地区の黄色砂礫～細砂層と同様に弥生時代後期から古墳時代初頭の河川内堆積層か洪水等の流水による堆積層と考えられる。

飯田博一氏所蔵の絵図⁽⁵⁾には鏡神社の西辺と南辺にL字状の水路が描かれている。西辺部が本地区に相当し、南辺部は発掘調査の対象としなかったコンクリート製の暗渠水路に相当すると考えられる。絵図に描かれた水路は他の水路と断絶しており、溜池状である。若江遺跡の発掘調査では近世の水路が中世の若江城の堀を利用している例が多く確認されているが、今回の調査では水路が中世まで遡る根拠は得られなかった。このことから次のように憶測する。

鏡神社は河内平野の中の微高地上に位置し、周囲から見れば平野の中の島状の高まりである。この高まりをさらに顕著にするため周囲を掘りくぼめ、古墳のように造成したのであろう。造成が四周に及んでいないのは、南方の河内十三街道と呼ばれる大坂と奈良を結ぶ街道からの景観のみを意識したためと思われる。掘りくぼみは水路状の池となったが、用水路の系統と

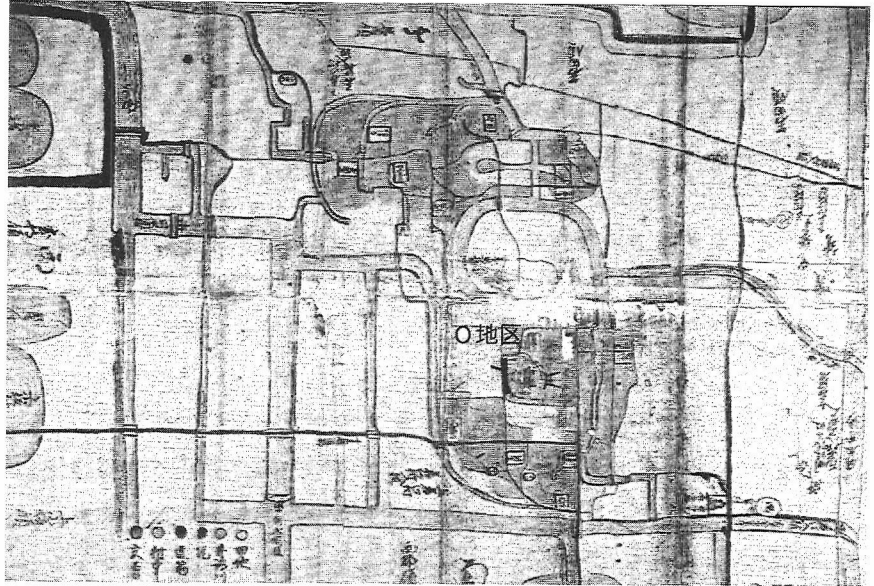


図327 若江村絵図 注(5)よりコピー加筆

異なるため水路としては活用されなかったと考えられる。したがって飯田氏所蔵の絵図に描かれた鏡神社の西辺と南辺の水路は近世に作られたものであり中世の若江城に関連するものではないと思われる。なお、地元市民によれば調査地には1965(昭和40)年頃まで水路状の池が存在したとのことである。

17. P地区

本地区は鏡神社の北方に位置する逆L状の長さ約86m、幅約1mの路線である。南端は本調査のI地区とO地区に接続する。調査は盛土及び攪乱層を機械によって除去し、以下を機械と人力の併用によって掘削した。

層序は上層から盛土及び攪乱層、黄褐色中粒砂～細砂層の順であった。黄褐色中粒砂～細砂層からは弥生時代後期から古墳時代初頭の土器が出土し、河川内堆積層と考えられる。本層の上面で近世の井戸や土壌、掘り込み地業を伴う礎石建物等を検出した。西端はO地区で検出した近世から現代に至る水路もしくは池となる。

18. Q地区

本地区は鏡神社の北方に位置する府道大阪東大阪線からP地区へ向かう南北約103m、幅約1mの路線である。北端西は若江遺跡第25次調査として⁽⁶⁾、北端東は若江遺跡第10次調査として発掘調査が行われ16世紀の若江城の堀が検出されている⁽⁷⁾。調査は盛土及び攪乱層を機械によって除去し、以下を機械と人力の併用によって掘削した。

層序はP地区と同様であり、上層から盛土及び攪乱層、黄褐色中粒砂～細砂層の順であった。黄褐色中粒砂～細砂層からは弥生時代後期から古墳時代初頭の土器が出土し、河川内堆積層と考えられる。本層上面で近世の井戸や土壌、中世の井戸や16世紀の若江城の石垣を伴う堀等を検出した。

19. R地区

本地区は若江中学校の東方に位置する東西約180m、幅約1mの路線である。西端は若江遺跡第47次・山賀遺跡第5次調査のB地区に⁽⁸⁾、東端は若江遺跡第47次・山賀遺跡第5次調査のC地区に接続する⁽⁹⁾。行政上の遺跡範囲は山賀遺跡と若江遺跡にまたがるが、便宜的に若江遺跡として調査を進め

た。調査は盛土及び攪乱層を機械によって除去し、以下を機械と人力の併用によって掘削した。

層序は上層から盛土及び攪乱層、黄色中粒砂～粘土層の順であった。盛土層中には第二寝屋川掘削時の残土を田畑に盛った地層がみられた。黄色中粒砂～粘土層は、西半では中粒砂～細砂となり弥生時代後期から古墳時代初頭の土器が出土した。東半ではシルト～粘土となり土器は出土しなかった。M地区の黄色砂礫～細砂層と同様に河川内堆積層か洪水等の流水による堆積層と考えられる。本層の上面で近世の井戸や溝、中世の溝や土壙、ピット等を検出した。

20. S地区

本地区は鏡神社南方に位置する東西約28m、幅約1mの弧状路線である。東端は若江遺跡第47次・山賀遺跡第5次調査のC地区に接続する⁽¹⁰⁾。調査地が狭い路地であることと掘削が1m前後と浅いことから掘削に立ち会い、柱状土層図の作成と遺物採集に努めるものとなった。掘削自体は人力と機械の併用である。

層序はR地区と同様であり、上層から盛土及び攪乱層、黄褐色中粒砂～細砂層の順であった。黄褐色中粒砂～細砂層からは弥生時代後期から古墳時代初頭の土器が出土し、河川内堆積層と考えられる。本層上面の一部に褐色砂質シルトの遺物包含層が認められたが、その時期や性格は整理作業がなされていない現在では不明である。

21. T地区

本地区は鏡神社南方に位置する南北約70m、幅約1mの弧状路線である。北端は若江遺跡第26次調査第4ピットに接続し⁽¹¹⁾、南端は若江遺跡第47次・山賀遺跡第5次調査のC地区に接続する⁽¹²⁾。当初は既設管の入れ替え工事であるため、機械掘削に立ち会い、柱状土層図の作成と遺物採集に努める予定であった。しかし、既設管の口径が小さく浅いことと埋設する位置がずれることから本格的な調査を実施するの必要に迫られた。結果的に本格的な発掘調査を行うことができなかったが、近世の井戸や中世の溝、土壙等の遺構を確認した。

基本的な層序は上層から盛土及び攪乱層、近世遺物包含層、中世遺物包含層、黄褐色中粒砂～細砂層の順であった。黄褐色中粒砂～細砂層からは弥生時代後期から古墳時代初頭の土器が出土し、河川内堆積層と考えられる。遺構は本層上面で検出した。

22. V地区

本地区は鏡神社東方に位置する南北約28m、幅約1mの路線である。鏡神社の東門付近で若江遺跡第56次調査のC地区に接続する⁽¹³⁾。大部分は既設管の入れ替え工事であるため、機械掘削に立ち会い、柱状土層図の作成と遺物採集に努めるものとなった。

堆積状況は複雑で上記の各地区の様相とは異なる。南部では古墳時代の遺物包含層を断面で確認し、完形の土師器壺を1点採集している。北部では各地区で検出されている弥生時代後期から古墳時代初頭の土器を含む河川内堆積層と考えられる黄褐色中粒砂～細砂層の東肩と思われる立ち上がりを確認した。

23. U地区

本地区は第二寝屋川北方に位置する東西約85m、幅約80cmの路線である。東端は若江遺跡第47次・山賀遺跡第5次調査のC地区に接続する⁽¹⁴⁾。調査地が狭い路地であることと掘削が1m前後と浅いこ

とから掘削に立ち会い、柱状土層図の作成と遺物採集に努めるものとなった。掘削自体は人力と機械の併用である。

層序はS地区と同様であり、上層から盛土及び攪乱層、黄褐色中粒砂～細砂層の順であった。黄褐色中粒砂～細砂層からは弥生時代後期から古墳時代初頭の土器が出土し、河川内堆積層と考えられる。本層上面の一部に褐色砂質シルトの遺物包含層が認められたが、その時期や性格は整理作業がなされていない現在では不明である。

注

発行機関の、財団法人東大阪市文化財協会を協会に、東大阪市遺跡保護調査会を調査会と略した。

- (1)調査会「9.第11ピット」「若江遺跡・山賀遺跡発掘調査概報」『東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集1980年度』1981
- (2)協会『若江遺跡第35次発掘調査報告』1988
- (3)調査会「8.第10ピット」「若江遺跡・山賀遺跡発掘調査概報」『東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集1980年度』1981
- (4)調査会「9.第11ピット」同上
- (5)協会『若江遺跡第25次発掘調査報告』1987
- (6)同上
- (7)調査会『若江遺跡発掘調査報告書Ⅰ遺構編』1982
- (8)協会「第9章 若江遺跡第47次・山賀遺跡第5次調査」『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告—1991年度—』1992
- (9)協会「第3章 若江遺跡第47次・山賀遺跡第5次調査概要」『同—1992年度—』1994
- (10)協会「第3章 若江遺跡第47次・山賀遺跡第5次調査概要」『同—1992年度—』1994
- (11)協会「2. 若江遺跡」「瓜生堂遺跡・若江遺跡発掘調査概報」『(財)東大阪市文化財協会年報1983年度』1984
- (12)協会「第3章 若江遺跡第47次・山賀遺跡第5次調査概要」『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告—1992年度—』1994
- (13)協会「第7章 若江遺跡第56次調査概要」『同—1994年度—』1996
- (14)協会「第3章 若江遺跡第47次・山賀遺跡第5次調査概要」『同—1992年度—』1994

第10章 参考資料 若江遺跡第63次発掘調査報告

1. はじめに

本調査は東大阪市立若江幼稚園水洗化工事に伴うものである。工事は東大阪市若江北町3丁目地内に所在する幼稚園敷地内から周辺道路下の公共下水道管に接続するもので、幅約1m、総延長約63mを開削し、污水管を埋設するものであった(図328)。

これまで行われた周辺の調査成果⁽¹⁾によって若江幼稚園の敷地は16世紀後半の若江城本丸内に位置することが明らかとなっている。南に隣接する府道大阪東大阪線の現地表面よりも幼稚園敷地内の現地表面は約1m高くなっており、本丸造成時の整地層等が良好に遺存していると言われていた。

このため、東大阪市教育委員会文化財課の指導のもとに関係機関による協議の結果、本格的な発掘調査を実施することとなった。ただし、幼稚園の出入口が1箇所しかなく、敷地東部の部分については機械によって掘削し、土層断面の観察と遺物採集に努めることとなった。以下にその結果を略述する。

今回の調査の整理作業は未了である。また、幼稚園に北接する地点で住宅建設が計画された。これに伴い下水道管を埋設する工事について発掘調査を実施することとなった。今回の調査地と同様に16世紀の若江城本丸と推定される地区にあたる。このため今年度は経緯報告に止め、来年度に改めて本調査の成果とあわせて報告することしたい。

本調査は面積にすると約63㎡、工事発注が分かれていたこともあり調査期間は中断を含め1995(平成7)年6月14日から8月22日を要した。現場作業にあたっては若江幼稚園や金鉄屋土木株式会社、株式会社木本建設の諸氏にご協力をいただいた。記して謝意を表したい。

2. 調査概要

下水道管は排水を流すものであるため始点を浅く、終点を深く傾斜させて設置される。特に今回の場合は既設の施設に接続するため、始点は現地表面下約30cmの掘削にとどまった。工事掘削深度以下の調査は下水道管の安定に経費が増すため、東大阪市教育委員会より重要遺構以外は避けるように指

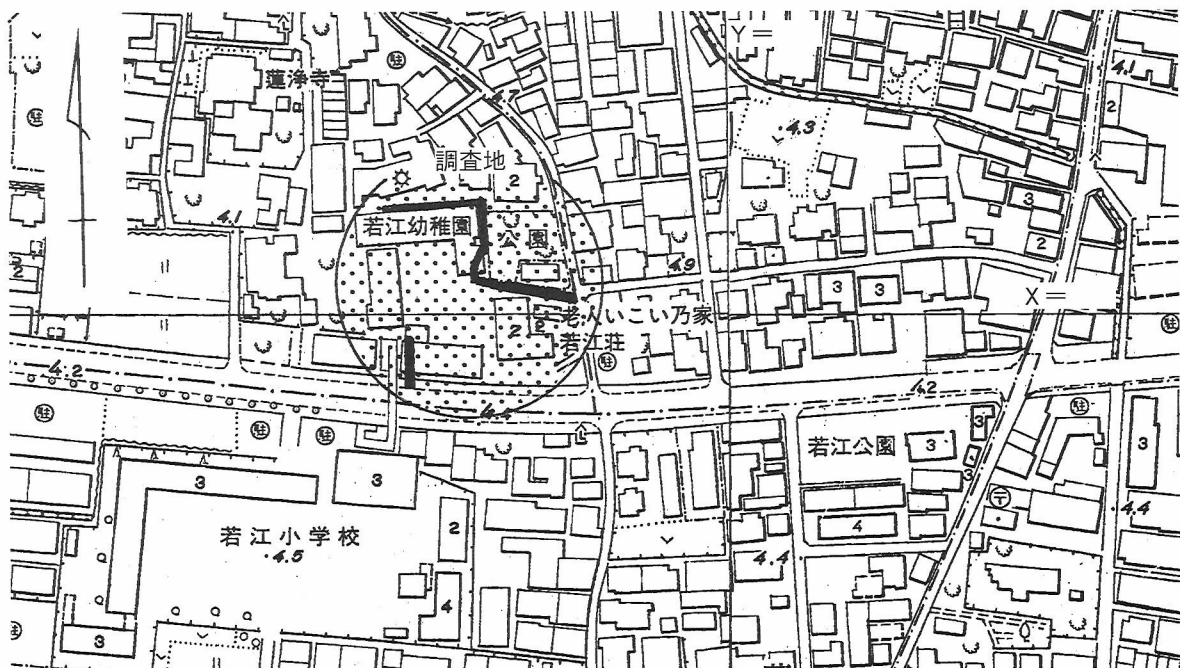


図328 若江遺跡第63次発掘調査調査地位置図(S=1/2500)

導されている。したがって層序の追求等は不十分とならざるをえない。本調査も例外ではなく次に述べる層序も調査区全体で確認されたものではない。

調査区内の基本的な層序は上層から、盛土及び攪乱層、近世耕作土層、中世整地層、黄色中粒砂～砂礫層の順であった。盛土層以下の各層はそれぞれの時期の遺物包含層であり、中世整地層は分層が可能であり、いくつかの遺構面を内包する。その様相は各地点によって異なるが、前述のように具体的な把握には至っていない。遺構は井戸と考えられる土壌やピット等を確認した。いずれも16世紀頃のものと思われる。黄色中粒砂～砂礫層はこれまでの周辺での調査から弥生時代後期から古墳時代初頭の河川内堆積層と考えられる。

3. まとめ

機械掘削による部分もあったが、今回の調査によって、これまで言われていたように若江幼稚園内の全体に中世の整地層が良好に遺存していることが明らかとなった。最も浅い部分では現地表下約30cmに遺物包含層が存在し、ごく小規模な工事によっても影響を受けることが確認された。今後、若江幼稚園敷地内での諸工事や周辺部の工事に対しては十分な注意を払う必要がある。

注

(1)財団法人東大阪市文化財協会『若江遺跡第27次発掘調査報告』1988

財団法人東大阪市文化財協会『若江遺跡第44次発掘調査報告』1993

この他に公共下水道管渠築造工事に伴う若江遺跡第37次調査(未報告)や共同住宅建設に伴う若江遺跡第59次調査(報告書作成中)等が実施されている。

図329 若江幼稚園
と府道の段差
(西から)



図330 同上(東から)



図331 調査区東部
(西から)





図332 若江幼稚園と
東側市道の段差
(北から)



図333 若江幼稚園
正門付近
(南東から)



図334 若江幼稚園
正門付近
(東から)

第11章 上小阪遺跡第5次発掘調査概要

上小阪遺跡第5次調査は、下水管渠築造工事に伴い、東大阪市宝持3丁目11番地の近畿大学クラブセンター前で、昼間の通行を避け1994年12月下旬の夜間に行われた。上小阪遺跡は、河内平野沖積低地中央部の、現在の地形にみられる長瀬川自然堤防の東方に位置する(図335)。すでに近畿大学の構内や隣接地での調査で、弥生時代後期から古墳時代初頭の遺物が検出されている。

5次調査では、7×4mの推進工法の堅坑内を、現地地表下約5mまで掘削した。厚さ約1mの盛土をバックホーで除去した後、弥生時代後期の遺構のベースまでの堆積層を人力掘削で調査し、それより下方については、工事の機械掘削に立ち会い堆積層の観察を行った。調査地で観察された堆積層の累重を図336に示す。現在の盛土下に、層厚約30cmのおそらく中世以後の畑地および水田耕作土層がみとめられた。その下に後背湿地の静水域の環境下で堆積するような、層厚約20cmの粘土質シルトが伏在し、同層も水田耕作土の可能性もある。地表下約1.6~1.9mの間に、弥生土器を含み、遺構を構成する堆積層がみとめられた(図337)。この遺構・遺物帯は上位より、土壌化がすすみ黒褐色を呈する砂礫まじり粘土質シルト層、上部は暗褐色、下部は黄褐色でわずかに粘土質の砂質シルト層および黄褐色の砂質シルト層からなる。前2者の上面ではそれぞれピット・溝・不整形な土壌ないし浅い落ち込みなどを検出した(図338)。ピット群の一部は、直径15~30cm、深さ30~60cmで、一定の配列をなし、掘立柱建物跡の可能性もある。浅いピット・土壌のベースや充填堆積層中に、1~数個体分のその場で破碎された状態を示す土器の集合が10数か所で見とめられた(図339)。これらの土器には弥生時代後期末~古墳時代初頭の年代を示すものが含まれる。土器片の表面は剥落が著しく、好氣的な埋没環境にあったことを示している。土壌の深いものは、粘土質シルトのブロック土で充填され、掘削後ほとんど時を経ず埋積されたものがある。遺構は遺構・遺物帯の中部でとくに多くみとめられ、土壌化のすすんだ最上部の層準では数少ない。このことは、集落廃棄後、人間活動の場が陸上の植生をとともう環境下で一定期間放置されていたことを示す。遺構形成のベースをなす最下位の堆積層からも、比較的出土量は少ないが、弥生時代後期の土器片が出土した。遺構・遺物帯を構成する堆積層の下位には層厚約1mの砂層がみとめられた。この上面には、調査区を南南西-北北東方向に、西側に緩やかに脹らむ弧をなして横切る、幅1m前後の尾根状の高まりが数本みとめられ、砂層の堆積構造から推測される古流向はこれにやや西寄りに斜交して北向きであった。これらのことから、調査地は弥生時代後期の前半には、浅い河川の畔のポイントバーで、その後、大量のウォッシュロードからなる洪水堆積物が載り、人間活動の場となる微高地が形成されたと推測される。遺構・遺物帯最上部の土壌帯は、弥生時代後期から古墳時代初頭に「河内湖」沿岸の浅水域・後背湿地に形成される亜泥炭層に対比されるようである。

上記の砂層より下方の機械掘削に立ち会い、堆積層の断面を観察した結果、泥層がフレーム構造やロード構造をなし、下位層へのフィッシャーをしばしば伴う地震動による変形構造が4層準にみとめられた。これらの形成時期は、河内平野中央部の他遺跡との層序対比から、上位より弥生時代中期末、中期前半~中頃、前期、および縄文時代晩期後半と考えられる。詳細な観察をなしえなかったが、縄文時代晩期の変形構造の上位には、同じく晩期のものと考えられる変形(ないし擾乱)をうけた層準がみとめられた(図340)。

本調査地点を含めて、より東方の大阪中央環状線付近の若江遺跡・若江北遺跡・巨摩遺跡・山賀遺跡における多くの調査地点間での層序対比と各時代の微環境、とくに地形-堆積環境および人間活動の変遷を総合してゆくことが今後の考古学的な一課題であると思われる。

図335 上小阪遺跡 5次調査地位置図

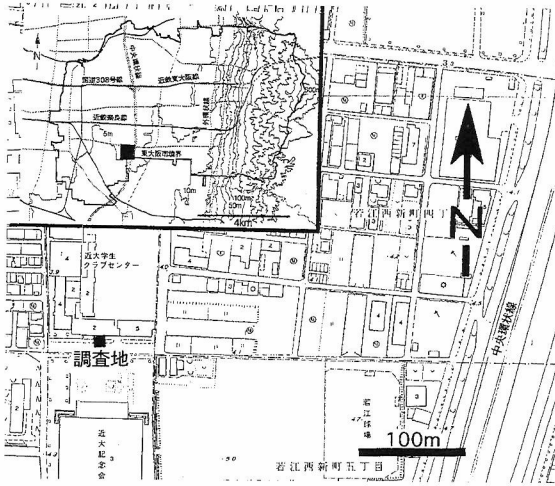


図337 南壁堆積層断面、下半部が弥生土器出土層、スケールは約1.5m

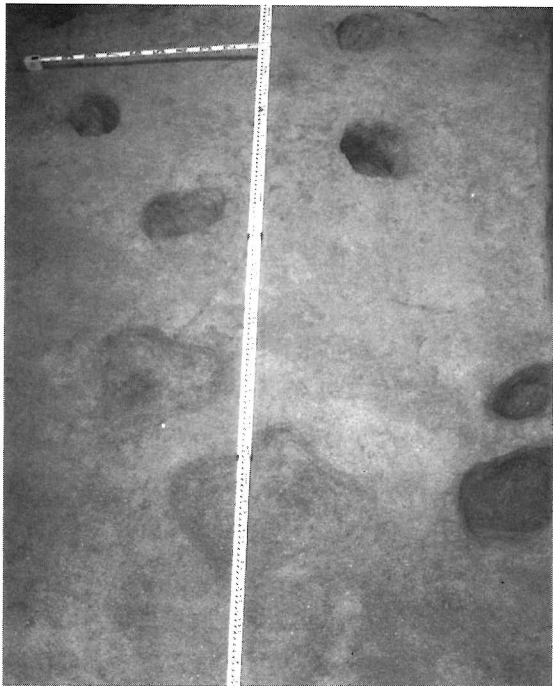


図338 弥生時代後期ピット群検出状況

図336 上小阪遺跡 5次調査地柱状図

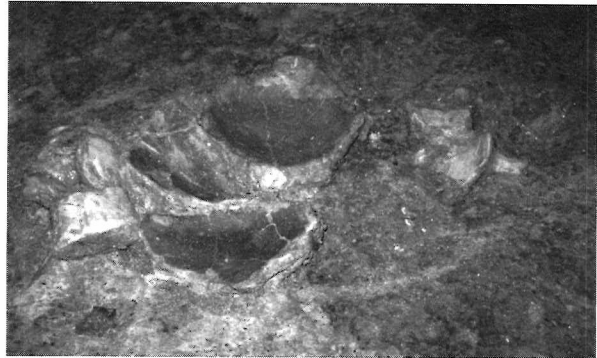
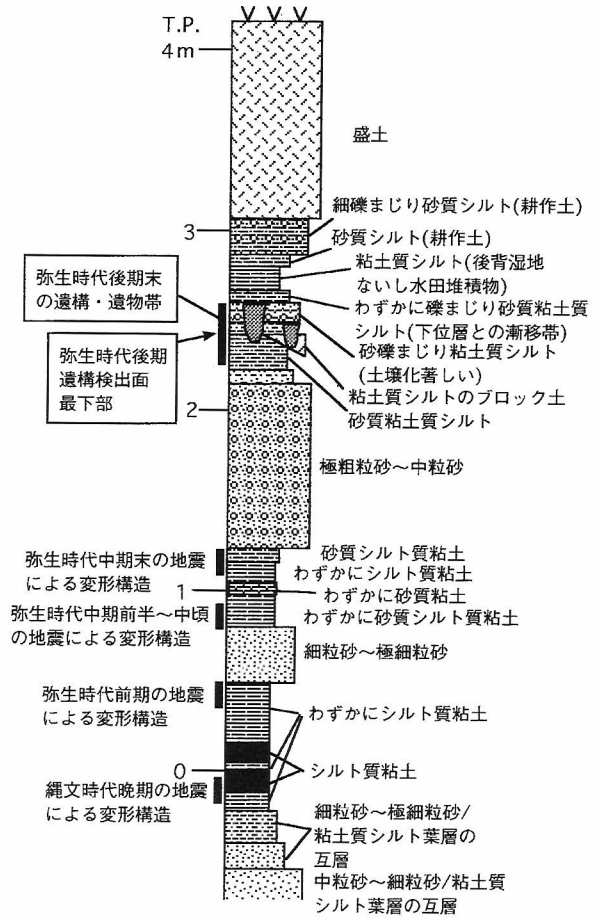


図339 土器溜りの検出状況

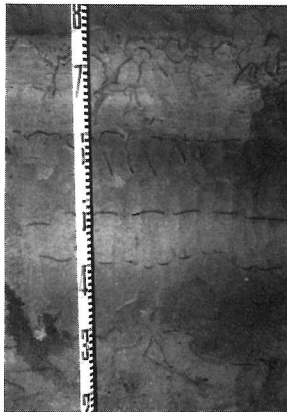


図340 弥生時代前期(最上部)と縄文時代晩期(最下部)の地震動による泥層の変形構造

報告書抄録 1

ふりがな ひがしおおさかしげすいどうじぎょうかんけいはくつちょうさがいようほうこく
書名 東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告 —1995年度—
副書名
巻次
シリーズ名
シリーズ番号
編著者名 井上伸一、金村浩一、曾我恭子、松田順一郎、松宮昌樹、三輪若葉
編集機関 財団法人東大阪市文化財協会
発行機関 財団法人東大阪市文化財協会
所在地 〒577 大阪府東大阪市荒川3丁目28-21
発行年月日 1997年3月31日
市町村コード 27227
所収遺跡 別記参照
調査原因 公共下水道管渠築造工事
遺跡所在地 大阪府東大阪市地内各所

報告書抄録 2

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	遺跡番号	遺跡種別	北緯	東経	調査期間	面積	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
いけしま 池島遺跡15次	いけしまちょう 池島町5丁目		集落・耕作跡	34度38分32秒	135度37分59秒	19960314～継続中	51m ²	縄文～近世	河川	土師器・須恵器	
やまはたこふんぐん 山畑古墳群17次	しじょうちょう 四条町		古墳群	34度39分25秒	135度39分00秒	19950822～継続中	500m ²	古墳～中世	河川	須恵器・瓦器	
おにづか 鬼塚遺跡20次	なんそうちょう 南荘町		集落・耕作跡	34度40分15秒	135度38分42秒	19950905～951103	165m ²	古墳～近世	溝・土壙・ピット 暗渠	土師器・須恵器・ 瓦器・製塩土器・ 石器・土管	
だんのうえ 段上遺跡5次	しもろくまんじ 下六万寺三丁目		集落・耕作跡・ 古墳	34度39分14秒	135度38分40秒	19951106～951207	106m ²	弥生～近世	土壙・井戸	弥生土器	
だんのうえ 段上遺跡6次	しもろくまんじ 下六万寺三丁目		集落・耕作跡・ 古墳	34度39分14秒	135度38分40秒	19951207～960117	30m ²	縄文～近世		縄文土器・弥生土 器	
うえつけ 植附遺跡9次	なかいしきりちょう 中石切町三丁目		集落・耕作跡	34度40分40秒	135度38分42秒	19950711～960124	175m ²	古墳～近世	溝・土壙・ピット 河川	土師器・須恵器・ 製塩土器	
わかえ 若江遺跡61・62次	わかえみなみまち 若江南町1～4丁目 若江本町三丁目		集落・耕作跡・ 城郭	34度39分00秒	135度36分26秒	19950523～継続中	1686m ²	弥生～近世	溝・土壙・井戸・ ピット・河川	弥生土器・土師器・ 須恵器・瓦器・陶 磁器・瓦類	
わかえ 若江遺跡63次	わかえほんまち 若江本町3丁目		集落・耕作跡・ 城郭	34度39分00秒	135度36分26秒	19950614～950822	63m ²	中世～近世	土壙・ピット	弥生土器・土師器・ 瓦器・瓦類	
かみこさか 上小阪遺跡5次	ほうじ 宝持3丁目		集落・耕作跡	34度39分00秒	135度35分46秒	19941208～941222	32m ²	弥生～近世	土壙・ピット	弥生土器・土師器・ 須恵器・瓦器	

東大阪市下水道事業関係
発掘調査概要報告

—1995年度—

1997年3月31日

発行 財団法人東大阪市文化財協会
東大阪市荒川3丁目-28-21
TEL 06-736-0346

印刷 ミラテック
大阪市都島区片町2丁目9-9
TEL 06-354-3081